# New　World

池宮樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Ｎｅｗ　Ｗｏｒｌｄ

【Ｎコード】

Ｎ３９９５Ｕ

【作者名】

池宮樹

【あらすじ】

ＭＭＯＲＰＧ《Ｎｅｗ　Ｗｏｒｌｄ》の世界に限りなく近い世界に転生する事になった主人公が、その知識と経験、そして神様（？）からもらったチート能力を使ってたくましく、そして時に（？）卑怯に生き抜いて行くテンプレ満載のファンタジーなお話でございます。

チートあり、ハーレムあり（お姉さんからツンデレまで完備）、内政？経済？系あり、科学知識によるゲームバランスの破壊ありとほ

ぼ何でもありです。

基本私が毎日文章を書く事の練習としてかいておりますので、皆様のご意見やご指摘をいただけるとうれしいです。

文字数は１話５０００文字前後、更新はストックが切れてからは３日に一回行ければいいと考えてます。

注意　申し訳ありませんが、この作品は基本私が「文章を書く事」自体に慣れる為に書かせていただいております。

完全な習作ですので、設定の矛盾、キャラの言動のおかしい点など多数出てくるとは思いますが、稚拙な作品でいいと思われる方のみお読みください。

## 初めて読む方へ

本作はＭＭＯＲＰＧをモチーフにしたフィクションです。

この作品の主人公は設定上、ＭＭＯＲＰＧで本来持つことが不可能であり、それを可能にするのがシステムやデーターの改竄といったことによってしか得られないであろう能力（チート能力）を持っています。

ですがこれは現実のＭＭＯＲＰＧでのチート（ズル行為）を賛美、助長するものではありません。

その事をご理解の上、娯楽作品として《Ｎｅｗ　Ｗｏｒｌｄ》をお楽しみください。

池宮　樹

## 初めて読む方へ（後書き）

感想欄にこの文章を掲載するきっかけになった感想をくださった方がいらっしゃいます。

当然こんなことは言われなくても常識だ！ふざけんな！という方も多くいらっしゃると思いますが、私としてはできるだけ多くの方が不快な気持ちにならずに話しを進めて行きたいとおもっておりますので、皆さんのご理解をよろしくお願いいたします。

## ＭＭＯＲＰＧを知らない方の為の用語解説（前書き）

タイトル通り質問がありそうな事、あったことを私に分かる範囲でご紹介しておこうかと思います。
必要な時に随時更新しますのでお気軽にご質問をお寄せください。

ストーリーの進行上答えられない事も多いですが、可能な限り答えていきたいと思います。

またネタバレを含みますので、それはちょっとという方は回れ右お願いします。

## ＭＭＯＲＰＧを知らない方の為の用語解説

ＭＭＯＲＰＧをやった事にない方も多くおられるかなと簡単に専門用語の説明をしていこうと思います。
基本本編でも説明を入れるようにしていますがそれでも分からない方はここを見てみてくださいね。

注意　説明の為ストーリーを楽しむのに問題ない程度のネタバレを含みます。お嫌な方は回れ右をお願いします。

《Ｎｅｗ　Ｗｏｒｌｄ》のホームページ風に書いていきます～。

ＭＭＯＲＰＧ

Ｍａｓｓｉｖｅｌｙ　Ｍｕｌｔｉｐｌａｙｅｒ　Ｏｎｌｉｎｅ　Ｒｏｌｅ－Ｐｌａｙｉｎｇ　Ｇａｍｅ　（マッシブリー・マルチプレイヤー・オンライン・ロール・プレイング・ゲーム、ＭＭＯＲＰＧ。）　は、「多人数同時参加型オンラインＲＰＧ」などと訳され、オンラインゲームの一種でコンピューターＲＰＧをモチーフとしたものを指す。

（上記Ｗｉｋｉｐｅｄｉａ様より抜粋いたしました。）

簡単に言うとインターネットを通じて、あるゲームを不特定多数の

人間で遊ぶゲームです。
オンラインゲームとかネットゲーム（略してネトゲとも。）とかいいます。
ＲＰＧなのでロールプレイ（キャラになり切り）ながら敵と戦ったり、お金儲けをしたり、プレイヤー同士で戦ったりするゲームの事です。

ＢＯＴ

ＢＯＴ、もしくはＢＯＴ行為とは、
『ある一定の命令を与えられたアバターが無人かつ自動でプレイをする迷惑行為。』のことです。
《Ｎｅｗ　Ｗｏｒｌｄ》においては、運営側の不断の努力とプレイヤーの皆さんの自浄努力のおかげで、ほぼこのような悪質な行為をする方がおられないことが自慢の一つでもあります。

リアルマネートレーディング（ＲＭＴ）

リアルマネートレーディング（Ｒｅａｌ　Ｍｏｎｅｙ　Ｔｒａｄｉｎｇ、以下ＲＭＴ）とは、オンラインゲーム上のキャラクター、ゲーム内通貨等を、現実の通貨等と取引する経済行為を指す。主に擬似的な経済システムが成立するＭＭＯＲＰＧ、ＭＯＲＰＧを中心に普及している。

それに伴う諸問題として、、
ＢＯＴの大量発生、サーバダウン・ラグの発生、ゲーム内経済の崩壊他、アカウントの窃盗を目的としたコンピュータウィルス、不正アクセス等のサイバー犯罪の増加、不正行為への対策コストに反比例するサービス低下（新規コンテンツ開発の減少、顧客サポート機

能低下など）がある

（上記Ｗｉｋｉｐｅｄｉａ様より抜粋いたしました。）

つまり現実のお金（日本なら円）でゲーム内のお金を購入する事です。

これが行われる環境は不正ユーザーにより、ゲームを楽しんでいただける環境が著しく脅かされる為、《Ｎｅｗ　Ｗｏｒｌｄ》運営はこれらの行為の撲滅に日夜力を注いでおります。

以下は上記よりも多くのネタバレを含みます。具体的にはどんな種族が存在しているかなどです。

キャラクターメイキングとアバター

《Ｎｅｗ　Ｗｏｒｌｄ》をはじめる為には、最初にあなたの分身を作らなくてはなりません。
このあなたの分身の事をアバターといいます。
なお一度に動かせるアバターの数は１人です。
あなたはアバターを作るにあたって以下の事を決めなくてはなりません。

・　種族はなんであるのか。

・　職業を戦士系職と魔法系職のどちらにするのか。

・　どんな容姿であるのか。

以上です。
種族と職業については次で説明します。

種族

《Ｎｅｗ　Ｗｏｒｌｄ》に登場する登場人物たちは５つ（細かく言うと６つ）の種族が存在しています。

ヒューマン族

人間で平均的な能力を持っています。
全体的に可もなく不可もありませんが、それだけに無限の可能性を秘めており全種族で一番の多様な職業を選択する事ができます。

エルフ族

とがった耳に白い肌、美しい容姿をもつ世界樹の森を守護する種族です。
全ての種族の中で一番非力ですが、高い魔法力と俊敏さからくる正確さで敵を圧倒します。
またこの速さは動作の速さだけに留まらず、魔法を唱える早さは全種族ＮＯ１です。

ダークエルフ族

エルフと同じようにとがった耳を持ち美しい容姿を持つ種族ですが、彼らの肌の色は闇色に似た黒い肌です。
彼らはエルフ族の鏡であり森の負の部分を象徴し、決して悪の存在ではありませんが、夜に属する種族である為、森の光の部分の象徴たるエルフ族とは相容れず永い永い冷戦状態が続いています。
彼らは生まれながらの戦士であり、魔法使いである為瞬間的な攻撃力は魔法も含めて全種族で一番です。
その分体力に劣り、魔法的なものも含めて防御力という面では基本的に他の種族にはかないません。

ドワーフ族

ドワーフ族は、火と大地の力の加護を受け、非常に頑健でたくましい種族です。
彼らの肉体の強さは全種族一番であり、戦闘の時は頼りになる前衛としての役割を果たしてくれます。
またその見た目に反して手先が器用で様々な武器や防具、他にも様々な道具の作成に力を発揮する種族です。
その頑健な体を持つ代償でしょうか？彼らの動作は遅く、魔法が不得意でその力を使いこなす事ができません。
また外見上の大きな特色として、男性はヒゲを蓄えた老人のように見え、女性は背の低い子供のような容姿をしています。

ワーワイルド族

ワーワイルド族は大きく２つの種族で構成されています。

一つが、人狼族（ワーウルフ族。）。
もう一つが猫人族です（ワーキャット）。
人狼族はドワーフにつぐ強靭な肉体と獣そのものであるすばやさを武器に戦う戦士の一族です。
彼らの攻撃力は瞬間という点ではダークエルフ族に劣りますが、その持続的破壊力は他の追随を許しません。
また彼らの使う魔法を独特で、森や植物の力を借りパーティ全体の強化を一度に可能にします。
また見た目も独特です。
人狼族の男性は、体はヒューマン族に良く似ていますが尻尾を生やし首から上は狼そのものです。
女性の場合はほとんどヒューマン族の女性と同じですが、頭のてっぺんから飛び出した狼の耳とお尻に生えた尻尾を持っており、彼女達も人目で種族が分かるようになっています。

猫人族はすばやさにおいて他の追随を許しません。
彼らに攻撃を当てる事は困難の極みであり、逃げる彼らを捕まえるのも不可能に近いといっていいでしょう。
その分力はあまり無いのであくまで彼らの武器はその俊敏さであるといえます。
彼らの魔法は、森や植物の力を借り複数の敵に同時に呪いをかける事ができます。
彼らの呪いに縛られたものは、満足に身動きが取れなくなったり、毒に犯されたりと彼らに敵対した事を後悔しながら死んでいくことになるでしょう。

また彼らの姿も特徴的です。
猫人族の男性は、ヒューマン族の１０歳程度の子供ほど大きさの歩

く猫そのままです。
一方女性は、人狼族と同じで頭から突き出た耳と尻尾以外はヒューマン族の女性と変わる事はありません。

職業

職業は大きく2種類に分かれます。
『戦士系職』と『魔法系職』です。
戦士系職は敵に対して体を張って武器を振るいなぎ倒す戦士達です。
魔法系職は魔法という不思議な力を使い、敵をなぎ倒したり仲間を助けたりする力を振るいます。
《Ｎｅｗ　Ｗｏｒｌｄ》の世界では最初に決めたこの種族と系統の壁を越える事はできません。
例えばヒューマン族の戦士系職で始めた人は途中から魔法系職に変わる事はできません。
同じようにヒューマン族で始めた人がヒューマン族以外、例えばエルフ族の職業に就く事はできません。

レベルとグレード

《Ｎｅｗ　Ｗｏｒｌｄ》では装備にグレードというものが存在しており、最低のＥから最高のＳまで存在しておりアバターのレベルが上がってゆくに従ってより強いグレードの武器や防具が装備できる

ようになります。

各グレードと対応するレベルは以下のとおりです。

Ｅグレード　レベル１～１９
Ｄグレード　レベル２０～３９
Ｃグレード　レベル４０～４９
Ｂグレード　レベル５０～５９
Ａグレード　レベル６０～６９
Ｓグレード　レベル７０～

となっています。

ＰＫ（プレイヤーキラー）

プレイヤーがプレイヤーを一般フィールド上で襲って殺す行為のことをさします。

この行為を行った人間は、悪徳の街「アンギル」以外の街でのサービスが受けられないようになり、なおかつ街の警備兵に排除されます。

さらに賞金首となってしまい、他のユーザーからの合法的攻撃対象になりますのでけして利口な考えではありません。

さらに３回賞金首として狩られたアバターは、神の祝福を失い、現実での一定期間ゲームに参加する事が出来なくなります。

またその場合全てのアイテムと資金を失う事になります。

ＰｖＰ（プレイヤーＶＳプレイヤー）

プレイヤー同士が、大規模戦闘などの特殊な場面において、合法的に戦う事をＰｖＰといいます。

この場合前述のＰＫ行為には当たりませんので、日頃の成果をお互いに試す絶好の機会です。

## よくあるご質問について（前書き）

ネタバレを大量に含みます。

本編をご覧になった後にお読みください。

## よくあるご質問について

ご質問がかなり重なった場合書いてきます～。

基本的に主人公の目線でこのストーリーは進んでおります。

ですので、ある程度神の目線で見れる読者様の受ける印象と、彼自身の心証がずれる事が多い事をまずご理解願えますと助かります。

Q　主人公はなぜ『おちこぼれ』の振りをしているのか？

A　そのほうが何かと便利だからです。自分のダブルスキルという異常さを隠すいい隠れ蓑だからですね。

Q　主人公がいちいち奴隷の態度に動揺しすぎるのは何故？

A　根本的には、表現が大げさなほうがそのイメージを読者様に共有してもらいやすいからです。
あと主人公の心の中では、当たり前のことをしてるだけ、にも関わらず予想をはるかに超える感謝を受けて戸惑ってしまっているんです。

分かりにくい例えですが、
あなたが財布（たいした物は入っていない）を拾いました。
＞警察に届けました。
＞持ち主から土下座でこのご恩は命でお返しいたします！と言われました。

というのをご自分に置き換えてみると少しは主人公に共感できるか

もです。

Q　主人公が鈍すぎるのは何故？

A　これはバトル＆ハーレム系主人公が持たざる得ない（と私が分析している）特性の為です。
自分がモテている実感を持つ主人公は感情移入が非常に難しいと思うんです。

分かりにくい例ですが、

某ＹＯＫＯＳＩＭＡが自分がモテでいると自覚してる場合。

某薬味がそっち方面にすげ～早く目覚めてた場合。

某使い魔さんが、そっち方面がガンダールヴだった場合。

別の物語になりませんか？これ。

Q　主人公はなぜクリスティンの誤解を解かないのか？

A　そもそも誤解している事を主人公は理解していませんので。
私たちは神の視点で見ていますので分かりますが、彼は主観でしか見れませんから。
あとは鈍感補正のせいです。

Q　なぜ主人公はベテンを豚呼ばわりし続けるのか？

A　基本このお話は主人公の一人称で進んでいます。
なので豚って呼んでいるのは全て心の声なんです。口には出してま

せん。
あと、まず第一に主人公はベテンという名前を覚えているはいるんですが、豚のほうが印象が強いので、わざわざ名前で呼ぶのが面倒なだけです。

いませんでした？　名前で呼ぶのも嫌な奴。心の中ではアイツとかあの野郎とかいいませんでしたか？　私だけなのか！そんな感じです。

Q　主人公は死なないのか？

A　はい、死にません。
厳密には死んでもすぐ蘇る事ができます。
なぜかというとゲームをベースに作られた現実世界だからです。
ゲームで出来た事はできます。
勿論そこがミソでもあるんですが。

## よくあるご質問について（後書き）

最終書き込み　７月３０日

# プロローグ

起動式が虚空に展開。

次の刹那、俺の《爆発》（エクスプロージョン）の術式が炸裂し、十分な距離をとってさえ鼓膜を破りそうな爆音が空間を支配。

その凶悪な破壊力で、守護者共に破壊の鉄槌を下す。

跡形も無く多くの敵を消し飛ばしたのだが、まるで無限であるかのように新たな敵が湧き出てくる。

うじゃうじゃガシャガシャと、まったくうっとうしいにも程がある。

俺は大量の鎧人形共に囲まれて喜べるほど人間終わってはいない。

囲まれるならかわいい女の子たちがいい———俺はいたって健全だ。

無意識に命令していたのだろう、俺の『オリハルコン・ゴーレム』が時間を稼ぐかのように邪魔なやつらを力強く受け止め打ち倒して行く。

ダルマ倒しのように倒されるがらんどうの西洋鎧たち。

このまったく笑えない現状に逆に余裕ができてしまったのか、次の術式を起動するための演算を開始しながら、ほんのわずかに残った脳の余裕を使って、ふと今までの道のりを思い出してしまった。

俺の周囲では仲間たちが金銀と栄光と名誉、そして俺の我儘のために死力を尽くして戦ってくれている。
とどろく爆音、絶え間なく響く剣戟の音、それがどこか遠いもののように聞こえるから不思議だ。

一瞬視線を戦線からはずし俺の隣で必死に呪文を詠唱する二人の少女を見る。
情熱的な赤毛の髪に鏡に映したようにそっくりな可憐な顔立ちの二人の女の子。

あんなに小さかった俺の初めての従者――――アリアとエリアだ。

彼女達の成長を省みて改めて思う。

（長かった……。ここまで来るのに２５年……。やはり”ゲーム”と”現実”では違うらしい。）

思わず苦笑してしまう。
こんな時でなかったら腹を抱えて笑っていたかもしれない。

”ゲーム”だった時にはたった5年ちょっとでここまで来たのになぁ、と。

俺の名前はジオ・パラケルスス・ラ・テオフラストゥス。

種族ヒューマンの魔法６職の一角、アルケミスト（錬金術師）の到達職　”ヘルメス・トリスメギストス”　であり、ギルド　”十七人の賢者”　のギルドマスター。

昔の名前は中村秀人。
いろいろあってＭＭＯＲＰＧ《Ｎｅｗ　Ｗｏｒｌｄ》に酷似したこの世界に転生した日本のさえない元大学院生だ。

## 第一話　天国と地獄は一日の間にやってくる（前書き）

本編開始です。お楽しみいただければ幸いです。

６月２９日　パクってない？との指摘がありましたので当該部分を変更いたしました。

元彼女＞ストーカーさん　です。

まことに失礼いたしました。

## 第一話　天国と地獄は一日の間にやってくる

自分の感覚で２５年前、あの運命の日のことは今でもよく覚えている。

「はい、ありがとうございます！よろしくお願いいたします！」

携帯に向かって思わず叫ぶような返事をしてしまい、街中だったため周りの人にギョッと下目で見られた。

当時の俺は就職ド氷河期真っ只中を大学の修士課程の２年生で迎え、予想していた最悪の遥か斜め上を行く予想以上の大苦戦の末、ついにその日就職の内定を頂いたのである。

ちなみに私学とはいえ、そこそこ有名な大学ですよ？俺の大学……。

コキュートスデスカ……ソウデスカ……。

今も昔もすべて含めた俺の人生の中でも５本の指に入る絶望的な戦いでしたよ、マヂで。

エントリーシート何百枚書いたことか……。

何回２次面接で落とされたことか……、そんなに国公立が偉いのか……。

ハッいかんいかん！過去の怨念が……。

ちなみにその時既に９月。就職活動をしている人間にとって、就活浪人が見えてくる正直やばすぎる時期であった。

ようやく内定が出たことを下手をすると俺よりも気をもんでいたかもしれない実家の両親にすぐ電話で報告し、今度の週末には帰るからと言って携帯を切ってから夕方の買い物客でにぎわうスーパーに入ると、おいしそうに焼けたサンマや秋の味覚の王様である松茸なんかが、一年中空調で管理された店内に秋の香りをこれでもかというくらいに撒き散らしていた。

もちろん貧乏大学院生一人暮らしの俺には、いくら就職が決まったお祝いだって言っても松茸様なんてものは買えませんでしたけどね。

サンマが限界。サンマが最高。サンマ万歳！

ということで6缶セットのビール（発泡酒じゃなくてビール！）とつまみに脂が照りついている焼きサンマを買ってスーパーを出た俺の目に最初に飛び込んできたのは深い橙色に染まる空とひときわ美しい夕日。

しばし呆然とそれを見つめる俺。

何だか温かで、「お前今までホントよく頑張ったじゃん！」って言われてるみたいだった。

その後何故か目から出た汗を拭いて、最高に軽い足取りで大学生活の5年半を過ごしたワンルームの学生マンションの一室である我が家に帰る。

ステップは軽やか。今なら華麗なワルツもどんとこい！　って感じ。

そのままのテンションで一段飛ばしにアパートの階段を上がり、見慣れたドアを開け、部屋になだれ込む。

そして早速買ってきた６缶パックのビールのうちの一本を待ちきれずに一気にあおって勝利の美酒をのどに流し込む。

「ぷは～マジでうめぇ。ビールってこんなに美味かったっけ？」

思わず口から独り言が出るほど美味いビールに感動しながら、箸で焼きサンマの身をくすして食べる。

うん、これも美味い！

さてと、先のことは分からないけどとりあえず就職は決まったし、あとは卒論だけだし……。

そう思いビールを飲みながらサンマをあてに、この先の未来に思いをはせていた俺。

あのときの自分にもし伝えられるなら是非とも言ってやりたいことがある。

――――無駄すぎる未来妄想超乙ｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗ。

まぁ予定は未定だってことだ、まったく。

そうやって未来妄想が、１６歳になった愛娘に「パパのあとのお風

呂は入りたくない！」って言われて凹みまくるところで、何とか現実に帰還した俺はパソコンの電源を入れた。

俺は現実でこそさえない大学院生だったが、実はとある世界では有名人で英雄だったのだ。

———ＭＭＯＲＰＧ《Ｎｅｗ　Ｗｏｒｌｄ》

日本国産にして、日本最大のオンラインＲＰＧで舞台は中世ヨーロッパ風のありがちなファンタジー世界。

人間族（ヒューマンっていうんだけど）、エルフ族、ダークエルフ族、ドワーフ族、ワーワイルド（獣人族）などの種族から自分のアバターを選んで育成しやりたいことをやるっていうありがちなネトゲなんだけど、その自由度の高さとかゆいところに手が届くシステムの完成度と運営の決めの細かいサービス体制から”ＭＭＯＲＰＧの完成型”って言われた超人気タイトルだ。

俺はこの《Ｎｅｗ　Ｗｏｒｌｄ》のサービス開始当初からの超ヘビープレイヤー（いわゆるネトゲ廃人です。）で超有名人だった。

『ぱらけるすす』、それが俺の《Ｎｅｗ　Ｗｏｒｌｄ》での名前。

職業はヒューマンの魔法６職の一角、”アルケミスト”（錬金術師）の最高職　”ヘルメス・トリスメギストス”

実はこのアルケミストという魔法職は、あまりというかほとんど人

気が無い。
なぜかというとそのあまりの使用難度の為である。
高火力と様々な便利な攻撃魔法、壁であり直接火力であるゴーレムの召喚、非戦闘時でのポーション系精製スキルと、
プラス面を見れば万能に近いほかの攻撃型魔法職のいいとこ取りであるのだが……当然マイナス面もすごい。

基本一回あたりの魔法力（ＭＰってやつですね。）消費量が平均で他の魔法職の２倍以上、魔法の発動速度も全魔法職中最低（どのくらい遅いかというと最速のルーンウィスパーが３回魔法唱えてる間にやっと１回くらい）、この欠点はＰｖＰと呼ばれるプレイヤー同士の対人戦闘システムが存在している《Ｎｅｗ　Ｗｏｒｌｄ》ではかなり致命的な弱点であり、さらにさも当たり前であるかのように全種族全職含めて最低のＨＰと防御力、そのあまりの耐久力の無さについた『アルケミスト＝もやし』っていう認識が定着したくらいなのである。（アルケミストをやってるプレイヤーにもやしは禁句、もやしは禁句だ！大事だから２度言った！）

さらにもっと大きな、大きすぎるペナルティが存在した。

各種族に設定されたアルケミストを含む特殊職（例えばヒューマン戦士系特殊職はサムライ）は経験値が他の一般職の倍必要という特殊ペナルティである。

誰得やねん……。

まぁそれでも他の特殊職はそこまでピーキーな性能でもなく普通にパーティを組めるし、
オンリーワンの能力や異常な汎用性（例えばエルフの戦士系特殊職”イグドラジルナイト”は前衛盾職屈指の鉄壁を維持しながら回復魔法職並みの回復魔法他が使える超人気職。
ペナルティーはパーティを守る盾にも拘らず、全戦士系職ワースト３のＨＰの低さと、全戦士職はおろか一部の魔法職以下の直接攻撃力である。）を見せることから人気職も多かった。

一方アルケミストは確かに万能に近いが、弱点も多く使いにくい上に成長が遅い。
それよりは一部に特化した一般職のほうが……ということでプレイヤー数が極端に少なかった。

しかし中には物好き（マゾともいう）が存在する。
そう、俺の、そして俺の仲間たちのような！

みんなの嫌われ者（パーティとかまじで誘われなかったのよ、ホント。）アルケミストを集めて作った俺のギルド（ギルドっていうのは冒険をする為に集まって作るグループみたいなものです）”十七人の賢者”はその名前の通りアルケミスト１７人が集まってできたギルドであり、互助組織であった。

そして俺達は極めた！アルケミストを！

使い勝手の悪さを各人の研究を持ち寄って研鑽しつくし！
世のドＭどもが泣きながら負けを認めるほどの過酷過ぎる、まるで先の見えないドン亀のマーチを、仲間達とスクラムを組んで行進し抜いたその先には！

”最強”が待っていた。

いやぁもうね、最終的にはぶっちぎりの全職最強でしたよ。アルケミスト。

その所以となったのがレベル７０を過ぎて覚えることができるようになる公式チート、各種反則級魔法の数々である。
最強の範囲攻撃魔法”核熱”、同レベル帯の戦士職や魔法系召喚職の最強召喚獣と互角に渡り合える”サモン・オリハルコンゴーレム”、アルケミストしか作れない各種特殊魔法薬などｅｔｃｅｔｃ……。

正直笑いが止まりませんでしたとも！それ以降は！

まぁあまりの強さにしばらくして各種修正が入ったものの。

その後もその能力は相変わらずずば抜けており、戦争（対人大規模戦闘のことです）のときはうちのギルドを味方につけたほうが勝ちとまで言わしめた。
（実際絶対不敗だったし、戦闘開始直後の核熱×１７で敵勢力瀕死、後ゴーレムによる蹂躙他で即終了っていうことも多かったし）

そんなこんなで《Ｎｅｗ　Ｗｏｒｌｄ》の超有名人になった俺は楽しいネトゲゲーマー生活を送っていた。

さすがにド氷河期の就職活動中はほとんど頑張れなかったが、これでこれからは心おきなく”あっち”に”帰れる”と思ってマイパソコンが立ち上がるのを待っていたら、チャイムが鳴った。

誰だろと思って、ドアに向かおうとするとガン！ガン！と何か鉄と鉄がぶつかり合う音がする。
何事だ？と思いまず携帯で警察に電話……と思って１１０を押した瞬間、部屋のドアが開いた。

そこには確実にやっぱい顔で笑ってる、美人に見えなくも無い女。

いや確実に道を歩いてたら、十人中八人振り返るはずの美女なんですが、俺の好みはもっとやさしげで柔らかな感じ。

目の前の女には、それが１ナノグラムも感じられねぇ……。

どっかで見たことあるなぁ……と思ったら就活中とある会社でグ

ループミーティングがあったときに俺にやたら絡んできた女だ！
その後どこで俺の携帯番号調べたんだか（少なくても俺は教えてない。）、うっとおしい程かけてきやがったので即着信拒否。
美人とはいえ、ああいう女には関わりたくないものだ……とか思ってた女が、なんで俺のうちにいるんだよ！

どうやって住所調べたんだよ！ていうかドアはどうやって開けた？

とパニクリまくってる間にどてっぱらに何かすげーいやな感触がしてお腹を見てみると
包丁が生えてて周りがもぅ真っ赤……まじかよおい。

目の前で女がにや～と笑っていた。怖っ！

「あなたが私を無視するのがいけないのよ？」とか「本当は好きだったくせに」とかマジで脳みそがおかしいらしい。

病院いって検査してこい、といつもの俺らしく軽口叩いてやろうとしたらその声が出ない。

代わりに俺から何かが抜け落ちて行く。

急激に寒くなっていく俺の全て。

何か決定的なものが体から抜け落ちていく気がする感覚……。

まじかよ……俺の人生これでゲームオーバーですか？

コレガ、テンゴクカラジゴク、ッテイウンデスネ……。

どすんというフローリングに倒れこむ音とやけにまぶしい蛍光灯の明かり、にも拘らずゆっくり薄暗くなっていく世界。

かすかに残る意識の中に聞こえる、女の気持ち悪い猫撫で声。最悪の子守唄。

これが俺の前世の最後の記憶だ。

## 第一話　天国と地獄は一日の間にやってくる（後書き）

読んで頂いてありがとうございました。

何か気づいた点ございましたらご意見、ご指摘お待ちしております。

## 第二話　テンプレ展開とゆるふわ幼女様（前書き）

いらっしゃいませ。テンプレを召し上がれ、でございます。

６月２９日　パクってない？との指摘がありましたので当該部分を変更いたしました。

元彼女＞ストーカーさん　です。

多少言い回しなどが変わっております。

ご容赦ください。

## 第二話　テンプレ展開とゆるふわ幼女様

目を開けるとそこは真っ白い空間でいつの間にかあの体の冷え切っていく嫌な感じは無くなっていた。

「知らない天井だ……。」

とお決まり過ぎるフレーズを吐いてから、背中が地面？みたいなものに当たっている感覚に気づく。
俺は寝ているのだろうと思い、しばらくボーとしてから手足を動かす、動く。
動いた手で腹を触る、うん大丈夫。

大丈夫？無傷デスト？

おかしい、俺はあの変態女に包丁でどてっぱらをいかれたはずだ。
あの異常な寒さは大量の出血のせいだっただろうし、普通なら出血性ショックとかで確実に死んでるはず。
助かったのなら、どれだけ俺が目を覚ますまでに時間がたったにせよ、まったく痛み一つ無く大丈夫ってことは無いはずだ。
急激に今まで麻痺していた頭が回り始める、冷や汗を大量に生産しながら。

おかしい。そもそもここはどこだ。

真っ白でだだっ広いだけの空間、少なくても病院ではない。

そもそもテンプレネタを思わず口走っちまったけど、なにもない白

い空間とかもしかしてっつうかもしかしなくても、いわゆるひとつのテンプレ展開ですか？　マサカ！

急いで起き上がり周囲を確認と思った瞬間に俺は視界の隅にいる何かに気づいた、気づいてしまった。

わたあめみたいなゆるふわカールの金髪幼女の土下座に。

……俺ハドウスリャイインデスカ？イッタイ？

ーーーーーー結論からいうとテンプレ通りだった。まったく笑えねぇ。

◇◆◇◆◇◆◇◆

「つまりあなたは神様で俺はあなたのミスであんな死に方をしたってことですか？」

自然と俺の声がきついものになる。

そりゃそうだ、こんな荒唐無稽な話聞かされて、さらにいくつかありえない奇跡目の前で見せられて、無理やり事実だと信じさせられて、しかも目の前の奴のせいで自分が死んだとか聞かされてキレな

いやつがいたらそいつはニホンカワウソとかツチノコ以上の希少生物だ、誰か俺の前につれて来い。
だから俺の怒りは正当だ、絶対に正当ではあるのであるが。

『はぃい……そのとぅりでしゅぅ……』

目の前で絶賛土下座中の舌足らずなしゃべり方でぐすぐす泣くゆるふわ金髪幼女（見た目3歳児）に今年２４歳の俺が怒りのままにブチ切れるのはさすがに無理だった。

だってこんなかわいらしいモンいじめられませんよ……マヂで。

大きく空気を吸い込みそして吐く。
神様だろうがなんだろうが幼女は幼女である、いじめてはいけない、我慢我慢。

「とりあえず泣き止んでください。神様、そして神様らしく奇跡使ってとっとと俺を蘇らせてください。そうすれば全部無かったことになりますから、ね！」

今までの２４年の人生の中で一番素敵でいい笑顔で幼女にお願いする俺。
この絵を知り合いに見られる危険性が無いことだけには心の奥底から感謝したい。

そしてうわ〜〜〜んとまた泣き出す幼女様、勘弁してください。
言い方がきつかったのか？俺の笑顔がきつかったのか？う〜〜んどっちもつらい。

オレガナキタインデス、マヂデ。

そこで幼女様のかわいらしいお口から絶望的な言葉が俺に告げられた。

コレだ。

『申し訳ありまちぇん、あなたはもう元の世界との縁が切れてしまっていてもどれないんですぅ。ぐしゅぐしゅ、わたちのしぇいで……ごめんなちゃいぃぁああい！！』

ナンデスト？生キ返レナイ？俺ノ人生オシマイデスカ？

え〜〜〜

！！！！！」

はい、キレちゃいました。

◇◆◇◆◇◆◇◆

……その後一通り俺がブチ切れ、幼女様が泣き喚き、お互いがいろんな意味で疲れ果てた後で幼女様の話を聞くとこういうことだった。

幼女様は俺達の世界の神様の娘みたいなもんで、最近ようやく仕事を少しづつ任せてもらって頑張っていたのだが、なかなか最初から全部うまくいかないのは人間も神様も同じなようで、あの変態ヤンデレ女は就職活動がまったく上手くいかなかったらしく（あんなことする素養があるなら当然だと思う）、それが回りまわって俺が自分に優しくしてくれなかったせい、ってことで俺のお腹に包丁をドン！ってことらしい……。

そして本来その行為は普通なら成功しないはずだったのだが、幼女様のミスで成功してしまったと。

何じゃそれ！意味分からんわ！１０００％とばっちりじゃねえか！返せよ俺の就活での努力！！

神様も大変だな！あんな変態ヤンデレ女のフォローの失敗で人間に土下座とか！

逆にこっちが気ぃ使うわ！

ということはあの会社を受けた事が間違いだったのか……？
人事もすげぇ嫌な感じだったし……。

忘れよう、不毛だ。

んでその先はまさにテンプレどおりの言葉を舌足らずなまさに鈴が鳴るようなかわいらしい声で説明してくれた。こんな風に。

『あなたはまちがって死んだ人なので別の世界に転生してほしいんでしゅ。』

『そこはいわゆる人の作った『物語の世界』なら基本どこでもかまいまちぇえん。』

『今回の件のお詫びにわたちにできうるだけのことをさしぇていたたきまちゅ！』

まぁ俺は断じてロリでもペドでもないんだがこの幼女様まじでかわいらしい。
神様っていうより天使様だ、おもわず許してしまいそうだ。
てか上目遣い＋うるうるの碧い目＋綿アメ金髪幼女様とかどんだけ反則だよおい。

話が脱線してしまった、つまり要約するとこうなった。

『どこか漫画や小説、ゲームの世界に転生してそこで新しい人生を送って欲しい。
さらにその世界に行くときには俺が望む力を幼女様の力の及ぶ限り、サービスしてもらえる』ってことだな。

あまりのテンプレに逆に冷静になってしまったよ、オイラ。

話を聞き終えて俺がまず幼女様もとい神様に頼んだことは、俺の家族へのフォロー。
親父もお袋も、兄貴はちっちゃいころ及び反抗期にはちょっとイロイロあったけど、俺は基本家族が好きだったしこれから親孝行もするつもりだった。

今回のことは俺にとっても天国から地獄だったけど、俺の家族にとっても間違いなくそうだった。

……みんななかなか決まらない俺の就職にやきもきしてたからな……。

だから俺がいなくなった悲しみを埋める分だけのいいことが起こるように神様にお願いした。
神様はまたえぐえぐ泣きながら過不足無く俺の家族が幸せになれる

ようにフォローしてくれると約束してくれた。
なんか俺の心の優しさに感動したらしい。
まぁ完全な不可抗力とはいえ親より先に死ぬ親不孝したわけだしこれくらいはな。

次に俺が向かう世界、つまり転生先に選んだのは言わずもがなＭＭＯＲＰＧ《Ｎｅｗ　Ｗｏｒｌｄ》の世界だ。
厳密に言うと限りなく《Ｎｅｗ　Ｗｏｒｌｄ》の世界に酷似した世界らしい。

俺は今まで仮想世界Ｎｏ．１の錬金術師だったが、今度は本物の錬金術師になるのだ！

フハハハハハハハハハハハ！

……うん分かってはいる、厨二でゴメンよ。

あとお願いしたのはこんな感じだった。

一つ、キャラメイキング。
つまりどの職業に生まれるか、大体どんな顔でどんな姿になるか決めさせてくれってこと。

一つ、今現在俺が持ってる現状の知識の保護。
転生して成長していく過程で忘れたりしたら大変だからな。

一つ、いわゆるダブルジョブ化。
アルケミストとしても勿論改めて極めなおすが、それだけでは面白くないので同時にやったことがなくてやってみたかった戦士職の能力を同時に持てるようにして欲しいってこと。
魔法戦士ってやつだ……まぁ限りなくチートなんだけどこれくらいは許してくれ。

一つ、ゲームには本来存在しない新しいアイテムや概念を俺が考え出して作ることができるゲームへの介入権利。
だけどこれはちゃんと理にかなったものじゃないとダメってルールにしてもらった。

これは行き過ぎると万能になって面白くないし、逆にあんまりゲームと同じだとせっかくあの世界に行くのにもったいない気がしたから。

そして最後に、女へのトラウマを無くして欲しいってことだ！

切実だよ！コノヤロー！

だってあの変態ヤンデレ女のせいで、あっちの世界で彼女の一人もできん人生とかイヤ過ぎるじゃん！

オンナコワイデス。

あと細々したことをいくつか頼むと神様はちっちゃいかわいらしい手で必死にメモを取りながら『間違いなくちゃんとやりましゅ！』と言ってくれた。マヂで癒される。

本当はもっとありえないくらいイロイロ要求されるかと思って冷や冷やしていたらしい。
神様にしろとか、無敵の英雄にしろとかな。
だからなんて謙虚なひとなんだろ～～ってキラキラした目で見られたんだが、俺はいわゆるマゾプレイヤーに属するのであんまりバランスブレイクし過ぎるのがイヤだっただけなんだが。

……まぁ十分すぎるほどチートなんだけどな。

そこでゲーム開始時にはヒューマン男の魔法職に、髪は金髪で、切れ長の目をした2枚目キャラに自分を設定。（そこのチミ笑うな、ネトゲのアバターはみんなこんなもんだ）

それから俺は神様と握手して（ふにふにのかわいらしい手だった！）何も無かったはずの空間に突如現れた木製に見えるドアを開いて新しい人生への第一歩を歩みだした。

……まぁその後ある程度経ってから分かったことだが幼女様は神様らしく頑張ろう！俺のために色々サービスしよう！とイロイロや

らかしてくれた。それはもう盛大に。

まぁ結果としては面白い人生になったからよかったんだけどな。

## 第二話　テンプレ展開とゆるふわ幼女様（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

ご意見、ご感想、誤字脱字の指摘など幅広くお待ちしております。

本日の投稿はここまでです。

以降は今出来てるところまで二日に一度日付の変わるころお届けしたいと思っています。

３話は２８日の０時予定です。ではでは。

## 第三話　オギャーとお昼寝と初めてのオツカイ（前書き）

ここからネトゲの世界に突入です。
楽しんでいただけたら幸いです。

## 第三話　オギャーとお昼寝と初めてのオツカイ

次に目を覚ましたとき俺は赤ん坊だった。
ちなみにふわふわの金髪で紫っぽい青い目をした超かわいいベイビーだったらしい。

……そこから3年間のことはお願いだから聞かないでくれよ、ブラザー。

ひとつだけ言っておくと新しいママンのおっぱいサイコウデシタ！

◇◆◇◆◇◆◇◆

ぼくのにゃまえは、じお・ぱらけらしゅしゅ・ら・ておふりゃすとぅす、さんしゃいでしゅ！

おっと失礼、俺がかわいらしすぎてスマン。

嘘だよ、許してくれよ。

そんなこんなでジオ・パラケルスス・ラ・テオフラストゥスと名づけられ、三歳になった俺がそのかわいらしさを武器にみんな（両親とか！乳母とか！メイドさんとか！）に聞きだしたところいろんなことが分かった。

まず俺が生まれたこの家が《Ｎｅｗ　Ｗｏｒｌｄ》の舞台となる大陸西部にあるエルトリンの国の街ワトリアだということ。
ワトリアはヒューマンで最初ゲームを開始したときのスタート地点のすぐ傍の町である。

ちなみにヒューマンのスタート地点は、戦士系職は戦神の鍛錬場、魔法系職はエルトリン魔法学院という。

次に俺がワトリアの街の魔法ギルドのギルドマスターの子供として生まれたこと。
これにはびっくりした。
だって父親の名前がひじょ～～～に良く知ってるＮＰＣ（ノンプレイヤーキャラ＝ＲＰＧの町の人）だったから。
父の名前はテオフラストゥス。
このお方はアルケミストの転職イベント等で必ずお世話になる、設定上この世界でも有数の錬金術師なのだ。

……転職クエストのあまりのうっとおしさに、何度このおっさん始末してやろうと考えたことか……。

このことによって早い段階でこの世界の魔法や錬金術をスキルとしてでなく、実地の知識や技術として学ぶことができそうで大変うれしかった。
あとそれなら家に乳母とかメイドさんがいてもおかしくないよなと納得できた。

ゲームでお決まりのステータス画面とかアイテムウィンドウとかも開けた。
装備　胴：幼児の服　とかワロタ。
ステータスを確認したらまだ幼児なので体力系の数値はすごい低かったけど、知力や魔力は普通にメイジの基礎数値がすでにあった。
んじゃ次にスキル欄を～とおもったらスキル欄だけは開くことができなかった。
開こうとしたらに神様のあの超かわいらしい声で
『この機能は本来ゲームが始まる時点以降で確認可能になりまちゅ～☆
それまでお楽ちみに～！』という声がどこからともなく聞こえた。
その突然の幼女ボイスにビックリしながらも、まぁ現状困らないしいいかとその時は諦めた俺であった。
この判断のせいで後で死ぬほどびっくりすることになるのは、まぁご愛嬌ってやつだな。

あと重要な情報、今がいつかということも分かった。
神聖帝国暦５３８年、つまりゲームのサービス開始（オープンβ）の１２年前である。
これは神聖帝国暦５５０年のアサイオンの大神官マルフィアの神託によって、モンスターの大侵攻が始まるという予言を聞いた多くの冒険者（プレイヤー）たちがこの困難な時代に立ち向かう為、それぞれ種族の訓練施設から旅立っていくっていうのが《Ｎｅｗ　Ｗｏｒｌｄ》というゲームが始まるときの設定だからである。

つまり舞台はまだまっさらで、俺の持ってる情報価値はすごくでかいってことだ。

よしいいぞ、燃えてきた。

だがまずは今日のお昼寝からだ、３歳児の僕はもうおねむですよ。

メイドさんの添い寝は仕様です。オヤスミナサイ。

◇◆◇◆◇◆◇◆

7歳になりました、中村秀人改めジオ・パラケルスス・ラ・テオフラストゥスです。

この4年間体を鍛える為に頑張って運動したり、この世界の常識や魔法や錬金術（主にポーションの調合など）を勉強したりしてたんだけど何かこの体異常なほどスペックが高い。

7歳児、元の世界で小学1年生程度なのに既に元の世界のアスリート並の身体能力なんだもの。

ありえないっつ～の。

それでさすがファンタジーとか思っていたら、どうも俺は異常らしい。

父上（始めはちょっと恥かしかったけど慣れた）が「私の息子は天才だ！」とかいって死ぬほど喜んでるところを見ると周りから見た

らさぞかし異常なんだろうな～と思う。

よく考えてみたら7歳で既にこの世界の文字の読み書きが普通にできて、計算は大人顔負けどころか楽勝で俺が上で（理系でしたから）、世界有数の錬金術師にして賢者である親父様もビックリするようなこと（前世の一般的な科学や物理とかの知識や俺の間違いなく業界トップクラスだった《Ｎｅｗ　Ｗｏｒｌｄ》のゲーム内知識）を口走ればそら天才扱いもされるか。

慣性の法則とかＢグレード（レベル５０以上のアルケミストが作成可能）ポーションのレシピとかな。

あと6歳のときにようやく許されて魔法を教えてもらえることになった。

何も習わず使えるかどうか分からんかったし、仮にスキル発動で使えても、何も知らないはずの幼児が魔法使えたらさすがに怪しまれると思ったからやめといた。

そして父上と母上の指導と監視の下うちのやたらめったら広い庭で初めて魔法を使ったら、できましたよ。

いとも簡単に。

何ていうか死ぬほど簡単に覚えられた。

ていうか教えられたら忘れてたことを思い出したって感じだった。

たぶん前世のプレイ経験のおかげだと思う。

そして父上が「この子は魔法の神に愛された子だ！」ってうるさかった。

惜しいな父上！俺を愛してるのは魔法の神様じゃなくて幼女でチートな神様だ。

そしてハジメテの魔法の感想は。

魔法サイコ～！マジ俺ＴＵＥＥＥＥＥＥＥＥ！って感じ！でした。
あ～～～マヂでこの感動は伝えきれない。
言葉で伝えられないものって本当にあるんですね。

その日は興奮してなかなか寝付けなかったぜ。

本当は心配だったんだ、ゲーム開始のときまで魔法とかスキルに分類されるものは使えないんじゃないだろうかと。
でもそんなことは無かった。
ポーション作成もスキルでできたしな。

それでちゃんと魔法が使えることを確認した俺はついに新しい人生の本当の意味での第一歩を刻む為に、今日街の外に冒険に行く準備を整え始めた！

まずは神殿に行って神官さんに冒険者の登録をしてもらった。

もちろん両親には秘密で。
若干ショタ属性のある女神官を捕まえて（事前調査済み☆）、幼女な神様直伝の上目使いでたぶらかして両親には秘密で登録完了！

これで万が一死んでも神殿で蘇るのだ！

死ぬのは絶対嫌だけどな、トラウマだもの。

次に装備だ。
さすがに最弱クラスの雑魚相手といえど万が一にも死にたくないので、ここでも俺は策略を練った。

「はやく父上みたいな立派な魔法使い、ううん錬金術師になりたいから！」って言って父上を篭絡することに。
魔法の練習用にちゃんとした杖が欲しいんですっておねだりした。

結果？　当然成功しましたヨ？　だってうちの父上親バカだし！

Ｅグレード（装備にはグレードがあってレベルが低い時に上位グレードの装備を装備するとすげえペナルティが発生する。Ｅグレードは最低のグレードでレベル帯は１～２０）最高の魔法武器であるトネリコスタッフとなし崩し的に防具一式を含む装備を買ってもらった。
（しめて３５００Ｇ。
ちなみにうちのメイドさんの一月のお給料が１００Ｇである。
さらに付け加えるなら、実際ゲームとしての《Ｎｅｗ　Ｗｏｒｌｄ

≫内でこの装備を買える様になるのは普通1次転職前、つまりレベル２０に近くなってからだ！親バカ万歳！）

魔法は使える、装備は万全、万が一の為のポーション（父上の私物の材料をくすねて自分で作った）もちゃんと準備した。

これで準備は整った。
今日は半年がかりで準備を整えたハジメテのオツカイならぬ、ハジメテの冒険だ！

ケケケ、これからが俺のチート人生（言っちゃった）の始まりだぜ！ビバチート人生！

大事だからちゃんと2回言いました！

ということでいざ出陣！

まず遊びに行く振りをして、こっそり街の外に出る。
どの衛兵がさぼりがちで監視が行き届いてないかは、既にチェック済みである。
街から出る馬車の影に隠れて外に出る事にした。
待つ事数分、ちょうどいい感じの荷馬車が通りがかったので、うまく隠れて脱出成功。

驚くほど簡単に出れた。

大丈夫か？　ワトリアの警備体制。不安になるぜ……。

そうして無事街の外に抜け出した俺は、エルトリン魔法学院に向かう街道を歩いていく。

こっちの世界で自由に動き回れるようになって思ったんだけど、この世界はすごくきれいだ。

元の世界もそうだったけどあのころはいろんな意味でゆとりがなかったからなぁ……特に最後の１年……。

と暗い過去を思い出しつつも、気持ちいい風に体に感じながら『やつ』を探していたらいた！いやがった！

ウェアラットだ……。

ゲーム開始時チュートリアルで学院に集められたこいつらを５匹倒すことが《Ｎｅｗ　Ｗｏｒｌｄ》最初のイベントなのだ。

ちなみに他の種族で始めても似たようなイベントが存在する。

つまり《Ｎｅｗ　Ｗｏｒｌｄ》最弱の雑魚、ドラゴンＯエストでいうところのスライム、ファイナルＯファンタジーでいうところのゴブリンである。

姿は茶色の小型犬くらいのでかいネズミなんだけど、実際に初めて見たら顔がまじできもい。

こいつらとディズＯーのミＯキーやポケＯンのピカチＯウが同じ種族であることを俺は認めない！

気分を切り替えて呼吸を整えて、意識の中でターゲットをロック、まだ俺にはかなりおっきい杖を構えて、集中し呪文を唱える！

《ファイアーボール》

すると杖の先端に小さな火の玉が浮かび上がりウェアラットに向かって飛んでいき、そして着弾！

やった！倒したって……アレ？

ヲイヲイ1発でこんがりとネズミさんが焼けちゃいましたよ……。

すげえよトネリコスタッフ……。

普通にゲームを開始した場合ウェアラット一匹を倒すのに《ファイアーボール》2発必要なんだが……。

しばし呆然とする俺。

そしてしばらくして自分を取り戻した俺は残された金とアイテムを拾う。

初めて拾う金とドロップアイテム……、まじでたまらん！

ファンタジー最高だぜ！なぜ丸焼きにしたネズミからアイテムや金が落ちるかって？
そんなの決まってるぜ！ファンタジーだからだ！！

そして次なる獲物を探す。
いるいる！ウェアラットが街道をのんきに歩いていやがりますよ！

発見＞ターゲットロックオン！＞《ファイアーボール》＞ネズミ丸こげ　を９回繰り返したところで体が光に包まれた！

レベルアップのエフェクト（画面効果）だ！なんか強くなった感じがするぜ！

ステータスを呼び出して確認してみる。

レベルが１＞２に。
ＨＰが５２＞８０に
ＭＰが１５＞２７になっていた。

よし今日の最重要確認事項『俺の野望の為のステップ1』をクリアした！

つまり！ゲーム開始前でもレベルは上げられる。

よし予想通りだ！笑いがとまんねぇぜ！ウケケケケケケ！！

この後俺はお日様が夕日になるまでネズミさんたちをこんがりと焼きまくり、レベルが3になったところでおうちに帰りました。

……遅くなったことを母上に超怒られました……グスン。

## 第三話　オギャーとお昼寝と初めてのオツカイ（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

ご意見、ご感想、誤字脱字の指摘など幅広くお待ちしております。

## 第四話　しょせん世の中、金（前書き）

うちの主人公、自重する気０です。どうしようもありません。

６月３０日誤字脱字修正しました。

## 第四話　しょせん世の中、金

む～まだ眠いよ～、ん～このおっぱいは……母上のだ！母上は俺のもの～♪

ん？　何か？　添い寝はジャスティスだろ？　ブラザー。

だって俺まだ7歳だもん！

初ミッションに成功したジオだ。今日の俺は昨日までとは一味違うぜ！

そんなこんなで『オツカイ』の翌日である今日、俺はさっそく『俺の野望の為のステップ2』の為にワトリアの道具屋のブエロのおっさんのところを訪ねた。

こういうことは勢いが大事だ。

ブエロのおっさんもとい『道具屋ブエロ』は普通の《Ｎｅｗ　Ｗｏｒｌｄ》ヒューマンプレイヤーにとって最初に必ずお世話になるといっていいＮＰＣである。

《Ｎｅｗ　Ｗｏｒｌｄ》の世界では、《クエスト》というＮＰＣから頼まれた依頼を達成して報酬としてお金かアイテムをもらうシステムが存在する。

『道具屋ブエロ』から受けるこのクエストは、通称『おつかいクエスト』というもので、ワトリアだけではなく各種族ごとにスタートポイント最寄の街や村に設定されており、スタートポイントの責任

者から教えられてプレイヤーが初めてクエストを受け、その過程でアバターの操作方法や街にどんな施設があるかなどを学ぶためのクエストであり、クエスト用のチュートリアルといえる。

ちなみに報酬は『初心者用ポーション』１０個。
同じ効果のポーションは、買えば一個５０ゴールドするので初心者にとっては非常にうれしい。
まさに必須のクエストといえる。
（ちなみにこれの転売は不可能だ。《Ｎｅｗ　Ｗｏｒｌｄ》の運営はそれほど甘くない）

歩きなれたワトリアの街並をとことこと歩き道具屋『風の始まり亭』に到着した。

店のドアは開いている。

俺は精一杯大きな声で中にいるだろう人物に声をかけた。

「こんにちわ～ブエロのおじさんいますか～」

俺の声にカウンターに座った大柄なごついヒゲ親父がこちらを向いた。
声の主が俺だと気づいたようだ。
おっさんのだみ声が店に響く。

「おう、ジオの坊主。どうしたおつかいか？」

俺はこのおっさんとはわりと長い付き合いだ。
勿論こっちの世界に来てから。

なぜならうちの父上は錬金術師だから作ったポーションをこのおっさんに卸してっていう商売上の関係があり、この店と俺の家とは生まれる前からの付き合いがあるのだ。
当然俺のことも良く知っている。

もっというとさらに昔から父上とは知り合いらしい。
ゲームでは語られない裏設定が多すぎるぜ、こっちに来てから。

「ちょっとお願いがあるんだ～、お店の奥でお話できないかな～」
と必殺の上目遣いでおっさんを店の奥に誘う。

「お、おぅ。おい！お前わりいけど店に出てくれ！ジオ坊が俺に男同士の話があるんだとよ！」

おっさんがそういっておばさんを呼んだ。助かった。
子供のいないおばさんは俺のことをかわいがってくれていて一度捕まると長いのだ。
これから大事な話って時に気合が抜けるのはいただけない。

よし第一関門突破だ。

「ジオ坊こっちだ。」

店の奥に入れてもらったのはそういえば初めてだ。
いつもは俺の家か店内で話すからな。

小さな部屋に案内されて中に入るとそこはポーションの調合室だった。
このおっさん調合士だったのか？　イヤもしかして元メイジなのか？　あんなにごついのに？　う～ん人は見かけによらんなぁ。
さらに明かされる裏設定？　に驚きながら俺はおっさんから勧められた椅子に座ってから話を切り出した。

――――この場所（調合室）は俺にとっても死ぬほど都合がイイしな。

ここでぶっちゃけると俺の『俺の野望の為のステップ』とは要するにゲームスタート、つまり神聖帝国暦５５０年の俺の１５歳の旅立ちの時までに可能な限り強くなることやお金を貯めておくことなど、できうる限りの準備を整えてしまっておくことだ。

う～～～～～ん、チートにも程があるぜ。元の世界の仲間のみんなゴメンナサイ。

そして強くなることに関しては今でもレベルが上げられることを確認したからこの件に関してはクリア。
あとは暇を見つけては弱めのモンスターを倒してレベルアップしていけばいい。
ホントまじでチートだわ、ウケケ。

そして金に関しては、このおっさんとの今回の話し合いの結果が大

きく関わってくる。
失敗は許されねぇ……。
俺は表情に何とか緊張を見せないようにしながらおっさんに切り出した。
「おじさん、このポーション見てくれる？」
そう言って俺はおっさんにかばんの中に入っていたポーションのビンを渡した。
「これは……親父さんのポーションか？これがどうした？」
ポーションの出来を確かめつつ、そういうおっさん。
――――――かかった。
心の中で今年でトータル３１になる俺が邪悪にほくそ笑みながら、俺は外見上７歳のかわいい金髪幼児の笑顔でおっさんに事実を告げる。
「えへへ～いい出来でしょ～。それね～僕が作ったんだよ！」
「何？　嘘つくんじゃねぇぞ、ジオ坊。お前がいくら天才少年っていわれてるからって……」

そういって驚きながらもさすがにありえないと否定するおっさん。
そらそうだわ、一番簡単なポーションとはいえまさに教科書そのものというべき最高級の出来だしな、我ながら。
こんなもんがホントに普通の7歳児に作れたらそいつは絶対に異常だ、そう！俺みたいにな！

さて勝負はここから！攻撃開始だ！

怒ったようなすねたような顔してまんまるほっぺをぷ～～と膨らませ、

「ふ～～ん、そんなこというなら今から作るから見ててよ！」と宣言してやる。

そういって俺はカバンから材料を取り出す。
もちろんこの材料はうちの庭にある薬草園のものを使った。
まぁ練習用になら少し持って行ってもいいぞと父上の言質はちゃんととってあるので合法だがな！

そういって俺はおっさんの前でポーションを手際よく調合し始める。
とはいってもこのポーション、レシピは簡単で材料も高いものは必要ない。
（何度も言うようだが、だからと言って普通の7歳児に作れるもんじゃないけどな。念の為）

そもそもプレイヤーがこれを作ることはほとんど無いといっていいだろう。
なぜなら効果は十分なのだが、これを作る為の材料集めに時間を使

うくらいならばその時間を使ってモンスターを狩り、経験値とお金を貯めつつ、店に売っているポーションを買うほうがどう考えても合理的だからだ。

実際、俺も昔はそうだった。
レシピは持っていたが2、3回ためしに作っただけで、その後作ったことは無かった。
まぁアルケミスト職のプレイヤーにとっては、ポーションのレシピはコレクターズアイテムとして欠かせないので、レシピだけは俺の周りはみんなもってたけどな。
（もちろん俺は全種類コンプリートでした）

そのコレクター根性がこの世界では超プラスに働いたのだ！
つまり俺が前の世界で覚えていたポーションのレシピや装備を作るのに必要な基本素材のレシピなどが、全て頭の中にスキルとして存在していた。
そしてこのポーションを作ろうとしたとき、魔法を初めて使った時と同じように手馴れたことを思い出すようにそれが出来たのだ！

……まぁ初めから完璧なものを作ると父上がどんなに親バカでもさすがに怪しまれる（全然大丈夫なような気もするがな！）と思ったので何度かわざと失敗したがな！

まぁちなみにさらに上位のポーション、つまり上位グレードのポーションは今は作れない。
試してみたが魔法の時やこのポーションのときのような感覚は無かった。
まだレベルが足りないからだろう。

昔よく作った（そして売った、そしてぼろ儲けした）他のポーショ

ンのレシピは空で覚えてるが、さすがに今は材料費が無いし、もし失敗したら材料費がパァ。
さらにそんな上位プレイヤー用のポーション今（ゲーム開始前って意味だ）売れるかどうかわからんし、リスクが大きすぎるので保留だ。

———結論、市場調査が出来るようになるまでは薄利多売で儲ける。

とそんなこんなを考えているうちにポーションが出来上がった。
我ながら完璧な出来のものが一度に5個。

振り向いてみるとブエロのおっさんが目をまん丸にして驚いてやがる、ウケケ！ざまぁみろ！

そんなおっさんに向かって俺は自信満々の得意顔で言ってやる。

「どう？おじさんちゃんと出来たでしょ！」笑顔は忘れない、笑顔は大事。

就活の教訓だ。

「あぁ……悪かったなジオ坊、疑ったりして……」

夢でも見たかのような顔をしながらもおっさんが俺に謝ってきた。
そこに畳み掛ける俺！

「それでね、ポーション作りの練習にもっといっぱい作りたいんだけどこんなにポーションがあっても僕使わないんだ～♪だ、か、ら、

おじさんお願い！これを一本あたり３０Ｇで買って欲しいんだ！」

そうこれが俺の『俺の野望の為のステップ２』なのだ！

このポーションは冒険者や衛兵が存在するだけ売れる。
それは既に半年間のリサーチで確認済みだ。
（それ以外にもおっさんが父上にもっと納品数を増やしてくれると助かるんですがって言ってたのを聞いたこともあったしな！）
そもそもこのポーション、普通の初心者プレイヤーなら一回の冒険に出るのに１０個は持って行くのが常識である。

ぶっちゃけた話、需要と供給のバランスが取れていないらしい。
（勿論ゲーム内では品切れなど起こさないのだが、いわゆるこれも裏設定なのだろう）

おっさんも商人ならこんないい話を断るはずが無い。

（販売価格５０Ｇ－俺へ支払う金３０Ｇ－ビン代負担１０Ｇ＝おっさんの利益１０Ｇ）

濡れ手に粟で一本１０Ｇの利益が出るのだ！
しかもあればあるだけ売れる！
しかも出来は最高品質だ！
（実はこっちに来て知ったんだけどポーションにも出来不出来があるそうなのだ。その中でも父上や俺が作るものは最高級品だといっていいのですよ！）

ちなみにうちのようなかなり裕福な家のメイドさんの一月のお給料が大体１０００Ｇらしい。
（この事実からおおよそ１Ｇ＝１０００円程度の感覚が正しいらしいことが分かった。
さらにいうとＧは金貨であり、普通の生活では基本Ｃ（銅貨）を、もしくはＳ（銀貨）使う為、金貨を使うことは実はあまり無いらしい）
さらに父上が同じものを３５Ｇで納品しているのもちゃんとリサーチ済みだ！

さぁさぁどうするおっさん！この申し出をうけてくれるかにゃあああああァ！！

妄想してた俺が現実に帰ってくるとおっさんは、ふ～と息を吹いて俺に話しかけてきた。

「ジオ坊、俺が買わなきゃどうするつもりだ？そもそもなんでそんなに金が欲しい？」

さぁきた正念場だ。
利益誘導や搦め手で押すのはここまで。
俺は慎重に答える。

「ん～おじさんが買ってくれないなら父上に渡しておこづかいって形でおじさんにひきとってもらうかなぁ……。

それでね、お金が欲しいのは～僕ね！将来冒険者になって父上みたいな立派な錬金術師になるんだ！それでその為に貯金するの！」

うん、一切嘘は言っていない。
おっさんは俺の子供らしくない発言と子供らしい夢にまた混乱しながらも、俺の目をじっと見つめて何かを探るように見ていたが、やがて諦めたようにため息を大きくついてから頷いてくれた。

よっしっ！商談成立だ！

結局とりあえず値段はそのままで月間１０本づつ納品してくれって話で話はまとまった。
だが一つ残念なのが、お金はうちの執事のじぃに渡して管理してもらうことになってしまった。
残念だが子供には大金だし仕方ない。

ちゃんといくら儲けたかは手帳につけて俺の手元とおっさんの手元に残しておこう。
じぃもおっさんも大好きだし信用しているが、こういう事はちゃんとやっとかないと揉め事の元になるからな。

勿論両親には内緒にしてねってちゃんとお願いしておいた。
おっさんには父上や母上に何かの記念の時に何かプレゼントするのに使うから秘密にしておきたいんだ～と言って約束させた。
おっさんがやたら熱いテンションで「おう！男同士の約束だな！」って言ってたのが暑苦しかったが、今回の交渉の結果は俺にとって大変満足の行くものだった。

こうして俺は『俺の野望の為のステップ２』をクリアした！

なお、この後俺のポーションはそのあまりの出来の良さに注文が殺到し、初めの約束はいつの間にか忘れられ、多い時に月２００本ほど納品する程になったのだった。

まさに狙い通りである。笑いが止まりませんヨ？

## 第四話　しょせん世の中、金（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

ご意見、ご感想、誤字脱字の指摘など幅広くお待ちしております。

ところで皆様に質問です。
キャラが増えるたびに登場人物とかあったほうがいいですか？まぁ主要人物のみにはなると思いますが。
いかがでしょうか？

## 第五話　おねえさんはメイド様！（前書き）

ヒロイン一人目登場でございます。
自分の描写力の無さにほとほと愛想が尽きております。

６月３０日　素人＞日本人　に変更しました。
貴重なご意見ありがとうございます。

## 第五話　おねえさんはメイド様！

いちま～い、にま～い、ぐへへ。いつ見ても金貨の輝きはええのぉ……。

何でも出来そうな気がしてくるわぁ……ウケケケケケケ……。

ん？　気配を感じる！はっ！いつの間に！

……どうもこんにちわ！僕の名前はジオ！１０歳だよ！

（危ない危ない、もう少しで無垢で純真な俺のイメージが……）

ということであのはじめてのオツカイと商談から3年が経った。

その間にあった大事な出来事をいくつか先に話しておこうと思うから、ちょっと聞いてくれ。

あぁ……お茶菓子はそこ。急須はここで、お茶の葉はそこの棚の中だ。セルフで頼む。

まず『俺の野望の為のステップ』、もういちいち長いから計画って言い換えちゃうけど、計画1、つまりレベル上げはその後もそこそこ順調に来ている。

初日に3まで上がった俺のレベルは、3年たった今では１８。

ん？　ペースが遅くないかって？

みんな間違えちゃいけないぜ、俺は、まだ、１０歳だ！
……なかなか遠出とか出来ないんだよ、さすがに。

それにレベルは上に行けば行くほど上がりにくくなるからな。

まぁそれでも今はワトリアの街からすぐ行ける狩場の中では、一番敵が強いデフ盆地入り口で、イアナゴブリン相手にレベル上げとアイテム収集に勤しんでいる。
（ゴブリンやオークは種族と狩場によってその強さが本当に天と地ほども違う。
イアナゴブリンは全体から見ると弱い部類だが、レベル１３～２０くらいの１次転職前から転職後のおよそ３０台前半まで幅広くお世話になるゴブリンだ）

あと今俺は基本的に狩りで魔法を使っていない。
前世補正（簡単に使えた魔法とかポーションの調合とかの不思議能力のことを俺はこう呼んでいる。またの名を幼女☆ボーナス）のない戦士系としての能力を鍛える為に、武器を使った戦闘で奴らを倒している。

……まぁもちろん最初は安全の為ネズミからやったんだけど、魔法と違ってまじで生き物を殺してる感覚が手に伝わる初体験の後、俺は吐きまくってしまい、その後も一週間部屋に閉じこもってしま

った。
（刃物でグサ！は俺のＮＯ１トラウマだから……）
その後、家で食べる為に鶏さんを絞める時や、豚さんを解体する時などに立ち合わせてもらったりして、３ヶ月かかってなんとかトラウマを克服したのも、今ではもう昔の話だ。

……人型のゴブリンを初めてスチールダガー（１４００Ｇ、つまりおよそ日本円にして１４０万くらいはするＥグレード最強の片刃の幅広なナイフだ。
基本、武器を含む装備はこの世界ではかなり高い。
元の世界の感覚に例えると、一般的な日本人が本格的な軍用拳銃を買うような感覚だと思ってもらえれば、この感覚の差が少しは埋まると思う）を使って倒した時も、また一週間閉じこもったけどな。

今はもう大丈夫どころか、むしろスポーツ感覚でやってる自分に少し驚いている。
ゴブリン相手に経験をつんだおかげだろうか、かなりこの世界の『戦い』ってやつに慣れたからだと思う。
今ではそういう場面になると、スイッチが切り替わる感覚で冷静になれるようになった。
やっぱり何事も経験は大事で、コツコツ積み上げないとな。

７歳の時にアスリート並だと感じてた身体能力だが今では野生のサル並だと自信を持って言える。
今の段階でこうなのだからレベルが上がるにつれ、どこまで行くのかが今から楽しみだ。

目指せ天Ｏ突破！おっと危ない、著作権の侵害は犯罪だ。

今は弓を打ち込んでダメージを与えながら、おびき寄せつつナイフで止めを刺すっていうやり方で頑張っている。

次に計画２、ポーションで大もうけ計画だが予想以上に儲かっている。

ポーションの売り上げは絶好調でこの３年で５００００Ｇ以上儲けた。

５００００Ｇだ。もう一回言おう！５００００Ｇだ！

元の世界換算でおよそ５０００万円（およそ１Ｇ＝１０００円だからな。）、こちらの世界でも『一般人』にとってはかなりの大金である、ていうか普通の家が数件買える。

但しあくまで『一般人』ならだ。

冒険者に必要な金額というのは、かなり一般人とは隔絶している。

《Ｎｅｗ　Ｗｏｒｌｄ》では、グレードが上がるごとに装備の値段がおよそ１０倍必要になる。例えばＥグレードの武器が１０００Ｇだとする。じゃあそれに相当するＤグレードのものなら１００００Ｇということだ。

グレードは俺の知る限りＳグレードまでありＥ＞Ｄ＞Ｃ＞Ｂ＞Ａ＞

Ｓと上がるのでＳグレードの武器は１００，０００，０００Ｇ、つまり１億Ｇ必要になるというのがこの世界の相場であると思っておいてくれ。

防具は全部集めておおよそその半分くらいが相場だろうか。

な、隔絶してるだろ？Ｓグレード装備とか、もうどこかの国の国家予算レベルだからなぁ……。

まぁそんなもんでも使わなきゃ、伝説のドラゴンとか魔物のボスなんてものとは戦えないってことだな。

閑話休題。

そんなわけで上を見れば切りが無いが、駆け出し冒険者としては異常なほど今の俺は金を持っている。これをどういう風に使うかはもう少ししたらゆっくり話したいと思う。（ちなみにスチールダガーを含む装備は全部自分で買った。全部で５０００Ｇくらいしたが先行投資だと思えば安いものだ）

あとは……９歳の時に父上と母上に将来の夢とそのために俺がやってることを話した。

夢に関しては大いに誉められ（父上はテーブルに滝が出来るほど泣いていた）、計画つまり実際こそこそやってた事については当然だけど死ぬほど怒られた。

まぁその後イロイロあったが、最後には許されて今は万が一の為の護衛付きで冒険に行くことが許されているのが現状だ。
護衛の人は、父上が雇ったヒューマンの戦士系1次職レンジャーのイナさんだ。
レンジャーはヒューマン戦士系一次職の中でもスピードと器用さに優れた戦士職で、短剣や弓を使いこなして戦うスピード型の職業である。
ちなみに見た目は、いぶし銀を地で行くナイスミドルなおじさまだ。

なんでも父上やブエロのおっさんの昔の知り合いで、元冒険者だが今は引退して悠々自適の暮らしをしていたらしい。
今の俺と比較するとかなり強い上に、戦士職の武器の使い方戦い方、レンジャーとしての技や経験を教えてくれるので、俺は普段は『先生』って呼んでいる。
（スキルはまだヒューマンの戦士系基本職『ファイター』としてのものしか使えないけどね）

あ、大事なこと言い忘れてた。
俺に戦士職としての才能も、魔法職としての才能もあるらしいって分かった時、父上が珍しく厳しい顔をしてできるだけ誰にも漏らさないようにって約束させられた。

ありえないことだからなぁ……コレ。
幼女チートだもんなぁ……。

ということで俺は対外的には

『魔法ギルドのギルドマスターの子供にも関わらず、魔法職の才能に乏しいからしかたなく今から戦士職としていろいろ鍛えられてる魔法のオチコボレ』ってことになってる。
まぁ非常にイイ隠れ蓑だから俺は結構便利に使っているがな……。

おかげで父上がギルドマスター追われそうになったりもしたそうなんだが、火種のかけらも残さずもみ消したそうだ。
ギルド関係者のガキどもの多くにはバカにした目で見られるが、はっきり言って気にもならない。
だって喧嘩にすらならないから。（やつらはレベル1以下のひよこ以下の存在だからな、まだ）

そして最後に……大事なことを言わなきゃいけない。

落ち着いて聞いてくれ。

実は……

好きな女の子が出来ました。

◇◆◇◆◇◆◇◆

落ち着いたか？ブラザー。

うん、分かってる。
前世２４歳＋こっち１０歳で実際３４歳の三十路過ぎたおっさんが
何をって言いたいんだろ？
うん、分かってる。

でも今から言うこと聞いたらもっと怒ると思うよ。

落ち着いて聞いてくれ。

相手は、『超かわいくてやさしい巨乳の黒髪美人な俺の専属メイドさんのマリエルちゃん、１４歳だ。』

ＯＫ。モノを投げないでくれ、頼むから。

まぁまじめな話、２４歳以上の歳のおっさんな自分と見た目どおり１０歳の自分が自分の中では違和感無く存在している部分があるんでロリではないと思う。

あと彼女エルトリン国内の農村の生まれなんだが、家族が多くて口減らしのために町に出て働こうとしていたところ、それならってことでその村で引退生活しながら子供たちに読み書きなんかを教えてたイナ先生が、昔なじみに会う（父上が俺の為に呼んでくれた）ついでってことで一緒にワトリアに出てきたところ、それならって事で俺の専属メイドとしてうちで雇ってもらったっていうのがことの始まりだったりする。

……だって、一目ぼれだったんだもん。

イタイ、イタイ。石を投げないでくれ。

実際人手が必要だったってこともある。
俺は自分の訓練や狩りに出かけることも多くて、ポーションの納品とか注文を受けたりとかっていうことの代行が欲しかったのは本当の話。
あと冒険者として立つ後々の事を考えると、俺を裏から支えてくれる信頼できる人間は絶対に必要だったんだ。
留守の間集めてきた素材を売ったり、市場に出物が出たら買ってもらっておいたり、他にも料理、掃除、洗濯などやってもらいたい事は数え切れない。

この世界で冒険者として生き抜くには、そういうサポートをしてくれる人間は必須だと俺は判断したんだ。

なぜならこの世界は『ゲームの中』じゃない。
『《Ｎｅｗ　Ｗｏｒｌｄ》というゲームに限りなく近い現実』だからだ。

実際の戦争でも兵站、つまり補給とか後方支援がしっかりしているところが勝利するだろ？
そういうことだと思う。

ローマは兵站で勝つ、ですよ。

そんなこんなでマリエルは良く頑張ってくれている。
明るくてやさしくて包容力のある年上の『おねえさん』タイプで、俺の好みのもろど真ん中どストレートだし、仕事も丁寧でかなり頭もいい。
計算も俺が少し教えたらかなり出来るようになったしな

マリエルは俺に対して、まるでやんちゃな弟に対するやさしいお姉さんのように接してくれる。
兄弟が多くて、マリエルを一番上に下に7人とかいるって言ってた。
前世でも兄貴しか兄弟がいなかったし、『おねえさん』は俺にも結構新鮮だ。

どこをとってもマリエルはかわいい。
前も含めて俺の人生の中で絶対一番かわいい！
今は俺の片思いだけどいつか口説き落として絶対に俺の嫁にしてみせる！

……自信まったくねぇや。

でも！異論は認めない！マリエルは俺の嫁！

お、規則正しい足音が聞こえる。
これはマリエルかな。（念のために言っておく。俺は変態じゃない、これは戦士としての訓練の成果だ）
コンコンとドアがノックされる。

「入ってマリエル」

ドアの向こうの人物にそう言うと、失礼しますといいながら『俺の嫁（予定）』マリエルが入ってきた。

紺のメイド服に清潔な白いエプロンと白いカチューシャが良く似合ってる。
髪型は黒くてつややかな黒髪を三つ編みにしてる。
肌なんかも真っ白で、目も髪とお揃いの真っ黒のお目々がきらきら輝いてる。
うん、今日もかわいすぎる。

そう思いながらマリエルを見つめていたら、マリエルはにっこり笑いながら

「あらあら若様。もうお昼前でございますよ？
ベッドから起きてくださいませ。旦那様がお呼びでございます」と

やさしく教えてくれた。

マリエルは俺の事を『若様』って呼ぶ。いいだろ！

おっと、現実に戻らないと！
父上から呼び出し？もしかしてあの件か？
よっし！もしそうなら待ちに待った『俺の野望の為のステップ３』の始まりだぜ！

俺は寝転んでいたベッドから飛び起きると、マリエルを連れて父上のところへ向かう。

さりげなく手をつないでな。子供の特権だ、許せ。

◇◆◇◆◇◆◇◆

父上の自室の前に着いた俺はノックしてからドアを開けた。

「父上、お呼びですか？」

「よく来たな息子よ！」

そう言うと父上は椅子から立ち上がり、俺のほうへやって来て俺を抱き上げた。
重くなったなぁといいながらおろしてくれる。
まぁいつもというか毎日の事なんだが、いい加減１０歳にもなるんだしやめて欲しいと思うのだが、父上がやめるまではそのままにしておくことにしている。

以前母上にそう言ったが、母上は
「あなたはもうすぐこの家を出て、この世の中で最も危険な仕事しながら生きていくつもりなんでしょう？あと少しの間だけ私たちにあなたをかわいがらせて欲しいと思うのはいけない？」って言われて諦めざる得なかった。

但し！マリエルのいるところではできればやめて欲しいんだ！恥かしいから！
ほら今も何かほほえましいもの見てるような目で俺を見てるから！

俺は父上のヒゲ攻撃をなんとか回避しながら話を聞きだして行くことにした。

「父上、お話はもしかしてあのお話ですか？」

そう俺が聞くと父上は俺をようやく解放しながら、

「そうだ息子よ。今回のエルトリンシティ行きにお前も同行させる事にした」

と答えてくれました。

おっしゃあ！来たぁぁぁ

に移すのが普通だからな。
だが俺は何と言ってもまだ１０歳だし、父上や母上に必要以上の心配はかけたくない。
一人で行くとなるとまぁ確実に家出扱いされるしな。
この場合『合法的に１回行く』って事に意味があるんだ。
そして一度行けば、後はいつでも好きな時にいけるようになるから。

『ゲートキーパー』って分かるかな？
町ごとに存在する特殊な魔法使い達で、有料ではあるが魔法で違う町やダンジョンの入り口に送ってくれるそれはそれは便利な方たちだ。

但しこれにはいくつかルールが存在する。
まず使用開始の為のクエストを受ける事、これは『お使いクエスト』の一種なのですぐに終わるので問題ない。
あとそのクエストの最後に登録料１０００Ｇを要求される。
これもその便利さを考えればまったく問題無い。

問題なのが次の２点だ。

『ゲートキーパーから飛べるのは、町でもダンジョンでも一度行った事のある場所だけ』

『ゲートキーパーの管轄する範囲はそれぞれ決まっている』

つまり『自分で行った事のないところには移動できず、行った事の

ある場所でもエリア外だと一度には移動できない』ということだ。

つまりA、B，Cという町があるとする。
AからBへの移動は可能だが、AからCに一気に移動する事は出来ず、その場合Bを経由してCに移動しなければならないということである。

簡単だけどこれがゲートキーパーについての説明だ。
これと自分の現在地から最も近い町に移動する『帰還のスクロール』が《New World》内での移動の基本だといえるだろう。

……まともに一回一回歩いて帰ったりしてたら、まじでリアルに日がくれるからな。

登録自体は既にワトリアで済ませてあるし、実は狩りに行くために日常的に使ったりしてる。

週3くらいでな。

デフ盆地まで（片道1人50Gと帰り用帰還のスクロールが一枚150G）×2（先生の分ね。）、半日頑張った時の稼ぎがドロップの金だけでおよそ3～400Gなので十分黒字になるので時間が節約できてすごいお得なんだ。（ちなみにワトリアからデフ盆地入り口までは近いとはいえ、歩いて半日以上はかかるからトータルでは絶対にゲートを使ったほうがプラスなんだ）

そう、今回最も大きな目的はワトリア～エルトリンシティ間のゲー

トの開通、コレだ。

一度開いてしまえばいつでもエルトリンシティに行けるようになる。
さらに強い敵が出て稼ぎがおいしい狩場も使えるようになるし、ワトリアにはない品物を扱ってる店や施設もこれからは利用できるようになるって寸法だ。

そう、『あの施設』はワトリアには無い。
『あのシステム』を利用すれば俺の計画がまた一気に加速する。

……現代日本に生まれた人間としては、ちょっと躊躇わないでもないんだけど、な。

よし！待ってろよ！エルトリンシティ！

あ！じぃ！俺の預金全部おろしてきて欲しいんだけど～♪

## 第五話　おねえさんはメイド様！（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

ご意見、ご感想、誤字脱字の指摘など幅広くお待ちしております。

ヒロインは各種取り揃えているつもりですが、もしご希望などありましたら感想欄にお願いいたします。

出せそうなキャラは出したいと思っていますので。

既に……最低八人ほど決まっています、が。

書けるか不安でたまりません。ガクガクブルブル。

ご指導ご鞭撻お願いいたします。

## 第六話　買い物がモノだけとは限らない（前書き）

『俺の野望の為のステップ』は一応４まであります。
あと二つです。

今回から舞台が変わります。
主人公は自分の認識の甘さをここで再確認する事になります。

## 第六話　買い物がモノだけとは限らない

トンネルを抜けるとそこはエルトリンシティだった。

うん、なんて文学的才能に溢れた俺。まぁトンネルは無かったがな。

え？パクリ？　某文豪に謝れ？　聞こえませんが何か？

というわけでジオだ！あれから一月、俺は今念願のエルトリンシティにいる。

昔《Ｎｅｗ　Ｗｏｒｌｄ》をやってたころパソコンのディスプレイ越しに何度も行き来した町並みを実際に自分の足で歩いているとやっぱりなんだか変な感じがする。

ワトリアはそういうことを考える前にもう文字通りの第２の故郷になってたからそんなにそういうこと思わなかったんだけどな。

あとやっぱり町の規模がワトリアとはだいぶ違う。

これでも《Ｎｅｗ　Ｗｏｒｌｄ》の中では中ぐらいのサイズなんだが、十分でかくて立派な町だわ。

エルトリンシティでこのサイズとか、アサイオンとかギーレンとかどんだけのサイズなんだよ、おい……。

「ではな、息子よ。決して危ない事はしてはいけないぞ？　サバン、イナ、頼んだぞ」

何度も同じ事を繰り返して泣く泣く王宮に向かう父上。
どうも王様から呼び出されているらしい。

あ、ちなみにサバンっていうのはうちの執事のじいの名前だ。
今回じいとイナ先生は俺のお目付け役として今回のエルトリンシティ行きに随行してきたのだ。

……さてと、今回やらなきゃいけないことは４つ。１つずつ用件を済ませて行くか。

「じぃ、先生。じゃあ行こう～」

そう言って俺はすばらしい天気の元、この人生初のエルトリンシティの街を歩き出した。

◇◆◇◆◇◆◇◆

やっぱりゲームと実際は違う。
地図は頭に入っているんだけど、それでもいろいろ物珍しさにうろうろしていると何度か道に迷いそうになってしまい、イナ先生に首根っこ?まれてメインストリートに戻されるってことを何度か繰り返してしまった。
まるで子供みたいだ、ハズカシイ……。

そうこうしながら商店が集まるメインストリートを抜け、光の神エ

リーオンの神殿の入り口まで行くと……いた！
ゲートキーパー独特の白い大きなローブを着たお姉ちゃんが！
俺はうれしさのあまりダッシュで駆け寄る。

「おね～～～～ちゃ～～～ん、登録お願いしま～～す！」

ゲートキーパーのお姉ちゃんは、俺の声に気がついて振り返り、俺を見て固まった。
困ったような顔をしながら俺に聞いてくる。

「ボク、お父さんかお母さんは？どこにいるのかしら？　ゴメンナサイね、お姉さん冒険者の人たちの為にお仕事してるから坊やみたいな小さな子のお手伝いは出来ないのよ～」

そう言って俺の発言をスルーしてくるお姉さん。
まぁ当然の反応だな、俺１０歳児だし。

さてと、では食らうがいい！
幼女様直伝の上目遣いスキル＆俺のチートによる非常識のコンボを！

「だから～僕お姉さんに助けて欲しいんだ～♪
ほらほら～調べてみてよ～、僕ちゃんと冒険者なんだよ～」

「はぅ！そんなキラキラした目で私を見ないで！
分かったわ、ちゃんと調べるからってそんなまさか……って本当に？」

ほぅら、驚いてる驚いてる。
年頃のお姉さんがああも口をあんぐりと開けて……あらまぁ。
いつ見てもこの瞬間はいいねぇ……。

チートな自分がいかにチートかを再確認できるこの瞬間はよ！ウケケケケケ！

やがて驚きから開放されたお姉さんは、「ありえないわ」とか「信じられない」とか言っていたが数分たってようやく自分を取り戻すと、俺のゲート使用認証をしてくれた。

よし、今回最大の目標は達成した！あとは口止めっと。

「お姉さん～登録ありがと～♪
それでね、お願いがあるんだけど～聞いてくれる？」

「え、えぇ。何かしら坊や」

動揺しすぎだよお姉さん、かわいらしいけどな。

「あのね～僕変な子って思われたくないんだ～。

だから僕のことはあんまり話さないで欲しいな～。

もし僕のことがいろんなとこに知られちゃったらお姉さんのせいだとおもうからね～。

お姉さんのお仕事って守秘義務？だっけ、大事だよね？

話していいことと悪い事の差くらいは分かるよね？だからお願い～～～～。

……まぁ仮に話したとしても誰にも信じてもらえないと思うけどね」

俺のかわいらしいお口からでる話の内容と、それにまるで似つかわしくない口調のアンバランスさに顔面蒼白になりながらハイスピードで何度もうなずくお姉さん。

うん、動揺しすぎだから。

「じゃあまったね～お姉さん～！」

こうして俺は今回の最優先事項をクリアした！あと３つだ！

◇◆◇◆◇◆◇◆

次に俺は冒険者ギルドに向かった。

《Ｎｅｗ　Ｗｏｒｌｄ》の世界ではギルドというのは2種類存在する。

一つはＮＰＣが運営するクエストを受ける為の施設としての『ギルド』。
これは各町に存在しており、スキルの習得やレベルアップなどのサービスを受けられる所だ。

もう一つがプレイヤー同士の互助組織としての『ギルド』だ。
ＭＭＯ型オンラインＲＰＧにおいて何かやるのに単独ではほとんど何も出来ない。
そんなゲーム内で気の合う仲間やあるいは利害でつながった仲間同士が結成するコミュニティーの事である。

例えばかつての俺は『不人気職アルケミストの頂をともに目指す互助組織ギルド』、『十七人の賢者』ギルドの一員にしてその代表、ギルドマスターだったしな。
ちなみに『十七人の賢者』の名前の由来は、結成当時に集まったアルケミストおよびその予備軍の人数が１７人だったから。
後に《Ｎｅｗ　Ｗｏｒｌｄ》内で、その頂（レベル７０）に至るまでは、

『傷のなめあいギルド』だとか、

『もやしっ子の集まりギルド』だとか、

『アルケとか何が楽しいの？』だとか、さんざん罵られ、

そして俺達１７人がその頂を上りきった時

『１７人の悪魔のギルド』だとか、

『公式チートどもは戦争に来るな』だとか、

『大規模環境破壊ギルド』とか、

とにかく俺たちのギルドがさんざん言われたのも今では遠い思い出だ。

あぁ、俺達にさんざん失礼な口効いたやつらは後で全部《核熱》で焼いたよ？

コレハアタリマエデス。

これでギルドって言葉に二つの意味がある事は分かってもらえたと思う。

さらに、前から話してた『クエスト』にも実は2種類あるんだよね。

一つは《Ｎｅｗ　Ｗｏｒｌｄ》の世界の普通のＮＰＣから受ける『一般クエスト』。

基本的にもらえるものは特殊なアイテムだったり、何かの権利だったりする。

例を挙げれば前に話した『オツカイ』クエストとかあとは転職する時受ける転職クエストなんかがそう。

まぁ普通の人から頼まれていろいろお仕事をするって感じのクエストだ。

もう一つが『討伐クエスト』。
これは冒険者ギルドで受ける事のできるクエストで、決まった内容の中から選んでクエストを受け、それぞれ特定の敵をたくさん倒す事で報酬を得る事ができるっていう、まぁプレイヤーの為のお金儲け用のクエストである。

二つ目の目的はこの『討伐クエスト』を受ける事。
これを受けられるのは各エリア（つまり国）の城のある町の冒険者ギルドだけなんだよね～。

つまりワトリアでは無理なのです。
これが可能になると普通の狩りでの収入がかなり底上げできるから早めに来たかったんだ。

ということで登録だぜ！

……まぁ詳細はさっきのゲートキーパーのお姉さんとほぼ同じ内容が繰り返された為省略するわ。

依頼に関してはちゃんと受けられた。

今回受けたのは、『イアナゴブリン討伐』。
報酬は１匹　１Ｇ
職業持ち・下級（ゴブリンにもファイターとかアーチャーとか職業持ちの奴がいる）は一匹５Ｇ
職業持ち・上級（ジェネラルとかウィザードとかだな）は１０Ｇって内容。

これで収入アップだぜ！

これで２つ！あと２つだ！

◇◆◇◆◇◆◇◆

次に俺が向かったのは街のはずれにあるマジックアイテムの専門店だ。

うん、店の雰囲気がまじでエキゾチック。

蛇とか出てきそうだもの。ガクガクブルブル。

そうやって中を覗いていろいろ見ていると肌の黒い妖艶なお姉さんが声をかけてきた。

「あら、かわいらしいお客様だこと。坊や、何かお探しですか？」

おぅ……なんてエロくてきれいな姉ちゃんなんだ……。

まるで完璧な彫刻のように美しい顔、輝くような銀色の髪、人でないことを示すとがった耳、そして闇色の肌を見せそうで見えないけど、素敵過ぎる大きな胸はほぼ見えてるという薄手のローブを身に纏った美女がそこにいた。

ダークエルフ。
森の負の部分を象徴し夜に属するエルフ族にして、黒い肌を持つエルフの合わせ鏡。

その人ではありえないきれいなおねえちゃんが俺の前に座り込んでニコニコ俺を見ていた。

う〜〜ん、まだ子供でよかった。
大人になってたら前かがみで立てないところだったぜ、目の前の光景。すげぇ破壊力。

俺はもじもじしながらも目当ての商品を指差しながら美人のねーちゃんに告げる。

「え〜と、コレをくだしゃい！」

やべ、動揺しすぎて噛んじゃった。

「ウフフ、かわいい。ねぇ坊や、お姉さんとあとで仲良くしよっか？

まぁそれはあとにして、欲しいのは……念話石、か。
ふ～～ん、なるほどぉ……、まぁいいわ。
坊や、いくつに加工するの？」
「ん～ととりあえず……３０個！」
お姉さんはいぶかしがりながらも、俺の注文を聞いてくれた。
そして仲良くするのは、俺も是非お願いしたい！

マジックアイテム『念話石』。

同じ石から加工された石を持つもの同士が、相手のことを思いながら石を持って集中すると
遠く離れたところにいる相手でもまるで電話のようにテレパシーでの会話（？）が可能になるアイテムだ。

ゲーム内ではこれはゲーム内で仲良くなった友人達といつでも話したり出来るようにするため（これをフレンド登録といいます）に必要なアイテムで、一度契約すれば一方が登録を抹消しない限りその回線はいつでも使えるという優れものだった。

つまりコレさえあれば携帯電話を持っているのと同じになるのだ。
死ぬほど便利。情報を制すものはすべてを制す！ですよ！！

やがて魔法による加工が終わり、お姉さんが小さな皮袋に念話石を入れて渡してくれた。

お代は３０個で３０００Ｇ。

効果と比較すれば非常に安い買い物だ。ていうかありえないなこの安さ。

金を払い俺が店を出際、お姉さんに元気よく

「ありがとうお姉さん！また来るね！」というと

お姉さんがまた俺の目の前に座り込んで俺をぎゅっと抱きしめ（勿論顔に巨乳様がぴったりと！ビバ！おっぱい！）さらに離れ際ほっぺにチュウまでして「また来てね、坊や！」と言ってくれた。

１０歳でよかった！心の底からそう思う！

そうして俺は超高いテンションで店を出たのだが、次に行かなくてはいけないところの事を思い出しさっきまでのテンションが下がって行くのを自覚せずにはいられないのだった。

とりあえずこれで３つ。残るはラスト１つだ。

……ラストの場所は元日本人としては少しというかかなり気が重いんだけどな。

◇◆◇◆◇◆◇◆

「若様、こちらでございます。」

「うん……、じぃ」

じいに案内されながら俺は町の中心部から少し寂れた、もうちょっと正確にいうと退廃的な一角にいる。

よく言うと夜の歓楽街、悪く言うとスラムだ。

まだ昼間だから先ほどまでの明るい町並みとのコントラストの鮮やかさに思わず胸が痛くなってしまう。

ちなみに生き死にという点では怖くは無いよ？

狩りの時に飛び出してくる獣やモンスターのほうが命の危機的には怖いからね。

でもこの澱んだ空気が何とも言えず怖い……、人間の業のオソロシサを感じるよママン……。

通りにあるのは酒場か娼館だけ。
時々やたら色っぽいきれいなオネエサンが俺に気づいて手を振ってくれる。

……もうちょっと育ったらお相手お願いしまっす！おっぱいが、おっぱいがステキだ……。

あぁ、マリエルが恋しい……マリエル分が不足してる……。

そんなこんなイロイロと妄想しながらある意味何よりも人間らしい一角を抜けてたどり着きました、今回の旅の目的の最後の一つ。

『奴隷市場』に。

《Ｎｅｗ　Ｗｏｒｌｄ》は、ＭＭＯＲＰＧとしては最後発のタイトルといっても過言じゃなかった。
故に既存のネトゲのいい点、悪い点を徹底的にリサーチして『日本人が一番楽しめるＭＭＯＲＰＧ』を目指して作られたネトゲであり、その成果はゲーム内での快適なプレイ環境と魅力的な内容によって遺憾なく発揮されたといっていいだろう。

その快適なプレイ環境を支えた数あるシステムの一つが『従者システム』である。

『従者システム』とは『奴隷市場』（という名前なんだよ！ホントに！）でサブキャラクターを購入し、半自動で動くプレイヤーの仲間を育成しながら使用可能にするシステムである。

このシステムのいいところは普通の家庭用ＲＰＧの経験しかない人には分かりにくいかもしれない。

なぜならこのシステムは『オンライン型ＭＭＯＲＰＧはやりたいけど、人によってはめんどくさい他のプレイヤーとの関係を出来るだけ少なくしたい』という何のためにオンラインゲームやってんの？
　っていう人向けのお助けシステムだからだ。

つまり端的に言うと『プレイヤー一人でパーティーが組めるようになるシステム』ということである。
このシステムの分かりやすい使い方は、例えば戦士系職のプレイヤーが回復役の魔法職の従者を使ったり、逆に魔法職のプレイヤーが前衛の戦士職の従者を盾役として使ったりなどだ。

勿論制限やデメリットもちゃんと設定されている。
キャラメイキングはちゃんと各種族、各職業からすべて主人であるプレイヤーが選んで決められるし、プレイヤーキャラと同じように従者キャラも成長していく。

でも一度に連れて行ける従者の数は３人まで。

経験値は普通のパーティプレイと同じ様に分配されるし（オンラインゲームでは拾ったアイテムやお金、経験値はパーティプレイの場合、普通は自動分配されるようになってます）
従者のレベルＵＰに必要な経験値は一般プレイヤーの倍。
さらに当然一人ひとりに装備は必要だし、そのためのお金もたくさん必要になる。

あと最大のデメリットとして、所詮指示した行動やマクロと呼ばれる自動行動によってしか動かない為に、一般プレイヤーが動かすアバターとはその有用性が比べ物にならないことだ。
攻撃、防御の切り替えや回復のタイミングなど、ネトゲでは『レベル以外の熟練度』が必要とされる為、瞬間的な判断など不可能な従者システムは、高レベル狩場になればなるほど使いにくくなるシステムだった。

このシステムはなかなか人と仲良くなれないシャイな人や、性格的にちょっと……って人でもネトゲが楽しめるように、という運営側からの救済システムだといえる。
逆に本当の意味での高レベルプレイヤーには、良い人間関係を構築する能力がないとそこまで至れないとも言えた。

他にもまだメリット、デメリットは存在するが、基本的なのはこのあたりまで。

あとこのシステムを用いての自動行動プレイ、いわゆるＢＯＴ行為

は事実上不可能だった。
（ＢＯＴ行為っていうのは、アバターを自動で動かす事によって２４時間人がいない状態でもお金や経験値を稼ぐという迷惑行為のことです。
知らない方の為に説明☆キラッ）

やろうとした人は絶えなかったが、ＢＯＴ対策が１００％充実していた《Ｎｅｗ　Ｗｏｒｌｄ》において、それらの行為を行う不届き者共は、すべて粛清されていったのである。

《Ｎｅｗ　Ｗｏｒｌｄ》の運営はマジですごかった。
迷惑行為に関しては徹底的に洗い出して悪質なプレイヤーはプレイ停止や禁止とか迅速かつ適切にやっていたからな～。

というわけで俺は今そのシステムが具現化した結果の『奴隷市場』の前にいます。

前世のお父さん、お母さん、兄貴、親戚一同と友人や関係者各位の皆々様。

ゴメンナサイ。俺悪い子になっちゃいましたヨ。

## 第六話　買い物がモノだけとは限らない（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

ご意見、ご感想、誤字脱字の指摘など幅広くお待ちしております。

従者システムですが、ＭＭＯプレイ済みの方には一番適切な使い方が思いつくとは思います。

あれとかあれとかあれとか。

それは仕様上不可能となっております。ということでひとつ。

ここまでで一応投稿前のストックを吐き出してしまいました。

できるだけ2日に一度の投稿が長く続くように努力する所存であります。

現状の残弾　3発……。がんばります。

## 第七話　入り口で財宝につまずく事もあるわけで（前書き）

今回はかなり短めです。
文章の長さより切りのよさを優先しました。

ここから3話は大規模改変予定の対象です。

あんまり突っ込まないでいただけると助かります。

## 第七話　入り口で財宝につまずく事もあるわけで

いや～さすがにこの場所で冗談かます余裕は無いわ、俺。

ジオです。

何ていうか画面越しの記憶で知ってはいたんだけどやっぱここの雰囲気は暗い。

昔なら「グラフィックスタッフいい仕事してるぜ！いえっふううううううう」とこの独特の負の雰囲気を表現したスタッフを誉めてたんだろうが、今の俺にはきつい。

だってリアルに負のオーラが目の前の建物からビンビン来るんだもん！

いや～甘く考えてたよ『奴隷市場』。

今更そんな事をいってても始まらん！突撃あるのみ！

たのも～！

そんな感じでじぃが『奴隷市場』の店員らしき男の人に声をかけた。

色素の薄い茶色の髪のなかなかの美男子だ。

でも首輪をしてるってことは彼も奴隷かよ！

ここの主人は奴隷に店番任せてるのか……。

そうやって俺が驚いているうちに男がこちら、いや俺に話しかけてきた。

「これはこれは若様。ようこそおいでくださいました、エルトリンの僕の館へ」

その男は素晴らしく高度に訓練された店員さんだった。
直感で感じた、彼は出来る男だ。
ふむ、ここの主人はもしかしたらやり手なのか？　と思ってしまう。

「若様のような尊い方に私どものところへお越しいただけるとは光栄の極みにございます。

本日はどのような奴隷をお探しでしょうか？　護衛用、労働用、夜伽用と様々取り揃えておりますが」

男はいささかも態度を崩さず、目の色に不穏な何も浮かべずに丁重そのものの態度で俺達に話しかけてくる。
俺達の今の格好はどうみても俺が貴族の御曹司、じぃがその執事で先生が護衛にしか見えない。
ていうか事実そのままなんだが……。

一応うちの家は貴族の端くれではあるからな。
父上が冒険者時代に多大な功績を挙げた事により王国に貴族として取り立てられたらしい。

この話聞くまで俺、父上の事ただの親バカだと思ってましたよ～♪
ゴメンネ父上。

しかし格好や見た目なら普通執事に話を聞こうとするはず。
この兄さん、今初めて俺を見ただけで、俺自身が客と見ぬいてんのか？　どんだけ慧眼やねん！

俺がしばし呆然としているとじぃが俺の肩を触って促してくれた。
今回の件、俺は交渉も含めて俺にやらせてくれとじぃ達に頼んであったからだ。

この兄さん相手には相当気合入れんとケツの毛まで全部むしりとられるな、こりゃ。

うっし！気合入った。戦闘開始だ！

「こんにちは、お兄さん。僕の名前はジオといいます！
僕まずお兄さんのお名前教えて欲しいな～」

先制攻撃。奴隷に対してこんなにフレンドリーに話しかける貴族の御曹司はいないはずだしな。ウケケ。

はっと息を呑む男。
しかしすぐに何事も無かったかのように、これまで以上の笑顔を浮かべ、丁重に俺達に言葉を返してきた。

「ご丁寧に私などにお名乗りいただき恐悦至極でございます。
しかし私の名前ですか？私のような下賤な奴隷の名前など……。

……失礼致しました、シランと申します。

以後お見知りおきいただければ幸いでございます、『小さな旦那様』

」

うぉっ、こら手ごわい……。

さすが俺に名乗られた後は他の客、ましては貴族の場合そんなことは絶対しないせいか、めちゃめちゃ驚いてはいたけれどそれでも乱れず、その後の受け答えもどこをとっても完璧……。

しかも極め付きは『小さな旦那様』か……。

俺の評価をただの貴族のガキから上方修正して、さらにそれをこちらに即アピールしてきやがったヨ。

付け入る隙が無いとはこのことか、まったくいやになるほど優秀だね。

ちなみになかなか言おうとしない名前を言わせたのは、いつもの幼女様直伝の必殺技のおかげだ！いつもありがとう幼女様！

決めた。とりあえず俺が最初にすべきなのは……。

「え～～～と、シランさん。あのね、聞いてもいい？」

「シランで結構でございます。」

「あぁ、うん。じゃあシラン。その首のへんなのしてる人はえ～～と、う～～～～んと、なんだっけ？」

ここで１０歳相応のポーズを作る！自分の手の内は明かしませんよ！簡単には！

「あぁ、そうでございますね。この『従属の首輪』をつけているものは全て奴隷でございますね。」

おし、言質取った！

しかし何かシランさんの頬が若干赤くなってきてるぞ。

俺の必殺技にやられたか？もしかして危ない人なのか？そっち（ショタ）なのか？

少し身の危険を感じた俺だったが、作戦を続行する。

「そっか～、じゃシランさんも買えるんだね？」

◇◆◇◆◇◆◇◆

驚いたような、納得したような、それでいて待ち望んでいたものが

現れたかのような顔をしてシランさんは頷いた。

「勿論でございます、『旦那様』。
ですが私には今現在値がついておりませんので、主人に話してみませんことには何ともお返事できないのです。申し訳ありません」

そういって頭を下げてくるシランさん。

やべぇ、マジで優秀すぎる。
まったく動揺しないんですけど、この人。

そして『旦那様』だと？　また俺への評価を上方修正ですか？

まさか俺の考えをリアルタイムで正確に読んでる？

だからどんだけなんだよ！あんた！

だめだ、勝てる気がしない。
この人のことは後で考えることにして、とりあえずいったん切り上げよう。

まったくダンジョンに入ろうとしたら入り口でとんでもない財宝見つけた気分だわ。

「じゃあシランさんのお話はひとまずあとにして～ここにいる人たち『全部』見せて欲しいな～」

「『全部』で……ございますか。
……かしこまりました、今準備させますのでしばしお時間を頂戴できますでしょうか？
準備が整いましたらお呼びいたしますので、しばしこちらの部屋でお待ちくださいませ」

そういって入り口脇にあった小部屋、大口の客に対する応接室なのだろう、に通された。

その部屋は小さいながら俺の目から見ても場違いなほど豪華な部屋だった。

申し訳ありませんがこの部屋でしばしお過ごしくださいませ、と言って奥に消えていくシランさん。

彼の姿が消えたのをドアが閉まった音で確認して、俺は大きく息を吐いた。

やべ～まじやべ～、あの人何者だよ。
そう思いながらじぃを見ると俺も同じような顔をしてるんだろうと思う顔をしてた。

彼はやばい、言葉は悪いがここに置いとくのは宝の持ち腐れでしかない。
良くも悪くも。

ていうことでこれがこの後、俺の忠実な右腕となり、俺の行動の全てを生涯通じて支えてくれるシランとの出会いだったのだが。

ただ今でもたまに後悔する時がある。
この時の俺の判断は正しかったのかと。俺の胃的に。

有能すぎて怖いんだよ、彼。しかもドＳ。俺が逆らえない人Ｎｏ．２。

Ｎｏ．１はもちろんマリエルだけどな。

## 第七話　入り口で財宝につまずく事もあるわけで（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

ご意見、ご感想、誤字脱字の指摘など幅広くお待ちしております。

今回はここで引きです。申し訳ありません。

確認したところ今回かなり短いので明日第八話を投稿します。

はい、また自分の首を絞めてますね。割と得意です。

## 第八話　俺には地雷（トラウマ）が多い（前書き）

え～～ヒロイン2人目（名前だけなら3人）登場でございます。

今回の話で主人公のこの世界でのスタンスが少し見えてくるかと思います。

## 第八話　俺には地雷（トラウマ）が多い

いやね、もうね。いっぱいいっぱいだヨ。助けてマリエル。

今俺は就職活動末期以来の絶望的な戦いを強いられているよ、みんな。

今回も『奴隷市場』の現場からジオ・パラケルスス・ラ・テオフラストゥスがお送りします！

アホ、俺のアホ。

まったく失敗だった。思いついたときはまだ『ゲーム』の延長線上で考えてた。

もう一度いう、俺のアホ！

だってさ、現代日本で暮らしてた元日本人が『人を買う』ってどんだけ？って話ですよ！

人身売買ですよ？じ・ん・し・ん・ば・い・ば・い！人殺し並みに抵抗あるわ！

もうちょっと良く考えとけよ！この能無し！（自分の事ですヨ。）

ここまでリアルだとか考えもしなかったわ！胃に穴開きそうだ～。

う～～～～しかもまだＰＫもあるんだもんなぁ……。

（ＰＫ＝プレイヤーキラー　プレイヤーがプレイヤーに攻撃を加えて殺す行為。《Ｎｅｗ　Ｗｏｒｌｄ》ではかなり高いリスクが存在するがシステムとして存在している為可能。）

胃がもつかな……。行く世界まちがえたかもな～。

だがもう『サイは投げられた』し、既に俺は『ルビコン川を渡った』のだよ！

いまさらひけませんヨ。

そろそろ何故俺がこの『従者システム』を利用しようとしたかの説明をしないといけないだろう。

《Ｎｅｗ　Ｗｏｒｌｄ》に限らず他のＭＭＯＲＰＧでも、いやそれどころか元の世界であってさえ数が多いという事はそれだけで絶対的な力だ。

俺は確かに神様から戦士系職と魔法系職の双方を一度に極める可能性をもらってはいるが、それはあくまで『１人で二役こなせるすごい奴』がいるだけであって、それぞれの能力が俺と同じくらいの奴

２人がかりでこられたらよくて互角、普通なら負ける。

もし二人で俺に勝てないなら５人、それでダメなら１０人。

そうなれば確実に勝てない。俺は決して無敵ではないからだ。

この世界ならレベルの差が２０もあればそれでも切り抜けられるのかも知れないが、俺の力がいきつくところまでいっても一人でボスモンスターを倒す事も戦争に勝つ事もできないのだ。

（核熱はたしかに最強の魔法ではあるが、それでも一撃くらいならシャットアウトする方法はいくつも存在し、燃費が悪すぎるので連発できる代物ではない。）

確かに俺が神様に頼んで授けてもらった『ダブルジョブ』の才能というのはすさまじいが、逆に言えばあくまでその程度のもの、ともいえるのだ。

その程度の力では到底俺の『願い』には届かない。

だから俺がこの先冒険者として生き抜いて行くためには、絶対に俺のことを助けてくれる仲間が必要だ。

但しただ仲間が多ければいいというものじゃない。

『船頭多くして船、山登る』とはよく言ったもの。

必要なのは俺と同じ夢を見てくれる奴、俺を信じてついてきてくれる奴だ。

その為の最初のステップとしての『従者』だし、その為に俺は『他人の人生を金で買う』のだ。

自分でも思う、ひどい人間だと。

それでも俺は形は違えど、俺が一度失ったものを必ず取り返すつもりなのだ。

諦めるつもりは無い。

それが”日本人　中村　秀人”への”ジオ・パラケルスス・ラ・テオフラストゥス”からの何よりの手向けなのだから。

◇◆◇◆◇◆◇◆

およそ３０分ほどだろうか？

入り口近くの応接室で待たされた俺達がシランさんに呼ばれるまで

にかかった時間は。

この対応で彼がどの程度俺の考えを理解できているか分かる。

『普通の商人の考え』なら俺の『全部』の意味をきちんと理解していないという事だからな。

俺が言った『全部』の意味、それは現在彼らが売りたい商品だけを出すのではなく、それ以外も全部、可能な限り見せろという意味だ。

そのまんまの意味だが、商人とか商売人っていうのはその辺賢いからな。

さて行くか。俺が立ち上がるとじぃと先生も俺の後ろに従ってくれた。

ドアを開けるとシランさんがそこにいて、「旦那様、お待たせいたしました。どうぞこちらへ。」と俺達を先導してくれた。

中への間仕切りになっているカーテンを開けるとそこは……モーセ？ですか？っていう光景が広がっていた。

そこには首輪をした人でできた壁があった。

会社の会議室ほどの空間を埋めるように整然と並んだおよそ１００

人程の奴隷の皆さんが、俺たちの歩く為の花道を残して整列していたのだから。

おまけに背の低い者は花道から見て前側に座り、その後ろに中腰の人が並び、さらにその後ろに立っている人たちが並ぶという組み合わせの三列が花道を挟んで両側に……。

それから誰を見るともなし見て気がついたのだが、奴隷という割にはみんな身奇麗にしているし、思っていたよりも薄汚れてもいなかったのはこの男がこの店を仕切っているからだろうと思った。

それともやっぱりこの店の経営者はこのお兄さん以上の傑物なのか？

ん～～～～想像がつかんな、考えるのやめよ。

それにしても俺の横で愉快そうな笑みを浮かべているお兄さんは、俺をどれだけ驚かせたら気が済むのだろうか。

にゃろう、完璧以上に理解してやがったよ。予想以上ですよ。認めますよ！

『普通の商人』なら今高く売れる商品とさっさと売ってしまいたい商品だけ並べるはずだが、この人数は俺の『全て』っていう意味を正しく理解して、今現在本当は売りたくない者を含めて、文字通りこの『奴隷市場』にいる奴隷『全て』をここに並べたに違いない。

さらに『私はきちんとあなたの言うことを理解しています。』ってアピールもかねているのだろう。

さすがにじぃも先生も俺の後ろで唖然としている。

まったく……このお兄さんは何者なんですかね？妖怪か？サトリか？

そんな事を軽く口を開いた若干アホな表情のまま考えている俺に、シランさんは満足そうな笑顔でうやうやしく俺に頭を下げてきた。

「旦那様のご依頼通り、今この奴隷市場で管理しておりますものですぐに集められる者を全てこちらに並べてございます。どうぞ如何様にでもお好きにお選びくださいませ。」

そういって俺の脇にひざまづいて控えてしまった。

うん、この人敵に回すのはやばいね。

それはそうとして。

……はぁ、やるしかない、か。

「まずは急に集まっていただいた事に感謝を。

シランさん、まずこの人全員に今晩おいしいものが食べられるようにこれで手配していただけますか？」

そういって俺は１００Ｇシランさんに渡す。
彼は驚きながらもそれを受け取り「ありがとうございます。必ず。」と答えてくれた。

さてと、始めるか。いつまでも、驚かされているのは、俺の主義じゃ、ないんだよ。

「皆さんはじめまして、俺の名前はジオといいます。
皆さんにお願いがあります。
今から僕が質問する事には全部正直に答えてください。

僕は将来冒険者になろうと思っています。
そのために助けになる人を今日は探しに来ました。

シランさん、まずは魔力のある人と無い人に分けてもらえますか？」

そう俺が告げると奴隷の皆さんがざわざわと騒ぎ出した。

そうなるのも無理は無い。
奴隷を買うのにまず感謝の言葉を述べ、彼らの為に金を使い、尚且つ『お願い』したのだから。

後ろで控えてるじぃと先生もあごが落ちそうな顔をしていた。

……おっかしいな、この二人には散々非常識なとこ見せてきたはずなのにな、俺。

ざわめきはまだ収まらないがその中でも奴隷の人たちは粛々と動き、どうやら向かって右手が魔力のあるほう。
左手がない方という形で分かれたらしい。

さてと、じゃあやりますか。

◇◆◇◆◇◆◇◆

今回俺が欲しいのはまず戦闘用の従者『候補』だ。

まずは前衛の戦士系職が１人、後衛の魔法系職が２人。

そう、現時点で強い戦士や魔法使いは特に必要ない。

今相手にしている敵なら俺一人でも余裕だし、必要なら先生に手伝ってもらえば普通に狩りをしている分にはどうとでもなるからだ。
（イナ先生はＣグレード、つまりレベル４０以上の冒険者だ。
２次転職していないのは彼がレンジャーという職を気に入っていたからである。）

俺が欲しいのはもっと先を見据えた時に俺を支えてくれる仲間候補。
俺はまだ１０歳で冒険者として独立するまで、どうしてもあと5年かかるのだから。

年頃は俺と同じくらいがいい。
その方が俺の考える戦術や考え方を一から仕込める。

次にこれから作るつもりの俺専用の薬草園を管理してくれる人間。
当然農業や植物に詳しくて働き盛りのまじめな人間がいい。これが数人。

次にできれば元冒険者でそこそこの腕の人間。
俺が今動けない分、自由に動いて俺のできないことをしてくれる人間が欲しいのだ。
これはプレイ経験上そこそこ値段が高いはずなので無理ならそれはそれでいい。

そういう目で人の壁を見ていると目に止まる少女がいた。
燃えるような赤い髪が特徴的な鳶色の目のかわいらしい女の子。
見た感じ俺と同じくらいか少し年下だろうか？

ひどくおびえた目で俺を見つめていた。彼女の前に膝立ちで座り、その目を見る。

高い魔力を感じさせる鳶色の瞳。
うん、魔法職としての才能は十分だろう。
まず一人、決まりだ。

「シランさん、彼女を。」

ほぉっといった感じの顔を一瞬浮かべたシランさん。今何考えた？
まぁいいけど。

「はい、かしこまりました。
アリア、旦那様はお前の事をお買い上げくださるそうだ。
これからお仕えするご主人様にきちんとご挨拶しなさい。」

赤い髪の女の子は挨拶をしようとするが、おびえたように口ごもる。
俺は（嫌われてんのか？）と若干ショックを受けつつ、シランさんを見る。
シランさんが困った顔をして口を開こうとしたその瞬間少女が声を上げた。

「あ、あの！ご主人様にいきなり失礼なお願いだと分かってます！
でも、私とエリアをバラバラにしないでください、私をお買いになるならエリアも！

お願いいたします！私の妹を助けてください！」

目の前の少女、アリアの突然のお願いにびっくりする俺。
え～～とまずエリアって誰？助けるってどういうことかな？
と考えているとシランさんが彼女の顔を叩いた。

わぉ、シランさん顔がマジだ。そして痛そうだ。

「申し訳ございません、旦那様。
私どもの奴隷が大変な失礼を申し上げました。
この娘にはすぐにいいきかせますので、どうか平にご容赦を。
お気に召さなければ他にも旦那様のお眼鏡にかなうものはいるかと思います。

いかがですか？この子はおやめになさいますか？」

俺は正直一切何も怒ってはいなかった。というか訳が分からなかっただけなんだが。

てゆっか全部っていったのにな～とも思ったのだが、それ以上にこれだけ人がいて全部じゃないのか？
むしろそっちに驚くわ！て感じだぜ。

ということで分からない事は聞こう。

「シランさん、まず彼女には妹さんがいるの？それと助けてっていうのはどういうこと？」

「これはこのような事をお耳にお入れするつもりはなかったのです

が。
はい、確かにこのアリアには妹がおります。
エリアといいまして、このアリアの双子の妹です。
ただ今……エリアは患っておりまして。」

なるほどそれでここにいない。人前に出せる状態じゃないのか。
ふむ、彼女の双子の妹なら魔法職としての才能はかなりのものだろうし……。

よし、決めた！

「シランさん、二人でいくらかな？あとそのエリアちゃんだっけ？いくらあれば治せる？」

さすがに驚いた顔を隠せないシランさん。ようやく一本取れたらしい、ザマミロ。

驚きながらも俺に確認してくる。

「よろしいのですか？それなりの金額が必要かと思いますが？」

「かまわない。薬が必要なら俺が作る。
診察が必要なら最低限ならそれも俺が出来る。
それでダメでもあてはあるし。
もし魔法による治療がいる状態なら今すぐ神殿に運び込んで」

アルケミストは錬金術師にして科学者と医者の顔を併せ持つ。
そしてその最高峰たる『ヘルメス・トリスメギストス』の由来の一つは、ギリシャ神話のヘルメス神。
彼の杖たるケーリュケイオンは、しばしば同じくギリシャ神話における医療の神、アスクレピオスの杖と混同される。
故に俺が最初に父上から受けたアルケミストとしての教育は、医療に関するものだった。
目の前に手の届く命があるなら助けてあげたい。単純にそう思った。

「それは！　……かしこまりました。
では、２人で５０００Ｇでいかがでしょうか？
ちなみにこれはアリア１人をお買い上げいただく金額と同じでございます。
先ほどのアリアの失礼のお詫びも含めまして。いかがですか？」

「買った。」

部屋全体がどよめきに包まれる。
それが静まるのを待って、俺はもう一度アリアちゃんの顔を覗き込んで笑った。

「これでいいかな？これからよろしくね、アリアちゃん。」

その言葉を聴いたアリアは初めは何が起こったかわからずにいたのか、固まってしまったがその後我に返ると涙を流して俺の足元に土下座してしまった。

ちょっ～～と待ってくれ。俺は女の子の土下座にはあまりいい思い出が無いんだ……。

アレを思い出すからさ！アレを！

そんなこんなで彼女の顔を上げさせようとあわてる俺に彼女は涙に濡れた眼を向けてこう言ったのだ。

「ご主人様、アリアはご主人様に生涯絶対の忠誠をお誓いいたします。
妹のエリアと一緒に、どうぞご主人様のお好きなように私達をお使いくださいませ。」

ン～～～～～～～ナニ？コレ何ノフラグ？

## 第八話　俺には地雷（トラウマ）が多い（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

ご意見、ご感想、誤字脱字の指摘など幅広くお待ちしております。

主人公はＭＭＯＲＰＧをやった事のある方なら良く分かると思いますが、決して無敵系主人公ではありません。

ＭＭＯＲＰＧ未経験の方は、分かりにくい例かもしれませんが、ドラＯエ３の賢者の魔法を使える武道家、ＦＯならＦＯ３の忍者ジョブと賢者ジョブを一度に同じように使える能力と思ってください。

一見最強ですが、二つの能力を持っていても基本一度に行動できる限界は１回ですから。

１ターンにベＯマと攻撃をすることも、しゅＯけんを投げながらケＯルガをかけることも出来ません。

一人で普通にゾＯマと戦えば負けます。

同じように暗Ｏの雲にも負けます。

そういう意味ではチートですが、決して無敵ではないんです。

あと主人公は未だに基本現代日本人の感覚を多く引きずっている為に自分の言動の異常さが頭ではなんとなく理解していますが、本質的にはまったく理解できていませんってことですね。

## 第九話　世界で一番いい買い物（前書き）

今回かなりノリが違います。

同時にかなり重要な話です。

## 第九話　世界で一番いい買い物

あ～なるほど脚気か壊血病かまでは分からんけどどっちかだな。そら動けなくもなるわ。

玄米があればいいけど、なければ柑橘類かキャベツいっぱい食べさせないと。

ん～なんでこんなに知識があるんだろ？

確かに気まぐれで脚気や壊血病について調べた事もあったけどな～。

どう思う？実は結構歴史マニア、医療モノマニアだったジオが通りますよ～。

（インターネットってほんと便利だよね。）

今アリアちゃんの妹のエリアちゃんの診察が終わった。

ていっても俺の知識の中にあった診断方法を試したら、結果が脚気、つまりビタミンＢ１の不足が原因かなと、見当がついたってとこだ。

とりあえず体力の回復用に俺のポーションを一日３回水で１０倍に薄めて飲むようにいって、後は食事を改善したら治るだろうとシランさんに伝えておいた。

レモンをいっぱい食わせてやってくれと。

シランさんも病気の原因についてびっくりしていて、これから奴隷の人たちの食生活の改善を主に提言すると約束してくれた。

あと何気に彼を驚かせたのがうれしかった！

そんなことを考えながら先ほどまでとはうって変わって穏やかな顔で眠るエリアちゃんの顔を見てなんだか俺自身がほっとしてしまう。

頬が少しこけてしまっているが、今は少し血色も良くなってきている。

将来はお姉ちゃんのアリアちゃんともどもすごい美人になるんだろうな～、と思わせる顔立ちだった。

汗で濡れたおでこに貼りついた赤い髪を取ってあげると、彼女は少し身じろぎしてまた静かな眠りの中に戻っていった。

せっかく寝付いたのだ。

起こすのはまずいと部屋から出ようとすると、俺の後ろから泣き声がする。

……嫌な予感とともに振り向いてみると、またアリアちゃんが俺に涙を流しながら頭を下げていた。

やっぱり土下座で。

ヤメテ、これ以上俺のトラウマ刺激しないで！

この状況を打破する為には声をかけないわけにもいくまい……。
一応俺が主だし。

「え～アリアちゃん。まずお願いだから顔を上げて、ね？」

「ご主人様、アリアとお呼びください。
妹を、エリアを救っていただいて、本当にありがとうございました。
今日この時より私達の全ては、ご主人様のものです。
どんなご命令も、ご主人様の為なら、喜んでさせていただきます！
末永くお傍でお仕えさせてくださいませ！」

そうして顔を上げて俺を見る彼女の鳶色の目には確かに言葉通りの決意が見て取れる気がした。

やばい、一切聞いてくれていない。そしてコレは予想外だ。

嫌な汗が止まんねぇ。

だって奴隷って基本主人なんて大嫌いで仕方ないから従ってるっていうのが普通じゃないの？
確かにエリアちゃんを助けた（まだどうなるかは分からないけど）のは俺だけど、俺だってちゃんと打算があってのことだから逆に彼女のこの気持ちはどう扱っていいのか正直わからん！

そして俺にそんなキラッキラした目を向けられても俺は断じてロリじゃねぇ！

とりあえず容態も落ち着いてる事だし、待たせている他の皆さんを見て、どの人を連れて帰るか決めなきゃな。

深呼吸。

「えと、じゃあ、ア、アリア。」

「はい！ご主人様！」

頼むからそのキラキラした目で心の汚い俺を見るのはやめてくれ……。

「俺はこれから他の人たちを選んでくるから、君はエリアちゃ、エリアのことをちゃんと見てまた苦しそうにしたら俺を呼びに来てくれ。いいかな？」

「はい！かしこまりました！ご主人様。いってらっしゃいませ！」

そういってアリアは立ち上がりドアを開けて俺を送り出してくれた。

今の俺の状態はいわゆる『日本の平均的な男子中高生の夢』だ。間

違いない。

それが現実になるとこれだけ胃にクルものだとは……あの頃は想像もできなかったな。

◇◆◇◆◇◆◇◆

その後俺はシランさんの意見も聞きながら数人従者候補を選んでいった。

驚いたのが奴隷達の中にダークエルフと獣人族の一方、猫人族（ワーキャット）の女の子までいた事だ。

確かに《Ｎｅｗ　Ｗｏｒｌｄ》の『奴隷市場』ではヒューマン以外の種族も売りに出ていたからそういう意味ではおかしくは無いのだろうが、俺がこの世界で１０年過ごしてきてヒューマン以外の種族を見たのはワトリアのドワーフの鍛冶屋のジョフ爺を除けば、今日ここに来るまでに会ったエロいダークエルフのお姉さんを含めても、５人いるかいないかだったからだ。

この世界は広い。今日改めてそれを感じた。

ダークエルフの女の子はシルウィ。

エルフ族、ダークエルフ族に共通する細長くとがった耳。

整いすぎているほどの顔立ち、美しい銀色の髪と夜色の肌を持つ女の子だ。

ただ、この中で『奴隷市場』でいじめられていたのか、よほどつらい目にあったのか。

「……シルウィです。……以後よろしくお願いします。」

まるで人形のように無表情な顔で俺に忠誠を誓ってくれた。

そのあまりの感情の無さは、全てを諦めてしまっているのだろう。

その顔を見ていると、訳の分からない罪悪感に胃に鉛でもぶち込まれたかの様な気がしてくる。

本当にキツイ。この世界の負の現実をそのまま突きつけられているようで。

もう一人の猫人族（ワーキャット）の女の子の説明をするまでに少し獣人族について話した方がいいだろう。

獣人族はこの世界には現時点で二種族存在している。

人狼族（ワーウルフ）と猫人族（ワーキャット）である。

人狼族はあらゆる点で力が強く、戦士としての素質はおそらく全種族最高である。

義理に厚く、信義を大切にしているが、同時に融通が利かない性格をしている。

猫人族は好奇心旺盛で気まぐれ、楽しそうな事にすぐ首を突っ込むところはあるが、その
一方で彼らの野生を秘めたスピードは他の種族の追随を許さないまさにハンターだ。

彼らが他の種族に劣っているのは、分かりやすい意味での攻撃魔法と召喚魔法全般が使えない事である。

彼らの魔法は独特であり、人間やエルフ、ダークエルフのものとはまったく別物であるといえる。

あと付け加えるなら、人狼族がエルフ達の聖地である『世界樹の森』に、猫人族はダークエルフたちの聖地である『常夜の森』に暮らしていることくらいだろうか?。

いや、大事な事を忘れていた。彼らの姿は非常に独特なのである。

人狼族の男性は、体はヒューマン族に良く似ているが尻尾を生やし、首から上は狼そのものである。
まさに狼男。

女性の場合は逆にほとんどヒューマン族の女性と同じだが、頭のてっぺんから飛び出した狼の耳とお尻に生えた尻尾を持っており、彼女達もひと目で人狼族だと分かる。

また猫人族のほうも負けてはいない。

猫人族の男性は、ヒューマン族の１０歳程度の子供ほど大きさの歩く猫そのままである。
２足歩行で歩く猫、である。

我輩は猫……ゲフンゲフン。

一方女性は、人狼族と同じように頭から突き出た耳と尻尾以外はヒューマン族の女性と変わらない。
少し小柄なくらいだろう。

あと猫人族は語尾や言葉の途中に『にゃ』がつく！これは本当（公式設定）だ！

まぁこれで少しはこの二つの種族の事が分かってもらえたと思う。

さすが日本人の作ったＭＭＯＲＰＧの最高峰《Ｎｅｗ　Ｗｏｒｌｄ》。

初めて画面でそれを見た時、本当にお客のニーズを的確に捉えていると思ったものだ。

捉えすぎだろうと。

え？人狼族は語尾に「ワン」とつかないのかって？　付きませんよ、そんなの。

閑話休題。

そんな好奇心旺盛で気まぐれで底抜けの明るさが特徴の猫人族の少女のはずなのだが、彼女は俺が近づくと体を震わせながら、

「リューネといいますにゃ。
ご主人しゃまのいうこと何でも聞きますから、どうかひどい事しないでほしいにゃ……。」

と完全に脅えきった状態で俺に挨拶をしてきた。

へたりきった耳と尻尾はきれいな橙に近い茶色、髪は薄めのブラウン。
ヒューマンとさほど変わらない顔立ちだが、やはりその顔はどこか猫っぽくてかわいらしい。

しかし俺の目を引いたのは彼女の容姿ではなく、彼女の体に刻まれたものだった。

薄汚れた服からのぞく肌のそこかしこに見えるムチの跡。

俺は見ていられなくて目をそらしてしまった。

同時に元の世界のことを考えてしまう。

元の世界の奴隷の歴史について思い返し、
「あんなに平和そうな世界もこんなに不幸な人たちの過去があったからなんだな」
とガラでもなく考えてしまった。

そんなかわいそうな二人を俺は二人あわせて２０，０００Ｇで『買った』。

なぜなら彼らはヒューマンにはない力を使いこなす者になる可能性があるから。

それは俺の目的の為にはすごく『有用な力』だったから。

どうしようもない外道だと自分をこんなにも呪いたくなったのは、昔と今をあわせた人生でもこの時が初めてだった。

俺は何の言い訳もしない。

そんな事出来るわけがない。

◇◆◇◆◇◆◇◆

俺は他に俺が今度うちの庭に作る俺のための植物園の世話をしてくれる人間を男女２人ずつ買った。

これはシランの推薦で選んだ。

あのデキる彼の推薦なら間違いないだろう。
あと元冒険者の奴隷だが今回はやめておくことにした。
かなりお金を使ってしまったし、無理してまで欲しい人材がいなかったからだ。

いや、正直に言おう。人を『買う』という行為に俺はもう限界だった。

そうしてこの世界で一番不愉快な買い物を終わろうとする時、不意に小さな声が俺を呼び止めた。

自分の運命を変える声というのを俺は初めてこのときに聞いた。

「だ、旦那様。僕を買ってくれませんか？」

そこにいたのは背の低い小柄で何の変哲も無い黒い髪の少年だった。
その言葉に俺が驚いていると、少年は意を決したように言葉をぶつけてきた。

「僕、今は何のとりえもありませんが必ずあなたの役に立つ人間になって見せます！
だからお願いです！僕を買ってください！」

元々カラカラだった俺の喉がさらに渇いていく。
言葉がのどを通して出てくる気がしない。
それでも聞かなくちゃならない。
ひび割れた声をのどを割って絞り出す。

「……どうして俺なんかに買われたいの？」

「あなたの側にいれば僕でも、力の無いただの無力な奴隷の僕でも未来が見れる気がするからです。
それがどんな未来でもかまいません！お願いです、僕を連れて行ってください！」

……このとき初めて俺は理解した。人が人の命を背負うってことがどういうことか、ということを。

今から自分のしようとしている事がどういうことで、どういう覚悟

をしなければいけなかったのかを。

改めて自分に言い聞かせる、いや全ての認識を入れ替える。

俺はこの世界の人間だと。

この世界で生きて、死ぬのだと。

熱くなって来た目を上に向けて、少年に分からないようにしながら俺は彼に尋ねる。

「君、名前は？」

「テトです。」

テトか。長い付き合いになるなら呼びやすい名前は大歓迎だ。

「テト、俺の名前はジオ・パラケルスス・ラ・テオフラストゥスだ。俺は天空まで駆け上がるぞ！遅れないようについて来い！」

「ハイ！」

結局この日俺が金で買ったものは、たくさんの家族とこの世界の人間として生きて死ぬという覚悟だった。

俺はこの日世界で一番いい買い物をしたのだろう。その事だけには自信がある。

## 第九話　世界で一番いい買い物（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

書き始めるまでここまで重くて重要な話になるはずではなかったんです。

だって最初書き出しの時につけてたタイトルが
『俺は断じてロリでもショタでもない』ですから。

実力以上のものが出た感じがしていて自分的には満足です。

ヒロインのうち４人が今回出てきました。

赤毛の双子の姉妹、アリアとエリア。
ダークエルフの少女、シルウィ。
猫人族の少女、リューネです。

これで主人公が立てたフラグは５本目。

さて主人公はこの先何本のフラグを立てるのでしょうか？
作者の現在脳内でカウントしている数で止まる事ができるのか！ジオの腰は大丈夫なのか？それは誰にも分からない！

そんな感じです。

あとそろそろ他の人の視点から、閑話をいくつかはさんだほうがいいでしょうか？

あと二話消化できれば一章終了でちょうど切りがいいので。

閑話で扱う予定の話は、
ジオ父を初めとした回りの大人たち視点の話。
マリエル視点の話。
あとは奴隷少女４人組視点の話。
あとは短いですがテト少年の視点での話でしょうか。

まだ早いかなという気持ちもありますので微妙といえば微妙です。
書かないほうが読んでくださっている皆さんの想像力を掻き立てる気がして……。

書く場合は本編がその分遅くなりますしね。

あと前回お話の中でその強さ加減を説明したダブルジョブが主人公の一番のチートではありません。
既に各所で片鱗を見せている別の能力が、実は最高にチートなのです。

ある意味無双が可能なほど……。

ご意見、ご感想、誤字脱字の指摘など幅広くお待ちしております。

## 第十話　風呂敷は広げる為にある（前書き）

あと2話でエルトリンシティ編が終わります。

そして今回作品始まって初の超シリアスモード発動です。

はやくおばかなジオ君を書きたいものです。

あと少しお付き合いください。

## 第十話　風呂敷は広げる為にある

改めて名乗ろう。

俺の名前はジオ・パラケルスス・ラ・テオフラストゥスだ。

……我ながら柄じゃないよなぁ。

テトとの話の後、俺はすぐにシランさんのところへ向かった。

俺は英雄なんかになるつもりは無い。

人の為に生きるつもりも無い。

むしろ俺の生き方は他の多くの人間を不幸にするかもしれない。

だったらそんな俺が巻き込む人間達には少しでも幸せを感じてもらいたい。

自己満足でいい。俺に出来る事をする。これだけだ。

それにさっきから頭の中のスイッチが切り替わっているのが分かる。

頭がキレッキレになっていて、今ならどんな難問でもたやすく答え

られる気がする。
だから俺の望みをかなえる為の最善の方法を構築するのも簡単だった。

「シラン。」

入り口近くの応接室の前でじぃと話しているシランさんを発見。
どうやらお金を渡していたらしい。
「シラン、話が。そこの部屋で。じぃは悪いけどここに。
誰も入ってこないように見てて。」

そこまで言い切ってシランさんを連れて部屋に入る。
シランを促して目の前の椅子に座ってもらう。
本来客である俺のすることではないんだろうけど、そこは許してもらおう。
シランはまず深々と頭を下げてから俺の目の前の席に着いた。
「まず本日は多数の奴隷のお買い上げ誠にありがとうございます。
それで、お誘いいただくのは大変光栄なのですが、執事様にもお聞かれになりたくない話がおありなのですか？」

さすが鋭い。だが今の俺にはそれぐらいのほうがやりやすい。

「えっとね、シラン。僕ね、っと。

……いやもうあなたにはただの子供のふりも意味が無いですね。

改めて名乗ります。

俺の名前はジオ・パラケルスス・ラ・テオフラストゥス。

ワトリアの街の魔法ギルド『導きの英知』のギルドマスター、

フィリップ・パラケルスス・ラ・テオフラストゥスの息子です。

今回この『奴隷市場』にやってきたのは先ほどもお話した通り、近

い将来冒険者として立つつもりの自分を支えてくれる仲間候補を見

つけて自分の手で育て上げる為です。

他にも俺は父と同じアルケミストを目指していますので、この後自

分の為に作る薬草や植物の管理を任せる事ができる人材もここに探

しに来ました。

ここまではよろしいですか？」

俺は自らの素性とここに来た目的を一気に告げてから目の前の鋭敏

すぎる男の顔を見る。

男の顔に浮かんでいるのは、先ほどまでとほとんど変わらない笑顔。

だが決定的に違うのはその眼だ。

才能や力、野心を持つ人間特有のそれがギラギラと輝いている。
髪と同じ色素の薄い茶色の眼だ。
俺がそうやって彼のことを伺っていると、ようやくシランさんは口を開いた。
「丁寧な名乗りを私などに、しかも何度も本当にありがとうございます。
光栄の極みにございます。
私も改めて名乗らさせてくださいませ、ジオ様。
私の名前はシラン。シラン・モーフィングでございます。
主人よりこの『奴隷市場』、僕の館の管理を任せられております。
お話の前にまずはエリアの病の事、さらには私どもの奴隷への数々のお気遣い、このシラン心より感謝いたします。
実は私、あなた様の事は以前から存じてあげておりました、ジオ様。
仕事柄様々な情報に触れる機会が多いものですから。
ワトリアには変わった子供がいると。

ワトリアのテオフラストゥス様の息子様は大変変わった方で、魔法職の家系にも拘らず戦士職の訓練を積んでいる変わり者、いや見る目の無いものはオチコボレなどと呼んでいましたが。
奴らには見る目がないにも程がありますな。

ヒューマンの子供とドラゴンの子供を間違えるようなものだ。」

そこで一旦言葉を切るシラン。

俺は沈黙を続ける事で彼の言葉の続きを促す。

「まったくもってあなた様には驚かされました。
こんなに驚かされたのは私も生まれて初めてです。

あなたの奴隷達への態度も、
年端のいかない奴隷を買い取って一から自分で育てるという発想も、
私にとっては空から山が落ちてくるのではないかと思わせる出来事ですのに、そのあとも出し惜しみをなさらず、よくもまぁあれだけの非常識の大安売り（バーゲンセール）を我らに見せてくださったものです。

不敬な言い方をお許しいただけますか？

まったくあなた様は底が知れない。
でも私にはそこがたまらなく楽しい、……失礼を。言い過ぎましたね。

しかし、今からさらに私を驚かせる話をするおつもりで私をお誘いになったのでしょう？」

なるほど、表面上は平静を装ってはいたが、内心はそこまででもなかったようだ。

つまり似たもの同士、同族嫌悪ってやつなのか？　まったく笑えないけどな。

そして思っていた通り、異常なまでに切れる。

選択肢は二つ。味方にするか、……殺すかしかない。

シランは俺が話し出すのを、楽しさを抑えきれない眼で待っている。

いいだろう、後悔先に立たず。後悔は後でゆっくりすることにしよう。

「シラン、先ほどまであなたにお聞きしようと思っていたのはあなた自身のお値段でした。
いくらか聞かないと俺がこの後いくら稼げばいいのか分かりませんでしたしね。
ですが、今俺が伺いたいのは別の事です。」

シランが俺の言葉にわずかに苦笑する。どうせそれすら『フリ』だろうがな。

「はぁ、私が何か粗相を致しましたでしょうか？
いえ、失礼。とてもしていないとは申せませんね。
いやはや、私も嫌われてしまったようです。自業自得ですね。
それでは、ジオ様は私の値段ではなく、いったい何をお聞きになりたいのですか？」

刀の切っ先のように目を細めて俺を見るシランさん。

俺は間髪いれずに話を切り出す。
ここで大事なのは、この男に本当の意味で俺を認めさせることだ。

「まずはあなたのご主人について。
率直に伺います。あなたほどの人がその忠誠を、いや才気を捧げるに値する人ですか？」

彼の顔に驚きが広がり、苦笑がさらに大きくなる。

この男、顔の表情筋まで器用らしい、まったく妖怪だとしか思えない。

「そうですな、そう悪い方でもない。

……そう申し上げておきましょうか。一応私も奴隷の端くれですから。」

やはりか。ということはこの店で感じたものの多くは、この男の力によるものだと断定できる。

話を持ちかける相手を俺は間違ってはいなかったらしい。ならば話は早い。

「では教えてください。

あなた自身を含めたこの『奴隷市場』そのもの全てを買い取るのに、いったいいくらくらいかかります？」

◇◆◇◆◇◆◇◆

部屋を沈黙が支配した。

俺の目の前に座る男の顔にもさすがにもう笑顔がない。

白い仮面をかぶったかのようだ。

それほど長い時間ではなかったのだろうが、俺たちが感じていた時間の流れは1時間ほどにも感じられた。

やがて沈黙に飽きたように、呼吸を止めた人間が空気を欲するようにお互いが一息ついた後、目の前の男は振り絞るように声を出した。

「さすがにここまでとは……。

まだまだあなた様への見積もりが甘かった事を謝罪いたします。

ですが何をお考えになっています？なぜ、この場所ごと必要なのですか？

どう考えてもあなたには不要な荷物であると思いますが？」

とんでもない。メリットのほうがでかいよ。

「俺が将来冒険者として立とうとしている事は先ほどお話したとおりです。

ですが個人の実力だけで？める物等、俺がどれだけ強くなってもたいした事はありません。

また、戦闘に優れたものを多く集めても、その力で行ける場所も高々知れています。

……まぁ俺もここに今日来るまでは、それでいいと、思っていたんですが。

今日、しかもさっき気づいた事なんですが。

俺はどうやら自分で思っていたよりも遥かに我儘なようでして。

俺に関わった人間には、俺の我儘で可能な限り幸せになって欲しいようなのですよ。」

また部屋に沈黙が落ちる。

だが今度沈黙の帳を破ったのは、苦しい声ではなく外まで、いやこの商館中に響き渡るような笑い声だった。

その声にさすがに驚いたのだろう。

じぃと先生が部屋に飛び込んできて、俺の前に立ちふさがってくれた。

俺は苦笑しながら、血相を変えているその二人のズボンをつかんでこっちに向いてもらい、「大丈夫だから。」と告げてもう一度部屋の外に出てもらう。

しぶしぶながら出て行ってくれる二人。後で説明が大変かもな。

まぁ仕方ない。まだ内緒話は終わっていないからな。

やがて笑いの波が収まったのか、理性が復活したのか、目の前の男はもう先ほどまでと同じ笑顔を顔に浮かべ直していた。

「貴族様のお話の途中で笑い出すなど……。我ながら不敬の極みでございますな。

お詫びになりますかどうか分かりませんが、お望みならいつでもジオ様にこの首差し上げましょう。」

「首から上だけなら要りません。

そんなオブジェを飾って喜ぶ趣味はありませんので。

首から下も一緒に、しかもきちんと動く状態なら歓迎しますよ。

さてと。

笑えないブラックジョークはさておき、話の続きをしましょうか。」

俺の辛辣な返しに苦笑を浮かべるシランさん。

あんた絶対内心楽しんでるだろ！

あ～もう厄介すぎるこの人、マジで。

俺も内心（俺のは動揺）を顔に出さないようにしながら話を仕切りなおす。

「あなたは先ほど不要な荷物といいましたが、とんでもない。
そもそも人を差配する力というのは古今東西、それだけで大きな力です。
冒険者としての俺は優先的に自分に従ってくれる将来有望な従者達を安定的に確保できる。
これだけでも十分なメリットです。
その上、経済的な効果も見逃せません。
この『奴隷市場』を俺の方針できちんと運営できるなら、投資する資金の額がいくらにせよ容易く回収できる範囲のはずですしね。
そして何よりこの『奴隷市場』を押さえる事はこのエルトリンシティの歓楽街を押さえることに等しい。
この歓楽街のお姉さんたちはここの出身者がほとんどなのでしょう？
そこに集まる膨大かつ有益な情報……。
情報を制するものは全てを制す、ですよ？
これでも本当に俺にとって不要な荷物といいますか？
もし俺の身分や父や母の立場を考えてくれているなら代表者を別の人間にすればいいんですよ。
信用が出来て、頭が切れる……、そう、あなたのような。」

シランさんはその薄い茶色の眼を見開いて、苦笑しながら言ってきた。

「参りました……、ジオ様はまるで底のないビックリ箱のようだ。分かりました、私の負けです。

……首の代わりに私の人生を差し上げましょう。お好きなようにお使いください。」

人のことをビックリ箱扱いか。
それについて人のことを言える人間かよ、あんたが。
それはこっちの台詞だ、熨斗つけて返してやると言いたかったが今度にする事にする。

ふ～と息を吐き出す俺。
さすがにこんな交渉ごとは、昔も今も初めてだ。
かなり疲れたが、もう一押ししておかなくちゃな。

あとひとふんばりだ。

目の前の彼を最もひきつける物、それを提示して初めて彼を本当の意味で自分の味方にできる。

「これも商売ですね、あなたにとっては。

ではあなたの人生と引き換えに、俺はあなたにあなたが退屈しない

人生を差し上げる努力をしますよ。」

俺がそう言うとシランの顔が破顔した。先ほどの大笑いが無ければもう一度同じようになっていただろう。

顔に苦笑を浮かべながらシランさん、いやシランが立ち上がり俺の椅子の側で跪いた。

「契約成立です。私の全てはあなたの望みとともにーーーー。」

これが俺が俺の我儘をかなえる為に必要な最高の仲間を手に入れた時の一部始終だ。

この時の俺から一言だけ。

……疲れた。

◇◆◇◆◇◆◇◆

そこから話したことはそう多くない。

まず、じぃと先生に部屋に入ってもらい、今回買った奴隷達の移動をどうするかについて相談し、こちらの準備を整える間とエリアの

体の回復のことを考えて、一月後護衛を雇って彼らをワトリアに移動させること。

先ほどまでの奴隷とは別にテトという少年ももらって行くこと。

シランに５０００Ｇほどの金を預けて、あと一月の間、俺の買った奴隷達の面倒やあとはいくつか買っておいて欲しいものがあるのでそのために使ってくれと頼んだこと。

、

あとは、じぃたちにばれないように『念話石』をこっそりシランに渡したことぐらいだ。

その後、俺は９人分の契約書にサインをして『奴隷市場』を出た。

外はもう昼の白と青から、夕日の濃い橙と薄闇にその色を変えていた。

外の空気がやたら気持ちよかった。

今の夕日のきれいさは、あの日見た夕日に負けないものだと思った。

まったく我ながら大きな風呂敷を広げたものだ。

ただ、もう止まるつもりも無いけどな。

あとは今日死なないようにしないとな、と心の中で苦笑しながら父上の待っているであろう宿へと歩き出した。

## 第十話　風呂敷は広げる為にある（後書き）

いかがだったでしょうか？

キツネとタヌキの化かしあいをお送りしました。

次は厳密に言うとエルトリンシティ編だけど舞台はワトリアです。

それが終わったら学院編に突入します。

ご意見、ご感想、誤字脱字の指摘など幅広くお待ちしております。

ご指摘のあったところを修正いたしました。

ありがとうございました。

## 第十一話　おみやげと準備（前書き）

あと1話で幼年編終了の予定だったんですが
一緒にやっちゃうと1万文字超えちゃうので
2話に分ける事にしました。

ということでどうぞ。

## 第十一話　おみやげと準備

ワトリアよ！俺は……やめとこ。

エルトリンシティからやっと帰ってきたジオ君です！

あの胃が死ぬほど痛くなった日から１１日！ようやく帰ってきました！

まぁ理由はあまりに脳みそが高速回転したせいか、すげぇ熱が出てそれが引くまで家に帰れなかったんだよ。

知恵熱なんて生まれて初めてです。都市伝説かと思ってたわ。

ゲートを使って俺だけ帰るって手もあったんだけど、父上が「私が看病するのだ！」って言いだして、結局エルトリンシティにさらに７日滞在する事になった。

３日目には熱も引き、５日目には体も元通り動くようになったんだが、父上が心配してなかなかベッドから開放してくれなかったから、俺はもっぱらこっそり隠れて『念話石』を使ってシランといろいろ話をしていた。

シランの話では、エリアちゃんの容態は安定してきており、他にも同じ症状だった数名の奴隷も命を取り留めたとの事で、俺としては本当に良かったと思った。

その他にも『奴隷市場』の主人（シラン曰く「見た目が少し豚に似てらっしゃるのが大変残念なのですが」だそうだ。）が

「わしが楽しみに取っておいたモノまで売ってしまうとは！」とか

「しかし、これだけの上客の獲得の為なら仕方ないのか……。」とか

言っていたことも教えてくれた。

まぁ初めての客なのに、３万Ｇ（日本円で３０００万くらい。日本なら一軒家が買えるなぁ）近く一気に使ったからな、俺。

それにしても間一髪だったのか？　どうも彼の今の主人は、自分の商売モノに手を出す大馬鹿者らしい。

今となっては俺の買った子達に指一本触れさせるつもりはない。絶対に。

あの子達はもう俺の身内だからな。

他にも俺の依頼の品が既に用意できた事、約一月後にシラン自身が護衛隊を率いてみんなをワトリアに連れてきてくれることになった。

父上にも奴隷購入の顛末について（大事なところはぼかして）話した。

元々俺が今回のエルトリンシティ訪問で、将来の為に従者が欲しい

って言ったら父上も母上も大賛成してくれたので、今回俺は何の心配もせずに彼らを買いに行くことが出来たのだ。

１０歳で奴隷を買いに行く息子を誉める両親ってどうなのよ……とも思ったが、

元冒険者でもあり、自身が俺が目指すアルケミストでもある父上は、前衛役の必要性からいい考えだと俺の考えを絶賛してくれたし、母上は危ない事ばかりしている俺を忠実に守ってくれるなら奴隷でも悪魔でもいいとか、怖い事を言ってまったく反対しなかった。

今回の件、実は俺が考えていた最大の難関が『両親の許可』を取ること。コレだった。

その最難関が実はウェルカムで、あっさり行き過ぎたのにはさすがの俺もビックリした。

うちの両親は本当に親バカだと思う。

あまつさえ俺が用意した金で足りないといけないからって俺が用意した金以外に、さらに5万Gをじぃに渡していたのには、さすがに呆れた。

ありがたいね、親って。

そして前の世界の父さん母さんごめんな。親孝行できなくて。

……たださすがに従者候補だけで5人、しかも全員年端のいかな

い子供というのは予想をはるかに超えていたらしく、話をした時には唖然とされたが。

閑話休題

そしてようやく6日目に体が治った事を、しつこいくらいに父上に確認された上で外出許可をもらい、父上たちと一緒にエルトリンシティの商店を見て回った。

父上大フィーバー。マジで一日中連れ回された。

父上と俺は共同でまず母上へのおみやげを選び、その他にも家の者たちへのおみやげを。

そして俺はもちろんこっそりマリエルのおみやげを買った。

喜んでもらえるかな。喜んでもらえるといいな～♪

その様子を見たじぃが

「やっと若様が子供らしいお姿を……。」とかいいながら涙ぐんでいたり、

イナ先生が

「あの子の面倒を見始めて1年……、初めて子供だと思えた……。」とビックリしてたりしたのは見て無ぬ振りをしておいた。

いつもゴメンネ二人とも。

そうしてまた馬車で揺られる事3日、今日ワトリアに戻ってきた。
ん？４日じゃないのか？って。
母上のイライラがピークだとかで、１日分は急いでもらった。

やばかったからな。

本当は俺一人だけでもゲートキーパーで帰るって言ったんだけど、父上に帰りの道中も含めての今回の王都訪問だからダメって言われて諦めた。

街のゲートをくぐり、街の北側にある街の実力者達の住む住宅街に入る。

ちなみに《Ｎｅｗ　Ｗｏｒｌｄ》のゲーム内にはこういう区画は存在しなかった。

厳密には中心部はディスプレイ越しの記憶どおり。

でもその外延部にはなかったはずの路地があったり、食料品を売る市場があったりと、街の形も俺の記憶とは大幅にに変わっており、人間が暮らす都市としてよりリアリティのあるファンタジー世界の街に変化していた事が、最初に俺がこの世界で驚いた事である。

北側の住宅街は一つ一つの区画が半端じゃなくでかくて、それこそ

東京ドームが何個も入る大きさであり、もちろんうちの屋敷もその例に漏れない。

馬車ごと門をくぐって家に入る。

敷地の奥のほうで大勢の人間が働いているのは、頼んでおいた奴隷の人たちの為の家の工事が始まっているのだろう。

そうして家の前まで来ると母上とマリエルをはじめとした家の人間が総出で俺たちを迎えてくれた。

やばい、なんか超うれしい。

俺ははじかれたように馬車のドアを開け

「母上！ただいま帰りました！」と、

そういってから母上の胸に飛び込んでいった。

◇◆◇◆◇◆◇◆

翌朝。

「若様、朝でございますよ。」

やさしい声に目を開いてみると、目の前にニコニコ笑っているマリエルがいた。

あぁ！なんか今回の一連の苦労が全て報われた気がする！

「おはよう！マリエル。ただいま！」

「はい、おかえりなさいませ若様。昨日は良くお眠りになれましたか？」

「うん！起こしに来てくれてありがとう！」

ん～マリエルの顔を見るとなんだかすごく安心するんだよな～。

胸がポカポカしてくるというか。そしてドキドキするというか。

「ではお服をお着替えになりますか？よろしければ万歳してくださいね？」

無理、無理！恥ずかしいから！

「いいよ！いつも通り自分でやるから！」

俺がそう言うとマリエルは少しそのかわいい顔をしかめて、

「若様あちらでお熱を出されたとか？まだご無理はいけませんよ？」

と「め！」って感じで心配してくれたんだが、さすがにもう体は大丈夫だし、そして何より朝から羞恥プレイはつらいぜ！

あ、そういえば……。

「マリエル。あのね。ちょっと大事な話があるんだ。食事の後でまたこの部屋に来てくれないかな？」

小さく首をかしげて俺を見るマリエル。

「はい、かしこまりました。ではお着替えが終わりましたらお食事に参りましょう。」

さてと、じゃあさっさ着替えないとな。

ただ……。

「マリエル、恥ずかしいから後ろ向いてて！」

◇◆◇◆◇◆◇◆

マリエルに後ろを向いてもらってる間に、戦士系職の能力を最大限に発揮して、高速で着替えた俺が朝食に向かうと、そこには父上と母上が待っていた。

父上は凹み気味で母上のご機嫌をとっているが、母上はまだ機嫌が悪い。

昨日の親子の感動の再会は、熱烈な母上のハグで幕を開けた。

その後みんなにただいま～と言うと、みんな笑顔にうっすら涙を浮

かべて、俺たちの帰りを喜んでくれた。

そして、すぐに母上にはおみやげを渡した。

母上へのおみやげはサファイアのネックレス。

母上が飛び上がらんばかりに喜んだので、（「ジオちゃんのプレゼント！ジオちゃんのプレゼント！」と言って喜びまくっていたので、一緒に選んだ父上が哀れだったが）俺もうれしくなってすぐに身につけてもらうと、母上の青い目とおそろいでとても似合っていた。

ちなみに値段は3万G。父上が2万G、俺がかなりごねまくって1万G出した。

これで俺の貯金は運転資金を除けばほぼ0に。我ながらずいぶん派手に使ったもんだ。

だが母上の喜びはプライスレス。後悔とかするはずがない。

そのあたりまではよかったんだが、俺の向こうでの話になったあたりからドンドン加速度的に機嫌が悪くなり始め、病気で倒れた俺の看病を、父上がかっこよく（？）した話のあたりで「それは母親の役目よ！」と大きな声で若干キレ始め、最後に空気の読めない父上が俺とエルトリンシティでウインドウショッピングして楽しんだあたりのくだりで、ついに母上が爆発し。

拗ねて部屋に閉じこもってしまった。

そして一晩経ちました。

そして今に至る。

う～ん、拗ねてる母上もかわいらしいんだが……。

今日は母上と添い寝だな。機嫌とらなきゃな。

そんな事を思いながら帰宅してから最初の朝食のパンを食べる俺であった。

そんなこんなありながら朝食後。

俺の目の前には今マリエルが座ってる。

本当なら少しマリエルに甘えて、マリエル分を補給したいところなんだが、それはいつでもできる。

まぁ結構死活問題ではあるんだが。

酸素がないと人間が生きていけないように！俺にはマリエル分が必要なんだよ！

石投げるな！ロリっていうな！犯罪者じゃねぇ！俺は１０歳だ！

不毛だ、話を進めよう。

「マリエル、えっとね。まずこれおみやげ。いつもありがとう。」
そういって俺は腰に下げている皮製のポーチから、ローズクオーツのネックレスを取り出してマリエルに手渡した。
かわいらしいピンク色の石が、マリエルに似合うと思って買ってきたんだ。
おみやげって最初に聞いたときのマリエルの顔はすごく喜んでくれてたはずなのだが、ネックレスを渡したとたん、一瞬すごいうれしそうな顔をしたかと思ったら、その後すごく考え込んだ顔になり、最後には泣き出してしまった。
え？何で？何か俺まずい事したのか？
もしかして気に入らなかったのか？
やっぱダイヤのネックレスのほうがよかったのかな～と、あれこれ悩んでらちがあかないのでマリエルを見たら、マリエルは涙を流して俺のほうを見ながら首を振っていた。
何で？どうして？ＷＨＹ？
「マリエル！どうしたの？それ嫌いだった？」と俺が言うと
マリエルは涙をこぼしながらもう一度大きく首を振った。
「若様、私は一介のメイドでございます。
お気持ちは大変、この上もなくうれしゅうございますが、いかに私

が若様付きのメイドであっても、こんな高価なものをいただくわけには参りません！」

と涙交じりの声で言われてしまった。

あ～～～

だが今回は本当に感謝の気持ちと、自分が好きな相手に自分の選んだかわいいアクセサリーをつけて笑って欲しいという男の純情でおみやげを買ってきたので、俺としても笑って受け取って欲しいのだ。

万事休す……。えぇい、ままよ！

どうしようもなくなった俺はマリエルに抱きついた！

ビックリして俺を見るマリエル。

「若様？どうして私を抱きしめてくださるのですか？」

マリエルがビックリしながら困ったような顔で俺を見る。チャンス！

「マリエル泣かないで！あのね、これはマリエルにすごく似合うと思ったから買ってきたの！マリエルを泣かせようと思って買ってきたんじゃないんだ！」

そういって幼女スペシャル（既に固有スキルだな）を発動しながらマリエルに泣き止むように頼む。必死だぜ？俺は。

「マリエルお願い。俺、それをつけたマリエルにニコニコ笑って欲しいんだ。
だからもう泣かないで、ね？」

そこまで言うとマリエルは、ようやく落ち着いたのか俺のほうに笑顔を向けてくれた。

まるで濡れた蓮が咲いたような笑顔ーーー。

惚れた弱みとはいえその笑顔は反則ですヨ……マリエルさん……。

「あとね、マリエル。さっき言ってたでしょ？

俺マリエルに大変なお願いがあるんだ。

今度奴隷の人たちがうちに来るのは知ってるでしょ？

その中の俺の従者候補の子達は、男の子が1人に女の子が4人。

みんな俺よりも小さな子達ばっかりなんだ。

だからね、マリエルにその子達のお世話を頼みたかったんだよ。

みんな体はもちろん心にも傷を負った可哀想な子達なんだ……。

だからね、マリエル。その子達のお姉さん代わりになってあげて欲しいんだ。

だからそのネックレスは、その大変なお仕事をやってもらう為に、先にあげるごほうび……ってことでもらってくれないかな？」

俺がそう言うとマリエルは涙声のまま、俺の耳元でささやくように言ってくれた。

「はい、若様。私、喜んでその子達のお姉さんになります。

大丈夫です、実家で6人も弟や妹の面倒をみてきたんですもの。

いまさら兄妹が5人増えても問題ありませんから！

……だからこのネックレスいただきますね？

若様、本当に大事に致しますから……。」

そういってマリエルは泣き笑いの顔で俺を強く抱きしめてきた。

ってどういう状況？なんで俺マリエルにぎゅっとされてんの？

今までマリエルに泣き止んでもらおうと必死だった頭が急激に冷静に！

ぐあああああああああああああ、なんて事してんだ俺！

それにしてもいい匂いだな……。

まぁすんごい幸せだからしばらくこのままでいいか……。

◇◆◇◆◇◆◇◆

その後の半月ちょっと俺は、奴隷のみんなの為の準備に追われた。

薬草園で働いてくれる男女それぞれ2人に住んでもらう為の小屋の建設。

あと外にトイレを作り併設する形で、ごみを焼くところと、焼いた灰を捨てる穴を掘った。

さらにシランに連絡して、あちらにも同じものを作ってもらった。

成功したら鶏と豚も飼おうかな。ついでに肥料も作れるし。

……実際には初めてなんだよな、日本じゃ危なくてなかなかできんしな、コレ。

あとは小さな作業用の小屋と風呂。井戸も掘ってもらった。

これで気持ちよく働いてもらえると思う。

テトたち5人には屋敷の空き部屋に住んでもらって、まずは基本的な教育から始めるつもりだ。

教材は俺が記憶から引っ張り出したもので作った。

読み書き、算数、基本的な自然科学の知識あたりだ。

それにしてもおっかしいな～。

俺一回死んでやたら記憶力が良くなったらしい。

まぁ便利だからいいけど。

ということでこちらも手配済み。

母上にかわいらしい女の子が４人来ますよって言ったら、
「うれしい！娘ができるのね！それも４人も！」って言ってはしゃいでいた。

いつまでも俺の母上は若い。息子としてはうれしいやら、恥ずかしいやら……。

そうこうしているうちにシランから連絡があった。

俺に頼まれたものはすべて手に入ったこと。

エリアちゃんの体調が旅に耐えうるものになった為、明日にはエルトリンシティを出て、こちらに向かう事。

ようやく彼らが俺のところにやってくる。

もうひとがんばりするか！

そんな事を思いながら、俺は猛烈な勢いでブエロのおっさんに納品する各種ポーションの作成を続けるのであった。

## 第十一話　おみやげと準備（後書き）

いろいろ皆さんご意見ありがとうございます。

閑話を一つ。大人たちの目線ではさむ事にしました。

父、ブエロのおっさん、じぃ、イナ先生　あたりですね。

ご意見、ご感想、誤字脱字の指摘など幅広くお待ちしております。

## 第十二話　胃痛と契約書

ポーション５００個作成完了！ジオだ。

にしても徹夜明けには、今日のお日様は眩しすぎる……。

まぁ昔は３徹、４徹当たり前でやってたんだが……。

ふ、俺も軟弱になったもんだ……。

まぁそんな事はさておいて、あの念話での連絡から４日後、シランたちが無事ワトリアにやってきた。

街の入り口まで出迎えに出たじぃの乗った馬車を先頭に、大きな二頭引きの幌馬車が３台。

二台目の馬車の御者台に座っていたシランが、すばやく降りて俺のところに向かってくる。

にしてもこうして太陽の下で見ると一段と男前だな。

薄い茶色の髪を光がすり抜けてるように見えるので、無駄に神々しい……。

どうも人間性と容姿の端麗さは比例しないらしい、残念だ。

そんな事を考えながらこちらに歩いてくるシランを見てたら、シランの乗っていた幌馬車から赤い髪の少女が二人仲良く飛び出して、

俺のところにやってきた。

「ご主人様！」

完璧なユニゾンで俺の事をご主人様と呼ぶ赤い髪の美少女二人……。

まぁ元気になったようで何よりだ。

「アリア、久しぶりだね。
エリアも元気になってよかった、心配していたから。」

「ありがとうございます、ご主人様！
すべてご主人様のおかげでございます。

エリアもアリアともども末永くかわいがってください！」

こちらがエリアなのだろう、俺から見て左側にいた双子の片方が爆弾発言をすると顔を真っ赤にして俯いた。

いや、かわいいんだけどね？
見た感じ7歳か8歳くらいなのにすごい賢い感じがするし。

アリアは俺の事をず～と見てるし、エリアはたまに顔を上げて俺を見てはすぐ俯くってのを繰り返してる。

う～ん、俺は男二人の兄弟の末っ子だったし初めての感覚だけど、妹が出来たらこんなもんなのか？

なんか腋の下がむずむずするわ。

そして何かうれしいかも。

初めての感覚に我ながらどうしていいかわからなくなって、とりあえず二人の頭を撫でてからシランのところへ行くことにした。

「シラン。」

「これはこれは、わざわざのお出迎え痛み入ります。

早速ですが、こちらがご依頼の品でございます。

……ですが本当によろしいのですか？」

俺はシランに頼んでいた品物を確認してからその声に応える。

よし注文どおりだ。さすがシラン、いい仕事だぜ。

「後悔なんてしないよ？

それにシラン。こっちのほうが面白いでしょ？君的に。」

そう俺が言うと、にっこりとあの笑顔を浮かべたシランがそこにいた。

そういう風にシラン（腹黒で一発変換できると思うんだよね。）と話している間にも、彼の肩越しに見える馬車の陰から視線を感じた。

こちらが気づいてるのに気づかれないようにそっと見てみると、馬車の幌からひょっこり顔だけ飛び出すような感じで、フードをかぶった銀髪の少女と、薄いブラウンの髪からネコ耳が出ている女の子が俺のほうを見ていた。

シルウィとリューネだ。

どうやら俺の事を警戒しているらしい。

何気ない風を装って目を合わせてから笑顔で手を振ったら、二人とも驚いた顔でまた馬車の陰に隠れてしまった。

う〜〜ん、嫌われてるらしい。

俺は昔から子供好きだったから（変な意味じゃなくな。）ちょっとへこむ。

まぁこれからだな、これから。

ん？一人いなくないか？

あ、テトだ。

俺が知らない大人の奴隷達と一緒にいるところを見ると、後ろの馬車に乗っていたらしい。

俺に気づいてこちらに駆け出してこようとするが、荷物を降ろす仕事で捕まったのか、俺に申し訳なさそうに頭を下げて仕事に戻った。

うん、話はあとでゆっくりすればいいさ。

そうこうしてる内に荷降ろしなどの作業も終わったらしい。

総勢９人の奴隷達とシランが俺の前に跪いた。

……そういうの俺あんまり好きじゃないんだけどなぁ……。

これもおいおい改善しなきゃな。胃に悪いわ。

さてと、その辺はひとまず置いといて。

じゃあまずは挨拶からかな？

◇◆◇◆◇◆◇◆

俺と奴隷達のひととおりの挨拶が終わった後、渡しておいた金の残りで護衛の人たちに一杯やってもらうように言って、俺はまずみんなを連れてまず俺の住んでる家を案内した。

ついてきているのは、じぃ、シラン、テト、アリア、エリア、シルウィ、リューネと農園担当の４人だ。

男女２人づつの農園担当の４人にもさっき挨拶を受けた。

前の時は一杯一杯でちゃんと顔を合わすこともできなかったけど、全員まじめそうな人たちで合格。

何でもエルトリン北部地域の農民の子供だったらしいのだが、不作でどうにもならず奴隷として自ら身売りをしてきた人たちだったらしい。
みんないわゆる男前や美人ではなかったけど、非常に好感が持てる人たちだった。

さすがシラン。
それにしても何で俺の人物評価の基準が、一度顔を合わせただけの彼に分かるのか謎だ。

やっぱり妖怪なんだろう。そうに違いない。
そう思いながらふと振り返って奴を見ると、極上の笑顔で俺を見てやがった。

但し目が笑ってねぇ。やっぱり妖怪のようだ。マジコエエ。

テトもさっき4人と一緒に挨拶してきた。

「ご主人様！ありがとうございました！今日からお世話になります！」って言われたんだが
、俺的にはこういう反応が望ましいから頭撫でてやった。

前の時も思ったが、なんか子犬みたいでかわいらしい奴なんだよな。
そして先に言っておく。俺には勿論ショタっ気はねぇ！

閑話休題

まぁ案内するにもうちは広い。
うちの敷地にはマジで東京ドームが何個も入るくらいの広さがあるんだ。

敷地の中には小さな森や泉まであるし、俺が１０歳児とはいえ、敷地の入り口にある門から屋敷まで、普通に歩けば１０分以上かかるからな。

ということで俺たちは今馬車で屋敷の前まで移動して、みんなに見てもらったら、みんな口を開けて唖然としてた。

普通に豪邸だからな。
こっちで生まれて初めて母上に抱えられておもてに出た時、俺もそのあまりのでかさにびっくりしたしな。

平気なのはシランだけ。まぁ奴が初めからこんなことで驚くとは思ってないけど。

「ふぁ～おおきいにゃ～。」

「確かに大きい。」

猫人族特有の話し方で、驚きを隠せずにいるリューネ。

その後に話したのはシルウィ。冷静な口調だが、こちらも十分驚いているらしい。

そんな二人に俺は声をかけた。

「みんな、そんなに驚いてばかりいてもらっても困るよ。
テト、アリアとエリア、シルウィにリューネは今日からここに住んでもらうからね。
あぁ、４人にもちゃんと家を用意してあるよ、男女別に二軒。
もし、気に入らなかったら部屋も余ってることだし、こっちでもいいけどね。」

ん？空気がおかしい。何かまた変な事を言ったらしい。
こんな立派なお家に住むなんて無理です！とか、うにゃ～こんなところ怖くてすめないにゃ～とか、物を壊したら大変。とか、みんな驚きを通り越してパニックだ。
この程度で驚いてたら、俺と付き合うのは無理なんだけどなぁ。
「さてと、みんな中を見るのは後にして農園予定地のほうへいくよ～。」

俺の今の気分は、さしずめ観光のガイド役だ。
次はＯＯへ参りますってか？
俺が次に案内したのは、屋敷から１０分ほど歩いたところにある場所だ。

近くに小さな泉があって結構俺のお気に入りの場所。
そこに建っているのは、二つの家に、作業場と風呂、そしてトイレだ。
おとついまで作業をしていた大工さん達がいたが、彼らは既に引き上げている。

「ここが4人に生活と仕事をしてもらうところ。
家は男女別に住んで。お風呂も好きに使ってね、清潔にしないと病気になりやすいから。
それでトイレはここですること。」

「あの、ご主人様。よろしいですか？」
4人のうちの一人、実直な顔付きの男が俺に話しかけてきた。
確か名前はジトーだったかな？

「何？」

「私達はご主人様に奴隷として買われました。」

「そうだね。」

「ですのに、何故こんなにも私たちの為にいろいろしてくださるの

でしょうか？」

ん～意味分からねぇ。誰か通訳！ということでシランのほうを見る。

アイコンタクト、一瞬で意思疎通。こういうときだけ楽だな！

「そうですね。確かにジオ様のなさっている事は、奴隷にとってはあまりに過分のご配慮ですので、例の件も含めてこのあたりで皆にご説明なさるとよろしいかと。」

ん～そんなに異常か？

俺自身はどうせ働いてもらうなら効率よく、そして気持ちよく働いてもらいたいだけなんだが。

まぁもう少し落ち着いてからのつもりだったけど、そろそろ話をするか。

「じゃあ疑問に答える代わりに、俺からみんなに大事な話がある。そうだね、ここでいいか。シラン、あれを用意しておいて。」

◇◆◇◆◇◆◇◆

俺がシランに頼んでおいたもの。それは『ミウラの契約書』だ。

それが今俺の目の前にいる9人の目の前においてある。

『ミウラの契約書』とは『契約神ミウラ』によって祝福を受けた契

約書。

『契約神ミウラ』は《Ｎｅｗ　Ｗｏｒｌｄ》の世界における神の一柱にして、天秤と鉞を持つ契約神であり、公式設定では、この契約書で誓約された契約は魔法的拘束力を持ち、必ず履行されるとある。

さてなぜそんなものが存在するのか？

なぜなら、ＭＭＯＲＰＧ《Ｎｅｗ　Ｗｏｒｌｄ》にはプレイヤー間の揉め事防止、または解決の為に、この『ミウラの契約書』と『契約書システム』が存在したからである。

例えば、あるプレイヤーに高額アイテムを貸していたが、いつまで経っても返してくれず、挙句これは自分のものであると主張。

プレイヤーは当然運営に訴えて問題の解決を図る。

もしくは、あるプレイヤーにお金を、それも大金を貸していた。

しかし、そのプレイヤーは原因は分からないが、いつの間にかゲームに来なくなってしまいお金は戻ってこない。

こういった出来事は、ＭＭＯＲＰＧの世界では頻繁に見られるトラブルである。

もちろんこういった事は基本的に自己責任なのだが、損害を受けたほうとしてはなかなかそう割り切ることも出来ないわけで。

そして、後発ＭＭＯＲＰＧである《Ｎｅｗ　Ｗｏｒｌｄ》がこの問題にあらかじめ対策をうっていないわけがない。

その対策の一つが、この『契約書システム』なのだ。

これはプレイヤー同士が取り決めをウィンドウ画面で書き込み、もし万が一トラブルになった場合の判断基準の大きな参考にする。

最初の例なら、取り決めを破った場合アイテムを強制的に貸した側に移動。

２番目の例の場合、あらかじめ何日以上帰ってこなかった場合、強制的にお金の移動を行うなどだ。

実際この『強制執行』に至るまでに、他の様々なシステムやサービスによって問題の解決が図られるが、約束事の文書化と、万が一の場合の強制執行という安全ネットは、良心的なプレイヤー達にはどちらかというと好意的に受け取られていた。

さて、ここで今現在の『《Ｎｅｗ　Ｗｏｒｌｄ》に限りなく近い現実世界』での『ミウラの契約書』の効力はどうなるのか？

答えは簡単。

『契約書にかかれた誓約は履行される』

これである。

つまり契約書を書いたが最後、どうやっても逃れられないのだ。

しかし契約神ミウラは非常に厳格ではあるが、慈悲深い神でもあるので、一方の意思のみによる悪意ある強制的契約に対しては、逆にその愚か者に断罪の鉞を振り下ろす。

まさに公式設定通り。

そこに俺が今回書き込んだ内容は以下の通り。

『ジオ・パラケルスス・ラ・テオフラストゥス（以下主人）はＯＯ（各自の名前が入る。）に対して以下の権限を持つ。

一つ　主人の望む仕事に従事させる権利。

一つ　主人と彼が関係者と認めるものに対する暴力的行為の一切の禁止。

一つ　主人の仕事や主人との関係から知りえた情報の関係の無い人間への漏洩の禁止。これは主人の元を離れても、この誓約は解除されない。

一つ　ＯＯはその行動が主人の不利益にならないように心がけ、主人の為に誠実に仕事を行うことをここに誓う。

主人はＯＯにたいして以下の義務を負う。

一つ　ＯＯに対して年間５００Ｇを支払う。

一つ　主人はＯＯに不必要な暴力を振るってはならない。。

一つ　ＯＯが１００００Ｇと引き換えに、その身の自由を欲した場合、主人はそれに応じなければならない』

まぁ大まかにはこんな感じだろう。

要するに俺が結びたいのは、奴隷契約ではなく、雇用契約だってこと。

自主的に働いてくれるほうが絶対に能率がいいし。

その為にシランにこれを用意してもらったわけだ。

ちなみに解放奴隷制度って発想は、古代ローマ時代には普通のものだったらしい。

古代ローマでは、奴隷だった人の子供や孫が大金持ちだったり、高度な能力を持ち主人に殉じて死ぬ奴隷とかいたそうだ。

自分の自由を買い戻す為なら、人間がんばるだろ？

それに最低でも２０年（１万Ｇを払うのにってことね）ってことにしてあるが、仕事ができる人には少しずつ報酬を上げるつもりもあるし。

つまり、俺はできるだけ人間らしい職場で、人間らしく働いて欲しいんだよ。元日本人としてはさ。

正直、奴隷なんて俺はいらねぇ。

あ～～～～～～～やっとコレで少しは胃の痛いのから開放されるぜ！

「ということで、意味が分かったらサイン頂戴。

内容とか字の書き方が分からない人は言ってね、教えるから」

しかし誰もピクリとも動かない。

あれ～～～～？またですか？

そうやって俺が後ろを振り返るとやっぱりな。

シランだけが、すさまじく、ニヤニヤ、してやがる！

ムカツク！こら！通訳しろ！

俺の目配せ。シランの了解。

そして死ぬほどやばい笑顔。

……最高にイヤ過ぎる予感。

そしてこの後、案の定俺は後悔することになる。この時、この男に話をさせたことを。

まったく妖怪め！

「よかったな！お前達。

お前達は、幸運にもこの世で一番すばらしいご主人様に、お買いいただいた奴隷だったというわけだ。

他のどこに奴隷の為の住まいを整えてくれる方がいる？

他のどこに奴隷の権利を気遣ってくれる方がいる？

他のどこにお前達自身の自由を買い戻す事に、そのお心を砕いて誓約してくださる方がいる？

そう、そんな方は目の前のこのお方以外にはいない。

跪け！この方こそがお前達の主。

ジオ・パラケルスス・ラ・テオフラストゥス様である！」

その声に7人のヒューマンの奴隷たちがそろって俺に平伏した。

残る2人、まずリューネは最初意味がよく分からなかったのだろう。

回りをキョロキョロ見回して、自分ともう一人を除いて自分だけが平伏していない事に気づき、急いで同じようにした。

そしてもう1人、ダークエルフのシルウィはどうしても信じられないのか、最後まで俺のほうを見てポカンと口を開けていた。

美少女が台無しなんだが、その時の俺には突っ込む余裕はなかった。

その時の俺の気持ち？聞かないでくれよ……。

思い出すだけでしくしく胃が痛くなるんだよ……。

その後の事はあまり覚えていない。

とりあえず全員分の契約書を受け取り、相変わらすよくわけが分かっていないリューネを除く全員の『絶対』の忠誠を、俺はいつの間にか手に入れたらしい。

俺は、俺の想定していた状況とのあまりの落差に、その後すぐに逃げ出した。

部屋に閉じこもりましたとも！久々に！

まったく！あの野郎は！なんでいつもいつも！俺の胃に！厳しい事ばっか！するのかね！！

胃痛持ちの１０歳児とかおかしいだろ！まったく！

この後、俺のポーション研究に、胃薬が加わったのは言うまでもないよな？

## 第十二話　胃痛と契約書（後書き）

感想でのご意見がありましたので今後皆さんにお聞きしたいことがある場合は活動報告に書かせていただきます。

あと今活動報告でちょっとしたゲームしてます。
よければ覗いてください。

さらに明日閑話を投入します。

これで一章は終わりなのです。

ご意見、ご感想、誤字脱字の指摘など幅広くお待ちしております。

## 閑話　大人たちの回想録（前書き）

初の別視点です。ガクプルです。

## 閑話　大人たちの回想録

お初にお目にかかる。

私の名前はフィリップ・パラケルスス・ラ・テオフラストゥス。

エルトリン国のワトリアという街の魔法ギルド『導きの英知』のギルドマスターにして、科学と魔法の境界を歩むもの、真理の探求者、『アルケミスト』である。

まぁ私自身の事などどうでも良い事だ。

今日は私の自慢の息子の事について聞いて欲しい。

私は昔冒険者をしていたのだが、エルトリン国のためにいくつかの大仕事を成し遂げた事により貴族に取り立てられ、縁あってワトリア地方の貴族の令嬢を妻に迎えた。

彼女はそれはかわいらしい人で、仕事にも恵まれ、私の人生は幸せそのものであった。

ただ一つ。子供が授からないことを除けば。

私自身はそこまで子供を作ることには固執していなかった。

ただ愛する妻が幸せそうにしてくれていればよかったのだ。

そして妻は私との子供を望んでくれた。

私は様々な文献や研究結果を当たり、効果のありそうなものをいろいろ試してみたが、なかなか妻は懐妊する気配を見せなかった。

そんなときである。

妻が夢を見たというのだ。

「あなた。かわいらしい神様が、私達に赤ちゃんを授けてくださるそうです！」

彼女はうれしそうに私にそう告げた。

神様？確かにこの世界には多くの神が存在するが、神が子を授けてくれるなど……。

そんな話は御伽噺の時代の英雄たちの話の中でしか聞いたことが無い。

その時私は愚かにも、妻の話を妻の願望が見せた都合の良い夢だと判断した。

そしてその夜、妻と私はいつものように愛し合ったが、その後私はその予言のことを忘れてしまっていた。

そして数週間後、自室で仕事中だった私は忠実な執事であるサバンの声で、福音を告げられる事になる。

「旦那様！」

「何事だ、サバン。お前ともあろうものが騒がしい！」

「旦那様！落ち着いておられる場合ではございません！

奥様がどうやら御懐妊とのことでございます！」

これを聞いたときの私の喜びはどうか察して欲しい。

ずっと妻が望んでいた私との子供が授かったのだから。

科学の徒であり、アルケミストである私が、跪いて全ての神々に感謝の祈りを捧げたほどだったのだから。

そしてその後になって気がついた、いや思い出したというべきか。

私たちは神の子を授かったのだと。

そして数ヵ月後生まれた息子が、私の自慢の息子、ジオ・パラケルスス・ラ・テオフラストゥスだ。

この子は生まれる前から、そして生まれた瞬間からずっと私の度肝を抜き続けてくれる事になる。

まず妻が見た夢で告げられた、神から授けられた子という事。

そして生まれた我が子の、うっすら開いたまぶたから見えた瞳の色を見て、私は情けない事にその場で腰を抜かしてしまった。

紫水晶色（アメジスト色）の瞳。

これはありえない。

この瞳の色は我らアルケミストにとって、絶対にありえないものなのだ。

歴史上分かっている、この瞳の色をした人物は、ただ一人だけ。

ヘルメス・トリスメギストス。

かの伝説の錬金術師の王だけなのだから。

この時私は確信した。

私達は本当に神の子を授かったのだと。

何よりも大切に愛を注ぎ、そして私達がその翼を広げるのを妨げないように育てなくてはいけないと。

私はこの時それを、名も知らぬ神に感謝の祈りとともに誓った。

その後、まぁでるわでるわ、我が子の非常識についてはまったく尽きる事を知らん。

たった6歳でファイヤーボールの魔法を成功させるわ、教えたばかりでポーションの作成をいとも簡単に習得するわ。

7歳になったばかりで初の実戦をやらかし、さらには冒険者登録まで……。

挙句の果てに魔法職としての才能だけでなく、戦士職としての才もその小さな体に備えていると聞いた時には比喩でもなんでもなく、あごが外れるほど口を大きく開けて呆然としてしまったほどだ。

まったく、あの子の異常さに関するエピソードなら、それこそ1週間語り続けても語りつくせぬほどである。

しかしそんなことは全てどうでも良い。

私達の子は。聡明で勇気があり、そして何よりもやさしい心を持っている。

これだけで十分だ、これ以上なにを望むのか。

親の贔屓目と呼ばれようとも、これ以上の息子はこの世界に存在しないであろうと、私は声を大にして言いたい。

あの子は私達夫婦のみならず、世界に幸せを運ぶ為に生まれたのかもしれんな。

本当に困った、本当にかわいい我が息子。

さぁ今日もメイドのマリエルに連れられて、息子が朝食の場にやってきおった！

「父上～母上～おはようございます！」

さぁ我が愛しの息子よ！さて今日は何をしてこの父を驚かしてくれる？

◇◆◇◆◇◆◇◆

若様のことについてでございますか？

そうですね、少しならお話してもよろしいでしょう。

失礼、私の名前はサバン・トランド。

テオフラストゥス家にお仕えする執事でございます。

そうですな。若様がお生まれになった日の事は、今でも昨日のように覚えております。

奥様が歓喜の涙を流され、旦那様はお喜びのあまり、腰を抜かしてしまわれるほどでございました。

この時の旦那様の事については、秘密でお願いいたしますね？

その日お生まれになった方が我らの若様であるジオ様でございます。

ジオ様は、幼いころより輝くようなと形容するしかない金色の御髪と、見たことも聞いたこともない紫水晶色の瞳をお持ちになった神々しいほどにおかわいらしいお子様でした。

またその見た目の麗しさにもまったくひけをとらぬほど利発な方で、それでいて何より大変におやさしい方でございました。

他の貴族のご子息に残念ながらよくあるような、使用人に対する乱暴な振る舞いなど、私が知る限り一度たりともございません。

それどころか、私ども使用人が若様に何かさせていただこうものなら、毎回きちんと「ありがとう。」と言ってくださるようなお方なのです。

私の経験上、そのような貴族の若君のお話は聞いたことがございません。

そしてこれは旦那様から口止めされていることですが、若様は『天才』であらせられました。

たった6歳で魔法を習得され、家のものでも私とご両親、そしてイナ殿しか知らぬことですが、戦士職としての才能も持ち合わせてらっしゃったのですから。

そんな方は、神話の時代に数人いたらしいというだけ。

しかし若様の才能は、そこでとどまるところではありませんでした。
なんと街の道具屋であるブエロ殿と、7歳にしてポーションの売買契約を結んでこられたのです！
私はその売上金の管理を任されましたので、その凄まじさを他の誰より存じております。
このポーション販売によって若様は3年間で、5万Gもの大金を手にお入れになったのですから。
そしてそのお金をなんにお使いになるのかと思えば、
「将来に備えて従者になってくれる人を買う。」
これでございました。
驚かぬものなどなかったでしょうが、逆に私はストンと納得してしまいました。
あぁ、この為に若様はあのような大金を貯めてらっしゃったのだと。
その後の事は、良くご存知でしょう？
まぁ今日のところはこの辺にしておこうではありませんか。
なんですと？何か若様の子供らしいお話はないか、ですと。

……絶対に他言無用に願いますよ？

若様は幼いころより、女性の添い寝を大変お好みになられました。

若い女性の使用人達は皆、一度は若様の添い寝をした事があるはずでございます。

このお話には続きがございましてな。

若様専属のメイドとしてお屋敷にあがったマリエルだけには、若様は断固として添い寝をお望みにならなかったそうです。

……理由を聞いた者によると、「マリエルに添い寝してもらうのは、どうしても恥ずかしい。」と。

これが我らの若様のおかわいらしい一面でございますよ。

◇◆◇◆◇◆◇◆

ん？私に何か用か？

私の名？イナだ。イナ・サラシス、元冒険者だ。

ん？ジオの話を聞きたいだと？

……まぁよかろう。話してやろう。

私が始めてあの子に会ったのはあの子が8歳から9歳になる直前のころの事だったかな？

その前の私は冒険者をやめ、ワトリアから歩いて一週間ほどのところにある農村で、用心棒兼、読み書きなどの教師をやっていた。

そんな中ある日、突然昔なじみのフィリップ殿より手紙をもらったのだ。

手紙にはこうあった。

「私の息子を鍛えて欲しい。見守ってやって欲しい」と。

それをみた時、私はおかしなものだと感じた。

フィリップ殿の息子なら間違いなくその才能は魔法職のもののはず。

何の間違いかと思ったが、ちょうど教え子の一人であったマリエルが街に出て働き口を探すといっていたので、彼女を送りがてら久々にワトリアに向かった。

そこで待っていたのは輝くような金色の髪と不思議な紫水晶色の瞳を持った少年と、今までの常識との決別だったな。

ジオ、あの子には私の常識というものがまったく通用しなかった。

たかだか8歳や9歳で、既に冒険者であり、さらに信じられなかったのが戦士職と魔法職の才能を両方持っているだと？そんな人間聞いたことも無い！

そして私から見ても、あの子の動きは未熟な冒険者のそれではなく、熟練のそれを思わせるものであった。

それからの私は……、まぁ隠さず言えばあの子を鍛える事に熱中した。

自分の全てをあの子に注ぎ込んだといえる。

まぁ、飲め。一杯おごろう。

あとは……そうだな。

そういう才能の面を除いても、あの子は異常な子供だったな。

私が伴ってきたマリエルを、その場で自分専属のメイドとして雇ったり、ポーションを作ることで大金を既に手にしていたり、まぁいろいろあったが一番度肝を抜かれたのは、『年端もいかぬ奴隷を、計画的に将来の従者として育て上げる。』、この発想だな。

今まで誰もそんな事を考えたものはいなかっただろう。

なんとなくそうなっていた、ということはあっただろうが。

おかげで私は今子守の真っ最中というわけだ。

まったくあの子のおかげで、今の私の人生は退屈している暇もなくなってしまったよ。

……あぁ、効いてきた様だな。何、先ほどくれてやった酒に、ジ

オ特製の痺れ薬を仕込ませてもらっただけだ。

さてと、屋敷に帰ってからゆっくり聞かせてもらおうか？

どこの誰の指図かをな。

……まったく、ゆっくり酒も飲ませてもらえんらしい。困った弟子だ。

## 閑話　大人たちの回想録（後書き）

いかがだったでしょうか？

ご意見、ご感想、誤字脱字の指摘など幅広くお待ちしております。

## 第一章終了時点での主要登場人物紹介（前書き）

書いてみました。

## 第一章終了時点での主要登場人物紹介

ジオ・パラケルスス・ラ・テオフラストゥス

１０歳　ヒューマン　男

レベル　１８　職業　魔法職系基本職　メイジ　＋　戦士職系基本職　ファイター

主人公。

現代日本から《Ｎｅｗ　Ｗｏｒｌｄ》世界への転生者である。

本名　中村　秀人　（なかむら　ひでと）

本編では描写されていないが（一人称ですから）ブロンドというより輝く美しい金色の髪

瞳の色は紫水晶（アメジスト）色。

父親はフィリップ・パラケルスス・ラ・テオフラストゥス。

母親はエレーヌ・メルキオル・ラ・テオフラストゥス。

貴族であり将来冒険者になることを決めている。

転生時に様々な特殊能力を授かる。

現在分かっているものは、

ダブルジョブ　本来両立できないはずの戦士系の才能と魔法系の才能を同時に持つことができる。

マリエル・エトラント
１４歳　ヒューマン　女
職業　メイド

メインヒロイン。
エルトリン西部にある農村、エトラント村出身の少女。

ちなみに彼女はいわゆる平民なので、エトラントというのは家名ではなく、ＯＯ出身のＯＯという意味。
彼女の場合は　エトラント村　の　マリエル　となる。

つややかな黒い髪を後ろで三つ編みにしている、やわらかな雰囲気を持つ超のつく美少女。
主人公の（今世での）初恋の相手である。

歳に似合わない大きな胸と包容力の持ち主でもある。

実家は子沢山で7人兄弟の長女。口減らしと仕送りの為に街に出稼ぎに出ようとしていたところ、偶然ワトリアにいく用ができたイナに伴われ、テオフラストゥス家へ。
そのまま主人公の専属メイドとして雇われる。

主人公をして「泣いたマリエルと怒ったマリエルは最強」と言わしめる。

主人公に頼まれ、アリア、エリア、シルウィ。リューネ、テトの姉代わり、母代わりとしてその面倒の一切を見ている。

ちなみにＭＭＯＲＰＧ《Ｎｅｗ　Ｗｏｒｌｄ》において、エトラン

ト村は影も形も存在していない。

アリア

7歳　ヒューマン　女

職業　魔法職系基本職　メイジ

主人公が最初に買う事にした奴隷の少女。エリアの双子の姉である。

燃えるような赤い髪に鳶色の瞳の美少女。

魔法職としての才能は十分と主人公が判断するほど。

妹エリアの命を救い、かつ自分の願いを聞き入れてくれた主人公に絶対の忠誠を誓っている。

エリア

7歳　ヒューマン　女

職業　魔法職系基本職　メイジ

アリアの双子の妹。

一卵性双生児であり、外見的にはアリアと瓜二つ。

主人公が奴隷を買いにきたときには、病気で臥せっていたが主人公の診断と食事の改善により回復。

（主人公は自分の知識の中から脚気や壊血病と判断したが、実際は

栄養失調と流行り病による体の衰弱が主な原因で、壊血病に関しては患っていたがごく軽度であった。）

姉のアリア同様、自分の命を救ってくれた主人公に絶対の忠誠を誓っている。

シルウィ

7歳　ダークエルフ　女

職業　戦士系基本職　ダークエルフファイター

ダークエルフの少女で、エルフ、ダークエルフ族に共通する細長くとがった耳。

整いすぎているほどの顔立ち、美しい銀色の髪と夜色の肌を持つ少女。

初めに主人公に出会った時には、自らの環境に心を閉ざしたのか人形のような反応しかしなかった。

そのおよそ一ヵ月後テオフラストゥス家に来たときには、幾分ましになっており少しは能動的に話すようになっていたが、元々感情を強く表に出すほうではなかったようである。

リューネ

7歳　猫人族（ワーキャット）　女

職業　戦士系基本職　ワイルドファイター

猫人族（ワーキャット）族の少女で、耳と尻尾はきれいな橙に近い茶色、髪は薄めの

ブラウン。
ヒューマンとさほど変わらない顔立ちだが、やはりその顔はどこか猫っぽくてかわいらしい顔つきをしている。
しかし主人公と初めて会った時には、その幼い体中に鞭の跡があり、それは主人公が目をそむけるほどであった。
そのおよそ一ヵ月後テオフラストゥス家に来たときには、主人公の住む屋敷を見てそのあまりの立派さに驚いたり、シランの説明した言葉の意味が分からなかった。
（当時7歳の彼女にとって、無理のない話であるが。）

テト
8歳　ヒューマン　男
職業　戦士職系基本職　ファイター
主人公に奴隷市場で自分を売り込んだ少年。
外見は背の低い小柄で何の変哲も無い黒い髪の少年である。
彼の一言が、主人公を変えたともいえる。
主人公曰く『子犬みたいでかわいらしい奴』。

シラン・モーフィング
28歳　ヒューマン　男

職業　？？？　奴隷市場『僕の館』管理人

エルトリンシティにある奴隷市場『僕の館』の管理人。

色素の薄い茶色の髪と瞳を持つなかなかの美男子。

とにかく異常なくらいにデキル男。

主人公曰く『妖怪』、『サトリ』。

その一挙一投足からその人物の思考や思いをある程度読み取る技術に長けているらしい。

性格はドＳ。まごうこと無きドＳである。

自分の望みを叶えてくれるといったジオに忠誠を誓っているが、同時に彼で遊ぶ１事（いじめる）が、現在の彼の最大の楽しみになっている。

他にも主人公すら知らない秘密をたくさん持っている謎の多い男である。

## 第一章終了時点での主要登場人物紹介（後書き）

こんな感じです。

## 第一章に登場したサブキャラクター紹介（前書き）

こっちも書いてみました。

## 第一章に登場したサブキャラクター紹介

フィリップ・パラケルスス・ラ・テオフラストゥス

５３歳　ヒューマン　男

レベル　５６

職業　二次魔法職特殊職　アルケミスト　エルトリン王国テオフラストゥス男爵　ワトリア魔法ギルド『導きの英知』ギルドマスター

主人公の今世での父親。

ワトリアの街の魔法ギルド『導きの英知』のギルドマスター。

現在世界でも有数のアルケミストの一人である。

若い頃に冒険者をしていたのだが、エルトリン国のためにいくつかの大仕事を成し遂げた事により貴族に取り立てられた。

妻はワトリア地方の貴族の令嬢、エレーヌ。

アルケミストとして極めて高い能力と、経験、知識を持つ人物であるが、息子である主人公には、基本ただの親馬鹿だと思われている。

主人公の紫水晶の瞳の意味に最初に気づいた人物であり、それ故息子の運命を悟り、陰日なたに全面的なバックアップを行っている。

若い美人な嫁をもらったリア充親父でもある。

ちなみにＭＭＯＲＰＧ《Ｎｅｗ　Ｗｏｒｌｄ》においては、アルケミストの転職クエスト関連の全てに顔を出すＮＰＣキャラで、とて

つもなくメンドクサイ内容のクエストを与えてくる為アルケミスト経験者にとっては、怒りを通り越して憎悪の対象である。

主人公曰く　「転職クエストのあまりのうっとおしさに何度このおっさん始末してやろうと考えたことか。」。

エレーヌ・メルキオル・ラ・テオフラストゥス

３０歳　ヒューマン　女

職業　テオフラストゥス男爵夫人　主人公の母

主人公の今世での母親にして、フィリップ・パラケルスス・ラ・テオフラストゥスの妻。

ワトリア地方の貴族令嬢として生まれ、１６歳の時にフィリップに嫁ぐ。

その後3年ほど子供が出来ず悩んでいたが、突如夢の中に幼い姿の神が現れ、子供を授けるといわれた。

それを信じ、夫と行為に及び無事懐妊。念願の母親になった。

その夢と夫が語ってくれた息子の特異性から、息子である主人公を心の底から愛しているが、息子の運命の邪魔をしないように、夫同様息子の事を見守っている。

基本かわいい人であり、息子をかわいがることが何よりの生き甲斐。

家庭内では勿論ヒエラルキーの最上に位置している。

基本的におおらかで、奴隷の少女達が家に来ると聞いた時には、「

娘が増える」と喜んだ貴族らしくない女性でもある。

サバン・トランド
６３歳　ヒューマン　男
職業　テオフラストゥス家執事

主人公にじぃと呼ばれるテオフラストゥス家に仕える執事。
テオフラストゥス家の家政一切を取り仕切る人物。
元々はエレーヌの実家の執事頭を務めていたが、エレーヌの父が娘の為、嫁ぐ時に付き添わせた。
主人公の稼いだお金の管理を担当している。
実直で真面目、執事の鑑のような人物である。

ブエロ・カターシュ
４２歳　ヒューマン　男
レベル　４３　職業　二次魔法職　ソーサラー　道具屋『風の始まり亭』主人

ワトリアの街の道具屋『風の始まり亭』の主人。
だみ声で話す大柄なごついヒゲ親父であるが、元冒険者であり相応の実力のあるソーサラー。

フィリップやイナと同じギルドに所属していたが、ギルドの解散を機に、冒険者から足を洗い、ワトリアの食堂の看板娘であった妻と結婚、今に至る。

ちなみに子供はいない。その為夫婦共々主人公を子供のように思っている。

ソーサラーとしては相応の腕を持っているが、ポーション作りの才能はあまりないのか、フィリップにポーションの納品を頼んでいたのを主人公に見つかり、その後主人公の売り込みにその買取を始めるようになる。

それによって数年で彼は莫大な利益を得ているが、さてこの金をどういう風に使うか見当もつかず日々を穏やかに過ごしている小市民的な人物である。

ＭＭＯＲＰＧ《Ｎｅｗ　Ｗｏｒｌｄ》では、ヒューマン用のいわゆる『おつかいクエスト』を依頼してくるＮＰＣであり、アバターの操作方法や街にどんな施設があるかなどを学ぶためのクエストの始まりであるために、多くのプレイヤーに感謝されるＮＰＣである。

イナ・サラシス

４７歳　ヒューマン　男

レベル　４６　職業　一次戦士職　レンジャー

主人公の父やブエロと同じギルドに所属していた元冒険者。

ブエロと同じようにギルドの解散と同時に冒険者を引退し、

ワトリアから歩いて一週間ほどのところにあるエトラント村で、用心棒兼読み書きなどの教師をしていたが、
昔なじみのフィリップから手紙で呼び出された為マリエルをつれて、ワトリアへ。

そのまま主人公の護衛兼戦士系職の教師として留まる。

レベルが４０を超えているにも関わらず、上位職への転職を行わなかった変わり者でもある。

見た目は主人公曰く「いぶし銀を地で行くナイスミドルなおじさま」。

今現在は主人公の護衛と従者候補の子どもたちの訓練を見ることに忙しくしており、本人的には満足した生活を送っている。

ジトー、マオルル、キーナ、セロン

主人公が農園担当に買ってきた奴隷の男女４人。
年齢は２０代前後。

ジトー、マオルルはヒューマンの男。キーナ、セロンはヒューマンの女。

エルトリン北部地域の農民の子供だったらしいのだが、不作でどうにもならず奴隷として自ら身売りをしてきた人たち。

主人公曰く「みんないわゆる男前や美人ではなかったけど、非常に好感が持てる人たち。」

ジトーの顔は実直そうな顔つきらしい。

## 第一章に登場したサブキャラクター紹介（後書き）

いかがだったでしょうか？

おっさん達は意外に強いのです。実は。

## 第一話　今日も朝から大変だった（前書き）

ここから2章に突入です。
お楽しみいただければ幸いです。

## 第一話　今日も朝から大変だった

夢と現の境で、今俺は何かに顔を舐められてる。

おかしい、どうにもおかしい。

確かに犬のシロにこうやって顔を舐められて、起こされた事もあったけど……。

うちのシロは俺が１４歳、中２の夏に老衰で死んだはずだ。

あん時は珍しく兄貴と一緒に泣いたっけなぁ……。

あ～遠い昔の思い出だわ。

それ以来俺の家では、ペットの類は飼ってない。

にも関わらず、何に、俺は顔舐められてんの？

それに体が動かないのは何でだ？金縛りか？いや、単純に何か俺の上に乗ってる？

そこまで頭が回った瞬間、急激に意識が覚醒して俺が目を開くと。

俺の目の前にリューネの茶色の大きなおめめがあったよ。

「うにゃ？」

「リューネェエエエエエエエエエエエエ！」

いや、恥ずかしい姿を見せた。

２年ぶりかな？この挨拶も。１２歳になったジオだぜ。

まぁ誤解のないように、さっきの状況を説明しておくと、

『朝、マリエルに言われて俺を起こしに来たリューネが、俺の顔を見てる間に「ご主人しゃまのお顔をペロペロしたくなったにゃ～」って事で俺の上にマウントして、俺が起きるまで俺の顔を舐めていた』

そういうことだ。まぁ残念ながらいつもの事だ。

まったく何度注意してもリューネのコレは直らんな。

「ごめんなさいにゃ、ご主人しゃま……。リューネ馬鹿だから、どうしてもご主人しゃまのお顔見てたら我慢できにゃくて……」

まぁいつものこの台詞で謝った後、耳としっぽがへたり込んで『しょぼ～ん』っていう擬音まで見える気がするリューネを叱り続けるのは俺にはどうしても難しい。

何でだと？決まってるだろ？

かわいいんだよ！俺の従者は！

リアルネコ耳メイド服のお馬鹿でかわいい従者相手に、いつまでも難しい顔で怒ってられるのか？

ハッキリ言ってやる！俺には無理だ！

あとリューネはまだ９歳なんだよ！

……正直、いくつになっても直らないとは思うんだけどな。だってリューネだし。

そんなことを考えながら叱られて落ち込んだリューネを、膝の上に乗せて頭を撫でていると、ドアがノックされた。

「はい、誰？」

「アリアです、ご主人様。エリアとシルウィもおります。マリエル姉様からご主人様のご様子を見てきてくれと」

「あ～３人とも入っておいで」

あ～さすがマリエル。今の状況、織り込み済みなのね。
そしてこの後起こるであろう一連の流れに、朝から胃が痛くなりそうだ。
「失礼致します。あ！リューネ、あなたまたやったのね！」
そう言ってからドアを開け、先頭で入ってきたのがアリア。
一目で状況を理解したらしい、さすがマリエルの一番弟子だな。
燃えるような赤毛を、右のサイドテールにした彼女は、今では立派な美少女メイド見習いさんだ。
「リューネ！姉様に言いつけますからね！」
これはアリアの双子の妹のエリア。
あの時病気で死にそうだった彼女も、今では元気一杯で俺たちと一緒に暮らしている。
エリアは双子だから当然アリアと瓜二つだが、見分けやすいようにサイドテールが左になっている。
俺はさすがに2年も一緒にいるので、そんなもん無くても一目で見分けがつくんだけどな。
「リューネだけずるい。私もお膝で頭ナデナデ……」
そういいながら最後に入ってきたのがダークエルフのシルウィだ。
ダークエルフ族の特徴である、とがった長い耳に闇色の肌をした美

少女で、美しい銀色の髪がその美しさをさらに引き立てている。
初めて会った時から感情表現が上手にできないクールな感じの子であったが、今では俺たちによく懐いてくれるようになった。
実はリューネと並ぶぐらいの甘えん坊さんでもある。
ただあんまり表面に感情が出ないので、彼女の喜怒哀楽の機微が分かるのはうちの人間くらいだろうが。
そんな事を俺が考えている間に、彼女達四人姉妹の口論が始まった。
リューネは何度言ってもご主人様のお顔を舐める癖が直らない、とか。
すぐ自分だけご主人様にかわいがってもらってズルイ、とか。
リューネだけズルイ、私もご主人様のお顔舐めたら、お膝で頭ナデナデしてもらえる？とか。
それならアリアもお顔舐める！　とか、エリアも！　とか、じゃあリューネはもっとペロペロするにゃ～！　とか　じゃあ私もペロペロ。とか。
俺はその光景を見ながら、何で朝から美少女従者４人に、自分の顔舐めプレイなんていうマニアック極まるプレイの算段を、目の前でされなくちゃならんのか、と、全力で脱力してしまっていた。
はぁ、でもまぁ、もうすぐかな？
そう俺が思っていると、かすかな足音が聞こえた。

「若様失礼致します」

鈴が鳴るような声がして、彼女たちの『姉様』が入ってきた。

その声にリューネの耳としっぽがぴくんと伸び、そしてうなだれた後、４人の動きがまるで彫刻にでも変えられたかのように固まった。

次の瞬間俺の部屋の入り口には、メイド服に身を包んだ黒髪の可憐な美少女が立っていた。

マリエルだ。

この２年でマリエルはまた一段とキレイになった。

マジで前の人生では絶対にお近づきになれなかったような、国民的アイドル以上の美少女に

彼女は成長していたのだから。

この２年で体つきも間違いなく女の子から女の人に変わりつつあるし、もう俺は毎日ドギマギしっぱなしですヨ。

そして何より変わったことが――――。

「アリア！エリア！シルウィ！リューネ！

朝からなんてはしたない事を大きな声で話しているのです！

そもそもあなた達に私はなんと言いました？

若様を起こしてきてください、といったはずですよ！」

マリエルはあの日俺がお願いしたとおり、これ以上ないほどの彼女達の『お姉さん』になってくれたのだ。

……但し怒ると超コワイ。

そしてその矛先は俺にもーーー。

「若様も黙ってご覧になっておられないで、少しはこの子達を叱ってくださいませ！」

ハイ！マリエルさん！

まぁ最近の俺の朝は、おおむねこんな感じ。

大変だけど案外俺はにぎやかで悪くないと思ってるのは、マリエルには内緒なんだ。

◇◆◇◆◇◆◇◆

そうだな、この2年間なにがあったか少し話しておかないとな。

まず俺が部屋に閉じこもった日の翌日。
俺は改めて全員を集めて、彼ら彼女らの首にしてあった『従属の首輪』をはずした。

前にも言ったけど俺は働き手が欲しかっただけで、奴隷が欲しかったんじゃないからな。

無理やり言うことときかすってのは、あんまり趣味じゃない。

そして、それを見届けてから、シランはニヤニヤしながら帰っていった。

……いつか見てろ、あの妖怪野郎め。

その後農園をみんなで作り始めたり、初めは従者候補の5人だけとも思ったけど、結局全員に勉強を教えたりして、しばらくゆっくりと過ごした。

その間に少しずつだけど、俺に対して警戒心の強かったリューネと、人形のようだったシルウィの心もほぐれてきたみたいで、半年を過ぎる頃には俺に懐いてくれるようになったよ。

これはうれしかった。涙が出そうだった。

もちろんこれは俺だけの手柄だけではなくて、マリエルを筆頭にうちの人間全てが頑張った成果だ。

その後少しづつ訓練を始めた5人を家の者たちに任せて、俺はデフ盆地中層で、下級職業持ちイアナゴブリンたちを倒しまくって、レベルをさっさと２０まで上げた。

これで転職クエストさえ済ませばいつでも転職が可能になるのだが、今回さっさとレベルを２０にしたのはまったく別の狙いがあったからだ。

いや～だって金が欲しくってさ～。

――――Ｄグレードポーション作成スキルの解放。

これによってＤグレードのポーションレシピが全てスキルにより作成可能になり、俺の金儲けの幅がさらに広がった。

何といっても『高級ポーション』の存在は大きい。

この『高級ポーション』は使うだけならグレードを問わず、《Ｎｅｗ Ｗｏｒｌｄ》ゲーム内で、ＮＰＣの運営する店に売っているポーションでは最高の回復力を誇るのだから。

一個１００Ｇするのだが、それなりの近接戦士職なら一度に５０個持っているのが当たり前、とかいう代物であった。

これの大量生産が可能になった俺は、さっそくブエロのおっさんに交渉。

一個７０Ｇの利益配分で、大量に受注を受ける事に成功した。

そして数ヵ月後には、俺の貯金が１０万Ｇを越えていた事はいうま

でもないだろう。

これによって出来る事が格段に増えた俺は、まずシランに頼んでいくつか特殊なアイテムを探してもらう事にした。所詮世の中９５％は金である。

一つは『変身マント』。
これは見た目だけではあるが、他の種族や性別に見せかける事ができるというアイテムだ。

これがあればエルトリンシティ経由で、今まで行けなかったいろんな狩場に進出できる。
さすがに子供のままの姿で、ワトリア以外の街をうろうろするのは目立ちすぎる。

ワトリアなら父上の目が行き届いているから、大丈夫だけどな。

次に様々な金属。
オリハルコンやミスリルといった、ファンタジー世界でメジャーな魔法金属ではなくて、金や銀、さらにはマグネシウムなど様々な金属をだ。

まだ先の話にはなるが、いろいろ試してみたい事があるんだ。

最後に今後必要になるであろう、薬草の苗や秘薬と呼ばれるものの材料などだな。

特に硫黄に関しては、安定的に安価で仕入れるルートを構築するように頼んである。

ん？なんで硫黄かって？まだ秘密。楽しみにしててくれ。

さらに３万Ｇほどシランに渡し、『奴隷市場』で俺やシランの手足となるものを、とりあえず５０人ほど買ってもらった。

もちろんうちの子達と同じ契約書を交わして、首輪ははずしてあるよ？

今彼らはシランの元で、秘かに教育を受けているところだ。

計算とか、料理とか、接客とか他にもいろいろな。

ちなみにシランの『主人』は、この大量購入に大喜びで、わざわざ感謝状をシラン経由で贈ってきたほど。

俺はそれに対して『あなたのようなデキル経営者は、雑事をすべてシランさんに任せてのんびりなさっては？』とお返事を送ってやったら、

その後シランから念話で、『仕事がやりやすくなりました。ありがとうございます。』とのお礼があった。

まぁ野郎には、余計なお世話みたいなモンだっただろうけど。

まぁ他にも頼んである事はいろいろあるんだけど、大きなところではこれくらいかな。

そうして様々な実験と、農園作り、俺のかわいい従者たちの勉強や

訓練の相手をしてる間に2年が経ったってとこだな。

そして俺はあと半年で、エルトリン魔法学院へ入学しなくちゃならない。

冒険者への第一歩、普通ならだけど。

まぁできるだけ目立たない地味な学生でも目指しますかね！

## 第一話　今日も朝から大変だった（後書き）

お読みいただきましてありがとうございます。
ご意見、ご感想、誤字脱字の指摘など幅広くお待ちしております。

## 第二話　玄関と馬車で大変だった（前書き）

ちょっと短いですが、お楽しみいただけると幸いです。

## 第二話　玄関と馬車で大変だった

イアナゴブリンチーフの振り降ろす、うねるように曲がった剣を左に避け、通り抜けざま頚動脈を掻っ切る。

はね切った頚部から鮮血を飛び散らせながら、ゴブリンチーフが倒れこんだ。

その体がアイテムに変わったのを横目に見ながら、俺は次々と襲ってくる上級職業持ちイアナゴブリン達に、ミスリル銀の冷たい刃のプレゼントするべく一歩前に出る。

すばやいステップで奴らの攻撃をすり抜けるようにかわしつつ、一瞬にして奴らの後ろに回り込んだ俺は、イアナゴブリンシャーマンの背後から短剣スキル《ソリッドスタブ》で後ろから心臓を貫く。

《インスタントキル》発動。

反応すら出来ず、口から血をこぼしながら糸が切れた人形の様に崩れ落ちるシャーマン。

こいつ残しておくと何かとうっとおしいんだよな。魔法とか魔法とか魔法とか。

シャーマンの体がアイテムに変わる。

残るは、イアナゴブリンナイトとチーフがもう一体。

ナイトの奇声とともに突き込んで来る剣の一撃が左腕をかする。

痛ってぇ！　左腕に軽度の裂傷。損害軽微。戦闘に影響なし。

だがバカどもは一撃かすったことに気を大きくしたらしい。耳障りな声と共にかさになって攻めてきやがる！

なめんなぁ！

俺の右腕が振るわれるたび、銀色の光跡がゴブリンたちを切り刻み、やがて体中から大量の血を流し、ぐらりと倒れ付すチーフ。

次の瞬間、俺の胸元ぎりぎりに迫るナイトゴブリン捨て身の両手突き。

しかし、甘い。

それを紙一重で体を捻りながらかわし、同時に飛び込んできたナイトの首を鋭い刃でお出迎えしてやる。

次の瞬間、鮮血とともに撥ね切ったナイトの首が兜ごと宙を飛んだ。

後に残ったものはゴブリンどもの血の跡と、アイテムと金だけ。

ふ～。まぁ、こんなもんだろ？

さすがに上級職業持ちイアナゴブリンを、５匹一度に相手にするのはまだしんどいな。

まぁ、現状でもかなりやれるってことがわかって満足だぜ。
ちょっと安全地帯で休憩中のジオですよ～。

今俺はエルトリン魔法学院入学前の最後の狩りに来ている。

今までまともに踏み込んだ事のなかったデフ盆地の奥地で、上級ゴブリンども相手に現状の実力のチェックをしてるわけだ。

装備は既にＤグレード最強の軽装備一式＋αを揃えてある。

いい機会だし、基本的な装備の説明をしとくか。

《Ｎｅｗ　Ｗｏｒｌｄ》では、装備のカテゴリーは基本武器、防具のみであり、後は能力アップ用のアクセサリーが、首につけるネックレス、両耳のイアリング、両手の指のリング、というように存在する。

まぁ他にもないではないのだが、話がややこしくなるので今はこの辺で。

まず武器について説明すると、その種類は多種多様で、片手剣、両

手剣、片手鈍器、両手鈍器、短剣、短弓、長弓。
あと特殊な装備で、二刀流、カタナ、銃ってものが存在する。
さらにそれぞれの中で細かな分類が存在するんだけど、それもまた別の機会って事で。
あと各職業ごとに得意武器があるので、その武器の真価を発揮できるのは、その職業だけって事だ。
（例えば、ヒューマン二次戦士職の『バーサーカー』は、槍と両手鈍器が得意武器である。）
ちなみに今俺が使ってる短剣で、ファンタジーではおなじみのミスリル製のダガーだ。
Dグレード最強の短剣、ミスリルダガー。
これは以前使っていた、Eグレード最強のスチールダガーの約3倍の攻撃力を誇る。
おかげで、レベル20になって装備持ち換えた後の行った狩りの楽な事、楽な事。
それにしてもミスリルってマジですごい。半端じゃなく切れるし手入れもほとんど要らない。
しかもまさに芸術品、という他ないほどの美しさ。
常に月の光を反射して、輝いているように見えるから恐ろしい。

次に防具の話。

装備できるところは、頭、体、腕、足。

大きな装備の種類では、重装備、軽装備、ローブ　と種類がある。

ものすごく大雑把に言うと、

重装備は物理攻撃に強く、魔法攻撃に弱い。

さらに、近接戦闘に必要なボーナスが付くものが多い。

逆にローブは、物理攻撃に弱く、魔法攻撃に強い。

さらに、魔法攻撃力や魔法詠唱速度などにボーナスが付くものが多い。

軽装備は、よく言えば弱点がなく、悪く言えば中途半端。

但し、速度に関するものにボーナスがつくものが多い。

例えば今俺が着てるシルバーウルブズレザーメイルは、攻撃速度ボーナス＋３％と命中ボーナス＋３％、さらに回避率＋５％が付いてる超優良装備だ。

あとは弱点を埋めたり、長所を伸ばしたりする為のアクセサリーだが、これはＣグレード以降の装備でまだお預け。

ちなみに今俺がつけてる装備。

もろもろ合わせると、５万を超える。

武器のミスリルダガーだけで２万。

さらに魔法用の片手鈍器（この手の杖の事を通称『魔法鈍器』っていう。）、エルダーウッドワンドが１８０００Ｇ。

さらに防具一式（頭、体、腕、足）で、合わせて大体５万だ。

Ｄ最強はどれも高いんだ。現状普通の商店で買える最強装備だしな。

閑話休題。

ちなみに俺は一人で、こんな危ない場所にいるわけじゃない。

そんな事はまだ父上も母上も許してくれないからな。

付き添い兼護衛のイナ先生は、いつも通り弓の射程範囲ぎりぎりに隠れてるはずだ。

本当に危ない時しか手を貸してくれないからな、あの人。

基本スパルタだし。

さすがにレベル帯２４～３０まで存在するデフ盆地奥地でのソロ狩りは、レベル２２の俺にはきついが、その分やりがいはあるぜ。

ちなみに今俺がいる場所で狩りをするなら、普通は2、3人のパーティで。

しかもレベルは２５以上が普通だ。

こんな事ができるのは、俺が戦士系の力と魔法系の力を併せ持っている事と、そして現時点では破格の装備のおかげ。

さてと、息も整ったし次のやつら行ってみますかね。

エルダーウッドワンドに持ち替えて、目の前に見えるイアナゴブリンジェネラルめがけて、
食らいやがれ《ファイヤーボール》！

杖先に人の体を覆いつくすほどの火球が生まれ、それが俺の意思に従ってジェネラルに炸裂する！
炎に包まれて、一発で崩れ落ちるジェネラル。

それによって俺に気づき、お供ゴブリンどもが俺に殺到する！

さぁて、俺と奴らの戦いはこれから本番だ。

結局あの後、半日頑張った結果、レベルが２３に上がったところでキリがよかったので帰ってきた。

それでな！聞いてくれ！今回の狩りではラッキーなことに現物をゲットしたんだよ！

しかも武器！

Ｄグレード最弱の片手剣、クリムゾンロングソードだったけど、武器の現物は実は初めてで結構うれしいぜ！

（Eグレードの防具なら、ドロップ品だけでもかなり持ってる。）
ちなみに買うとDグレード最弱とはいえ、それでも8，000Gはする代物だからな。
いや～入学前の最後の狩りでいい事あったな～。こりゃ、学院でもいい事あるかもな！

結果は、いいこともたくさん、めんどくさい事もたくさん。
人生なかなかいい事ばっかじゃないな。

◇◆◇◆◇◆◇◆

入学前最後の狩りの数日後、とうとうエルトリン魔法学院に入学する日がやってきた。

「泣かないでよ、4人とも……。前から言ってたでしょ？いかなきゃなんないって……。
それにちゃんと毎週休みの日は帰ってくるし、いざとなれば歩いても1時間で着く場所なんだからさ……。」

俺の目の前には、大泣きしながら俺にすがり付いてくる、かわいい4人の従者達。

正直どうしていいか分からん……、頼むから泣き止んで……、ていうかマリエルどこ〜〜〜〜！？

「「だ、だって、ご主人様が3年もいらっしゃらないなんて……」」

アリアとエリアの完璧なユニゾン。さすが双子、すすり泣くタイミングまで一緒とは。

「ご主人しゃま！　リューネイイ子にするから！　お顔ペロペロ我慢しましゅから！　行かにゃいで欲しいにゃ〜！」

リューネはリューネで、俺の服にしがみついて離れない。無意識に爪が立ってて服を貫いてるのか、ちくちく痛い。

「……ヤダ」

シルウィも目に涙を浮かべながら、リューネとは逆側の袖をつかんで、まったく放そうとしない。

ん〜、そして何でこの子達をうらやましそうな目で見てるのかな？

俺の母上は！

かわいいですけど！　息子としては複雑なんですよ！　もう！

テト！　お前もどうしようって、困った顔で小首を傾げてる暇があったら、義妹（いもうと）たちを泣き止ます努力をしろ！

やっべぇ……、これから出発だってのに、既に胃が痛ぇ……。

屋敷のみんなも、農園のみんなもいるのに、微笑ましいものを見るような目でこちらを見るだけで、誰も俺のこと助けてくれやしねぇ……。

シランがいなくてよかった……。あいつの顔筋が笑いをこらえてんのだけは見たくねぇからな……。

あぁ～～～～～～～～～～～～～～～～～！

「4人ともおいで！」

そう言った俺は、俺の小さな従者達一人一人の手を取って、念話石を渡していった。

「これがあればいつでも暇な時はお話できるから！　さびしくないだろ？

いい子にしてたら、帰ってきたときちゃんと遊んであげるから、ね？」

「「そんなものがあるんですか？」」「どういうことにゃ？」「これで、お話？」

「使い方はじぃかイナ先生に聞いてくれ。

あといつでもお話できるわけじゃないから、そこはゴメンな」

じゃあ、と一人づつハグをして（みんなビックリしたのか、急に泣き止んだよ）、玄関を出ようとすると、

「ジオちゃん！」の一声で呼び止められてしまった。

振り返ってみてみると、腰に両手を当てて「プンプン！」って感じの我が母。

え～と、母上もですか？　ソウデスカ……。

ようやく、玄関から脱出した俺が、表に出てみると二頭立ての立派な馬車が一台と、幌付きの荷馬車が一台、俺が出てくるのを待っていてくれた。

御者さんに軽く会釈をして、馬車の扉を開けると、そこには……。

「マリエル！？」

「あは！　驚いてくださいましたね、若様！

本日は私も学院のほうまで、お供させていただきます。

旦那様は、既に学院のほうへ。何でも学院長先生にお話がおありになるそうでございます。

……先に馬車にお邪魔していて、申し訳ありませんでした。

ちょっとイタズラしてみたくて」

そういって小さく舌を出すマリエル。

ちょ、ちょっと……。

うぉおおおおおおおおお！　耐えろ！　耐えるんだ俺！！

何ですかあああああああ、このかわいすぎる人は！

この状況（馬車の中で、「テヘ」って感じのマリエルと、二人きり）で、小半時俺に耐えろと！

なんてミッションインポッシブル！

そうだ！　素数を数えるといいって、昔イカレタ神父さんが言ってた！

2、3、5、7．11．13、17……。

くっそ～～～～何の意味もねぇ～～～～～～～～～！（この間約5秒。）

「若様？　どうされました？　もしかしてお怒りになりましたか？」

マリエルが冷や汗を流している俺の斜め下から覗き込むように尋ね

てきた。不安そうな顔で。

間近に見える彼女の花の顔。(かんばせ)

ブンブン顔と手を横に振りまわす俺。

動き出した馬車のゆれを感じながら、俺が思った事はただ一つ。

だ、誰かこの幸せ地獄をどうにかして……。

◇◆◇◆◇◆◇◆

よし、大丈夫だ、心臓は、口から、出ていない。

ドキドキしすぎて、心停止するかと思った……。

馬車に揺られる事およそ３０分ほど、エルトリン魔法学院に到着した。

大理石で出来た石壁に囲まれた、荘厳なゴシック風建築で築かれた魔法職の為の学校だ。

ま～何度か狩りのついでに見に来た事はあったが、相変わらず無駄にでかいよな。

鋼鉄製の大きな扉が開け放たれた門をくぐり、ここから俺の3年間の冒険者”見習い”生活が始まる。

……とっくの昔にデビューしてるんだけどね？

## 第二話　玄関と馬車で大変だった（後書き）

お読みいただきましてありがとうございます。
ご意見、ご感想、誤字脱字の指摘など幅広くお待ちしております。

## 第三話　入学式後が大変だった

へ～ここが俺が3年間暮らす部屋ですか～。

いい～お家ですね～、いや～じつにいい！

建物Ｏ訪って知ってる？　知らない？　あっそう、歳がばれるな。

ジオ１２歳だ！文句あるか！

まぁ冗談はさておき、めちゃくちゃ広いな。

学生寮は四棟あり、三階建てと平屋建ての建物が存在し、それぞれに男性寮、女性寮がある。

俺の部屋は平屋建てのほうの一人部屋で、さすがに実家の俺の部屋には負けるが、学生の寮の部屋にしては破格の大きさである。

道具類を置く場所やポーション作る場所も十分以上にあるな。

ん～、……父上が手を回してくれたか？　気楽でいいけど。抜け出すにも便利だし。

あ、この足音は……。

その音に気づいた俺は、部屋の入り口に駆け寄り、声がかかる前にゆっくりドアを開けた。

「お疲れ様、マリエル。」

そこにいたのはやっぱり俺の荷物を運んできてくれたマリエルだった。

俺が声をかける前にドアを開けたから、少しビックリした顔をしたが、すぐに優秀なメイドさんの顔に戻った。

「はい、若様。こちらで今回お持ちしたお荷物は全てでございます。あとはおいおいということです。」

「うん、マリエルお疲れ様。ありがとう。」

俺がマリエルにお礼を言うと、マリエルが満面の笑顔で笑ってくれた。

あ、忘れてた。渡さなきゃな、アレ。

「マリエル。あのね、これ『念話石』っていって同じ石をもってる人同士なら、離れた場所でも話ができる石なんだ。

それでさ、これを使って、あの子達と一緒に朝起こして欲しいんだ。ダメかな？」

そういいながら、俺が念話石をマリエルに渡すと、困ったような笑顔で、

「まったく若様はいつまでも経っても朝がダメなんですね。

かしこまりました、毎朝あの子達と『にぎやかに』起こして差し上げます。」

と最近は俺に見せなくなった『おねえさん』の笑顔で約束してくれた。

うん。3年間、朝にこの笑顔を見れなくなる。

家帰ろうかな、マジで。

俺の学園生活、最初の一歩目で大きすぎる難関だよ。

……よし！耐えた！

さてと、眠いだけだとは思うけど入学式とやらに行きますかね？

◇◆◇◆◇◆◇◆

そしてあまりにも予想通りな、学園長のお決まりのお話が終わり、俺はあくびをしながら講堂を出た。

父上とマリエルはもう帰った。

帰り際の父上に、「くれぐれも、くれぐれも！『手を抜く』ようにな！」と激励されてしまった。

どんな親やねん。どんな激励やねん。

まぁ俺が息子じゃ仕方ないか。

にしてもやたらめったらでかいな、ここ。

講堂、授業棟、生徒達の寄宿舎の三つが集まると、まるで城かと錯覚しそうになるくらいにでかい。

まぁ、どうでもいいしさっさと食堂に行きますかね。

昼飯食ってないから腹減った。

そう思いながら歩き出したのだが、後ろから俺に近づいてくる足音が。

「あなたが、ジオ・パラケルスス・ラ・テオフラストゥス？」

その声に振り向いてみると、そこには気の強そうな女の子が腕を組んで立っていた。

鼻筋の通ったきれいな顔立ちの女の子で、同年代の女の子にしてはすらりと背が高く、ナチュラルウェーブのブロンドの髪を後ろに流したおでこちゃんだった。

「え～あ～うん。まぁ。」

彼女は、俺の顔をまるで値踏みするような目で見てくる。何だこいつ。

「そう……、あなた、まるで女の子みたいな顔してるのね。
それに本当にすごい髪の色と、あと……不思議な目の色ね。確かに。

まぁいいわ、私の事はもちろん知ってるわよね？」
ん～、あなたはどこの自意識過剰さんでしょうか？
ワタシ、アナタ、シラナイアルヨ。
それに俺は男だから、女の子みたいとか言われて喜ぶ男の娘じゃないやい！
「え～と、初対面だし、知ってるはずがないと思うんだけど？
それに一方的に人の名前を呼ぶのは勝手だけど、いささか礼儀がなってなくないかい？」
初対面の人にはまず丁寧な挨拶から。
社会生活のいろはの　い　ですよ！
至極まっとうな俺の返事だったはずなのだが、その言葉に目の前のおでこちゃんは露骨に表情を変えた。
まるで俺に？みかからんばかりの勢いだ。

「そう！そんなところまであなたは『おちこぼれ』なのね！
自分の『元・許嫁』の名前も知らないなんて！
いい！覚えておきなさい！
私がクリスティン・アレシエル・ラ・サーペンディアよ！」
そういい残すと彼女は、ふん！といった感じで俺に背を向けて行ってしまった。

……え～と。許嫁？そんなもん聞いたこともねえよ！
父上！どうなってですかぁあああああああ！

◇◆◇◆◇◆◇◆

あ～もう、衝撃の事実でしたね、まったく。
今まで許嫁がいたなんて俺聞いたこともなかったわ。
まぁ一応うちも貴族だからなぁ。いてもおかしくはないわな。
そういえば俺のお披露目をやる、やらないで、昔母上の父上、つまり俺のおじい様がうちに乗り込んできたことがあったな。
毎年2度程、俺の顔を見に来てくれる気のいい爺さんだ。

それだけにあの時はなんであんなにもめてんだ、と不思議に思ったもんだが。
小一時間、両親と大声で話してたのは知ってるけど、最後は仕方ないって笑顔で俺の頭撫でて帰っていったんだよな～、おじい様。
まぁ貴族的な生活とか俺には面倒なだけだし、父上にはどうせ私が初代の新興貴族だから、俺は家を継ぐことなど考えなくていいって言われてるし。
一応貴族としての作法なんかはちゃんと一通り仕込まれてるから、もし家を継ぐことになっても問題はない。
まぁ許嫁とか、俺にはマリエルがいるし、どうでもいい話ではあるんだが。
さすがにあの剣幕はビックリする。
何か事情でもあるのか？あとで父上に念話で聞いてみるか。
まぁそれよりもまず飯だ。上手い飯こそ明日へのエネルギー源だ。
寄宿舎に戻った俺は、自分の部屋には行かずそのまま食堂に向かった。
そこは大学の学食を思わせるような大きな部屋で、立派で大きな樫の長テーブルがいくつも並んでおいてあった。
お～～～、Ｏリーポッターみてぇ、と俺が驚いていると、また後ろ

から声をかけられた。

「おい、そこの平民。道を開けろ、どけ。」

その声は子供にしてもかん高い響きを含んでおり、その言葉の内容とあいまって俺の神経を猛烈に逆撫でした。

「おい、貴様！聞いているのか？」

「……何か？」

そう声を抑えながら後ろを向くと、そこにいたのは白い豚だった。

丸々と太った豚みたいなガキ。

仕立てのいい服を着た直立二足歩行の豚が、人間の俺を睨みつけていた。

「貴様！平民の分際で、この私を無視したあげく、その物言いは何のつもりだ！」

ふむ、本格的に死にたいらしい。

俺はいつも狩りを始めるときに感じる、あのスイッチが変わる感覚を覚えていた。

殺すか？

ほぼ反射的に、護身用に持ってきた手のひらサイズの短剣を？む。

どうにもこういう馬鹿だけはキライだ。

本当なら事を穏便に済ますほうがいいのだろうが、何故かまったく我慢できる気がしない。

「貴様！もう許せん！ティリス！かまわん！やってしまえ！」

子豚がそういうと、後ろに控えていた栗色の髪の女性が、申し訳なさそうに俺に頭を下げてから、腰からショートソードを抜いて切りつけて来た。

彼女の首には、あの『従属の首輪』。

それにボブカットか。俺好きなんだよねあの髪型。

そして豚のほうは、なるほど馬鹿貴族か。

そんな事を思いながらも、俺は彼女の剣をかわす。

どう見てもためらいがちに剣を振っていることもあり、俺の力を持ってすれば目をつぶっていても避けられる代物だった。

それにしてもここは学生寮の食堂の入り口で、今日が入学式ってこと分かってんのか？　この豚。

当然回りは騒然とし、野次馬達が危険のない距離をとりながら集まってくる。

中には状況のやばさに気づいて、教師を呼びに行ってくれた人もいたようだ。

まぁあの豚をバラすのには躊躇はないのだが、この奴隷のお姉さん

に罪はないし、さすがに入学初日にこれから3年間お世話になる食堂の入り口を汚すのもアレなので、反撃せずにかわし続けていると、やがて鋭い声が俺たちにかかった。

「双方そこまでだ、ベテン、そちらの少年も」

その声の主は、12歳にしてはあまりにも落ち着いた雰囲気を持った黒髪の少年で、間違いなく良家の子弟であることを感じさせた。

「この男が失礼した。すまないが君の名前は？」

「君も貴族なら、先にそちらが名乗るのが礼儀だろう？」

そう俺が返すと、豚は泡を食ったようにわめきたてようとしたが、少年は苦笑いして俺の軽く頭を下げ名を名乗ってきた。

「失礼。私の名は、ヘルガー。ヘルガー・ブライトス・ラ・エンデルフォンだ。

そうか……黄金の髪に紫水晶の瞳、君がテオフラストゥス家の一人息子か。

確か……。」

そういって俺の名前を思い出そうとしているヘルガーという少年。

その後ろではベテンと呼ばれた豚が、俺が貴族だと知ってオロオロし始めた。

マジでバラしたい。

そしてどうやら、先ほどのおでこちゃんといい、俺が知らないうちに俺の名前はずいぶん有名になっているらしい。なんでだ？

「ジオ。ジオ・パラケルスス・ラ・テオフラストゥスだ。

で、なぜ君は俺の名前を知っている？

そして何故俺がテオフラストゥス家の一人息子だと分かった？

先ほどからの度重なる無礼への謝罪の代わりに答えてもらおうか？」

その俺の言葉に何か耐えられなくなった豚が、俺に食って掛かってきた。

お前は人間の言葉をしゃべるな。豚小屋で糞でも食ってろ。

「貴様！成り上がりの家の息子の分際で！

ヘルガー様は代々エルトリンの宮廷魔術師を輩出するエンデルフォン伯爵家のご子息だぞ！

貴様ごとき成り上がりの男爵家の息子が、よくもそんな口を……。」

豚が唾を撒き散らしながら長口上を続けたいようだったが、それを止めたのはヘルガー少年だった。

まぁそれ以上続けていたら、俺が息の根ごと止めていたがな。

俺が成り上がりの息子なら、お前は二足歩行の豚だろうが。

あと俺だけでなく、うちの家にも喧嘩を売ったな？　今。

「黙れ、ベテン。
わが国の英雄たるフィリップ・パラケルスス・ラ・テオフラストゥス殿に対して、貴様は今なんと言った？事と次第によっては私が貴様を許さんぞ？
済まない、この男の非礼を許してやって欲しい。
そして君の質問への答えだが、君は有名人なのだよ。
英雄、フィリップ・パラケルスス・ラ・テオフラストゥス男爵の一人息子は、社交界にも宮廷にも一度も姿を見せないテオフラストゥス家の秘蔵っ子だとね。
『テオフラストゥスの隠れ子』。それが君のエルトリン貴族の間での通り名なんだよ。」
なるほどな。あとで父上に聞くことが増えたな。
今日はこの少年の顔を立てるのが正解か。
豚はバラしたいが、しかたない。
そう思ったらスイッチがまた切り替わる感覚がして、自然と俺は戦闘態勢を解いた。
「疑問に答えてくれてありがとう。俺はもう行ってもいいかな？」
「あぁ、また。私達は同級生だからな。」

ではまた、と返して俺は食堂から自室への廊下を歩いていった。
それにしても少なからず俺の殺気を浴びていたはずなのにな、あの少年。
よく平気だったな。
ん？豚はって？ああゆう馬鹿には、殺気に気づくっていう高度な神経がないだけだ。
それにしても、ヘルガー少年はともかく、あの自称元・婚約者や何故か人間の学校に紛れ込んだ豚と同級生か。
う～ん、登校拒否でもするか？
そんなことを考えながら俺は自室へと戻っていったんだが、その時は後ろから俺を見ていた視線にまったく気づかなかった。
あの頃のあの子にちゃんと見えてたかは、かなり微妙なんだけどな（笑）。
さてと、飯よりも先に父上に尋問だ。
念話じゃ埒があかんな。
まったく入学初日から家に帰る事になるとは、思いもよらなかったぜ。

……腹減った。

## 第三話　入学式後が大変だった（後書き）

いかがだったでしょうか？

ご意見、ご感想、誤字脱字の指摘など幅広くお待ちしております。

## 第四話　普通にするのが大変だった（前書き）

１００万ＰＶ突破記念でございますだ。

## 第四話　普通にするのが大変だった

月明かりの中を一人寂しく疾走中のジオだ！

今俺は今日の昼に入学した、寄宿舎付きのエルトリン魔法学校に向かって、実家から走って帰ってるところだ。

うん、おかしいよね。俺もそう思う。

まぁいろいろ話がありすぎて念話じゃらちがあかんと思ったから、俺はあのヘルガー少年との出会いの後、急いで自室に戻り、さっさと着替えて（もちろん、俺愛用の装備にな）家に駆け戻った。

何？豚？そんな奴いたっけ？　シラネェナァ。

陽が落ちきる前に何とか家に着いた俺はまず、あらかじめ念話で用意してもらっておいた夕食を急いで平らげ、そのまま母上とじぃの立会いの元、父上への尋問、もとい話し合いを開始した。

それで分かった事は、普通の貴族の子供は、遅くても１０歳までに貴族の社交界にデビューするのが常識である事。

あ～その頃俺は、奴隷市場デビューしてたわ。

クリスティン嬢は確かに親同士が決めていた俺の元婚約者で、しかしその婚約は俺が「冒険者になる！」と両親に宣言した８歳の時に破談になったこと。

魔法職の名家の次女の夫として、魔法職として『おちこぼれ』の俺はふさわしくない、ということで相手がこの婚約はなかったことにと申し出た、というのが表向きの理由。

本当の理由は、父親同士の話し合いで、さすがに貴族の、いや我が娘をこれから冒険者になるものにはやれないという、あちらの親御様の非常に理解できる親心からであったそうだ。

しかし、彼女はそのことを知らずに育っているはずなのだが、にも関わらずなぜか今年になって学院に入学する事を決めたらしい。

ちなみに彼女は一つ年上の１３歳だった。

う～ん、分かったような、分からんような。

その経緯で、何で彼女が俺に突っかかってくるんだろう？

あと、あのヘルガー少年について。

ヘルガー・ブライトス・ラ・エンデルフォン。

正真正銘エルトリン王国主席宮廷魔術師にして、エンデルフォン伯爵家現当主、グラフィン・ブライトス・ラ・エンデルフォンの嫡男だった。

あちらもどうも天才と呼ばれる類の少年らしい。

……まぁ俺は天才などではなく、実際には幼女チートなんだが。

なんでも代々エンデルフォン家の魔法使いは、エルトリン魔法学院

で学ぶのがしきたりだそうだ。

確かエルトリンのエンデルフォンって言えばあれか、ソーサラーとアークウィザードの転職クエストに絡んでくるおっさんだな。やたら男前の。

何かそんな人いたね、確かに。

最後に思い出したくも無いが、あの豚の素性。

父上に聞いても、母上に聞いても分からなかったが、じぃが知っていて教えてくれた。

ベテン・ロキソネ・ラ・エンガイラ。

エンガイラ子爵家の息子で、じぃ曰く、評判が大変よろしくない、らしい。

まぁ豚だし、俺への最初の一言や、あの奴隷の女性への態度を見てたらそれも当然だろう。

まぁ典型的な馬鹿貴族の息子だな。

まったく奴の親もわざわざ豚に服を着せたうえに、二足歩行までさせていったい何が楽しいのやら。

そこまで聞いた俺は、父上たちに別れの挨拶をしてこっそり家を出た。

３人ともしきりに引き止めてくれたが、さすがに入学二日目から朝帰りはまずいしな。

あとマリエルたちには会っていない。

さすがにマリエルとあの子達に今日顔を合わせると、さすがに俺が帰りたくなくなるので、マリエルにはあの子達を連れて、農園のほうへ行ってもらっておいたのだ。

その理由として、最近農園の側に家畜を少しづつ飼いだしたので、試しにその中の豚を一頭丸焼きにしてみんなで食べてみたら？　とマリエルには言っておいた。

……豚君ごめんよ、完全な八つ当たりだ。そして俺も食いたかった。

そうこう考えながら走っているうちに、学院の明かりが見えてきた。

走っておよそ２０分か、通学が許されるならしたいなぁ……。

◇◆◇◆◇◆◇◆

――――若様、若様。おはようございます。朝でございますよ。

起きてくださいまし。

ん？　あ～マリエルおはようって、目の前にいない！
幽霊？　生霊？　なんまいだぶ！　なんまいだぶ！
――――若様！　わけの分からない事を仰っていないで目をお覚ましくださいませ！
はっ！　念話か！　そういや昨日念話石渡したっけ。
――――おはよ～マリエル。起こしてくれてありがとう～。
外は、まだ薄暗闇が残る早朝だが、俺の朝は早い。
そしてそんな俺たちの世話をする、うちの使用人さんたちの朝はもっと早い。
――――では若様、よい一日を。明日はアリアに呼びかけをさせるように致しますので。
それでは、これで。
――――うん。マリエルもいい一日をね。
さてと。さくっと起きて、朝の訓練始めるか。
俺はこちらの世界に転生して、体がある程度大きくなってきてから毎朝自分の体の動きを確認する為一人稽古をしている。
今の自分の体は、異常なほどスペックが高い。
だが、それも使いこなさなければ、ただの宝の持ち腐れである。

《Ｎｅｗ　Ｗｏｒｌｄ》に限らず、ＭＭＯＲＰＧの世界で本当に大事なのは、表面上のレベルではない。

プレイヤースキルである。

レベルの高いアバターは、分かりやすく言い換えれば性能の高いお人形さんである。

操る人形使いであるプレイヤー自身の能力しだいで、故にその能力には驚くほど差が出るのだ。

そして俺のアルケミスト職ほど、このプレイヤースキルが要求された職業はなかった。

ハッキリ言って経験値倍のデメリットなど、このハードルに比べれば、まったく問題にもならなかったのだから。

高すぎる能力と万能性の代償である、非常にピーキーで繊細かつ複雑な操作性。

それが《Ｎｅｗ　Ｗｏｒｌｄ》プレイヤー達の、本当のアルケミスト職に対する評価だった。

正直俺たち『十七人の賢者』によって、アルケミストが超強力職であることを証明された後、大手のギルドを中心にアルケミスト育成祭りが巻き起こったことがあったが、残念ながらすぐに沈静化した。

無理なのである。

他の職業に慣れたプレイヤーにも、これから新規に始めるプレイヤ

ーにも。
その操作性は、他の職業とあまりにも違いすぎる為に、チャレンジしたほとんどのプレイヤーが、その能力を生かし切れはしなかった。
一度試してみたらしい、知り合いの高レベルプレイヤーがこう言っていた。
「別のゲームしてる感覚だな、あれだけ操作感が違うと。俺にはとてもじゃないけど無理だわ。」
そう他の一流プレイヤーにさえ言わしめるほどに、アルケミストという職業は異質だったのだ。
そして、それを使いこなせたのは、そういう訓練を地道に積み続けた俺たちのギルドメンバーと、その他少数のプレイヤーだけ。
それゆえの最強だったのだ。

少し話がそれたな。

つまり何が言いたかったかと言うと、俺のダブルスキルのありえないチート性能といえど、それを完全に把握してこそ、その真価を発揮するのである。
そのための努力を、俺は惜しんだ事はない。
着替えと準備を終えた俺は、ドアを開けて廊下に出た。

まずは落ち着いて訓練ができる場所探しから始めなきゃな。

◇◆◇◆◇◆◇◆

一人稽古のあと、部屋に戻り着替えた後、ようやく食堂での食事にありつく事ができた俺は、そこで働いていた給仕のお姉さんを捕まえた。

「あの～そこのお姉さん。忙しいところ悪いんだけど、お願いを聞いてくれませんか？」

俺が呼び止めたお姉さんは、初め自分が呼ばれたとは思わなかったのだろう、回りをキョロキョロしてから、自分が俺に呼ばれた事に気づき急いで頭を下げてきた。

何で？

「貴族様！　申し訳ありません！　何の御用事でしょうか？」

見た目、顔が真っ青。う～んかわいらしいお姉さんなんだが……。

何がそんなにいけなかったんだろうか？　俺何かやったのか？　まぁいいや。

「あのね、お願いがあって。毎朝、朝食の前ぐらいの時間に、俺の部屋の前に水の入った桶を置いておいて欲しいんだ。」

「水、でございますか？」

「そう、朝使いたいから。あと休みの日はいいです。俺毎週実家に帰るし。

ということでお願いできますか？」

そういいながら俺は久々の『幼女スペシャル』を解禁！

はぅ！　とか言ってクラっと倒れそうになるお姉さんだったが、何とか立ち直り、すごい勢いでうなづいてくれたので、手間賃として銀貨を1枚チップに渡した。

こんなにいただくわけには！　とか言ってたけど、その手の言い分は基本無視する方向なので当然スルー。

よろしく～と言って初めての授業に向かう俺なのであった。

入学後初日の授業終了。

結論、暇。

どうも今日はカリキュラムの説明のようだったのだが、そのカリキュラムはどうも俺が父上から6歳のときに一週間で習ったものを、半年以上かけてやるらしい。

いや、分かってはいるんだけどね。基本は大事だと。

でもさすがにこれは予想外だったし、ここでは俺はあまり目立つつもりもなかったのだが、この退屈さには正直耐えられそうにない。

あとやたらと同級生のみんなが、俺の事を見てくる。

そんなに珍しいか？　俺。

その視線の中で、異質なものがちらほら。

分かりやすかったのが、クリスティン嬢と豚の視線だ。

敵意、だろうな。あれは。

豚はともかく、クリスティン嬢にはさすがにそんな目で見られる覚えがなかったので、こちらからも目を合わせて「何？」って感じで視線をぶつけてあげたら、ビックリしたような顔をして俯いてしまった。

う～ん、分からん。

豚がこっちを睨みつけていたが、あの程度でビビッてたらモンスター相手の狩りは勿論、イナ先生や父上の前になんざ立てるわけがない。

特に父上。

あの人、訓練となると人間が変わるんだよ、マジで。

Dグレード冒険者の俺に、元Bグレード冒険者の父上が、「ふはははははは！」とか言いながら、《爆発（エクスプロージョン）》をぶちかましてくるとかありえないから、マジで！

《爆発》はアルケミスト職の代名詞ともいえる主戦攻撃魔法で、威力、範囲ともに申し分のない強力な術式だ。

（アルケミストだけは魔法のことを術式というようになる。公式設定より）

まぁ、俺ほど対アルケミスト研究をしていた人間も少なかったであろう、過去のゲームの経験からなんとか全て範囲を見切ってかわしてはいるんだが……。

間違いなくまともに当たれば一発で死ぬ。さすが元Bグレード冒険者は伊達じゃない。

そんな危ねぇモン、実の息子に笑いながらぶち込むんじゃねぇよ！

父上！

それにうちの敷地がどれだけ広かろうとさすがにご近所迷惑だ！

爆音だけで鼓膜破れて死にそうになるんだから！

自分に《ヒール》ですぐ治すけどな。

閑話休題。

後、気になった視線が二つ。

一つはあのヘルガー少年のもの。

どうやら俺を観察しているらしい。

真っ黒な瞳で、見るともなしに俺の事を見ていた。

クリスティン嬢と同じように、目線をこちらから合わせてやったが、手を振ってくる始末。

メンドクサイ。

あと一人は、やたらと眉間にしわをよせているのが残念に思えるかわいらしいぽい女の子で、まだ１２、３歳にも関わらずあのマリエルの胸よりもさらに大きな爆乳ちゃんだった。

おぉう……、むしろ俺の目線がそっちに固定されてしまいそうだぜ……。

こちらの視線には悪意も何も感じなかったのだが、なんだか尻がむずがゆくはなったな。

そんなこんなで授業終了後、俺は逃げ出すように食堂に向かいささっと飯を食って自室に引きこもってポーション作りに没頭した。

うん、こういうときは体動かすか、手動かすかだな！

そんなこんなで俺は入学初日からさぼりがちになり、『おちこぼれ』の名に恥じない学生生活をスタートさせたのだった。

……言っとくけど予定通りだからな！

## 第四話　普通にするのが大変だった（後書き）

いかがだったでしょうか？

ご意見、ご感想、誤字脱字の指摘など幅広くお待ちしております。

## 第五話　考え事で大変だった（前書き）

説明ばかりの回ですが、ＭＭＯ経験者の方はニヤニヤできるかもしれません。

## 第五話　考え事で大変だった

友達百人〜、出来そうもないな。

ジオだ。俺がエルトリン魔法学院に入学してから早一ヶ月。

いろんなことが分かって来た。基本、嫌な事ばっかり。

まず、なぜ学生寮が三階建てと平屋の二種類存在するのか。

理由は簡単で、三階建てのほうが平民用、俺の住んでる平屋建てのほうが貴族の子弟用ってことだ。

まぁ、身分差別的な発想で住む場所を区切るのは、社会的に未成熟なこの世界では無駄なトラブルを避けるために必要だと思えたので、そのこと自体は俺はなんとも思っていない。

問題は俺も貴族なら、クリス嬢や、そしてあの豚も貴族だって事だ。

さすがに毎日自分の部屋に帰ろうとするたびに、奴のあのかん高いむかつく声や、豚そのもののような姿を視界の隅に入れるのはうっとおしかった為、父上経由で学院長に頼んでもらい、平民用の寮に替えてもらった。

あの広くていい部屋は惜しかったが、精神安定のほうが優先だ。

そのうち殺ってしまいそうで怖かったしな。

ただ、貴族と平民を相部屋にはできないと判断したのか、二人部屋を一人で使う事になったが。

別にかまわんのだけど、俺は一緒で。

あぁ、俺が引越ししてしばらくしてからだが、クリス嬢も俺と同じように平民用の女性寮に引っ越してきたらしい。

なんでだろ？豚と一つ屋根の下ならわからんではないけれど。

ちなみに今学院に在籍している貴族の子供は、ヘルガー少年を含めた俺たち４人だけらしい。

まぁ父上に聞いたところによると、普通貴族の子弟が魔法を習う場合、エルトリン城に勤めている宮廷魔術師から直接習うのが普通だそうだ。

基本エルトリン魔法学院は、冒険者になろうとする人間を育成する学校であり、貴族が冒険者になろうとするのは、普通に考えればおかしい。

そうなると、しきたりって理由があるヘルガー少年はともかく、クリス嬢と豚の理由が分からんな。

あとメイドさんのあの反応の理由。

全員が全員そうではないそうなのだが、学院に入学する貴族の中にあの豚のような人間が少なからずおり、学院の使用人である彼女達を、まるで自分の奴隷のように扱う輩が少なからずいるのだそうだ。

なるほどな。俺も一応貴族だから、なにかやっちゃったら酷い事されると思ったわけか。

心外ですヨ！非常に心外です！

そんな事できる度胸があるなら、とっくにマリエルの胸の谷間に顔うずめてるわぁあああああ！！

そして同じ理由で、一般の生徒たちも俺になかなか近づいてはこない。

みんなチラチラ見ては来るけどな。

ちょっとさびしい。

まぁどれもどうでもいいといえばいいことなので、これでも俺はそれなりに学園生活を満喫している。

《Ｎｅｗ　Ｗｏｒｌｄ》がゲームだった頃には、こんなとことか見て回れなかったし。

という事で今日も俺は授業をさぼって、学院の図書館にいる。

さすがに魔法職育成の最前線、いい本がそろってる。

アリアとエリアに魔法教えなきゃならんから、覚えたい事は山ほどあるし。

あぁ、ちなみにこの前あった試験でも、筆記と実技、両方俺は手を抜いといたよ？

だって父上に「くれぐれも「手を抜く」ように！」って言われたし。

親の言いつけをキチンと守る、俺っていい子だろ？

まぁ真面目にやれば学年トップとか確実だけど、そこはヘルガー君に譲っておく事にした。

あと試験の結果が張り出されたあとの、例の二人の反応はこんな感じ。

「やっぱり『おちこぼれ』なのですね！あなたは！」とクリス嬢。

何故か涙目だった。

「は！所詮成り上がりの息子だな！まったく見かけ倒しにも程がある！無様な！」と豚。

学年次席のクリス嬢はともかく、わざと最低限の点しか取らなかった俺以下の成績（赤点）だったあの豚に言われるのは納得がいかんが、まぁ擬態を続けられるうちは続けたほうがいいしスルーしといた。

自分が強いアピールなんてものは、百害あって一利なしだからな。

まぁ抑止力といえるまでに力があればいいんだろうけどね。

俺の好みは、油断させて後ろから、ズドン、だぜ。

まぁある意味平穏で暇な今の間に考えておかなきゃならない事は山ほどある。

まず、何に転職するか。

魔法系職については、アルケミストになることが決定しているから何の悩みもないんだけど、問題なのは戦士系職。

選択肢は３つ。

防御力特化、パーティの盾への道であるナイト職。

バーサーカー、ソードファイター、そして花形攻撃職であるサムライに通じる、ウォーリア職。

イナ先生と同じ、スピードとトリッキーさで勝負の、レンジャー職。

この三種類の道が俺にはあるわけだ。

まず大前提として、ナイトは除外。

前線で敵の攻撃を受け止めながら、魔法使うとか無理だから。

となると残るのは、ウォーリアかレンジャー。

いや、この言い方じゃ俺が何を悩んでいるのかわかんないよな。ごめん。

まず、ウォーリア経由で考えている職業が、ソードファイターだ。
片手剣の二刀流が可能な近接攻撃職の一角で、攻守のバランスが取れた人気職の一つだ。

中でも対人戦闘、ＰｖＰ（プレイヤーｖｓプレイヤー　プレイヤー同士が、大規模戦闘などの特殊な場面において、合法的に戦う事をＰｖＰという。）においては無類の強さを発揮する戦場の鬼。

一番の特徴は、近接職の癖に遠距離攻撃が得意な事。

通称、《カマイタチ》もしくは《クロスカマイタチ》と呼ばれる斬撃を、ＭＰを消費して『飛ばす』ことができるのだ。
（《カマイタチ》、《クロスカマイタチ》は通称。正式名称はそれぞれ《オーラブレイク》、《クロスオーラブレイク》である。）
さらに各種近接攻撃スキルも充実しており、まさに近接戦闘のスペシャリストである。

そして地味ではあるが、それら以上に魅力的なのが、スキル《アイオブソード》である。

このスキルは、遠近問わず武器による物理攻撃に対して、回避ボーナスが付くもので、その効果は極めた状態になると３０％にも及ぶ、まさに物理アタッカー殺しのスキルである。

あとは重装備適正が存在する為に、かなり物理防御が硬いのも見逃せない。

勿論逆に弱点も多く存在する。

まず、魔法攻撃に弱い。
分かりやすい比較例として、ウォーリアの派生先3職を同じレベルで比較すると、大体このくらい違う。

バーサーカー　７　ソードファイター　４　サムライ　１０

さらに移動速度が遅く、急な戦況の変化に付いていけない所、範囲攻撃を持たないため乱戦に弱いところなどあるが、ソードファイター最大の弱点は、燃費が悪いところである。

正確な言葉に直すと、『ＭＰがかなり少ないので、スキルの連続使用可能時間が短い為、最大火力を維持できる時間が、他の近接アタッカー職に比べてかなり短い』だ。

まぁこれがソードファイターの特性である。

さて、俺のメイン職であるアルケミストとの相性を考えるとどうなのか？

基本的にアルケミストが火力に困る事はないので、基本は《アイオブソード》狙いで選ぶという方向になるだろう。
防御が硬く、天敵である物理攻撃に対して、スキルで優位に立てるのは、アルケミストにとってはかなり助かる。
あと燃費不足の問題であるが、これは弱点でなくなるはずと、俺は読んでいる。

魔法系職であるアルケミストのＭＰ量は、戦士系職の平均の軽く三倍以上。

つまり《カマイタチ》打ち放題。

ソードファイター使いが一度は夢見る《カマイタチ》無双が出来るはずなのだ！

ただ、移動速度の低さはいただけない。

ソードファイターはこんなところ。

そしてもう一方の候補が、ローグ。

レンジャーから派生する職業で、短剣と弓を得意とするレンジャーの、短剣使いとしての能力を選択した先にある職業である。

最大の特徴は、そのスピードと回避力。

そして凶悪極まりない各種短剣系攻撃スキルの数々である。

ローグに限らず、短剣職の代名詞ともいわれるのが、スキル《バックスタッブ》。

ただでさえ高い攻撃力を誇るこのスキルだが、敵の背後に回った状態で繰り出すと、ダメージに補正がかかり、さらに最高２５％の確率で《インスタントキル》、つまり即死が発動する。

これがやばい。

さらに短剣職には基本、相手の背後に回るスキルや、一時的に透明になるスキルなどが多数存在する為、どの職業であっても《インスタントキル》を持つ短剣職は怖い。

特に物理防御力に乏しい魔法系職にとっては、まさに天敵中の天敵。
戦争中に後ろから、ズドンとか普通だからな。
他にも一撃一撃の威力が高いスキルが多いのが攻撃面の特徴である。
さらに高い回避率と移動力。
小細工ともいえるような多種多様なスキルなどがローグの長所である。

逆に弱点だが、まず近接攻撃職の中でも、軽装備適正しかないので装備が限定され、物理防御力が低い。
さらに重装備適正のある物理近接職に比べて、ＨＰも低いことと相まって、パーティ内で相手の攻撃をひきつけながら戦うという役割（これをタンク、もしくはタンカーという。）を果たす事が出来ないのだ。

つまり一瞬の攻撃力においては最強だが、足を止めての戦いには基本的に向いていないリスキーな近接アタッカー職、それがローグである。

さて、これとアルケミストとの相性はというと、意外というか、かなりいい。
基本後衛で戦うアルケミストに、重装備の防御力が必要かと聞かれれば微妙だし、軽装備といえどもローブよりはかなり防御力も高い。
瞬間的な回避スキルも存在する為、案外しぶといし。

さらに魔法系職のジレンマである移動速度の遅さをカバーできる事も大きい。

魔法系職だと思って不用意に近づいてくる奴相手を、短剣でお出迎えっていうのは凶悪の一言だし。

あと短剣職には、同じ短剣職が隠れて接近してきた場合に、それを察知するスキルがあるからそれもでかいな。

だって刃物でズドンとか俺のトラウマど真ん中だからさ～。

まぁそれはおいといて、もしローグを選んだ場合には、操作性、今は自分の体でやるわけだが、それがさらにピーキーにはなるだろうが、ある意味いまさらだし、使いこなせば最強の万能戦士の出来上がり、かもしれないし。

普通に考えればこっちなんだろうが……。

なかなか決められない。

だってまず二刀流ってかっこいいじゃん？

そして何より俺には《カマイタチ》無双の夢が捨てきれない……。

あれは、まさに、男の、夢。

そんなこんなで俺の戦士系職の転職先決定は、既にかれこれ１０年以上先延ばしにされているのだ。

いい加減に決めないとな～。

あ、授業終了のベルが鳴ったな。

さて飯に食いに行くか。

授業はさぼるが、飯の時間はさぼらんのだよ！フハハハハ！

## 第五話　考え事で大変だった（後書き）

いかがだったでしょうか？

ご意見、ご感想、誤字脱字の指摘など幅広くお待ちしております。

## 第六話　父上がすごくて大変だった（前書き）

今回もちょっと短めです。

## 第六話　父上がすごくて大変だった

は～い、今日も図書館でサボりという名の自習真っ最中のジオですよ～。

一応言っておくと、俺のサボりは学院長に黙認されている。

入学の1週間後、学院長から呼び出され、父上から聞いたとの事で、「今自分で使える最強の魔法をワシにぶつけて来い！」て言われたので、遠慮なく《ファイヤーボール》をかましたら、サボリを認められた。

まぁあっさりと俺の《ファイヤーボール》はレジストされたけど、ビックリしてたなぁ、あの爺さん。

（レベル差がありすぎると、魔法は抵抗されて威力を殺される＝レジストされることがある）

学院長が部屋に戻る時、「あんなものを普通の生徒の中に入れておいたら、どんな事になるや分からん！」とか失礼な事言ってたのは、寛大な心でスルーしておいたぜ。

ヒゲジジィ、オボエテロ。

にしても、あれをほぼノーダメージで防ぐとは。

ありゃ学院長も、父上と同等クラスかそれ以上かねぇ。

職業はたぶん、ソーサラーかな？　少なくともアルケミストではないな。

……アークウィザード（魔法系職の最高峰の一つ。炎を支配するソーサラーの最上位職）なんてオチは、さすがにないよな？

まぁその学院長公認のサボり特権を使った、ここ一月半の図書館入りびたり生活のおかげで、とりあえず必要な知識は頭に入れることが出来た。

転生後のハイスペックな脳みそサイコー。

てゆっか完全記憶レベルだわ。これ。

これが大学受験のときあったら、国公立行けてたんだろうなぁ……。

あと、2、3点だったんだよなぁ……。

まぁそれは置いといて、あとは禁書棚と各教師の個人的な蔵書も見たいところだけど、不要なリスクは避けるべきだな。

あと昨日の夜、シランから連絡が入って、頼んでおいた『変身マント』が手に入ったので、こちらに送ってくれるとの事だ。

よし、学園が長期休暇に入ったら遠征だな。あそことかあそことかあそことか。

そんなことを考えながら、そろそろ少しは真面目に授業に顔を出すかな、と思っていたら背後で図書館のドアが開く音がした。

はて？この時間に図書館に出入りする人間が、司書のばあさんと俺以外にもいたとは。

あの人間の化石みたいなばあさんは、勝手口からうろうろしてるから、正面扉は使わんだろうし。

ていうか、あれ生きてんのか？　ホントに。いまいち信じられん。

ていうかこんな時間にホントに利用者か？　普通に授業中だろ。

完全に自分のことを棚にあげつつ耳を澄ませていると、大きな物音。

どうやら何かにぶつかったらしく、「ゴン！」っていう音が静謐さを保つ図書館全体に響いた。

どうも誰かを探している感じがする。

……こんな時間帯にここで誰かを、という事は俺か。

足音の感じからすると、おそらく女の子で、学生。

本人的には足音や気配に気をつけているつもりなんだろうけど、最初の「ゴン！」で誰でも気づくだろ。

女性という事で、最初はクリス嬢か？　とも思ったが、どうも違うらしい。

なぜなら彼女の足音はこういう風には聞こえない。

彼女の足音は『コツコツ』、今俺を探している人間の足音はどちら

かというと『パタパタ』だからだ。
特に攻撃してくる感じもない。
あ、また何かにぶつかった。ドジっ子か？
相手はおそらく普通の生徒。
ん～果たして普通の生徒が、俺に何のようだ？
分からない事は聞く。これ基本。
という事で。

「だれ～？　俺になんか用？」

背を向けたまま、俺の背後からこちらを窺っている人にそう言ってやる。
返って来たのは、驚きをその声に隠したか細い女の子の声。
「あ、あの……、どうして私がいること分かったんですか？」
「ん～ドアが開いたの聞いてたし、足音がしたし、だれか探してるみたいだったけど、この時間帯にここにいるのは俺だけだし。
何よりあんな大きな音何度も響かせて気づかないやつはいないよ」
あれで気づかないとか言ったら、イナ先生に何されるか分かったも

んじゃねぇからな。

「恥ずかしい……。

初めて御領主様の若様にご挨拶するのに……」

ん？　領主の若様？　誰が？　俺が？　という事は。

そこで俺はようやく後ろを振り返った。

そこには、あの授業初日の日に眉間にしわを寄せながら、俺を妙な目で見ていた爆乳少女が顔を真っ赤に染めて俯いていた。

「……えっと、君はどなた？」

そう俺が問いかけると、彼女ははじかれたかのように顔を上げてから、俺に跪いてこう言った。

「はい、若様。お初にお目にかかります。
テオフラストゥス男爵領の街、パラピルから参りましたアニー・ロビルス・メアンと申します！」

◇◆◇◆◇◆◇◆

うちの父上の領地、テオフラストゥス男爵領はワトリアから馬車を使って南に１０日ほど行ったところにある、らしい。

元々王領だったものを、父上が貴族に叙勲される時に下賜された、

らしい。

パラピルの街は、行政府が置かれる領内最大の街で、人口はおよそ5千人ほどの地方都市、らしい。

父上には、ワトリア魔法ギルドのギルドマスターという仕事があるために代官による委任統治が行われている、らしい。

俺が知ってたのはこのくらい。

全部聞いただけ、行った事ないから正直分からない……。

貴族の子弟としては、失格にも程があるんだが。

自分の父親の領地の事もろくに知らないとか。

そんな俺に、跪いた女の子――――アニー・ロビルス・メアンはいかにうちの父上、フィリップ・パラケルスス・ラ・テオフラストゥスが素晴らしい領主であるかを、熱っぽく語ってくれた。

まず、最初に多数の冒険者を雇って領内の安全を確保してくれた事。

人の活動範囲に、モンスターが入り込めないように結界を張ってくれたこと。

おかげでモンスターにやられ怪我をする人、死んでしまう人がすごく少なくなったこと。

以前は特に産業のなかったテオフラストゥス男爵領だったが、、様々な特産品を作ることで経済的な発展を遂げている事。

さらに孤児院や学校を作り、領内の発展に努めていることなど。

さらに他にも数え切れないほどの父上の領地運営の話を聞いていて、最初は、お～父上、ただの親バカじゃなかったのか～。　とかのんきに思っていた俺だったが、話の途中から、それは驚きと尊敬に変わった。

父上は小さな頃から俺に、ギルドの仕事の事や領内の整備などの事で、『お前ならどうする？』というような聞き方をする事が頻繁にあった。

だから俺は、それに答えて知ってる農法や肥料の作り方、特産物を作り商人を呼び込む事で、経済を活性化させ財源を確保する事、法律や社会福祉の重要性など、ほとんど考え無しにただ問われるまま、俺ならこうするってことでいっぱい話した。

父上は、それを子供のたわごととは受け取らず、真剣に検討し、さらにそれを信頼できるものに任せて実行させる事によって、わずかの間にテオフラストゥス男爵領内を、国内でも有数の領地へと変貌させていたのだ。

しかし俺が本当に驚いたのはそのことじゃない。

どこに年端もいかない幼児の言う事を真剣に聞いて、それを検討し、領地経営に活かそうとする領主がいるだろうか？

よくよく聞いてみると、最初に俺が提案したもので実行されたのは、街や村の公衆衛生に対する政策で、俺が5歳の時のものである。

父上……、気づいてはいたんだ。思ってるよりはるかにすごい人

だって事は。

こんな我儘な俺に好き勝手やらせてくれるだけでも、父上達はすごいって。

しかし、今ほど今回の人生で父上達の子供に生まれてよかったと思った事はないよ。

ありがとう、父上、母上。

「若様、どうして泣いておられるのですか？」

え？　俺今泣いてるのか？

「ご、ごめん！かっこわるいとこ見せちゃったね。

それで、父上がすごい事と、今アニーが授業をサボってまで俺のとこに来てくれてることは何か関係あるの？」

父上のすごさを説明してくれたのには、感謝してるけどそれとこれと何の因果関係が？

涙を拭きながら目の前の少女を、本当の意味で初めて良く見る。

明るく長い茶色の髪を、二つのお下げでまとめている。

顔つきは12、3歳とはいえ、俺と同じ年頃とは思えないような童顔、そしてかわいらしい垂れ目ちゃんだ。

背も小さい。

にも関わらずその全てを裏切る胸の超双子山。

……ちょっとソレ反則ですヨ、お嬢さん。

この確認に要した時間、約５秒。内胸を見てた時間４秒。

うん、俺は男として間違ってねぇ！

アニーはそんな俺のセクハラ的視線にもまったく気づかず、彼女曰く「若様へのお目通り」に来た理由を一生懸命話してくれる。

「あのですね、若様のお父上であらせられる御領主様が、前の年に領内に布告をお出しになりまして、「冒険者になりたいものに奨学金を与える」と。

それで審査を経て、その中でもそれなりの魔力を認められた私が、この学院に入学する事ができたのです！

学院には私だけなのですが、他にも数人が『戦神の鍛錬場』で鍛錬に励んでいるはずでございます。

それで私がみんなを代表して若様に御礼申し上げようと……」

なるほど、そういうことね。

それで初日に俺をガン見してたわけね。

そして逆に今までそれができなかったのは、ろくに俺が授業に出てなかったから。

正直、ゴメン。

それはそれで置いといて、ていうか俺にお礼言われてもな。

そういうのは、本人に直接いったほうがいいよね。そうだよね。そうに違いない。

「アニー、そういうのは俺に言うんじゃなくて本人に言おうか。」

そういっていぶかしげに眉間にしわを寄せて俺を見つめるアニーをよそに、俺は懐から念話石を取り出すと、父上に呼びかけた。

――――父上、聞こえますか？　ジオです。今よろしいですか？

――――おお！どうした！息子よ！何か問題でもあったのか？

――――いえいえ、特に何もありません。今週末も帰りますので、よろしくお願いします。あとですね、父上とお話をしたいという者がおりまして。今からその者と代わりますので、よろしく。

――――ん？　良く分からんが分かった。

そうして一度念話を切り上げると、

「アニー、ここにおいで」

そういって隣の椅子引いて、彼女を無理やり座らせる。

ずっと最初から言ってたんだけど、固辞されてたんだよ。

「若様のお隣に座らせていただくなど、滅相もございません！」とか。

「俺の手を握って、これ命令ね。そう、繋がったら渡すから。」

こうでも言わんとこの子はやらんからさ。

念話石に意識を集中して、父上をイメージする。

空中を漂う見えない線が繋がったような感覚がして、意思の交換が可能になる。

――――父上、聞こえますか？

――――うむ。

――――では渡します。

そこまでやった俺は、アニーに念話石を渡した。

目を閉じている振りをしながら、薄目を開けて隣の少女を見てみる。

アニーの顔に、困惑と驚き。

そしてアニーはやがて涙を流し始めた。

という事で今回はここまで。

え？　この後の話？　そういうことを聞くのは野暮ってもんだぜ？

は？　エロいことなんてするわけないだろ！

## 第六話　父上がすごくて大変だった（後書き）

いかがだったでしょうか？

ご意見、ご感想、誤字脱字の指摘など幅広くお待ちしております。

## 第七話　夜道が暗くて大変だった

ゴリゴリゴリ……。マゼマゼマゼ……。

ゴリゴリ、マゼマゼ……。

水を入れてさらにゴリゴリ……、ツメツメ。

ガンガン……。

……。

……。

……！

できた！

あとは乾かすだけ！

あ～今回はマッドなジオ君がお送りするぜ。

学院に入学して、３ヶ月が経った。

最近はぼちぼち授業にも出るようになった俺は、相変わらずのぐうたら学生生活を送ってる。

あの日以来、アニーは何かと俺の世話を焼いてくれるようになった。

一緒にいるとき、目のやり場に非常に困るんだが。

そして彼女はやたらめったら何かにぶつかる。何でだ？

あとうれしいことに彼女は「私も御領主様みたいなアルケミストになりたいんです！」と言ってくれたので、近々魔改造を始めようかと思ってたり。

昔ギルドメンバーに「ぱらさん新人の魔改造乙☆」とかよく言われたわ……。

通常ソロで１００時間かかるレベル１～２０を、３時間でやったりな。

魔改造得意です。

今日は学院が休みなので、俺は実家に戻っていて、今農園にある作業部屋の中にいる。

昔は３人が作業するのが精一杯だったこの小屋も、この２年ちょっとの間に２回の増築を繰り返し、今では７人一緒に作業ができるまでになった。

今も俺の周りには、６人の奴隷の働き手さん達がいて、黙々と作業を行っている。

もちろん分業。元日本人なら当然。

え？人数が増えてるって？

そうそう、シランに頼んでおいた５０人のうち１０人は、うちで農園の世話とここでの作業をしてもらってる。

あと、最初にうちに来たジトーとセロン、マオルルとキーナがデキた。

俺がまだ学院に入学する前の話なんだけどな。

まぁ、毎日一緒にいれば成り行きとして、そうなるよね～。

デキたついでに子供もデキたらしく、ジトーとマオルルが必死の形相で俺に謝りに来て、自分の命と引き換えに……とか言い出したから、ちゃんと働いて金返せ～お幸せにな～と言ったら、４人に涙流しながら死ぬほど頭下げられた。

俺みじんも怒ってないんだけどな～。

ついでに家族用に家をそれぞれ建ててあげた。

借金追加な～、と笑いながら言ったら、また大泣きされたけど。

……借金追加とか悪い事したかな？

んで、俺が学院に入学する直前に生まれた赤ちゃんが、それはそれはかわいいんだわ。

ジトーのとこが男の子で、マオルルのとこが女の子。

名付け親に〜って言われたから、黒い髪の男の子に、シュバルツ（ドイツ語で黒）。

小麦色の髪の女の子に、そのままムギってつけた。

我ながらネーミングセンスゼロな名前だったんだけど、それぞれの親が喜んでくれたしいいよな。

そんなこんなでジトーたちはめちゃめちゃ頑張って働いてくれている。

あと子供たちが生まれたことで、アリアたち４人にも結構いい影響があったりして俺としてはすごいうれしい。

アリアとエリアは元々世話好きだし、リューネも気になるのか何かと見に来るらしい。

そして一番いい影響があったのが、シルウィ。

足しげく赤ちゃんのところに通っては、黙って赤ちゃんを見て幸せそうにうっすら笑ってると、マリエルから念話で聞いた。

最近俺が家に帰っても、感情を前より上手に出せるようになってきた気がするし。

そういえば、あの子たちが生まれてしばらくして二人が一緒に熱出

した時には、たまたま学院の休みに帰ってきてた俺と父上が一緒にパニクっちゃって、母上とマリエルに怒られたなんて事もあったなぁ。

アホみたいにポーション持っていったからな。

この辺の一連の話を、イナ先生がシランに話したらしい。

腹抱えて笑ってたとよ！あんにゃろうめ！

コレだから悪い大人は！

ま～そういう感じなので、追加で来てくれた１０人にも、恋愛は自由だからと言ってある。

人はパンだけで生きるにあらず！

恋愛って生きるのには必要だと思うし。

もちろん無理強いしたら、そいつは４分の３殺した後、要らないモノは切るって言ってあるけど。

あと恋愛関係でもめたら、他の場所に移動とも言ってある。

うちで俺のことをただのガキだって思ってる奴はいないから、みんなちゃんと言うことを聞いてくれて助かる。

ま～イロイロとありえないもん見せてるからね～。

さてと、俺も今日はここらで切り上げて、２人の天使の顔でも見に行きますかね？

◇◆◇◆◇◆◇◆

うん、かわいかった。

ほっぺがプニプニしてんだよな～、赤ちゃんって。

そういう感じでマリエルたちも交えて赤ちゃんを堪能、その後父上たちと食事をして、今は夜の間に学院に駆け戻ってる最中だ。

今日はいわゆる朧月夜で、ちょっと薄暗いけど何とか大丈夫。

魔法のカンテラ持ってるし。

そう思いながらカンテラ片手に夜道をひた走っていると、いきなり風を裂いて俺の頭めがけて何か飛んできた！

それが何かを認識する前に何とか間一髪かわし、カンテラを投げ捨て様、即座に腰からダガーを引き抜いて臨戦態勢を取る。

その瞬間俺のスイッチが切り替わる。

チラリと見た俺の背後に刺さっていたのは、一本の矢。

こんなところに矢を打ってくるような人型のモンスターはいない。

つまり相手は同じ人間。

にゃろう、どこのどいつだ。

矢の刺さってる角度からして、敵は向かって左手の森の中か？

相手は盗賊？　冒険者？　まぁなんでもいいや。

――――さて、人間相手の初めての実戦か。

おそらくそれほどの数はいない。

気配からすると……４人か。

そうこうしているうちに目の前の森から3人出てきやがった。３人？

あ～そういうことか。

ということは今までもそうだったと？　あちゃ～。

まったく、まだまだかなわないなぁ……あの人には。

わずかに雲間から零れ落ちる月明かりを頼りに、こちらに歩いてくる3人の先頭の奴の顔を見ると、そいつは汚らしい顔したおっさんだった。

装備も見えた分だけではあるが、どれもEグレードのものばかり。

おそらく冒険者崩れのごろつき野郎。

他の二人も似たようなもんだな。

舐められたモンだ、俺も。

とりあえず楽しい楽しいお話で、情報を可能な限り引き出すとするか。

「おっさん、月も朧な闇夜のご挨拶にしては物騒だな。

誰かと間違えたってんだったら、手加減、してやらなくもないぜ？」

その俺の言葉に、おっさん達が笑う。汚い歯見せんじゃねぇよ。

「ガハハ！小僧！

いくらお前が貴族のガキだろうと、今はたった一人だ！

そんな大口叩いても、誰も守ってくれやしねぇよ！

パパ〜、ママ〜とか叫ばなくていいんでちゅか〜？

殺されちゃいまちゅよ〜。」

……台詞が三下以下なんだよ、おっさん。

いいや、予定変更だ。

とりあえずきっちり上下関係分からせてから、情報を吐かせるか。

「おっさん……、その台詞そっくり返すわ、こいつと一緒にな！」

俺はそう吐き捨てると同時に、護身用の小さなナイフをおっさんめがけて投げつける。

闇夜を鋭く走る一筋の光が、見事におっさんの左内腿に刺さり、「ぐぁ！」というくぐもった声が聞こえた。

闇夜の中で明らかに動揺する3人の男。

そんな事には委細構わず、俺はわずかに漏れる月の薄明かりを頼りに、一番後ろにいたメイジ風の男に切りつける。

左腕、右腕、右わき腹、両足を切り裂き、戦闘不能状態に追い込んだあと、あごを掌で強打して気絶させる。

俺の早業にパニックになったもう一人の男が、弓矢を放りだして逃げようとするが、逃がすわけがない。

後ろから迫って同じように死なない程度に加減して血だるまにした後、今度は延髄をぶっ叩いて寝かしつける。

オヤスミ。

さ・て・と。

「おっさん、あんたのパパとママは呼ばなくていいのか？」

そう言いながら振り返るとおっさんは血だらけの左足で、何とか立ち上がって震えながら剣をかまえていた。

うわ、生まれたての小鹿みてぇ。

「て、てめぇ！何モンだ！

何でてめぇみたいなガキの癖に、な、なんで、レ、レベル１４もある俺たちが３人がかりでやられるんだよ！いったいどういうことだ！」

おいおい、おっさん、声が震えてるぜ？　さっきまでの威勢はどこに行った？

そしてレベル１４程度でいばってんじゃねえよ。

そんなレベル、俺は８歳の時に通り過ぎとるわ！

「簡単だろ？　俺がおっさんたちより強いんだよ。そんだけのことさ。

あとさ、一応貴族の一人息子の俺が、本気で一人でこんな暗い夜道を行き来してると思ってんのか？

……イナ先生！もういいでしょう！」

ミスリルダガーについた血を腰のポーチにいつも入れてあるボロ布で拭いながら、俺がそう叫ぶと案の定おられましたよ、我がお師匠様。

俺の背後の闇の中から浮かび上がるように現れた先生は、珍しくそのナイスミドルなお顔に満面の笑みを浮かべておられました。

まったくスパルタにも程があるっての。

「いつから気づいていた？」

「情けない事に、こいつらの気配を探った時に一緒にですね。４人いるって感じましたから。」

「ふむ。まぁ何とか及第点、といったところだな。

ジオ、一度こいつらを連れて屋敷に帰るぞ。その後改めて送って行こう。」

「は～い。というわけで！」

イナ先生の登場に逃げようとするおっさんに向かって、俺は威力を半分ほどにセーブした《ファイヤーボール》をお見舞いしてやる。

闇を赤々と染める紅蓮の炎が、おっさんに向かって飛ぶ！

突然の赤い光に耐え切れなくなったおっさんは振り向いて、そして絶望の悲鳴を上げた。

着弾！

おっさんは見事ミディアムレアに。

『上手に焼けました～♪』って幻聴が聞こえた気がしたけど、殺してない、はず！

そこまでやり遂げた俺は周囲の気配を改めて探ってから、戦闘状態を解除。

その瞬間、人間の肉を切った事実や人間に向かって魔法を使った事に軽く吐きそうになる。

でもまだまだ、昔のアレに比べれば。

ふ～～～～。

人間様と戦うのは……しんどいねぇ。

◇◆◇◆◇◆◇◆

あの後父上に連絡して、荷馬車と人手を用意してもらい俺を襲撃したおっさん3人を家まで護送した俺は、後のことを父上とイナ先生に任せて自分の部屋で寝た。

さすがにあの後、学院に戻る気にはならんかったわ。

まぁおっさんたちは死なないとは思うが、死ぬよりつらい目にあうだろうね～。

どのみち賞金首は決定だしな。

《New World》では『PK（プレイヤーキラー）』はシステムとしては存在するが、そのリスクは他のMMORPGと比べると比較にならないくらいに高い。

いい機会だから、これも説明したほうがいいか。

『PK（プレイヤーキラー）』とは、プレイヤーがプレイヤーを一般フィールド上で襲って殺す行為のことを指す。

これをやった奴は、大陸中部に存在する悪徳の街「アンギル」以外の街でのサービスが受けられないようになり、なおかつ一般の街に入れば警備兵に攻撃される。

さらに成功しても失敗しても賞金首となってしまい、他のユーザーからの合法的攻撃対象になっちまうので、基本これをやる奴は悪役のロールプレイをしてるやつか馬鹿だけ。

さらに3回賞金首として狩られたアバターは、神の祝福を失い、現実での一定期間ゲームに参加する事ができない、つまりキャラの使用凍結を運営側から食らう。

確か1週間だったかな？

またこうなった場合、全てのアイテムと資金を失う事になるというアホ仕様である。

勿論メリットがないわけじゃない。

倒したプレイヤーの持ち金全額ぱくれるからな。

但しデメリットがでかすぎる。

まぁ実際、犯罪行為ってそんなもんだよね。

公式設定では、冒険者たちに加護を与える勇気の神『アスリオン』が理由無き争いを禁じている為こういう風になっていると説明があったはずだ。

まぁ、今度の場合は、それ以上に……父上がヤヴァイ。

おっさんたち、元気でな～。

星になってオ・ク・レ。

少しは夜道が明るくなるだろうし♪

学院にはイナ先生に学院長に直接事情説明をしてもらう為に行ってもらい、俺はしばらく実家で休むことにした。

これでどう事態が動くか、だな。

おそらく誰かが俺を襲うように依頼したんだとは思うんだが……。

ど～～～～～～～～～～～～う考えても豚しか思いつかねえ。

あの豚。そんなに死にたいのか？　死ぬのか？　馬鹿なのか？

まぁ思い込みは良くないし、結果出てからだな、全部。

にしても殺してないせいか、狩りで生き死にに慣れすぎたせいか、精神的にほとんど動揺してない今の俺ってどうなのよ？

さすがに昨日一晩は人を切った感触とか、焼いたあの臭いとかでなかなか眠れなかったけど。

ウェアラットとかゴブリンとかの時あんなにきつかったのにな。

これって成長なんでしょうか？

日本でなら間違いなく過剰防衛だしなぁ。

まぁわかんないこと悩んでも仕方ないか。

久々に家でゆっくりするか～。

気分転換がてら、アリアたち連れて赤ん坊の顔見に行こっと。

……後日１５、０００Ｇが賞金首退治の報酬として与えられた。

ゴチです！

但し全部内々に処理してもらったから、情報まったく表に出てないけどね！

## 第七話　夜道が暗くて大変だった（後書き）

いかがだったでしょうか？

ご意見、ご感想、誤字脱字の指摘など幅広くお待ちしております。

## 第八話　あの後イロイロ大変だった

お～、半月ぶりの学院だぜ～。

相も変わらず端が見えないほど長い大理石の壁と平行に走る馬車の中から、俺は目の前を通り過ぎて行く鬱蒼とした森を眺めていた。

見てるとたまにウェアラットがいた。相変わらず顔がキモい。

もうすぐ初夏。

朝の光に照らされた緑が目にまぶしいぜ。

、

おはよう皆さん、被害者の会代表のジオです。

おっさん達の尋問……、もとい『ＯＨＡＮＡＳＩ』は父上たちが大活躍したらしい。

一応死んではいないらしいが。

その結果分かったのは、おっさん達がエルトリンシティの酒場で酒をかっくらってくだをまいていたところ、怪しげな男が近づいてきて、おっさん達に俺の襲撃を依頼したらしい。

その男曰く、あるところに生意気な貴族の子供がいるから、礼儀を教えてやってくれ。

そいつは週末の夜に一人で学院とワトリアの街を走って行き来している。

だからそこを狙って痛めつけてやってくれ。
金は弾むと言われ、前金で５，０００Ｇの大金を渡された。
そして成功したらさらに５，０００Ｇと言われ、嬉々として俺を襲ったら結果はあの通り。
そして相手が俺、つまりあの『フィリップ・パラケルスス・ラ・テオフラストゥス』の息子だとは知らなかったそうである。
もし知っていたら、そんな事は絶対しなかったとのこと。
知っていれば、あの『爆炎』の息子に手を出すとかありえない、だとか言ってたらしい。
父上、『爆炎』なんて厨二な二つ名があったんですね……。

その後この一件は、父上の緘口令により表に出る事もなく静かに収束したが、学院側には、わざわざじぃに出向いてもらって、『みんなに聞かれる様に』俺が急な病気でしばらく家で養生すると伝えてもらった。
学園への出かけ際、じぃに苦笑いを浮かべながら「若様も意地がお悪うございますなぁ」と言われてしまったが。
エへへ。そんなに褒めなくても。

さってと～、あれから半月。

俺がいない間に何が変わったかな？

調子に乗ってるのはどいつだろうねぇ？

あ～入学して初めてだわ。

あの豚のツラ拝むのが、こんなに楽しみなのは！

そんなことを考えながら、俺を乗せた馬車は学院の正門をくぐってから数分、学院の正面玄関に到着した。

御者に礼を言って馬車を降りる俺。

それから久々の自室に向かおうと足取り軽くエントランスホールに入ろうとすると、そこには俺の元・婚約者、クリスティン・アレシエル・ラ・サーペンディア嬢が仁王立ちでお待ちかねでしたヨ。

……何で？

◇◆◇◆◇◆◇◆

「ジオ・パラケルスス・ラ・テオフラストゥス！

急な病気で臥せっていたと聞いていたけど、元気そうでなによりね。

まったく『おちこぼれ』の癖に、まじめに授業には出ない！
勝手に実家に帰っては、そこで病気になって半月も寝付く！
本当にやる気はあるんですの？
私には、貴族として、魔法職としての自覚と努力が足りないようにしか見えませんわ！」
うん。清々しいぐらいに変わってないな、このお嬢さんは。
あ～今日もお空が青い。雀みたいな鳥が、ひぃ、ふぅ、みぃ……。

現実逃避終了。

いや、かわいい女の子なんだよ？　彼女。
顔立ちが綺麗だから将来の美人確定だし、ナチュラルにウェーブしたブロンドのロングヘアーを後ろに流しているのも似合ってるし、背も高いスレンダー美人さんだし。
頭も実技も学年次席、あのヘルガー少年さえいなきゃ余裕で両方主席だろう。
まぁおでこは光ってるけど。

……あと、おっぱいは少し残念な感じだけどまだ１３歳だし！（女性の皆様ごめんなさい！）

あと性格もいいみたい。

貴族としての姿勢が基本ではあるが、一般の生徒にも節度を保ちつつ、それでいてやわらかな態度で接している様だから。

但し、俺に対してだけは、とにかく噛み付いてくる。

勘弁して欲しいんだが。マジで。

どうしよっかな～、このままスルーってわけにもいかないだろうしな～。

あ～少しづつだけど胃が痛くなってきた。

そのうち胃に穴開くんじゃねぇかな、俺。

ヒールで直るんだろうか？その場合。

俺がそんな事を考えている間も、彼女の口撃が止まる事はなかった。

「そもそも貴方に魔法職としての適正がありますの？もしお有りにならないのなら、さっさとお隣（『戦神の鍛錬場』のことね）に移られてはいかが？」

あ～それもいいかもな～。

でも俺はやっぱりアルケミストがメインなんだよ～。

内心ではそんなことを取りとめもなく考えているが、こちらに来てから身につけたポーカーフェイスで、俺は一切の感情を悟らせないように彼女を眺めている。

ていうか何で俺にこんなに絡むのよ！

破談の件だって、形式的にはクリス嬢の家からって事になってるはずだし、俺自身が彼女に会ったのは入学後だからそれ以前から知ってるわけないじゃん！

考えろ！考えるんだ俺！……やっぱ分かんない！

そんな彼女の大声での一方的なやり取りが、授業前の正面エントランスで繰り広げられていた性であろう、遠巻きに、そして徐々にではあるが人が集まってきた。

うわ～、学院復帰当日から衆人環視でいじめられるとか嫌過ぎる。

即帰ってマリエルに慰めてもらいたくなってきた、胃薬飲まなきゃ。

ということで胃がこれ以上キリキリ痛み出す前に、強・行・突・破だ！

未だに続くクリスの俺への罵倒の言葉の継ぎ目に、俺は言葉を差し込む！

「サーペンディア嬢、もうよろしいだろうか？

ここは学院のエントランス。あまり長々と大声で世間話をするには不向きな場所だと思う。

そして何よりも他の者達に迷惑だ。

あとあまり私をいじめるのはやめてはもらえないだろうか？

私には、女性に罵倒されて喜ぶ趣味はないから。

私の体のこと、ご心配してくださってありがとう。では失礼。」

そう言って俺は唖然とするクリス嬢を横目に、何とか公開処刑の場から逃げ出した。

ふ～何とか脱出成功。

胃の危機は去った！

……後に俺はこの辺の時代の事を、酒の入ったときのクリスに延々と責められる事になる。

「だいたい貴方は鈍感で、朴念仁で、唐変木で、女性の気持ちを考えた事がおありになるの？　あの頃の私がどれだけつらかったか、ちゃんとお分かりなの？」とかな。

絡み酒で泣き上戸で、なおかつ説教癖まであるんだよ、クリスの奴。

まぁ、そこもかわいいんだけどさ。

いや、悪い事したとは思う。思うよ？

ちゃんとその時点で俺が分かってやってれば、ずいぶんその後の流れも変わっていただろうから。

でも、言い訳を一つだけ。

あれで分かれって方が無理じゃないですか？　クリスさん……。

◇◆◇◆◇◆◇◆

一般生徒用の男子寮の自分の部屋に一瞬立ち寄った俺は、椅子を暖める間もなく豚を探しに出かけた。

幸いまだ授業までは時間があるので、ある程度の時間の余裕はある。

そんなこんなで半月ぶりに歩く学院の廊下なのだが、やたらと他の生徒から奇異の目で見られた。

久々に顔を見せたからだろうか？　それとも別の理由からだろうか？

……さっきのエントランスでの会話のせいではないと信じたい。

俺が通り過ぎた後、生徒達が寄り集まってひそひそと話しだす。

わずかに聞こえる声を聞いてみると、

「お元気そうじゃないか、なんだったんだ？　あの重病説とか。」

「いや、俺はもう亡くなったって聞いてたぞ。女子が集まって泣いてたから。」

「あの1年の巨乳ちゃんは、必死にそんな事ないって否定してたらしいけど。」

「ラ・テオフラストゥス領出身のあの子か？　あの子の乳はマジで素晴らしいな。」

ん？思ったより大事になってたらしいな。

その内容から分かった事は、どうやら俺は勝手に重病人にされていたらしい。

俺がじぃにわざと流してもらった情報は、

「若様は、こちら（実家のことね）にお帰りになった際に、少しお風邪を召されてしまいましたので、しばらく大事を取り学院をお休みさせていただきたく思います。」

コレだ。

さらにアニーが必要以上の心配をするといけないので、じぃに伝言

を頼み、
「ちょっと父上と話し合わなきゃならないことがあるから、しばらく学院を休むけど何の心配いらないから。」と伝えてもらっておいた。

確かに学院在学中に、頻繁に家に帰る俺はまさしく異常だ。

何の為の寮生活だって話になるからな。

しかし、学院とワトリアの街の距離的要因と、ポーションの作成や各種俺でしか出来ない事の処理などの為に、俺が毎週週末に実家に帰っている事は、学院の人間ならそれほど深く調べることなくその事実を知る事ができたはずである。

実は俺自身はあの襲撃事件の黒幕が豚の確率は、今では正直半々だと思っている。

最初は１００％奴の差し金だと思った。

状況から考えて、ああゆう馬鹿なことをしそうな奴ＮＯ１は間違いなく奴だろうが、ただ可能性を追求して行くと、他の可能性も少なくはないことに気づいた。

これは一つの例に過ぎないのだが、アニーが話してくれたように、ラ・テオフラストゥス領は今、他の地方や領地では考えられないほどの急激な発展を遂げている。
その秘密を聞き出せれば、と考える人間が俺を人質に……と考える人間がいてもおかしくはない。

そんな状況で、毎週夜もふけてからたった一人（俺自身もそう思っ

てた。）で、ワトリア～学院間の夜道を走る１２歳のラ・テオフラストゥスの一人息子。

内情を知ってるごく一部の関係者からすると、たった一人とはいえ、あのおっさん達の失敗でも分かるように、俺を捕まえたり、殺したりするのが至難の業である為に、ほぼ単独行動を許されているだけなんだが。

Ｃグレード冒険者であるイナ先生からも、完全に逃げに回った俺を殺すのはかなり難しい、殺さずに捕らえるのは不可能に近い、とのありがたいお言葉をいただいている。

最悪、冒険者である俺は、自殺すれば多少のペナルティ（経験値が１０％程減る、はず。）はあるものの、最寄の町の神殿に移動後、蘇生するので実際のところ誘拐は無理なんだが。

試すつもりはないけどな！絶対！

但し、表面上見える情報から判断すると、誘拐してくれって言わんばかりだし。

つまり一般生徒や学院関係者が、故意か否かはさておき、俺の情報を外部に流した事で、あの襲撃が起こった可能性を提示したじぃの指摘を、俺も父上もイナ先生も否定できなかったからだ。

俺よく自分が貴族の子供って事を忘れちゃうんだよな。

まぁ怪しい謎の男うんぬんに関しては、既にエルトリンシティにいるシランに動いてもらっているので、もし今回尻尾を出さなくても、今後同じことをしようとすればとっ捕まえられる状況は出来ている。

まぁそんな感じで既に対応策はうってはある。

あと先輩方、アニーに（とその乳に）半端な気持ちで手を出した場合、あの子ももう『うちの子』ですから、俺が殺しますからね。

……物理的、社会的にな。

結婚を前提にした真剣交際なら、手をつなぐだけなら許してやってもいい。

それ以上は殺す。

ていうか俺はどこの父親だ。

本当は、心配していただろうアニーに顔を見せた安心させてやりたいところだが、さっさと豚君を見つけないとな。

まったく不必要な時は俺の周りをうろうろしやがるくせに、必要な時にぜんぜん見当たらないのはどういう了見なんだろうな、あの豚。

そう思いながら食堂、授業棟などを見て回っていると、いた。

正しくはあのムカツクかん高い声が聞こえた。

場所は、貴族用学生寮から授業棟への連絡通路だ。
これ幸いと、俺は物陰に隠れて話を盗み聞く事にした。
豚は相変わらずの甲高い声で、ブツブツ独り言を言ってやがる。

「どうして、奴が学院に戻ってきている？
もしかして失敗したのか？　では何故今まで学院に出てこなかった？
くそ、ここでは何も分からん！」

そう言いながら誰かを蹴るような物音がして、痛みに耐えるような女性の声が聞こえた。

あぁ、見えないから分からんが、おそらく蹴られたのは入学式翌日の騒動で俺に切りつけてきた栗色でボブカットな奴隷のお姉さんか。
可哀想に。

何とかしてやる方法があればいいんだが……。

そして。はい確定。

あまりにも予想通りで逆にビックリだわ！
色々みんなで頭つき合わせて可能性を考えたあの時間を返せ！豚！

まぁいい。もう済んだ事だ。

さ、て、と、それじゃあ、どうこの落とし前をつけてやるかな？

とりあえずアイツに相談するか。

気配を悟らせないように気をつけてその場を離れた俺は、腰のポーチからの念話石を取り出しながら、現在使われていない授業棟の空き教室に滑り込んだ。

◇◆◇◆◇◆◇◆

――――シラン、聞こえるか？俺だ。

俺は念話石を握り締めて、腹黒男との呼びかけを開始する。

すると間もなく反応があり、あの線と線が繋がる独特の感覚が俺の体を包む。

――――はい、ジオ様。お待ちしておりました。裏がお取りになれましたか？

――――あぁ。黒幕は豚だ。俺が隠れて聞いているにも関わらず、ベラベラと独り言で自白してくれたよ。

そう思念を送った俺の顔も、受け取ったシランの顔もおそらく同じような顔――――楽しくて仕方ないワルイ笑顔になっていたと思う。

――――――それであの豚をどう始末するのがいいと思う？　さすがに殺すのはまずいから、事故か何かに見せかけて再起不能に追い込むか？

俺がそう思ってシランに問いかけると、そこに返って来たのは予想外の答えだった。

――――――ジオ様。失礼ながらそれはあまりにももったいないお考えでございますな。

## 第八話　あの後イロイロ大変だった（後書き）

ここで引きでございます。

いろいろあって予定変更です。

腹黒無双はまた今度で。

ご意見、ご感想、誤字脱字の指摘など幅広くお待ちしております。

## 第九話　忙しくなりそうで大変だった（前書き）

今回はかなり短いです。
次回から休暇に入るので、そちらで暴れます。

あと活動報告に書いていますが、腹黒無双は後日となりました。ごめんなさい。

## 第九話　忙しくなりそうで大変だった

ジオだ。

今シランとの念話が終わったところなんだが、もう既に授業を受ける体力なんぞ1ミクロンたりとも残っていない。

もう無理っす。

俺はそんなにタフじゃない。

シラン黒い……、アイツ黒過ぎる……。

アイツはヒューマンじゃないと思う。腹黒ドSという名の新しい種族だ。

もしくは地獄生まれのヒューマンなんだ、そうに違いない。

ダウンOウンの浜Oゃんもビックリだぜ……。

さすがに今度ばかりは心から豚に同情するよ。自業自得とはいえな。

哀れだ。せいぜい上手く、そして滑稽に踊ってくれ、豚君。

同情を禁じえない……。

そしてアイツは俺の命を何だと思ってやがるのか……。

一応俺あいつの主っていうか、雇用者っていうか、そんな感じの存在だよな！

容赦がないにも程があるわ！もっと大事に扱えや！

まぁいまさら愚痴を言ってもしょうがない。

理解しちゃったんだから。

さて、となると早急に強くなる必要があるな。

正直あんまり猶予がない。

微妙にギロチンの刃が俺の頭上に見える気がする……。

コワイコワイ、刃物コワイ。

さて強くなる為に俺がすべき事は２つ。

まず転職、いい加減決めないとな。

ウィザードは決まりとして、ウォーリアかレンジャーか。

ロマンかリアルか、だな。

その後のレベル上げは……アレをやるか。

予定よりは随分前倒しにはなるが、もう準備は整ってるし。

もうちょっと入念に実験をしてからにしたかったけどな。

もしミスったら確実に死ぬから……。

やだな～死ぬの。生き返るけどさ～。

ちょうど半月後に、学院は１ヶ月間の長期休暇に入る。

それを使って戦士職、魔法職の転職。

そして超高速レベル上げだ。

ついでにドロップアイテムでぼろ儲けかな。

本当は今度の長期休暇は、アリアたちとゆっくり遊んでやるつもりだったんだが……、仕方ないな。

４人とも泣くだろうな……、埋め合わせの方法考えないとな……。

テト？　あぁ今頃じぃにしごかれながら、執事の勉強とかで大忙しだろうから、あいつに遊んでる暇なんかないよ。

さて……、部屋に行って寝よう……。精神的に限界……。

シランの野郎……オボエテヤガレ！

復学初日からサボリでいいのかって？

仕方ないじゃん……、もぅ無理……。

◇◆◇◆◇◆◇◆

あの襲撃事件の後も、俺は今までどおりのぐうたら学生生活を続けた。

あのシランとの念話の翌日、虚勢だろうなやたらと胸をいからせて歩く豚と通りすがった時に、ニヤ～と笑ってやったら顔を真っ青にして震えながら、回れ右してどっかに走り去りやがった。

ありゃ、もうちょい追い込んだら木に登っただろうな。

豚も追い詰めりゃ木に登る～ってか？

その後豚は、俺の前ではカチコチに固まるようになり、俺のいないところでは周りに当り散らすようになったらしい。

当り散らされる周りのみんなごめんな。ちゃんと卒業までには何とかするから、もうちょっと我慢してくれ。

……豚、まぁ今は生かしといてやるから、せいぜい今の間に人生

楽しんでおくんだな。

あとはクリス嬢は相変わらずプリプリ怒ってるし、ヘルガー少年も変わらず俺の事を観察するように見てくる。

まぁ変わらないな。

あとアニーには、あの後ちゃんと謝った。心配かけてゴメンネって。

「とんでもありません！」と顔を伏せて、真っ赤になったアニーは新しい妹が出来たみたいでかわいかったな。

おとなしくて、真面目で、かわいらしくて。女の子らしい女の子っていう感じだな。

うちの４人は……、ほらいろいろと過激なとこがあるから。

まぁそこがかわいいとこでもあるんだけどね。

そんなこんなで入学から約５ヶ月、授業はだんだんと実践的にはなってきた。

とはいえまだ魔力の感じ方、コントロールの仕方といった初歩の初歩であるために、俺には暇で仕方ない。

正直俺、言葉が話せるようになったときには、既に《ファイアーボール》使えたと思うし。

さすがに試さなかったけどね。

そしてアニーの『アルケミストになりたいんです』発言を受けて、俺は彼女の『魔改造』計画を発動した。

とりあえずまずポーション作りからだ。

今の間にスキルではなく、自分の手でもポーションが作成できるようにしておく。

どうやらスキルでポーションを作るだけの奴らに比べ、きちんと自力でポーションを調合できる人間の作るポーションはいいものになるみたいである。

まぁこれができるようになれば、まずＭＰが無くなるまでポーションをスキルで作成、その後ＭＰの自然回復を待ちながら普通にポーションを調合、回復したらまたスキル発動、という無限ローテーションが組めるようになる。

上手にポーションが作れればそれだけで食いっぱぐれる事がないのは、俺のこれまでの収入が証明しているから、まずアニーにはこれを覚えてもらっている。

そんなわけで毎日学生棟にある調合室でマンツーマンで教えているんだが、何と言うか、うん。

体が二次成長期に近づいてきたせいなのか、今まで以上に女の子が気になるようになってきた。

そこにロリの癖に、巨乳を超える巨乳であるアニーと毎日密室で二

人きり……。

俺はロリじゃねえええええええええええ、と叫んでみても

いつまで耐えられるか、正直自信がない。

マリエルがいなかったら襲ってたかも、いや実際はやらんけどさ。

そのくらいやばいわ、あの乳は。

あと相変わらずアニーはいろんなものにぶつかりがちだ。

乳がでかすぎてバランスが悪いのかとも思ったが、さすがにそれは

発想がエロ親父過ぎたので却下。

ん？　いろんなものにぶつかりがちで、顔を良くしかめてる。

……これはもしかして。

「アニーちょっとこっち向いて。」

「はい？」

アニーは最近やっと俺に打ち解けてくれるようになってきた。

最初は、「若様お手ずから何か教えていただくなど滅相もない！」

とか言っていたが、今では何とか慣れてくれた。

「これ何本に見える？」

指を数本立てる俺。眉根にしわを寄せてじ～～～とそれを見つめるアニー。

「え～～と、3本ですか？」

残念、2本だ。

なるほど、道理でいろんなものにぶつかりがちだと思った。

目が悪いんだこの子。

ん～となると眼鏡だが……。

ついでだし、休み中に手に入れてくるかな？

そしてそれから半月後、遠くに見える高山にうっすらと雪がかかり始める頃、学院は一ヶ月の長期休暇を迎えた。

それにしても一ヶ月か……。

少しはゆっくりしたいもんなんだがな。

◇◆◇◆◇◆◇◆

今、俺は実家からの迎えの馬車で、実家に帰っているところだ。

目の前には、アニーがいる。

彼女がこの休暇中は実家には帰らず学院で過ごす、と言ったので、じゃあうちにおいで、と誘ったわけだ。

まぁもちろん最初は固辞された（御領主様のお屋敷に、私ごときが！って感じで）が、農園に行けばいろんなポーションの材料も見ることができるし、学院で習った事をうちの双子に軽く教えたりして過ごせばいい、といって何とか納得させてつれてきたわけだ。

まぁ、馬車一つ乗せるのも大変ではあったが、なんとかここまでこぎつけたぜ。

アニーは本当に真面目でいい子なので、うちの領地の子でなくても俺は仲良くしていきたいと思っている。

あとはアルケミストになろうって人間は、こっちでも貴重なのできちんと囲い込まないとな。

青田買いって大事だと思う。

他の有望そうな学院生も取り込むか？　ヒーラー（パーティにおける回復役）やバッファー（パーティにおける強化魔法役）の素晴らしさを話して、今から洗脳しようかな……。

正直一番分かりやすい転職先であるソーサラーは、わざわざ育てなくても数が多いからな。

閑話休題。

それにしても……。

「アニー、そんなに緊張しないで」

「ひゃい！」

アニーはうちに行くことが決まってからずっとこんな感じ。

どうも父上に挨拶するのに緊張しているらしい。

大丈夫なのにな～。

父上はちょっと親馬鹿過ぎるところと、訓練の時にトリガーハッピーならぬボマーハッピーなところを除けば、割と普通だから。

「アニー、あのね、俺はこの休暇中めちゃくちゃ忙しいんだ。

もちろん俺がいる時は可能な限り、一緒にいるようにするけど、あんまり長い時間は無理だと思うんだ。

だからさ、うちにいる女の子達を紹介するから、その子達と仲良く1ヶ月過ごしてくれると助かる。

ポーションの練習とか魔法の訓練とかは、自由にやってくれていいから。

父上も教えてくれると思うよ？」

「ひゃい！かしこまりました！」

父上の名前を出しても変わらないアニー。

ここまで緊張していると、イジメたくなるな。

「アニー、目をつぶって。」

「ひゃい！え？目ですか？」

「そそ、目つぶって。」

そうすると顔を赤らめながら、目をつぶるアニー。この馬車暑いのか？

まぁいいや、そう思いながら俺は目の前に座っているアニーのほっぺに手を伸ばすと……。

「ひゃう！？」

アニーのほっぺを両手でぎゅっとつぶした。

あっちょんぶりけ！な顔になるアニー。いや、おもろい。

「わかひゃま、ひどいでひゅ、おてをおひゃなしくだしゃい！」

アニーさんから苦情が出たので、ぷにぷにのほっぺから両手を離す。

「ひどいです！若様！どうして私の顔をぎゅってするんですか！」

「ん～アニーが緊張しすぎであんまりかわいらしかったからさ～、ちょっとイタズラしたくなっただけ」

まんまるほっぺをぷく～と膨らませてお怒りをあらわにするアニーさん。

やめて、ロリをそれ以上強調しないで！かわいいけど、腹が痛い！

あぁ、そんなことを言ってる間に家に着いたらしい。

アニーにとっては、のんびりとした休暇、俺にとっては忙しすぎる休暇がこれから始まる。

まぁ今日一日だけはゆっくりさせてもらうとしよう。

「アニー着いたよ、ようこそ、ラ・テオフラストゥス家へ。」

そうアニーを促して、ドアを開け外に出た俺を、最初に出迎えてくれたのは「ジオちゃんお帰り～～～。」という母上の声と抱擁。

母上ストップ！お客さんいるのに恥ずかしいから！

それを唖然としながら見つめるアニー。

こんなことでそこまで驚いてると、うちでは色々大変だよアニー？

こりゃアニーにとっても大変な休暇になるかも？

## 第九話　忙しくなりそうで大変だった（後書き）

ご意見、ご感想、誤字脱字の指摘など幅広くお待ちしております。

初掲載からようやく１ヶ月、皆様ありがとうございます。

この休暇中に戦闘面でのチートがお目見えします。

化学に詳しい方でＭＭＯＲＰＧ経験者の方なら何をやるか想像がつくかもしれません。

既に伏線は張り終えてますので、探してみるのもお勧めです。

分かった方は黙っててくださいね？

## 第十話　長期休暇は大変だった　？（前書き）

お待たせいたしました。

ちっとも休めない休暇の始まりです。

## 第十話　長期休暇は大変だった　？

ん？　なんで俺実家のベッドで寝てるんだろう？

あ～そうか。今日から1ヶ月の休暇で、昨日アニーと一緒に帰ってきたんだったわ。

学院のベッドと違い、大きくて柔らかなベッドは俺のお気に入りだ。ベッドの左側にあるバルコニーにも通じた、大きな窓から飛び込む朝日がとてもまぶしい。

まだ頭がぼ～としている。

自慢じゃないが、俺は朝がすこぶる弱い。

この世界には電灯なんてものは存在しないので、基本夜明けとともに人々の生活は始まり、夜更けとともに彼らは夢の世界へと旅立つのである。

但し、それは極めて普通の生活を営む一般人の話。

一般人ではない俺の夜は、長い。

実家にいるときは、2日に一回行われるイナ先生の地獄の夜訓練。

内容は想像にお任せするが、その予想の3倍は地獄だと思う。

さらに日課となっている夜のポーション作りのためだ。

俺の金儲けは、いまだポーション作りがベースになっている。
その為俺は、魔法のカンテラ３つで部屋を照らしながら、毎日ＭＰが切れるまでポーションの作成をしている。
大量発注があったときなんて、日が昇るのを横目にベッドに入るのさえザラ。
そんな労働基準法を楽勝で違反している１２歳なのだ。
あと数日で１３歳だが。
閑話休題。

つまり、俺は寝ると日が昇りきってもなかなか起きない。
寝ている間に何かあってもほとんど気がつかない。
あ、危険に関するものは別な。ソコはソレだからさ。
そして、起きてもすぐに頭なんか働かない。
だから。

……こういうことになる。

体を起こそうとした俺の動きをベッドに縫いとめたのは、俺の両腕

を抱きしめるメイド服に身を包んだ瓜二つの赤毛の少女が左右に一人づつ。

添い寝のつもりなのか、ぎゅっと抱きついて放そうとしない。

二人とも幸せそうな顔して寝ている。

俺は体を起こすのをやめ、諦めの言葉とともに溜め息をはいた。

「今日はアリアとエリアか……」

ある意味実家に帰ってきたのを実感するなぁ、と二人の寝顔を眺めながら思わず笑みを浮かべてしまう。

学院入学後なのだが、実家で寝ている日の朝、アリアたち４人が俺にこういうことをしてくるようになった。

彼女達曰く、「埋め合わせです！」、だそうである。

どういうことかと思い、マリエルに聞いてみたところ、「存じ上げません♪」とニッコリ笑って（？）言われてしまった。

……ちょっと怖かったのは内緒だ。

さて、冷静に頭が回りはじめたところで質問。

俺はどうやって起きればいいのでしょうか？

それから15分程度経って、リューネとシルウィの乱入によって開放された時には、俺の腕の痺れは、ビリビリのバリバリで、さらにそこから10分ほど腕がまともに使えなかったことは言うまでもないだろう。

◇◆◇◆◇◆◇◆

一ヶ月。長いようで短い自由に動き回れる一ヶ月である。

シランの悪企みによって、急いで強くなる必要に迫られた俺は、ついに先延ばしにしていた転職に手をつけることにした。

いや、せざる得なかったんだが。

魔法職はいい、ウィザード一択だから。

ちなみにヒューマン魔法系基本職から派生する職業は2つ。

《ウィザード》と《クレリック》だ。

《ウィザード》は、攻撃魔法の扱いに優れた魔法職であり、パーティでの役割は《ダメージディーラー》となる。

一方は神の声を聞くことによって、回復魔法をはじめとする神聖系魔法を扱うことが可能になった魔法職であり、その真価はパーティプレイ中に発揮される。

役割は当然（ヒーラー）であり、この段階でも多少の強化魔法が使えるようになるため、《バッファー》としての役割も果たす。

あぁ、なじみのない言葉かもしれないな、《ダメージディーラー》とか《バッファー》とかは。

じゃあ、ここでＭＭＯＲＰＧにおける用語説明だな。

ＭＭＯＲＰＧでは《Ｎｅｗ　Ｗｏｒｌｄ》に限らず、職業毎に役割（ロール）分担が決まっている事が多く、職業とは別にその役割ごとにも、名称が存在する。

まず《タンカー》。

これはナイト系職が主に務める事になる、敵の攻撃を受け止める役割の事だ。

敵を引き付けて耐え、仲間が攻撃に集中できる状況を作るのが主な仕事である。

次に《ダメージディーラー》。

これは読んで名のとおり、パーティ内で『ダメージをディール（与える）』役割の事。

物理魔法、直接間接問わず、攻撃系の職業は基本これに属する事になる。

とにかく敵にダメージを与えて殲滅する事が仕事だ。

次が《ヒーラー》。

これも分かりやすい。パーティの回復役であり、その重要性は一般

のＲＰＧをやった事があるなら簡単に理解できると思う。

パーティでの役割は勿論、パーティメンバーの回復である。

ここからが分かりにくい。

まず《バッファー》。

《バッファー》はパーティメンバーの強化を担当する役割で、攻撃力や防御力といった分かりやすいものから、盾回避率上昇や属性攻撃力付加といった分かりにくいものまで、魔法による強化をパーティメンバーに施す事ができる。

そう、地味な役割である。

しかし馬鹿にしてはいけない。

仮にまったく同じ職業、装備のアバターを2人用意したとしよう。

片方がレベル１０、片方がレベル２０として、レベル１０のほうにのみこの補助魔法一式をかけて、１対１の戦いをした場合、よくて相打ち、悪くするとレベル２０のほうが負けるほどの差が生まれるのだから。

パーティ同士での対決になれば、その差はさらにハッキリする。

《ヒーラー》と並ぶ重要な役割、それが《バッファー》である。

そして実は細かく言っていけば、まだまだあるのであるが、大きく分けた場合これが最後の役割となる。

それが《デバッファー》。

これは《バッファー》以上に、地味かつ普段の戦闘では活躍しにくい役割である。

”デ・バッファー”の名の通り、敵の能力を下げる事に長けた職業がこなす役割で、主に強敵との対決や、ＰｖＰのような対人戦闘においてその力を発揮する。

ただ、通常の狩りにおいては彼らの出番はあまりない。

《デバッファー》を一人入れるよりも、《ダメージディーラー》を増やしたほうが狩りの効率が上がる事が多いからだ。

しかし、彼らの力が『ハマる』場面において、これほど怖い存在もいないというなかなか難しい役割なのである。

長々と語ってしまったが、これで基本は分かってもらえたと思う。

ということで、アルケミストを目指す俺にとっては、派生元であるウィザードになることは、もう悩む事のない絶対の真理であるから問題はない。

（ちなみにウィザードから転職できるのは４つ。

火力型魔法職ソーサラー、召喚魔法職サマナー、弱化魔法特化魔法職カースメーカー、そして特殊魔法職アルケミストである。）

問題は、戦士系職。

前にも語ったとおり、ソードファイターに繋がるウォーリアか、ローグに繋がるレンジャーか。

ロマンかリアルか。

決断の時は！
１０年の時を超え！
今まさに、ここに！
「若様！考え事もよろしいですが、お食事の後になさいませ！
せっかくの温かいお食事が冷めてしまいます！」
……朝食の給仕をしてくれていたマリエルに叱られたので、１０年越しの決断はあとにして生ぬるくなった朝食を食べ始める俺であった。

◇◆◇◆◇◆◇◆

朝食を終えた俺は、マリエル達に、客人であるアニーをいろんなところに案内するように頼み、俺は早々に家を出る事にした。
あんまりモタモタしてたら捕まってしまうからな、母上とかアリアたちとかに。
あと昨日アニーをみんなに紹介した時に、男女問わずみんな胸をガン見してたのには、思わず笑った。
そうだよな～、『アレ』規格外だよな～。

そんな事はさておき。

最初の目的地は父上のところ。

父上に話があるなら、家で話せば良さそうなものではあるが、今日ばかりはそうはいかない。

ということで今俺は、父上の仕事場であるワトリアの街の魔法ギルドにいる。

そう、ウィザードへの転職を始める為に最初に話しかけないといけない人が、うちの父上なのだ。

「ということでウィザードになりますので、さくっと転職クエストを始めてください。」

「さくっとって……まぁ、お前はレベルは２０を超えているし、今更お前に試しの試練が必要とは思えんのだが……、ルールはルールだな。

では、ジオ。ウィザードの試練を与える。」

そういって話し始めた父上の話だが、俺は右から左に聞き流していた。

だって全部知ってるもの。

何回やったと思ってんのさ！

自分では１回だけだが、知り合いや新人ギルドメンバーの手伝いを

含めれば、両手両足の指でも足りんどころかその2倍はやってるのだよ！このクエスト！

ぶっちゃけタイムアタックできます。

流れとしては、

ワトリアのテオフラストゥス（父上）と会話　＞
エルトリンシティのエンデル（魔法ギルドのＮＰＣ）と会話　＞
ワトリアに移動　＞
デフ盆地で魔法職系イアナゴブリンを倒し、クエストアイテム『魔術師の頭骨』を５つ入手する　＞
エルトリンシティのエンデルと会話　＞
カイゼラ湿原（エルトリンシティから南に行ったところにある狩場）で魔法職系カイゼラリザードマンを倒し、クエストアイテム『魔術師の心臓』を５つ入手する　＞
エルトリンシティのエンデルと会話　＞
アイエオーク駐屯地（エルトリンシティから東に行ったところにある狩場）で魔法職系アイエオークを倒し、クエストアイテム『壊れた魔術師のワンド』を５つ入手　＞
エルトリンシティのエンデルと会話、クエストアイテム『魔術師の証』を入手　＞
各町の魔法職系ギルドマスターで　「転職をする」　を選択する。

となる。

推奨レベルは１９以上となっているが、クエスト対象となる魔法職モンスターの中で、最初のイアナゴブリンメイジ、シャーマン、ウィザードは全て家族型モンスター（単独行動せずに、常に一定の組

み合わせで行動するモンスターのこと）の為、ソロでクリアしたい場合、最低でも２０以上のレベルとＤグレード装備が必要な高難度クエストである。

ていうかソロじゃ基本無理なんだよな、このクエスト。

と考えているうちに父上の話が終わった。

では旅立ちのご挨拶だな。

「父上、良く分かりました。頑張っていってまいります。

あとエルトリンシティのギルドマスター様に、連絡を入れておいていただくと助かります。何しろ俺子供ですから。」

あ、父上がめっちゃ苦笑いしてるぜ。

「子供、まぁその通りなのだがな。

実情を知っている私としては、我が息子ながら何と言ってよいものか……、分かったエンデル殿には、私から伝えておく。

ところでジオ、今日は家に帰ってくるのか？」

「いえ、移動を含めて、３日で転職を終わらせる予定ですので、その間はエルトリンシティの宿を利用しようかと。」

そう俺の場合このクエストで一番めんどくさいのが、移動だ。

まだ、『カイゼラ湿原』や『アイエオーク駐屯地』はまだ行った事がないのでゲートキーパーで直接飛べないのよね。

「……そうか。あれを三日でやるつもりなのか……。

いや、もう何も言うまい。

では一度帰って必ずイナを伴って行くのだぞ。

あと母上にきちんとお前から説明してから出かけるように！」

そう、クエストの予定を3日にしたのには訳がある。

なんというか、4日後は、この世界での正月に当たる日であり、俺の生まれた日でもあるんだ。

おぅぅ……、出発前に超高難度クエストが発生したぜ……。

母上の説得とか、マジでドウシヨウ？

◇◆◇◆◇◆◇◆

父上との話を終え、ウィザード転職クエスト開始の許可と、まったくもって受けたくもなかった超高難度クエスト『母上の説得』を受けさせられた俺が次に向かったのは、魔法ギルドの隣にある建物、ワトリアの戦士ギルドである。

さて、運命の時だ。

両開きの大きな樫のドアを開くと、そこには多数の戦士たちの姿。
大きな酒場ほどの広さのフロアに、多くの冒険者の戦士たちがひしめいている。
いい意味で野蛮で、そして豪快な空気がそこには満ち溢れていた。
そんな中で目当ての人を探して、目線を走らせている俺に大きな声で話しかける大男が一人。
「よぅ！ジオの坊主！どうしたこんな昼間に？　親父さんに用があるなら隣だろうが？」
と今俺に声をかけてきたのが、ウォーリア転職クエスト開始の為の人物、モルゲンデーレさん。
筋骨隆々の赤毛でヒゲ親父で、いかにもウォーリアって感じの巨漢である。
もちろん魔法ギルドのギルドマスターの息子である俺とは小さい頃からの知り合いで、基本気のいいおっさんなんだが、何かにつけてよく酒を飲ませようとするどうしようもない酒飲み親父だ。
ちなみにＢグレード、レベル５３のバーサーカーらしい。
まさに見たまんま。
そして得意武器は間違いなく両手鈍器だな。
今も立ってる場所の脇に、一般成人男子のくらい大きさであるＣグ

レード最強の両手鈍器、アイアンブレイカーが鎮座してるから間違いない。

ちなみに単純な攻撃力は、俺のミスリルダガーの約2、2倍くらい。

さらにバーサーカーの両手鈍器適正と、おっさん自身の攻撃力が乗る。

……あんなもんかすっただけで死ぬわ。

そして。

「はぁ～い、ジオちゃん。どうしたの？　もしかしてお姉さんに何か用かしら？」

この軽い感じで声をかけてきた女性が、レンジャー転職クエスト開始の為の人物、アスナイさんだ。

赤毛のショートボブが非常によくお似合いの美人のお姉さまなんだ。なんだが！

イナ先生と仲が良いらしく、よく夜訓練にお越しになって、俺を極限まで追い込んでくれるとてもとても怖いオネエタマなのです……。

《Ｎｅｗ　Ｗｏｒｌｄ》時代、俺は魔法職だったので、まったく接触のない人物だったんだが……、ホントにこんな性格のＮＰＣだったのか？　と思わず突っ込みを入れたくなったのも今では遠い昔の思い出だ。

しかも実力的にもレベル４９、Ｂグレード直前のローグ……。

マジでステルス怖い。

夜訓練の時、何回後ろから刃物突きつけられながら「はい、これでまた一回死んだよ～♪」って言われたか……。

いやね、マジで短剣職に背後取られたら即死亡だから。

冷や汗止まんないって。夏にお化け屋敷とかいらないもん、絶対。

なんで俺の周りはこうもドＳが多いのか……、何だ？　親孝行が足りんのか？　それともご先祖さんの供養が足りんのか？

どっちのだ？　中村家か？　テオフラストゥス家か？　どっちだぁぁぁぁぁ！

ハァハァ……すまん、取り乱した。

いやね、だからね。

何が言いたいかというと。

俺の戦士系職の転職先は……。

トラウマ回避を選択するしかなかった。

「アスナイさん、転職クエストお願いしまっす！」

◇◆◇◆◇◆◇◆

ということで、俺が選んだ転職先はレンジャー。

男のロマンより、安全を取ったこの哀れな男のことを笑ってやってくれ、ブラザー。

そうやって自分のヘタレ具合に落ち込んでいると、アスナイさんがニコニコ笑って俺に声をかけてきた。

「そっか～よしよし。ジオちゃんやっとこっちに来る気になったんだね？

偉いよ～頭なでたげる。よしよし。

……まぁもしもあのヒゲ親父のとこいってたら、ヤってたけどね♪」

目の前のニヤニヤ笑うお姉さんのその一言に、背中に氷水をぶっ掛

けられたような怖気が走る。

え～と、何をヤるんでしょうか？

危なかった……どうも俺は紙一重で命の危機を回避したらしい、ありがとう数分前の俺！

よかった！レンジャー選んでおいて！

だってこの人ヤるといったら”殺る”人なんだもの！

肩を落として軽くがっかりしているモルゲンデーレさんが、目の端に写ってるけどそんなの気にしていられない！

いのちだいじに！

「じゃあ、ジオちゃん。

今からレンジャーの試練について話すね。

レンジャーたるものは人を知り、森を知り、獲物を狩る方法を知り、そしてあらゆるものから自分の身を守る方法を知らなくちゃならないわ。

そのために、まずは、獲物を狩る方法から学びなさい。

この『レンジャー試練の短剣』と『レンジャー試練の弓』を渡すから、短剣でデフ盆地入り口周辺にいるパイソンを5匹狩って、『パ

イソンの蛇皮』を5枚、弓でワトリアから西に行ったところにある『マイサの森』に行き『ブラウンベアー』を同じく5匹狩って、『茶熊の毛皮』を5枚。

それぞれ集まったら、私のところに持ってきなさい。次の指示を出すわ。

あと注意点が一つ。ちゃんとそれぞれの指定の装備で止めをささないと、アイテムは手に入らないからね。

分かったかな？」

俺が神妙な顔で大きく頷いたら、アスナイさんは、クエスト用装備である『レンジャー試練の短剣』と『レンジャー試練の弓』を渡してくれた。

そして俺はお礼を言って、機嫌良さそうに手を振るアスナイさんを背に戦士ギルドを出た。

あ～しんど。

胃がまた痛くなったぜ……。

あの人もマジで胃に悪いんだわ、いつも。

さて、転職クエスト『レンジャーの試練』か。

さすがに自分でやるのは初めてだ。

まぁ自分でやった事がないだけで、1次に限らず転職クエストは一応全種族全職業全クエストを一度は手伝いでやってるから、段取りは覚えてるんだけどな。

散々暇な時に攻略サイトでも見たし。

さてと、クエストは受けた。

じゃあ、超高難度クエストをクリアしに行くとしますか……。

あ～、まだ昼前なのに、やたらめったら胃が痛い。

家帰ったら、俺オリジナルの胃薬ポーション（3年間の研究で完成したオリジナルポーション、効果はばつぐんだ！）飲も……。

◇◆◇◆◇◆◇◆

「こちらでございます、若様。

……ご健闘をお祈りいたします。」

そう言って母上のいる部屋に案内してくれたじぃの声をどこか遠くに聞きながら、目の前の

開けなれたドアがやたらと重く感じてしまう。

そうか、助けてくれる気はないのか、じぃ。

薄情者！

……よし、いくか。

「ただいま帰りました、母上。

それでですね、この休暇なんですが俺早急に強くなる必要が出来まして、あのその、ほとんど家に入れないと思うんです……

許してもらえませんか？」

部屋に入って挨拶するなり母上に先制パンチ！

言いにくいことだから、一気に言いました！

そうしたら、目の前でキョトーンとしていた母上の顔がじわじわと泣き顔になり、……そして泣いた。

「ジオちゃんのばぁかぁぁぁぁ！

私のこと嫌いになっちゃったのね！せっかくの休暇だからいっぱい仲良くしようと思ってたのに！

もぅいいわ！一人で強くなって来たらいいじゃない！」

そういって座っていたソファのクッションに顔を埋めて泣く我が母、３一歳。

うっわぁ～～～、やべぇ……母上マジ泣きだよ。

頼む、誰か助けてくれ。

今日俺こんなのばっかかよ。

マジで転職クエストとか目じゃないな。

これに比べたら、《ハイネオンの探索日記》（《Ｎｅｗ　Ｗｏｒｌｄ》内で最もマゾいと評判だったクエスト。俺は一応クリアしたけどマゾかった……）のほうがましかもしれん……。

あぁ～どうしたら母上泣き止んでくれるかな……、助けて神様！

その瞬間、まさに天啓というしかないひらめきが、俺に！

ありがとう！神様！

……何となく、幼女ボイスが聞こえた気がしたのは、もちろん華麗にスルー。

聞こえねぇよ！

「母上！休みの前半を使ってさっさと強くなってきますので、後半はみんなでエルトリンシティに買い物に行きましょう！

母上も長らくあちらに行ってないでしょうし、俺も母上と旅行したいかな～って！」

その言葉に反応して、母上の顔がおずおずと上がる。

「ほんと？　嘘つかない？　私とお買い物してくれる？」

「します、します。喜んで母上をエスコートいたしますよ。」

俺がそういうと、母上がニコ～と笑って俺のほうに駆け寄り、そして抱きしめてきた。

「分かったわ！約束よ、ジオちゃん！

そうと決まればこうしていられないわ！お支度を始めないと！

サバン！サバンはいますか？」

途端にはしゃぎだす母上に心から安堵の溜め息を漏らしながら、自分で仕掛けたタイムリミットの短さにため息しか出ない俺だった。

――――――クエスト『母上の説得』完了　報酬　理不尽なタイムリミット　残りあと１４日

さてと、じゃあやっとこさ転クエの始まりだな。

## 第十話　長期休暇は大変だった　？（後書き）

いかがだったでしょうか？

ご意見、ご感想、誤字脱字の指摘など幅広くお待ちしております。

しばらく3日に1話ペースで頑張りたいと思います。

## 第十一話　長期休暇は大変だった　？（前書き）

すいません、さらに引っ張ります。

申し訳ありません・・・・・。

## 第十一話　長期休暇は大変だった　？

戦士ギルドから出た俺は急いで家に戻り、帰宅の挨拶もせず部屋に飛び込んだ。

マジで時間がない、急がなくては……。

一応、母上から今日を含めて2週間のモラトリアムをお許しいただけたとはいえ、ソレはソレとして、3日後、つまり年が新しく変わる日には、俺は『絶対に』家にいないといけない。

このことについては前にも少し言ったと思うが、その日が新しい一年の始まりだから、というのが一つ。

そして、その日が『今の俺』がこの世界に生まれた日だから、というのがもう一つである。

普通の家庭では、家族で新しい年を迎えられた事を感謝しながらつつましく過ごす日らしい。

そしてこれは貴族も例外ではない。

しかし我がラ・テオフラストゥス家は一味違う。

一年間で一番派手に、父母を含めた家の人間全てがはっちゃける日なので、この日に俺がいないとなると、両親二人がどれだけ暴走するか想像するのも恐ろしい……。

最悪、洒落や冗談ではなく屋敷が吹き飛ぶかもしれない。ガクプルものです。

そして実際問題として、転職が無事終わっても、まだ実験を兼ねたレベル上げと、アニーの眼鏡を手に入れるという予定が残っているのだから、とりあえず転職は２つとも３日で終わらせなければ後がつかえてしまうのだ。

あと俺だって新年ぐらい、少しのんびりした気分で迎えたいんだよ……。

そんな事を考えながら同時に、雑然とした部屋の中から、必要そうなものを片っ端からかき集めて行く。

まず装備一式。

ミスリルダガー、エルダーウッドワンド、そしてシルバーウルブズレザーメイルセット。

今の俺の命を預ける頼れる相棒達である。

輝かんばかりに美しい銀色の狼皮をなめして作られたこの皮鎧一式は、非常に堅牢でありながらまったく体の動きを妨げる事はない。

ダガーもワンドもその高い力を、触れただけで感じさせてくれる。

さすがはＤグレード最強の武器防具たちである。

そして愛用の魔法のポーチ――――俺はこれを父上から譲り受けたのだが、正式には本来学院を卒業する時に渡されるマジックアイテム

で、見た目はただの小さな皮製のウェストポーチ、しかしてその実態は、ほとんど某青狸さんのお腹のポッケレベルの代物なのだ。

２ｍを超える長物であろうが、フルプレートアーマー一式であろうが、らくらく飲み込んでしまうのだから。

勿論限界は存在し、このポーチに入れておけるのは、品数にして３０個、重さにして５０００イラ＝５００ｋｇまでである。

それ以上の品物は入れられないし、それ以上の重さを入れると重量の呪いがかかってしまい、体の動きが死ぬほど制限されてしまう。

まぁ、一言で言えばＭＭＯＲＰＧでよくあるアイテムであるのだが。

……これ日本で売ったら、いったいどのくらいで売れるのか見当もつかねぇわ……。

そんな何気にとんでもポーチに、各種回復ポーション、魔法のカンテラ、帰還のスクロールなどなど、必要になりそうなものをありったけ詰め込んでいく。

とりあえず最低でも今日中に、ワトリアでやらなきゃいけないことまで終わらせないと、スケジュール的に確実に間に合わなくなってしまう。

今回の一連のクエストだが、実際のところ今の俺の力なら正直まったく問題なくソロで達成可能である。

『普通』のプレイヤーには困難極まりないソロでのクエスト達成も、今の俺には何の問題もないし。

だって俺チートだもの。

そもそも最大の関門であるイアナゴブリン家族狩りだが、以前俺が学院入学前に倒していたのが、狩場最奥付近をうろうろするデフ盆地最強のイアナゴブリンジェネラル家族。

そして今回狩らなければいけないのは、中層でうろうろしている狩場内で真ん中くらいの力しかないイアナゴブリンチーフ家族の中の、イアナゴブリンメイジやクレリックなので普通にいって楽勝過ぎる。無双さえできる。

我ながら規格外にも程があるぜ。

通常このクエストをソロでやろうとすると、レベル２０、そしてＤグレード上級装備が必須なのだが、全部持ってる上にさらに俺はチートだし。

うん、所詮世の中金が全てだということだよ、明Ｏ君！

まぁ正直俺はＥグレード装備でも、ソロでやる自信はあるがな！

まぁ、つまり何が言いたいのかというと、今回問題なのはクエスト自体の難度ではなく、今日から３日間という時間制限とそして狩場までの距離である。

《Ｎｅｗ　Ｗｏｒｌｄ》では、死ぬほど便利なゲートキーパーを使用するために、大きく二つの条件が存在する。

１、使用開始の為のクエストを達成する事。

2、一度自分でその狩場や町に到達した事があること。

この二つ。

俺は、1は問題なくクリアしている。8歳の時にやったからだ。

今問題なのは2の、『一度自分でその狩場や町に到達した事があること』

これが今回に限っては大問題なのである。

もし今回のクエストで全てゲートキーパーを使える状態なのであれば、正直半日かからずに終わらせる自信、いや確信はある。

しかし、今回行かなければならない『マイサの森』、『デフ盆地』、『カイゼラ湿原』、『アイエオーク駐屯地』、『ジエンの古戦場』のうち、今現在俺がゲートキーパーから飛べる場所は『デフ盆地』のみ。

それ以外の4つの狩場には直接歩いていかないといけない。だってまだ行った事ないから。

つまり単純に移動に時間がかかるのである。

ここでレンジャークエストを含めた段取りを、改めて説明しておこうと思う。

ウィザード　ワトリア魔法ギルドのテオフラストゥス（父上）と会話　＞
レンジャー　ワトリア戦士ギルドのアスナイと会話　『レンジャー試練の短剣』と『レンジャー試練の弓』を入手後ゲートキーパーでエルトリンシティへ　＞
ウィザード　エルトリンシティ魔法ギルドのエンデルと会話して、クエストアイテム『魔術媒体目録』を入手後、ゲートキーパーでワトリアへ　＞
レンジャー　ワトリア西の『マイサの森』で、『レンジャー試練の弓』を使い、『ブラウンベアー』を5匹倒してクエストアイテム『茶熊の毛皮』を5枚入手後、帰還のスクロールでワトリアへ　＞
レンジャー　ワトリアのゲートキーパーから『デフ盆地入り口』に移動後、『レンジャー試練の短剣』を使い、『パイソン』を5匹を倒してクエストアイテム『パイソンの蛇皮』を5枚入手　＞
ウィザード　そのまま『デフ盆地中層』に移動して、『イアナゴブリンメイジ』か『イアナゴブリンクレリック』を合わせて5体倒してクエストアイテム『魔術師の頭骨』を5つ入手後、帰還のスクロールでワトリアへ　＞
レンジャー　ワトリア戦士ギルドのアスナイと会話、クエストアイテム『パイソンの蛇皮』5枚と、クエストアイテム『茶熊の毛皮』5枚を渡し、『レンジャー試練の短剣』と『レンジャー試練の弓』を返却、代わりにクエストアイテム『アスナイの推薦状』を入手後、ゲートキーパーでエルトリンシティに移動　＞
ウィザード　エルトリンシティ魔法ギルドのエンデルと会話してクエストアイテム『魔術師の頭骨』5つ渡す　＞
レンジャー　エルトリンシティ戦士ギルドのウィテムと話して、クエストアイテム『アスナイの推薦状』を渡し、代わりにクエストアイテム『ウィテムの依頼書』を入手　＞
ウィザード　エルトリンシティ南のカイゼラ湿原で『カイゼラリザードマンウィザード』か『カイゼラリザードマンシャーマン』を合

わせて5体倒し、クエストアイテム『魔術師の心臓』を5つ入手後、帰還のスクロールでエルトリンシティへ　＞
ウィザード　エルトリンシティ魔法ギルドのエンデルと会話してクエストアイテム『魔術師の心臓』5つ渡す　＞
ウィザード　エルトリンシティ東のアイエオーク駐屯地で『アイエオークメイジ』か『アイエオークウィザード』を合わせて5匹倒し、クエストアイテム『壊れた魔術師のワンド』5つ入手　＞
レンジャー　エルトリンシティ東のアイエオーク駐屯地でクエストモンスター『アイエオークスカウトリーダー』を倒して、クエストアイテム『奪われた伝令書』を入手後、帰還のスクロールでエルトリンシティへ　＞
ウィザード　エルトリンシティ魔法ギルドのエンデルと会話してクエストアイテム『壊れた魔術師のワンド』5つと、クエストアイテム『魔術媒体目録』を渡して、代わりにクエストアイテム『魔術師の証』を入手　以後各町の魔法ギルドのギルドマスターに「転職をする」と話しかければ、一定の経験値とスキルポイントを獲得してウィザード転職クエスト終了
レンジャー　エルトリンシティ戦士ギルドのウィテムと話して、クエストアイテム『奪われた伝令書』を渡す　＞
レンジャー　エルトリンシティ南東の『ジエンの古戦場』で、クエストモンスター『ジエンバンディッドスカウト』を倒して、クエストアイテム『奪われた荷物』を入手後、帰還のスクロールでエルトリンシティへ　＞
レンジャー　エルトリンシティ戦士ギルドのウィテムと話して、クエストアイテム『奪われた荷物』とクエストアイテム『ウィテムの依頼書』を渡し、代わりにクエストアイテム『ウィテムの推薦書』を入手　以後各町の戦士ギルドのギルドマスターに「転職をする」と話しかければ、一定の経験値とスキルポイントを獲得してレンジャー転職クエスト終了

以上である。

うぅわ～自分で整理した最短ルートとはいえ、マジでめんどくせぇ。

これを3日でやれと？　かる～く気が遠くなるぜ。

そしてその先に待つ、アルケミスト転職クエストの異常なまでのめんどくささを思い出してげんなりとしてしまう。

だって大体これの5倍はだるいから。

……愚痴っていても仕方ない。

最後にエルトリンシティにゲートキーパーを使っていっても目立たないようにする為、シランから届けられた表地は黒、裏地は真っ赤ないかにもマントらしいマントであるこのアイテム、『変身マント』を身につける。

まだ休暇前に届いた『コレ』を俺は使ってはいなかった。

能力は読んで字のごとく、姿を変えることができるようになるマントである。

《Ｎｅｗ　Ｗｏｒｌｄ》には、能力を上げる装備以外にも、様々なものが存在する。

それがいわゆる『おしゃれ装備』だ。

例えば、蝶ネクタイ。これはスキルを使うと顔だけ大きくなる。

例えば、各種動物の耳。ネコ、イヌ、タヌキｅｔｃｅｔｃ……。ワーワイルドは装備が出来ないが、その他の種族のプレイヤーには大人気だった。

例えば、アフロ。それ以上は聞かないでくれ、ブラザー。男のソウルだぜ。

その他そういうおもしろアイテムがたくさん存在したのだが、その中の一つがこの『変身マント』である。

これは各マントに備わっているデフォルトの姿に変身できるようになるマントで、姿だけでもエルフやワーキャット気分を楽しめる人気アイテムであった。

ちなみに俺が死ぬ直前のゲーム内流通価格は、ワーキャットの男のものが５０万Ｇ。

Ｃグレード装備が一式買えるほどであった。

ちなみに俺の今の全財産より高いのは、間違いない。

そして俺はもちろん持っていた。それどころかこの変身のために、普段まったく使いもしない各種Ａ～Ｅまでの軽装備セットを一通り持っていたほどの狂いっぷりであった。

（合計金額は楽に３０００万Ｇを超えていた、当時の俺からするとはした金だったんだが）

あともちろん各色羽付き帽子も持っていたぜ！赤、青、緑、白、黒の五色。

一番人気の赤は、ゲーム内の流通価格が最低１００万Ｇ超えてたかな？

すまん、話が脱線したな。

今回手に入ったのはヒューマンのもの、値段も安くて１万Ｇ。

いや、基本キャンペーンアイテム（運営が何かの記念に、ゲーム内でキャンペーンイベントを行い、様々な特典やアイテムをプレイヤーに提供するイベントの時に手に入るアイテムの事）だから、無いのも覚悟していたが、『何だか良く分からないアイテム』扱いで、たまに市場に流れてくるものらしい。

よし、他も見つけ次第買い叩くとしよう。特にアフロは絶対買う！

そう心の中で熱い決意をしたところで、まずこの『変身マント』で変身できるのがどんな奴なのか確認しておかないとと思い、俺は自室の姿見の前で、この世界で初めての『変身』スキルを発動させた。

魔法をはじめて使ったときやポーションを初めて作れたときなど、こういうドキドキがあるからこの世界はやめられない！

発動の３秒後、桃色の光と星に包まれる俺！

次の瞬間鏡に写ったのは、シルバーウルブズレザーメイルに身を包んだブロンドヘアの若いかわいい姉ちゃんの姿。

あっれぇ～？　これ誰？　何で女なの？　ヒューマンの男じゃなかったの？

「何じゃこらあああああああああああああああああああああ！！！！」

姿見に映るまったく見慣れない女性の口から出た非常に聞きなれた自分の声での絶叫が、静かな午後のラ・テオフラストゥス家に響き渡ったのであった。

◇◆◇◆◇◆◇◆

俺の屋敷中に響き渡るほどの大声を聞きつけて、急いで俺の部屋にやってきたマリエルをはじめとした家人たちに「何でもないから！」とドア越しに言って引き取ってもらった。

だってさ、こんな姿見せられるかよ！

昔住んでいたワンルームとは比較にならないほど広い、住み慣れた石造りの『現在』の俺の部屋。

周りを見ると荷造りの後なので、そこかしこに様々なものが散らばってしまっている。

そんな中あらためて自分の姿を鏡で見てみると、映っていたのはいつもの見慣れた自分ではなく、俺愛用の装備に身を包んだくりっとした緑色の瞳をした短いブロンドヘアでかわいらしいという言葉がぴったりのお姉さん。

これが自分の姿なのだというのだからマジで欝になる……。

とりあえず『変身マント』の変身解除スキルを使い、再び桃色の光と星に包まれながら変身を解く俺。

次の瞬間、鏡には見慣れた俺の姿。

もう遠い昔に見慣れてしまったブロンドというより黄金というべきド派手な色の髪と、誰からも珍しいといわれる紫色の瞳。

こんなに鏡に映る自分の姿に安心するのは初めてだわ。

まぁマントの細かな検証は、またゆっくり時間のある時にやるとしよう。

さて、とりあえずとり急いでの最優先事項は……盛大に文句を言う事。

ウェストポーチから念話石を取り出す。

もちろん繋げる先は、あの腹黒クソ野郎だ！

――――――シラン！どういう事か、説明してもらおうか？

――――――これはこれはジオ様。いきなりどうなさいました？　何か大変にご立腹のようですが？

――――何で女に変身するんだよ！？

――――はて？　あぁ、『変身マント』でございますね。いやぁ、あれはなかなか面白い代物ですなぁ。あのようなものがあるということ、私ジオ様から伺うまでまったく存じ上げませんでしたので。

――――俺は何で女なんだ？　って聞いてるんだが？

――――はて、これは異なことを申されます。私は『ヒューマン』に変身可能な『変身マント』が手に入りましたので、お送りいたしますと確かに申しあげたはずですが？

――――あっ！

――――どうなさいました？　ジオ様？

――――……いや、もういい。今夜はエルトリンシティで宿を取るつもりだから、その手配を頼む。

――――それはそれは。かしこまりました、ではお待ちしております。あぁ、お部屋は男性でお取りしましょうか？　それとも女性がよろしいですか？

――――ッ！

ここで念話を強制的にガチャ切り。

うがぁあああああああああああ！

そして、俺ベッドに轟沈。装備身につけたままじたばたしたもんだ

から痛いのなんのって。

こんなアホなことで時間つぶしてる余裕なんて無いのに！

く～や～し～い！

そうだな、確かに『ヒューマン』に変身する『変身マント』に違いないわ。

間違ってはいない。

単純な思い込みと、いわゆる言葉の綾ってやつに見事に引っかかった俺が悪い。

悪いのだが！

あの思念越しに伝わる隠し切れない爆笑の気配！

イタズラが成功した後、自分が悪いんじゃないよ～って逃げ道をきっちり確保しているあのやり口！

そしてあの最後の『余計な一言』！

あの腹黒野郎、絶対に確信犯だ！今頃腹抱えて笑ってやがるに違いない！ちっきしょおおおおおお！いつか見てろぉぉおおおおおおおお！

……我ながら典型的な負け犬の台詞だよな、いつか見てろって。

遠くで大きな鐘の鳴る音がすることから、もう時間は正午か。
あ～急にお腹が減ってきた、お昼にしよう……。

◇◆◇◆◇◆◇◆

あ～お腹いっぱい、もうこのまま寝てしまいたい……。
そうもいかないか、ただでさえ遅れ気味なのに。
食後しきりに俺を引き止める母上の視線を振り切った俺は、歩きなれた石造りの廊下に出てから屋敷一階の奥にある調理室に向かう。
さっきまでに用意した物の他に、まだ足りないものがあるからだ。
食料と水。
これがゲームだった頃との最大の違いかもしれない。
そう、当たり前なんだがこの世界ではお腹が減る。
ＭＭＯＲＰＧの中には食料ゲージのあるものも少なくなかったが、《Ｎｅｗ　Ｗｏｒｌｄ》には存在しなかった。
だからひょっとしたら……なんてことを思ったこともあったが、そんな事はまったく無く、この世界でも何はなくとも腹は減る。

むしろ今の俺は１２、３歳どころか成長期にしても食いすぎなくらい、食事の量が半端ではない。
毎食軽く普通の成人男子の３倍は食べているだから。

父上曰く、「冒険者はとにかく腹が減るもの」だそうなのだが、さすがに最初はビックリしたものだ。

ちなみに先ほどの昼食で食べたのは、一抱えもあるパンに、鶏の丸焼きをほぼ一匹、香草サラダと野菜のスープといったもの。

おいしゅういただきました。

閑話休題

つまり今回俺はほぼ初めての泊まり有りの遠征に出かけるので、食料と水の携帯は絶対といえるだろう。

お腹減ったら死んじゃうもん。

「若様、ではこれを」

俺が幼い頃からうちの屋敷に仕えてくれている料理人のセバグが、その小太りの体つきに似つかわしくない手慣れたすばやい手つきで瞬く間にお弁当を用意してくれた。

子供の頭ほどの大きさのパン、大き目の干し肉の塊、さらにガラスで出来た半透明の水筒をそれぞれ２つ。

ありがたい、これでようやく出発できる。

きちんとお礼を言って厨房を後にしようとすると、ご無事のお帰りをとその場にいた使用人みんなが送り出してくれた。

何だか心が少し温かい感じ。

よし、行くか！

念話石を取り出し、イナ先生に向けて思念を飛ばす。

――――――イナ先生、準備が整いました。ゲートキーパー前で落ち合いましょう。

間髪いれず帰ってくる「了解」との返事。

急ぎ足で屋敷から出て、ワトリアの市外に向かう。

普段ならゆっくり歩いて３０分ほど距離だが、今は少しの時間も惜しい。

腰のポーチから、今回の秘密兵器を取り出す。

小さなビンに入った濃緑色のポーション。

『高級移動速度向上ポーション』、一個５００Ｇ也。

ちなみに俺は父上に作ってもらった。これはＣグレード作成ポーションだからな。

これの効果は移動速度が一律３００上昇するというもので、魔法だと『ファストウォークＬｖ２』に相当する。

分かりやすく別の例で言い換えると、移動に鈍行列車と急行ぐらいの差が生まれるのである。

今回の俺の作戦は単純。

『高級移動速度向上ポーション』常時がぶ飲みで、とにかく高速で目的地に到着し、目的の行動を終わらせる。

これだけ。

いや～馬に乗れればよかったんだろうが、あいにく俺は乗馬は未経験で。

どうせ将来『ワイバーン』とか『ライドリザード』手に入れるし、馬とかいいや～と思ったのが失敗の元です。

シランに『リトルリザードの笛』を探しておいてもらうとしよう。

あれ手に入れるクエストはレベル４０以降からだし、おまけにクエスト開始ポイント遠いしなぁ……。

市場に出回ってればいいんだけど。

あぁ、『ワイバーン』や『ライドリザード』は乗り物になるモンスターで、専用のアイテムで召喚できる。

それで『リトルリザードの笛』ていうのは、『ライドリザード』の

幼生である『リトルリザード』を呼び出す為のアイテムで、『リトルリザード』は連れ回してレベルを上げてやればやがて『ライドリザード』に成長する。

ちなみに『ライドリザード』は歩きの速度の5倍は速い上に、モンスターも怖がらないので、馬よりもいい乗り物である。

さらに乗り手の移動速度上昇の効果も乗るので、徒歩と比較すればまさに新幹線と呼ぶにふさわしい。

そして『ワイバーン』は飛ぶ。早い。色々制約もあるけどものすごい便利。

まぁもう一個考えてる事もあったしな、移動手段に関しては。

そんなこんなで乗馬の訓練はしていなかった、反省だな。

まぁこれで馬車で移動するのと同じくらいの速度は確保できるのだからよしとしよう。

そうこう考えている間も俺の歩みは止まらずに、１０分かからずワトリア中央広場のゲートキーパー前に到着。

ゲートキーパー側の商店の壁にもたれているのは、我がお師匠様。

おそるおそる近づくと「遅い」と一言いただきました。

いえ、俺が遅いんじゃなくて貴方が速いんだと思います……。

「それで、そのマントが『例のモノ』か？　使うならさっさと使っ

てしまえ」

と、俺が肩から引っ掛けているマントを見てそう告げる。

イナ先生には町から町への移動の時には、変身マントを使うと以前から言ってあったので、俺が妙なマントをつけていること自体には突っ込んでこない。

ただ、ゲームの頃は変身着替えとか余裕で衆人環視の元やってたけど、今は無理ですお師匠様。

「ちょっとそこの物陰でやってきますので……、何を見ても笑わないでくださいね？」

そうイナ先生に断りを入れると、こそこそと近くの細い通路に隠れて変身スキルを発動する。

例の桃色エフェクトに包まれて姿が女に変わる俺。

あらためて自分の状態を確認すると、まず目線が高いことが一番の変化だろうと思う。

手足が妙にしっくりこない感じだ、手のひらも柔らかいし。

「まだか？」

そうやって時間稼ぎをしていたが、そうもいかないらしい。

「笑わないでくださいね？」

もう一度そう言ってから、意を決して明るいところに出る。

広場に出た俺の目に映ったのは、視線の変化がもたらしたであろう
いつもと違う街の景色と
イナ先生の唖然とする顔。

そしてたっぷりと１０秒の間をおいて、普段ほとんど笑わない人の
爆笑が真昼のワトリアに響いたのであった。

## 第十一話　長期休暇は大変だった　？（後書き）

次こそ転職クエストに突入いたします。

さて何話で終わることでしょうか・・・・。

いかがだったでしょうか？

ご意見、ご感想、誤字脱字の指摘など幅広くお待ちしております。

## 第十二話　長期休暇は大変だった　？（前書き）

お待たせしました、出来立てです。

## 第十二話　長期休暇は大変だった　？

「では、これが『魔術媒体目録』だ。幸運を祈るよ、ジオ君」

「どうもありがとうございます、エンデルさん」

今俺にクエストアイテム『魔術媒体目録』を渡してくれたいかにも学者といった風貌の青年が、エルトリンシティ魔法ギルドのギルド員エンデルさんである。

「……それにしても、まったく君はとんでもない少年だね。12歳の子供が転職の試練を受けるなんて話は、少なくても私は聞いたことがないよ。

ひょっとしたらこういうことがあるかも知れないと、前々からギルドマスターに伺ってなかったらさすがに追い返していたよ？」

乾いた笑いとともに驚き半分、呆れ半分でそう俺に言ってくるエンデルさん。

いやいやその反応が普通というか、俺みたいな規格外のチートを見せ付けられた後でまともに話せてるあなたがすごいですよ、エンデルさん。

「ホントはもう少し先に来るつもりだったんですが……なかなか人生ままなりませんね。では、また今日中にもう一回は来ますから。それじゃ」

そう言って彼に背を向けた俺は、そそくさとエルトリンシティ魔法ギルドを後にした。

「そんな人生ままならないとかいう台詞は、子供の口から出るべき言葉じゃないよ、ジオ君……」

さてと、一度ワトリアに帰らないと……。

つうことは……、また女装しないとダメなのね……。

ん？エンデルさんの完全に呆れた感じのつぶやき？

もちろん聞こえてたけどあっさりスルー。

◇◆◇◆◇◆◇◆

というわけでワトリアに戻った俺は、昼を回りピークを過ぎた路上市の人ごみをすり抜けて、全力疾走でワトリア市街をイナ先生と二人西門へ向かって走りぬける。

ピークを過ぎたとはいえまだまだ多い買い物客たちや、既に商いを終わらせて片づけを始めている人たちなどでごった返すワトリアのメインストリートを、人にぶつからないように走り抜けるのはかなり難しい。

先生曰く、これも訓練らしい。はた迷惑な訓練だなオイ。

5分ほど走った後ようやく西門にたどり着いた俺たちは、そのまま西門を抜けひたすらこれから太陽が落ちてゆく方向に向かって走り続けた。

それにしてもイナ先生、何故こんなに速い……。

俺なんて既に本日二本目の『高級移動速度向上ポーション』を飲んで移動力強化してるのになんで俺よりも前走ってるんですか……。

そして人ごみの中でのあの動き。

あれってもしかして回避率補正かかってるとか？

なんにせよさすがはCグレード軽装備職ってことか。

ファイターとは基本性能が違うわ、いやはやおみそれいたしました。

そんなことを思いながら、左右に果ての無いように広がる畑の間にあるあぜ道を走る先生の背中を見ていたら、顔だけ俺のほうに向けて先生が声をかけてきた。

「あ～え～あの～、先程はすまん」

「え？　何のことですか？」

先生の突然の謝罪にビックリする俺。

「あ～さっき笑うなと言っていたのに笑ってしまっただろう？　悪かったと思ってな」

あ～、さっきの件ね。さすがに最初は少し怒ったけど、まぁ『アレ』

は俺も仕方ないと思う。

インパクトが強力すぎるからな、いきなり女になって出てくるとか。

「だからな、すまなかった」

珍しい事もあるもんだ、人に謝るイナ先生なんて。

こりゃ明日は槍でも降るんじゃねぇかな。

「……どうやら私が真面目に謝罪しているにも関わらず、貴様は何か非常に失礼な事を考えているようだな、ジオ」

先生の眼が鋭いものがあらわれ、その体から殺気が漂いはじめる。

イイエ、ソンナコトハゴザイマセンノコトヨ……、やばい俺終わったかもしれん。

「よし、屋敷に帰ったら覚悟しておけ。転職祝いにきっちりと遊んでやる」

……ぶっとい死亡フラグ立ちました！

転職後の地獄を思い浮かべながら、それから逃れるようにひたすら『マイサの森』目指して全力疾走を続ける俺なのであった。

後日、きっちりレンジャーとしての心得を肉体言語で叩き込まれました。

教訓　口以外も災いの元。

◇◆◇◆◇◆◇◆

そうして何とか冬の気の早い太陽が山の陰に隠れる前に、俺たちは『マイサの森』に到着。

ワトリア西部に広がる広大な広葉樹の森で、主にレベル１５～２０くらいまでのソロプレイヤーに人気のあった狩場だ。

ここまで移動速度をめいっぱい上げた状態でおよそ2時間か。

仮に時速２０キロで走っていたとして、距離にして４０キロ。

結構距離あったな。この分じゃほんとにギリギリになるか？

さすがに夜間に移動は避けたいんだが。

のどに渇きを覚えた俺は、ポーチからガラス製の水筒を取り出して、半分ほどを飲む。

冷たい水がのどに染み渡る。このポーチに入れると基本入れた状態を維持してくれるので大助かりなのだ。

少しづつパンと干し肉を切り取り、口に運ぶ。

口中に広がるパンの小麦と干し肉の味のハーモニー。やはりこれだ

け走るとお腹は空くもので、ぺろりと半分ほど胃の中に消えてしまった。

ふ～、うまかった。外で食べるとやっぱり少し味が違う気がするのは何でだろう？

まぁお腹も少し膨れたし、ちょっと落ち着いた気分だ。

頭に先ほどまで考えていた懸案事項が思い浮かんだが排除。

まぁ明日からの事は今はいいや。後でゆっくり考えるとしよう。

ということで早速装備をポーチから取り出した『レンジャー試練の弓』に変更する。

これで倒さないとクエストアイテムが出現しないから、その辺がめんどくさいところだな。

厳密には、『レンジャー試練の弓』で『止めを刺さない』と『クエストアイテム』は出ない、だが。

久しぶりの弓矢だが、扱い方はちゃんと覚えていた。

『レンジャー試練の弓』は種別としては短弓。

前にも少し言ったかもしれないが、弓には長弓と短弓の2種類がある。

それぞれ一長一短で、短弓のいいところは長弓に比べ攻撃速度がかなり速い事、悪いところは比較した場合の攻撃力の低さと射程の短

さである。

軽く引絞ってみると、手に程よい抵抗がかかる。

よし、いけそうだ。

準備を終えた俺は、先生に目配せをした。

無言で頷く先生の姿を背に、ひっそりとした足取りで森に入って行く。

シンと静まった森の中。

風が広葉樹の葉とこすれあう音と、わずかに生き物たち立てる小さな音だけが俺の耳に届く。

カリカリ。

その物音でふと見あげてみると、樹の大振りな枝の上でリスが俺のほうを見ながら木の実をかじっている姿があった。

うん、小動物かわいいよね。癒される。

そうしながらも大型の獣の足跡などを探して、慎重に目的の『ブラウンベアー』を探す。

この『ブラウンベアー』だが、『マイサの森』エリア最強のモンスターなのだが、元々出現エリアが狭く、さらに同時出現数も少ないモンスターなのでなかなか発見しづらいのだ。

過去の知識としてＧＫポイントから北西方向のエリアにそれなりに出現するポイントがあったはずなんだが、さすがに目の前の森とゲームの中の森とでは視点もリアリティも違う為どこかまではよく分からない。

実際今回自分の体でやってみて思った。

この試練、レンジャーの転職クエストとしてバッチリかも。

とてもじゃないけど、獲物を追う狩人としての訓練をしていないとこの広い森の中で獲物を探すのは難しいだろう。

まぁ《Ｎｅｗ　Ｗｏｒｌｄ》がゲームの時は、転職クエストとかただめんどくさかっただけだけど、ちゃんと内容まで考えて作ってたのかもしれないなぁ……運営様。

そんな事を考えながらも今まで先生から実地で叩き込まれた知識と経験を使い、丹念に大型の獣の足跡を追うと、森の少し開けたところにのそのそと歩く体長２ｍはあろうかという大型の獣の姿が。

その名の通り茶色の熊、『ブラウンベアー』である。

とりあえずでかい。こっちに来て見たモンスターの中ででかさだけなら最大。

よし、まだこちらには気づいていない。

さてレンジャーに限らず、弓職の基本は『やられる前に殺る』、コレである。

大きな樫の樹の陰に隠れて狙いを定めて、スキル『パワースナイプ』を発動する。

全力で引きしぼった弓から放たれた光を纏った矢が、木立の間を縫うように飛び、そしてブラウンベアーに突き刺さる。

ちっ、一撃ではさすがにしとめられんか。

結構なダメージを受けているだろうに、ものともせずにこちらに向かって駆け出してくる熊公。

うわっ、怖ぇえ。

今まで戦ってきた中で最大の大きさを持つモンスターの接近に内心少しあせりながらも弓を再び引き絞り、そして放つ。

再度突き立った矢の一撃に崩れ落ちる『ブラウンベアー』。

そしていつもモンスターを倒した時のようにいつの間にかその巨体は消え、後にはクエストアイテム『茶熊の毛皮』と少しのGが。

よし、まず一匹倒した。

これからも油断せずに行こう。

不意打ち上等、一撃必殺最高、それこそが軽戦士職の生きる道！

そうして俺はさらに熊公の姿を求めて、森の深いところへと分け入って行った。

その後、何とか日が隠れきる前に『茶熊の毛皮』を5枚手に入れた俺は先生と合流、『帰還のスクロール』の力でワトリアに戻った。

第一段階終了だな。

◇◆◇◆◇◆◇◆

ワトリアに戻った俺たちだが、休憩などしている暇はない。

急いでゲートキーパーのお姉さんのところへ行き、今度はデフ盆地入り口に飛ぶ。

お姉さんから放たれた青白い光に包まれて俺の体が光に変わり空間を超える。

次の瞬間目の前に広がったのは、石畳のワトリアの町の広場ではなく、すり鉢上に底まで見渡す事ができる『デフ盆地入り口』であった。

さてと、ここで狩らないといけないのはまず入り口付近に出現する『パイソン』を5匹。

ポーチから『レンジャー試練の短剣』を取り出し装備を持ちかえる。

いつも使っているミスリルダガーに比べ、やや小ぶりな為どうも頼りないのだが攻撃力は十分なはずだしいけるだろう。

先ほどの『ブラウンベアー』と違い、『パイソン』を探すのは簡単。
入り口付近から外周部に出て藪に近づけば……ほら出てきた。しかも2匹。
『パイソン』。一言で言うと1mくらいのでかい蛇。
索敵範囲が広いモンスターで、不用意に外周部の藪に近づくと次々とロックオンして襲ってくるやっかいな蛇なのだが、一匹づつの強さはそうでもない。
ということで。
襲い掛かってきたパイソンを迎え撃つ形で、《ソリッドスタブ》を叩き込むと一撃で消える
パイソン。
さらに襲い掛かってくるもう一匹に軽く一撃もらったが、まったく問題なし。
伊達にDグレード最強軽装備は身につけてませんから。
蛇の追撃をかわしながら短剣を3度振るうと、もう一匹も光になった。
南無っと心の中で小さく思いながらクエストアイテム『パイソンの蛇皮』2枚を拾い上げてポーチの中へ。
そしてまたパイソンを探して歩き出したんだが、少し歩き回っただけで藪から出てくる蛇。

新しいことわざ出来ました。藪からつつかなくても蛇。

そんな事を思いながらさらに3体倒し、クエストアイテム『パイソンの蛇皮』5枚を確保。

さてと……。

実はさ、最近イロイロと溜まってたんだよね。

『レンジャー試練の短剣』をポーチに戻し、手にミスリルダガーを、腰のベルト部分ににエルダーウッドワンドを差し込み準備完了。

さてとゴブリンたち、俺のストレス解消の相手をしてもらおうかなぁ……ウフフフ。

本日最後5本目の『高級移動速度向上ポーション』をぐい飲み。さらに『攻撃速度向上ポーション』もプラス！

さてと、暴れるか。

その後、『デフ盆地入り口』に真正面から侵入した俺は、群がるすべてのゴブリンどもを蹴散らしながら『デフ盆地中層』まで移動し、さらにイアナゴブリンチーフ一家を次々に襲撃。

ゴブリンたちにとっては阿鼻叫喚の地獄だろう光景を作り上げて、さくっとクエストアイテム『魔術師の頭骨』を5つ手に入れたのだが、まだまだ止まりませんよぉ！

その後も「そぉい！」てな感じで、どんどん最奥方面に向かって殲滅を繰り返していたのだが、１０家族目くらいで久々のレベルアップ。

まぁまだ少し物足りないけどクエストアイテムもとっくに集まってるし、キリもいいからということで帰還することにした俺。

……あ～、ちょっとはすっきりしたかな。

その後まずワトリア戦士ギルドに寄って、アスナイさんにまさか１日どころか半日で終わらせてくるとはね、と呆れられながらも、クエストアイテムなどと引き換えにクエストアイテム『アスナイの推薦状』を入手。

そして宣言どおり今日中にもう一回訪ねたことで、あごが外れそうな顔をしたエンデルさんに『魔術師の頭骨』５つ押し付けて、本日の予定めでたく終了でございます。

◇◆◇◆◇◆◇◆

エンデルさんにクエストアイテムを押し付けて、エルトリンシティ魔法ギルドを出てみるとすっかり夜になっていた。

さすがに少し疲れているようだ。

まだいつもの俺の感覚では寝るにはかなり早い時間なのだが、既に

まぶたが重い。

まぁ久々に無茶やったしな～。

どっちかというと急に酷使した体に残る肉体的疲労感よりも、すり減らした神経的な意味での疲労感のほうが大きいんだけど。そろそろ限界。

常に死を意識せざるえない戦闘は、実力差がいくらあってもしんどいから。

ん？　ストレス解消のために無双してたじゃないかって？　それはそれ。甘いものは別腹。

あと意図せぬ女装（？）初体験とか長距離マラソンとかなど、慣れないことばかりしたから気疲れしちゃった。

ああ見えて、一日中気を張ってたんですよ？

ということでギルド入り口でひっそりと佇んでいたイナ先生に今日はここまでだと告げること。

「先生、シランに宿を手配してもらってますので今日はそこに」

少し怪訝そうな顔をした先生が聞いてくる。

「ワトリアの屋敷に戻らないのか？」

「いや、もちろん戻ってもいいんですが、戻ると朝の出発が遅れてしまいそうで。そうなると予定をとてもじゃないけど消化できそうにありませんから」

苦笑交じりの俺の言葉に、なるほどと言った感じで頷いて了解の意を示してくれる先生。

まぁ家に帰ってしまうと、朝から出発とか不可能だし。

そこに思いいたったのだろう、先生も苦笑いしてる。

この苦笑いの理由を取り違えた俺はこの１０数分後、本日２度目の絶叫をさせられることとなる。

まぁとにかくそれを横目で確認した俺は念話石を取り出し、いつものように腹黒に思念をつなごうとしたのだが……。

「お待ちしておりました、ジオ様」

その突然の声に振り向いた俺の視線の先には、仕立てのいいベージュのチュニックを着てうやうやしく頭を下げたシラン。

おいおい、いつの間にか後ろにいやがった、この腹黒ドＳ！

———俺の名前はジオ・パラケルスス。２４時間で事件を解決する男じゃないが、今日は寝れそうにない。

◇◆◇◆◇◆◇◆

「こちらでございます」

夜のエルトリンシティをシランに案内されて歩いてきた俺の目に飛び込んできたのは、市内中心部から少し外れたところにある新築らしい大きな宿屋だった。

煌々と入り口には松明がたかれ、その松明の赤とオレンジの中ほどの色の光に照らされた白い大理石の石壁がなんともいえない美しさだ。

そういえば、例の件ずいぶん前から報告受けてないな。

いい機会だし今日全ての計画の進展具合を確認しておく事にしよう。

それにしてもさっきからシランとイナ先生のニヤニヤ笑いが止まらない。

また悪い大人が何かたくらんでいるのだろうか？

そうこうしている間に、宿の立派なドアの前に到着した。

振り返って俺に声をかけてくるシラン。

「いや、こちらへのお越しが突然のことで驚きましたが、今考えるとちょうどよろしゅうございました」

ん？　昨日のうちには伝えておいたはずだし、宿屋ってもっと前から予約しないとまずいもんなのだろうか。まだまだこちらの常識には疎いところがあるからその辺が今の俺の最大の弱点だよな。

……そんな甘いことを考えていたこの時の自分を殴りたい。

シランが両開きのドアに手をかけながら俺に声をかけてくる。にんまりと笑いながら。

「それではジオ様、どうぞ」

そういって開かれる扉。

ん？　嫌な予感がする……すごく。

中に入った俺を出迎えたのは、仕立てのいい制服に身を包んだ２０人ほどの男女。

「ようこそおいでくださいました！　ご主人様！」

宿の人たちからかけられた突然のご主人様宣言。

どういうこと？　まったく意味がわからん。

しばし呆然とする俺に後ろから悪魔の声。

「ようこそおいでくださいました、オーナー様。こちらが今夜お泊りいただく『あなた様』の宿、『冒険者の止まり木亭』でございます」

へ？　どういうこと？

隣を見てみるとイナ先生が笑いをこらえている。

「え～とシラン。もう一度言ってくれ。『誰』が『何』の宿だって？」

「はい、『ジオ様』が『オーナーであらせられ』ます宿でございます」

さらっと何かすげぇこと言いやがった、この野郎。

え～とちょっと待て。つまり何か？　この宿俺のもの？　どういうこと？

「何じゃこらあああああああああああああああああああ！！！！」

まさか一日にこの台詞を2回も叫ぶことになるとは思いもよらなかったぜ。

◇◆◇◆◇◆◇◆

今俺は宿のエントランスにあった素晴らしい出来の木製の長いすに腰掛けながら、これも見事な机を隔てて前に座っているシランと向かい合っている。

「きっちり俺にわかるように説明しろ、シラン」

かなり本気の殺気とともに言葉を叩きつけたはずなんだが、微笑を浮かべたまま小揺るぎもしないシラン。

マジで何もんだ、この野郎。

「はい。この宿は以前よりジオ様から命じられておりました、情報収集の拠点作りの為の宿でございます。」

ちょっと待て、俺がシランに依頼したのは……。

「おかしなことを言うな、シラン。俺は情報収集のためにまず冒険者が集まるような料理屋兼酒場を作れとはいったが、宿屋なんて作れと言った覚えはないぞ」

そう、以前から俺はシランにいくつかの指令を出していた。

そのうちの一つが、『情報収集の場をつくる』ことだった。

具体的には、まず奴隷達を訓練させて食堂の従業員にし、そこにあつまる様々な情報を整理してこれからの俺の活動に活かそうと言うものだった。

うまいものと酒が入れば、人間の口は緩むものだからな。

あとはあまり褒められたものではないが、高級娼館を作る計画もある。

これも当然情報収集のためであるが、こっちは俺は乗り気ではなく、シラン主導でほとんど任せっきりである。

ただ、こちらも無理強いや人間を使い捨てるようなやり方だけはしないようにと厳命してあるが。

シランは普段からよく俺をいじめて喜ぶどうしようもない腹黒ドSではあるが、その辺の価値観は一致しているので無体な真似はしないと思う。

能力とそこだけは俺はこの男を一切疑っていない。

ただし、その一連の話の中で宿屋を作るなんて話は今まで一言も聞いていない。

「もう一度聞く。何で宿屋なんだ？」

それでは、と前置きしたシランが話しはじめる。

ヤバイ、これは俺がいつも凹まされていいくるめられる時の流れだ

「まずこの宿を作りましたのは、端的に申し上げれば人が余ったからでございます。

以前より進めておりましたこの町の食堂兼酒場でございますが、近日中に店を開ける段階までこぎつけております。

ですが、まだまだエルトリン以外の国の町での営業権の獲得などは進んでいない状況ですので、訓練した人間達が手持ち無沙汰になってはいけないと思いまして、このような形に。

それに宿屋であれば、情報収集はもとより、一時的に仕事がないものの預かり先やちょっとした職業訓練。そして何よりいろんなものからの隠れ蓑には最適でございましょう？

なおこの件に関しましては、ジオ様のお父上様からの全面的ご協力をいただいております」

再び驚きを隠せずにポカンと口を開けてしまう俺。

何とか建てなおしシランに詰め寄る。

「何？　いったいどういうことだ？　いつの間に父上と接触した？」

しかし返事は意外なところから飛んできた。

「つなぎをつけたのは俺と執事殿だ。シラン殿を責めるのは筋違いだな。

ジオ、いくらお前が優れた人間であろうともまだ子供だ。

報告する必要のあるものを私たちが親であるフィリップ殿に黙っているわけがあるまい？

フィリップ殿がシラン殿に最初に会ったのは、あの後すぐ。

最初にエルトリンシティに来たとき、お前が寝込んでいる間だ。

つまりその後も全てお前のやる事は筒抜けだったと言うわけだ。

まだまだ視野が狭いな、ジオ」

先生の突然の暴露に呆然とする俺。

そんな俺を尻目に珍しく多弁な先生が続ける。

「それにお前の酒場という考えも悪くはないが、情報収集のためなら宿が一番効果的だ。

大手のギルド所属のものならともかく、基本フリーや中小のギルドの人間はギルドハウスなど手が出るものではないからな。

そういった者達の為に、良質なサービスを提供する宿があれば、そこは必ず繁盛する。

これは私が一人の元冒険者として保証する。

繁盛すればそこに必ず情報は集まるというわけだ。あと自分の寝床ほど人間が口が軽くなるところは存在せんよ。

ジオ、お前の発想はどうもどこか偏ったところがある。そのあたりは今後要修正といったところだな。

まぁお前もまだまだという事だ」

そういって俺の頭をなでてくる先生。

そして俺は先生の話を聞き終えた後、思わず椅子の背もたれに上半身の全てを預け天井を仰いだ。

あ、知らない天井だ……。

人生なにがあるか分からないな、まさか宿屋のオーナーになることになるとは思いもよらなかったぜ。

ど～～～～やら俺は大人たちの手のひらの上で転がされていたらしい。

シランはバツの悪そうな顔で、肩をすくめてやがる。

お前はウィットなジョークに富んだアメリカ人か。

あ～～～～～もう！完敗ですヨ、こんちきしょう！

その後俺はぐったりしながらも自分がオーナーとなったこの宿を色々見せてもらい、料理人たちが腕によりをかけた料理に舌鼓を打って寝た。

宿の部屋はシンプルかつ機能的で、料理も非常にうまかった。

そして働く皆は生き生きしておりサービスも満点。

あと男前もかわいい子も多かったし。

流行らない訳がないなぁ……と思いながら夢の世界へ。

これにて転職クエスト1日目終了。

タイムリミットまで残りあと2日。

## 第十二話　長期休暇は大変だった　？（後書き）

やっとお外に出れました。

いかがだったでしょうか？

ご意見、ご感想、誤字脱字の指摘など幅広くお待ちしております。

## 第十三話　長期休暇は大変だった　？（前書き）

２日目です。

ジオも作者も順調に頑張っております。

３日目一緒にしました。

# 第十三話　長期休暇は大変だった　？

カーテンをすり抜けた朝の光でぼんやりと目を覚ます。

ふかふかの布団があったかい。もうちょっと寝てたいんだけど起きないといけない気がする。

朝か……。

小鳥が鳴いてる声が聞こえる……。

ちょっとだけ体を起こそうとしたら、やたら寒かったのでもう一度布団の中にもそもそと戻る。

前世（むかし）から寒いの大嫌いだから、俺。

繊細な飾り彫りが施された天蓋付きのベッドに横になったまま、ぼ～とした頭で昨日の出来事と今日の段取りについて考える。

昨日の転職クエストの進捗具合については、まぁ順調だといえるだろう。

最悪熊狩りで終了の可能性もあったのに、ワトリアでやらなきゃいけない事は全部終わらせられたし。

『高級移動速度向上ポーション』様々だよ、ほんとに。

今日はできればウィザードの転職クエストは終わらせたいかな。

今日一日フルに使えば不可能な話じゃないし。

さすがにレンジャー転職クエストの最後である『ジエンの古戦場』は、隣国であるジラーデス王国との国境にあるから、ポーション使っても移動だけで半日かかる可能性が高いし、最終日にやることにしよう。

にしてもまさか一日の間に女装経験と宿屋のオーナーになるなんて……って？

そこまで、考えた俺はがばっと布団から勢いよく体を起こす。

周りを見渡すと、広々とした室内に品のいい調度品がしつらえられたよく知らない部屋がそこに。

明らかにスイートなお部屋でした。

……夢じゃなかったんだな。

がしがしと頭をかきながら昨日の出来事を思い出す。

元々情報収集を兼ねた奴隷達の就職（？）先を作るための計画で、最初に「酒場とかどうかな？　まぁいい考えあれば臨機応変に頼むよ。じゃあ任せたから～。」って言ってまかせっきりにしたのが今回のあのサプライズの原因。

ただあの後話を聞いてみると、俺が希望していた酒場は酒場でもう

用意が出来ていて近日開店とのことである。

シラン曰く、「ちゃんとご指示は実行していますよ？」とのこと。

イヤミだな、おい。

まぁ一晩経って冷静に考えてみれば、宿泊施設という絶対必要なものが思いつかなかった俺のほうがおかしい。

まだゲーム時代の常識を引きずってしまっている証拠だな、こりゃ。

いい加減直さないと。

ということで最初の店か～。

ここまで3年くらいかかったけど何とか最初の一歩にたどり着いたな。

俺が狙っているのは、例の契約をしたうちの奴隷という名の従業員派遣による、大陸のゲートキーパーが存在する全ての都市での直営店舗の経営である。

この主なメリットは三つ。

一つは情報収集のため。

俺は『情報を制するものは世界を制す』って格言は真理だと思うんだ。

もう一つは、大量の奴隷の救済のためである。

働き口があれば人間自立出来るし。

あともう一つは、２つ目に伴う社会制度の一部変革。

具体的には、古代ローマ方式の開放奴隷制度の導入だけど、これは間違いなく一生かかる仕事だ。

今すぐどうにかなるもんじゃないし、ゆっくりと芽を育てるさ。

……まぁ所詮どこまでいってもただの自己満足なんだけど、何もやらないよりはましだ思う、たぶん。

そして話を戻すと、店は『絶対』に流行る。

流行らないわけがない。

まず料理。

これは俺が覚えている限りの料理を簡単なレシピに書き起こしたものを、実家の料理人のゼバグに５年がかりで研究してもらったものを出す予定で、今世の中に出回っている普通の料理とは一味違うものに仕上がっている。

元々は俺が前の世界で食べてた食べ物なんかを食いたくなったから、ゼバグに頼んではじめた事だったんだけど、世の中何がどこでどう役に立つか分からないといういい例だと思う。

最終チェックの場でもあった、昨日の晩餐でのチキンドリアとオニオングラタンスープのうまさは反則だったし……。

いつも冷静沈着と無愛想……もといクールなイナ先生も素晴らしい料理の出来に、早くワトリアでの出店準備にかかるべきだと言い出す始末。

受けない理由がない。

次に大事な要素であるお酒。

これも俺が7歳のときに父上に進言したラ・テオフラストゥス領でのワインとウィスキー作りの特産品化が大成功を収めており、うちの領の酒は現在エルトリン国内のみならず、諸外国でも高い評価を受けているらしい。

そのお酒を優先的に安い価格で回してもらえることが決まって「いた」。

この世界、ガラスの加工技術だけは異常にレベル高いから運送面でも問題なしだし。

この件に関しては珍しく食いついていたシランが、あのレベルのお酒が振舞われる店が流行らないわけがありませんと、太鼓判を押してくれた。

これにより俺たちの店は安定的にうまい酒を仕入れる事ができるようになり、ラ・テオフラストゥス領の生産者たちは安定的に買ってくれる大口の顧客を手に入れたことになるので、双方いいこと尽くめだ。

そのことには不満はない。

……ただ父上たちにしてやられていた事だけは悔しいが。

そして制服。

俺の記憶からイギリス・ヴィクトリア時代の古きよきメイドさんの制服を再現し、それをウェイトレスの皆の制服に採用！

そして数年がかりでの完璧な接客とサービスの訓練により、うちの従業員さんたちはすでにただの従業員ではなくスーパー従業員と化している！

スマイル０円！

しかも諸経費がプラスマイナス０であればいいので、値段も格安！

これで流行らなかったら俺は泣く！

失礼、ちょっと興奮してしまった。

とまぁそんな訳で驚かされてしまったが、計画は順調のようで何よりだ。

まぁシランのやる事にいちいち怒ったり驚いてたりしたらきりが無いからな。

それでもよく驚かされるけど。

あんなのしょっちゅうだしな～、もう慣れた。

それにしても13歳の誕生日の前に、宿屋のオーナーになるなんてことがあるとは……転生はしてみるもんだねぇ……。

さて起きるか。

それにしても何かを忘れてる気が……。

なんだろ……。

何か大変な事を忘れている気がする……。

あ、大失敗。テンプレネタやりそこねた。

◇◆◇◆◇◆◇◆

まぁ二日の朝、朝食というにはかなり豪華な食事をいただいた俺は、再びイナ先生を伴って転職クエストの続きに出かけた。

そして今俺のポーチにはなんと弁当と水で薄く割ったワインが入ってる。

何か『止まり木亭のランチボックス』っていうものらしいだけど、元冒険者の父上や先生たちと料理人が相談し、力を合わせて作り上げた自慢の一品らしい。

すごく中身が気になったので覗いたら、小麦の風味溢れる柔らかめのパンにはさんだ干し肉と玉ねぎの酢漬けとハーブのサンドや鶏肉を揚げたから揚げのようなものがかなりの量はいっており、おまけにデザートにりんごが丸ごと一個というサービスぶりだった。

聞くところによるとこんなサービスまでしてる冒険者宿屋は存在しないらしく、シランはおもいっきり儲けるつもり満々のようだった。

……うん、悔しいけど大当たりすると思うわ、このサービス。

あらためてシランの能力の高さを思い知らされた。

なんていうか視野が広くて、目が細かいところまで行くのがすごい。

あとこれであのドSでさえなければ……。無理だな、あきらめよう。

ということでクエスト進行のために早朝からエルトリンシティ戦士ギルド『猛き剣集う館』にやってきた。

まぁ、担当のウィテムさんなんだが、初対面の人にいつもされる反応されたんで悪いけど略す。

気持ちは痛いぐらいにわかるんだけど、あまりにも代わり映えがしなさすぎるから、いい加減他のパターンが欲しい今日この頃。

テンプレ乙。

ということでウィテムさんと話して、クエストアイテム『アスナイの推薦状』を渡し、代わりにクエストアイテム『ウィテムの依頼書』を入手した俺は、手のひらで転がせる位の大きさの小瓶に入った『高級移動速度向上ポーション』をぐい飲みして次の目的地、南のカイゼラ湿原目指して朝のエルトリンシティの街を走り出したのだった。

◇◆◇◆◇◆◇◆

木枯らしが吹く乾季である冬の葦の群生地。

エルトリン国内最大の水源地にして、カイゼラリザードマンの本拠地、カイゼラ湿原。

水面にできた細波の広がりが、吹きぬける風の確かな存在を教えてくれる。

太陽は真上、つまり今およそ正午だと言う事だ。

最短距離で走り抜ければもう少し早く来れなくもなかったんだけど、ちょっと通り道にあるいくつかの狩場に寄っていたらこんな時間になったと言うわけである。

これで今日寄った狩場には、今後ゲートキーパーで飛べる。

まぁ、後々のことを考えるとプラスだし、昨日稼いだアドバンテージは生かさないとな。

にしても《Ｎｅｗ　Ｗｏｒｌｄ》時代は、常に青々とした一面の葦しか見たことがなかったが……、今俺の目の前に広がるのは、冬枯れした茶色の葦。

これぞリアルだね、まさに。

ちなみに俺の生まれ育ったエルトリンの国は、基本ワトリアを含む大部分が地中海（？）性気候らしく、雨季と乾季が存在するけど比較的過ごしやすい気候の国である。

もちろん冬の今は雨季なんだけど、ここ数日は天気にも恵まれて正直助かっている。

どうも俺は晴れ男らしく、何かやる時に雨が降っていたことがない。

入学式とか遠足とか運動会とかな。

まぁそんな事はおいてといてこのカイゼラ湿原、レベル２０～４０までのウィザードやエルフィンウィザードといった魔法攻撃職の聖地である。

理由は単体行動のモンスターしかいないこと、モンスターが密集していないので連鎖的に集まって次々に襲われる（これをリンクという）ことがほとんどないこと、リザードマンは物理攻撃に強く魔法攻撃に弱いという特性などの為に、ここで２次転職までのレベル上げをする魔法職は多い。

実際俺も昔はここに篭もってたし。

４０までお世話になってたし。

そんなある意味懐かしの狩場で感慨に浸っていたら視線の先に何か動く奴発見。

緑の、トカゲが、槍もって、歩いてる。

第一『カイゼラリザードマン』発見。

距離は十分、相手は俺に気づいていない。

ということで『エルダーウッドワンド』を装備して、試しに『ファイヤーボール』をくらわせてみる事に。

昔はサッカーボールくらいの炎だったけれども、今ではサーカスの玉乗りくらいの大きさになった炎の玉を遠慮なくぶち込む。

炎上。

ちっ、さすがに一発でしとめられんないようでこっちに向かってきた。

だが、甘い！

初級魔法である『ファイヤーボール』はスキル再使用（これをリキャストの時間という）までの時間が早いので、トカゲが俺に近づく前にもう一度『ファイヤーボール』を作り出し、もう一発お見舞いする。

よし、倒せた。

そして、ドロップアイテムとお金を拾う。いつまでたってもやめられんなこれだけは！

まぁそんなこんなで冬枯れの湿原で暴れまわった俺は、おなかが空いたと思った頃には目的のクエストアイテム『魔術師の心臓』を手に入れてエルトリンシティに帰還した。

……弁当どうしよ、町で食べるか。

◇◆◇◆◇◆◇◆

帰還したエルトリンシティの中央広場で階段に腰掛けてお弁当を堪能した俺は、イナ先生と二人、まっ昼間の神殿前で地味に感動していた。

「うまい……」

いや、まじで厳選した素材と料理人の手間がこのランチボックスには結実している！って感じで、これが毎日食えるなら俺たちの宿は絶対流行るとあらためて確信した俺たちだった。

うん、宿屋も他の町に作ろう。儲かるもん、絶対。

そんな弁当で英気を養った俺たちは、再びエンデルさんにクエストアイテムを押し付けて、今度は東に向かって走り出した。

目指すは、エルトリンシティ東の『アイエオーク駐屯地』。

別名『パーティー道場』へ。

今日5本目のポーションを飲み終えたところで『アイエオーク駐屯地』に到着した。

さすがに冬は日が落ちるのが早い。もう世界を包む色は昼の陽の白い光から夕日のオレンジに変わっている。

そして遠くに見える昼間見たリザードマンとは異なる緑の亜人。

醜い顔、太い手足。そして腰みの。オークである。

オーク族は、ゴブリン族以上に存在するレベル帯が広く、ゴブリンが１０～５０くらいのレベルなのに対して、オーク族は最弱のアイエオークの２０から、俺が知る限り最強だったメリエアスオークの７８まで、まさにいつまでもいろんな場所に存在する敵対種族。

オーク族の共通点は肌の色が緑。だからオークの通称は緑。

そしてこの『アイエオーク駐屯地』が『パーティー道場』と呼ばれるのにはわけがある。

この狩場経験値、収入ともにかなりおいしいのだが非常にリンクしやすく、そして敵が強い。

Ｄグレード最強装備といえど、普通のプレイヤーでは適正レベルではとてもではないがソロ狩りは出来ない。

つまりパーティ入門のために設定されたといえる狩場なのである。

さすがの俺も今の実力で、ここでのソロは少し無謀。

入り口くらいなら何とでもなるが、それ以上は普通に死ねる。

まぁ何でこんな話をしてるかというと……。

「ぐあぁあああ！リンク引っ掛けた！」

絶賛逃走中だからです！囲まれたらマジで死ぬ！イナ先生笑ってないで助けて！

俺を砂煙を立てながら追いかけてくるのは6体のアイエオークども。
くそ、来んな！緑め！

……この後30分ほど命がけの追いかけっこをさせられ涙目になりながらも、何とか各個撃破に成功した俺は、ウィザードのクエストアイテム『壊れた魔術師のワンド』5つを手にいれた俺は、先ほどの反省を込めてクエストモンスター『アイエオークスカウトリーダー』に慎重に忍び寄り、背後から丁寧に丸焼きにして、クエストアイテム『奪われた伝令書』を無事に入手。

終わったころ、空には既に満点の星。

一瞬だけ見とれたけど、感動しているだけの精神的余裕はゼロだったので、即効スクロールを使って帰還。

安全な町に戻ってきたことを確認した瞬間緊張が解け、ひさびさにその場に座り込んでしまった。

俺の傍らではイナ先生が、まだまだだなと言った顔で見ていたがちょっと待ってくれ。

俺まだ12歳なんだけどね！

とにもかくにも、これでウィザードクエストは事実上終了。あとは明日エンデルさんと話してクエストアイテム『壊れた魔術師のワンド』と、クエストアイテム『魔術媒体目録』を渡して、代わりにク

エストアイテム『魔術師の証』を入手したら全部終わり。
後はワトリアに帰ってから父上にウィザードにしてもらおう。

5分ほど街の建物の間から見える星をぼけ～と眺めたあと、引きずるような足取りで宿へ。

皆が笑顔で出迎えてくれたのが、実家みたいでかなりうれしかった。

昨日給仕をしてくれたお姉さんが「お風呂が沸いておりますので」というので、一もニもなく早速お風呂に。

エルトリン特産のオレンジの香りがするお湯が最高だった。

うん、死にかけた後のお風呂っていいよね。マジで生き返ったよ。

風呂は命の洗濯場ってホントだな、オイ。

ゆっくりと長風呂を堪能した俺を待っていたのはもちろん夕食。

今日の夕食は焼きたてのパンと宿自慢のとろっとろのビーフシチュー、とフレッシュハーブのサラダ。

特においしかったのが野菜の形がなくなるまで煮込まれたシチュー。

溶け込んだ野菜の味と、口に入れるととろけてしまうほど柔らかな肉の味が何ともいえない一品で、思わず5杯もお代わりをしてしまった。

げっぷ。俺は満足です。

満腹になった俺は、自分のスイートなお部屋に早々に入って寝ました。

このシーツ、太陽のにおいがする……といったあたりでその日の俺の記憶は途切れた。

後で聞いた話だとイナ先生は平気な顔で、シランと遅くまで酒飲んでたらしいけどな。

スパルタ人め！

あんたのギリギリはほんとにギリギリですから、もう少し前で助けてください！

トラウマが増えそうだったよ！

ということでそんなこんなで転職クエスト2日目終了。

ウィザードクエスト事実上終了。

タイムリミットはあと1日。

◇◆◇◆◇◆◇◆

翌日。ワトリアを出て2日目。予定では転職クエスト最終日。

ふわふわのホテルで出るようなスクランブルエッグと焼きたてのパンに、様々な野菜を煮込んだ野菜のやさしい味がするスープというその日の朝食をおいしく堪能した俺は、足取りも軽く朝一でエルトリンシティ魔法ギルドに。

昨日終わらせたウィザード転職クエストの仕上げに、クエスト達成の証であるクエストアイテム『魔術師の証』を手に入れるために。

「とことんとんでもない子供だね、君は……。まさかたった2日でこのウィザードの試練を終わらせてくるなんて……そこまでいくとすごいを通り越してもはや非常識だよ……。

この10年で1、2を争う天才と学院で呼ばれていた僕ですら、友人達と3人がかりで試練開始から1月以上かかったというのに……。

……いったい君はどんな魔法をつかったというんだい？」

「えと、《ファイヤーボール》ですけど？」

その俺の言葉にがくんと肩を落とすエンデルさん。

「アハハハハ。あぁ……、今まで自分が積み上げてきたものはなんだったんだろうか？　天才？　まったく滑稽だ、昔の自分を殴ってやりたい……、目の前の真の天才と比べたら僕なんて……。

……ダメだ、ギルドマスターにもこの子に普通の常識を当てはめようとすると頭がおかしくなるからやってはいけない、とあんなにも言われていたんだった……

忘れよう、忘れるのがいいんだ……」

哀れにも軽くぶっ壊れながら俺の目の前で自分の世界に入り込む目の前の２６歳、将来有望な若手ソーサラーレベル４１。

やっぱい。顔色とか青通り越して白いし、手が所在無く動いてるし、ぶつぶつ言うの止まらないし。

そして、いやいやいや。何気にかなり酷い事言ってくれてるけど、全部周到な準備の賜物だよ？

それに冒険者になってからここまで６年以上かかってるんだよ？

むしろ俺は遅い部類だと思うんだけどな！

それに俺は天才とかじゃなくて、ズル（チート）だから。人に自慢は出来ないけど。

そして学院卒だったんですね。どうも今まで軽いタメ口ですいませんでした、先輩！

な～んて事はこの空気の中言えるはずもなく、あいまいなうすら笑いを浮かべるしかない俺。

たっぷり3分ほど経ってからようやく自分を取り戻したエンデルさんは、全てを諦めたような笑顔で俺を祝福してくれた。

「あぁいけない、仕事はしないとね……。これが『魔術師の証』だよ。よく頑張ったね。お疲れ様」

渡されたのは魔力を秘めた小さな金のブローチ、クエストアイテム『魔術師の証』。

思っていたよりもずっしりとしたその重みに純金かと驚きながら、エンデルさんに

「ありがとうございました。あとお願いなんですが……」

と言おうとすると、蒼白な顔のエンデルさんは全て心得ているといった表情で手を振りながら、

「分かってるよ、君の事は誰にも言わない。うちのギルドマスターからもワトリアのギルドマスターからも、『くれぐれも』秘密にって言われてるし、僕も学院の後輩の情報をぺらぺら話すほど迂闊じゃないよ。

……それにこんな荒唐無稽な話を誰も信じたりしないって……」

と言ってくれた。

ありがとうございます、先輩。最後の一言、説得力ありすぎです。

そんな煤けた感じのエンデル先輩にもう一度お礼を言って、俺は魔法ギルドを後にした。

次は、隣にお手紙届けなきゃ。

あと俺がダブルスキル持ってるって知ったら、エンデルさんどうなるんだろ？　何か怖いから言わないけどさ、真っ白な灰になりそうで。

あと振り返ったりしないよ？

だって俺が背中向けた瞬間からまたず～とぶつぶつ言いだしたんだもん！怖いよ！

◇◆◇◆◇◆◇◆

お隣に手紙を届けた俺は予定通り『ジエンの古戦場』に行くように言われたので、じゃあといった感じでギルドの外に出ると、ゲートキーパーの前の広場にざっと見たところ１２，３人の冒険者らしき一団がたむろしていた。

構成はほとんどヒューマンばかりだが、ちらほら他種族の姿も見える。

装備から判断するに全員Ｄグレード冒険者以上。

内訳は戦士系が１０、魔法系が３と言ったところだろうか。
その光景を見てようやくこの集まりが何なのかに気づいた。
なるほど、討伐モンスターか。
討伐モンスター、一言で言うと《Ｎｅｗ　Ｗｏｒｌｄ》における小ボス。
定期的に一定の場所に出現する大きくて強力なモンスターで、普通複数のパーティで協力しないととても手には負えない怪物たちである。
他の特徴としては基本普通のモンスターがこちらが近づいたら攻撃してくるアクティブ型なのに対して、大型モンスターはごく一部の例外を除き、攻撃するまで何もしてこない非アクティブ型のモンスターだという事。
あと高い経験値を持ち、何らかの現物を高い確率でドロップする冒険者にとってハイリスクハイリターンな存在。
ということで各冒険者たちを細かく観察していく。
装備を見れば大方どういう職業か分かるし、討伐の成功の有無は編成の段階で９０％決まると言っても過言じゃないからだ。
そう思いながらふと隣を見ると先生も俺と同じように彼らを観察していた。

どうやら同じことを考えていたらしい。

この世界で初めての討伐モンスター狩りのパーティに興味が沸いたので、詳しい事を聞きたくなり外套で装備を隠し、かわいい子供の振りをして聞いてみることに。

いや、子供なんだけどさ。

「あの～、冒険者のひとですよね？　どこに何を倒しに行くんですか？」

話しかけたのは、Ｄグレード中盤くらいの防御力を持つアイアンアーマーセットに身を包み、左手にナイトシールドを持った騎士風のヒューマンの男。

年のころは３０歳くらい、堂々とした体躯の持ち主でなかなかの実力者に見える。

……レベルはおおよそ３０台前半、見た感じこの一団のリーダーだろう。

「うん？　坊や。どこの子だい？　私たちは今からモンスターを退治しに行くんだよ」

うん、それは分かってる。だから『どこ』に『何』を倒しに行くのか俺は知りたいんだよ！

目の前の男はどうも血の巡りが悪いのか、それとも俺が子供だから言う必要はないとでも思っているのか、あっさりと教えてはくれれな

い。

久々に幼女スペシャルの出番か？　と思っていると後ろから声が飛んだ。

「すまない。この子は私の弟子でな。来年『戦神の鍛錬場』に放り込むつもりなのだが、先輩である君達を見てどこに行くのか知りたくなったようだ。ぶしつけではあるが、もし差し支えがないようなら、この子の後学の為に教えてやってくれないだろうか？」

俺の肩越しに騎士風の男に向けられた先生の言葉の巧みさに内心感心しながら、とっさに自分に振られた役割は忘れずに、俺は立派な先輩にあこがれる冒険者見習いの少年の瞳で目の前の男を見上げた。

……こうかはばつぐんだ！

その俺の視線に答えるようにとたんに饒舌になり、話し出す男。

「そうか、君はこれから冒険者になるのか！よろしい、かわいい未来の後輩のために教えてあげよう。私たちは今から『ジエンの古戦場』にいる討伐モンスター『ヒュージスケルトン』の討伐に向かうところなんだ。

奴は強敵だが、我々なら必ず奴を倒せると私は確信している！」

なるほど、『ヒュージスケルトン』か。

レベル３５の討伐モンスターで、強力極まりない文字通り巨大な骸

骨である。

レベル３０台最強と名高かった怪物に、どうやらこの人たちは挑む気らしい。

ちょうどいい、行き先は同じだ。後でじっくり見させてもらうよ。

そう思いながら、冒険者『見習い』の俺はお礼とともに返事をする。

「へ～、すごいんですね～。頑張ってください！応援します！」

……現地でね。

もう一度深々とお辞儀をしてから、彼らのところから去る俺と先生。

並んで歩き出した俺たちは、彼らから見えないところまで移動すると、一瞬先生と目を合わせる。

そして俺は一気に速度を上げ『ジエンの古戦場』へと向かって全速力で走り出した。

彼らはおそらくゲートキーパーで移動するはず。

急がなくちゃ間に合わないからな。

これは得がたい機会だ。自分の知識と現実をすり合わせる為の。

逃すわけにはいかない。

◇◆◇◆◇◆◇◆

時間にしておよそ7時間ほどだろうか？　全速力で走りに走りとおしてようやく目的地『ジエンの古戦場』に到着した。

ここはその昔エルトリンとジラーデスの大軍が激突したその名のとおりの古戦場で、その時に死んだおびただしい死者の無念によってアンデッドたちが徘徊する恐ろしい場所である、と《ＮｅｗＷｏｒｌｄ》内のＮＰＣは昔話してくれた。

つまりゾンビやスケルトンのうごめくアンデッドだらけの荒廃した場所。

実際のところこの狩場は、主に鈍器を持った戦士系と各種族のヒーラーたちの2次転職までの狩場であるといえる。
威力の高い攻撃魔法を持たないヒーラー職だが、数少ない攻撃魔法である《ホーリーライト》の魔法が通じるアンデッドなら経験値が稼ぎやすいからだ。

鈍器を持った戦士系が有利な理由は、ここのモンスターの多くが鈍器弱点持ちだから。

というわけで初めて見ましたアンデッド。

……まじでグロい……、その光景はまさにリアルバイＯハザード……。

スケルトンもきついが、ゾンビ系はその比じゃない。近づきたくないし、短剣が汚れるから近接戦闘自体絶対にしたくない。

そう思いながら気づかれないように、目標の位置までこそこそ移動する俺とイナ先生。

狩場を大幅に迂回してくずれた砦跡の上に到着した俺たちは、眼下の目的のモンスターとそれを取り囲む準備中の冒険者達に目をやった。

巨大かつ禍々しいスケルトン、討伐モンスター『ヒュージスケルトン』。

過去の大戦（おおいくさ）のおり『ジエンの古戦場』に散ったエルトリン、ジラーデス両国の戦士たちの怨念をある邪悪な魔法使いが寄り集め、そして産み出された巨大なスケルトン。

周りを囲む冒険者たちとの比較から考えるに2階建ての一戸建てと同じくらい、およそ5m以上の超特大モンスターであることが推測できる。

ていうかでかすぎだろ、あれ。巨人族の骸骨とかじゃないと説明がつかなくないか？　と思わず心の中で突っ込みを入れてしまうほどの巨大さだ。

そんな常識では考えられないスケルトンに勇敢に立ち向かおうとす

る１４人の冒険者。

その様子を気づかれないように、上から詳細に観察した俺は外れてくれと思いながらも秘かに確信する。

彼らの『失敗』を。

イナ先生を見ると、小さく頷いてから小声で話しかけてきた。

「どう見た？」

「おそらくですが失敗するかと」

「理由は？」

「火力は足りているでしょうが、見たところ《ヒーラー》が多くて３人。足りないと思います」

そう、俺が無理だと判断した理由。それは後衛である《ヒーラー》の不足の為だ。

しかもＤグレードの場合、強化魔法も回復魔法も職業分化前のため全て《ヒーラー》がこなさなければならない。

人数自体は最大パーティ構成数である７人×２パーティで適正だが、『ヒュージスケルトン』の攻撃に耐える為のタンクＰＴにクレリックと思われるヒューマンの魔法職が２人、もう一つのパーティにもう一人という構成なのだが、こいつ相手にそれでは無理だ。

正解は盾2枚、できれば3枚にヒーラーが最低3枚。

もう片方のパーティにもヒーラーが2枚で、あとはダメージディーラーという構成なら討伐は可能だっただろう。

できれば弱点である鈍器持ちの戦士職と炎系魔法を得意とするウィザードでダメージディーラーを構成できるとなお良い。

但し彼らの名誉の為にいっておくと、今の構成も決して悪い構成ではない。

普通の討伐モンスターなら十分安定してしとめられるメンバーだと思うが、今回は相手が悪い。

相手は2次転職直前のメンバーだけで組まれたパーティですら、編成しだいで簡単に全滅するレベル３０台最強の討伐モンスターなのだから。

そんな思いを込めて先生に無理だといったのだが、その言葉に先生はほんの少しだけ満足そうな笑みを口の端に浮かべただけ。

そこまで分かっているのにまったくあわてる事なく、そして助けようともしない事に怒りを感じつつ、何とか止めようと立ち上がろうとした俺を引きとめる先生の手。

感情が高ぶり、声を潜めるのも一苦労である。

「何故ですか？負けるのが分かっているなら止めたほうが」

「子供に何を言われたからといって彼らは止まらんし、仮に今止められたところで近い将来また同じミスを犯すだろう。
冒険者なら誰もが一度は通る道だ。放っておけ」
「ですが！」
「ジオ。私が考えるお前の最大の才能は何だと思う？」
何だ？　唐突に。何か関係あるのか？　煮立った頭を何とか静め、先生の質問の意味を考えるが、まったく分からないので素直に答える。
「戦士系と魔法系の力を両方持っていることですか？」
「違うな」
違う？　チート能力以上の才能なんて俺にはないんだけど？
そう言うと先生は腕に力を込め、俺を元の体勢に戻した後手を離す。
隣で座る先生は、目線は厳しく準備中の眼下の光景を見据えたまま俺に答えを教えてくれた。
「私が見る限り、お前の一番の才能は『臆病さ』だな。
臆病であるが故に、執拗な努力と周到な準備を常に怠る事はない。
数々の突飛な発想も、その臆病さ故に生まれたものが大半ではないか？

それに比べれば、お前の神から授かったであろう才能など物の数ではないよ。

大体、普通のものでも職次第（クラス）においては遠近両戦をこなす事は可能だ。

確かに戦士系と魔法系の力を両方持っているという事は凶悪な才能ではあるが、それを活かす努力が出来ぬものには宝の持ち腐れにしかならん才能だ。

おかげで私はお前には冒険者として一番大事な事を教える必要がない。

楽をさせてもらっているよ」

むぅ……。褒められているんだろうが、どう反応を返したらいいか分からない……。

「次点で分析力とお前の中にある異常な知識。その次が発想力と言ったところだな。

……む、ジオ。始まるぞ、下を見ろ。彼らは今からここでお前がする必要のない勉強をする事になる。

最も教えるのが困難な事をな」

そう言われて下を見ると、準備を終えた冒険者達の中からおもむろに進み出る先ほどの騎士風の男。

彼の右手に持ったＤグレード片手鈍器『モーニングスター』が『ヒュージスケルトン』に振り下ろされ、討伐モンスターと彼ら１４人の冒険者たちとの死闘の幕は開かれた。

◇◆◇◆◇◆◇◆

現実とは理不尽なものである。

実力どおりに勝利し、そして実力どおりに敗北する。

そこにはくだらない精神論の介在する余地はない。

それをあらためて俺にまざまざと見せつけてくれた戦いだった。

１４人の冒険者たちと『ヒュージスケルトン』の戦いは、予想通りの展開で始まり、予想通りの結果で幕を閉じた。

開戦およそ３０分にて冒険者全滅。

おそらく『ヒュージスケルトン』の残りＨＰは3分の1前後といったあたりだろう。

戦闘開始２０分くらいまでは何とか善戦していた彼らだったが、その時点で《ヒーラー》のＭＰが枯渇。

あとは『ヒュージスケルトン』の猛攻に耐え切れなくなった騎士風の男の死亡とともに戦線が崩壊。

あとは無残な蹂躙により全員が死亡。今頃神殿で反省会といったところか……ゲームだったら、なら。

今の俺はそんな風に冷静に考える事で、必死に目の前で起こった惨劇を乗り越えようとしている。

さすがに目の前で誰かが殺されるところを見るの初めてだったから。

大きく息を吸い、そして吐く。

彼らが復活するとはいえ、俺が見殺しにしたのは確かである。

やはり心に澱のような物が溜まった感じがする。

しかしそのおかげで心が定まった。

……最初の獲物はお前だと。

先生は全てが終わったあと、たった一言「通過儀礼だな」と言っただけだった。

……どうやら俺は甘ちゃんで、先生は人でなしらしい。

俺はまだそんな風に割り切れはしない。

ここはもうゲーム（お遊び）ではないんだから。

その後必死に折れそうな心を支えながら、入り口近くまで戻った俺はそのへんにうろついていたクエストモンスター『ジエンバンディッドスカウト』を速攻で倒して、クエストアイテム『奪われた荷物』を入手後スクロールでエルトリンシティに帰還。

休むことなく戦士ギルドに向かい、クエストアイテム『ウィテムの推薦書』を手に入れた。

これでレンジャーの転職クエストも終わり。

担当のウィテムさんの驚愕した顔など今の俺にはどうでもいいことだった。

戦士ギルドを後にした俺は、ゲートキーパーを使って2日ぶりのワトリアへ。

夕日に染まる街の景色も目もくれず我が家に帰り着くと、母上やみんなへの挨拶もせずそのまま部屋に閉じこもる。

装備を机の上に置いて着替えだけは済ませてから、ベッドに横たわって見慣れた天井を睨みつけながら今まで準備してきた計画をやつ用に練り直すべく頭を高速で働かせる。

……こんな精神状態では、今年の誕生日は楽しめそうもない。

そう思いながら思考の海を経由して深い眠りへと沈んでいく１２歳最後の日の俺であった。

転職クエスト最終日終了。

レンジャー・ウィザードともに目標達成。

## 第十三話　長期休暇は大変だった　？（後書き）

いかがだったでしょうか？

次で転職クエストは終わりです。

後何でチキンドリアかって？　数日前に私が食べたからです！

ご意見、ご感想、誤字脱字の指摘など幅広くお待ちしております。

## 第十四話　長期休暇は大変だった　？（前書き）

今回色々と自信がありません。

とりあえず休暇の前半は終了です。

## 第十四話　長期休暇は大変だった　？

俺はその時悪夢を見ていた。

何かすごく嫌なことがあった後、部屋に閉じこもった時の夜はいつもそうだ。

何かに追われる夢、誰かから責められる夢、永遠に続く責め苦の夢、自分のふがいなさを嘆く夢。

そんな悪夢をいくつも渡り歩きいつも最後にたどり着くのが、思い出したくもないあの『死』の場面。

よく分からないまま腹に刃物をつきたてられる自分の姿。

流れ出る血と体温。

狂ったように笑う女。

暗い闇に沈むように消えていく『自分』という存在。

それを永遠に繰り返すかのような無限円環。

でもそんな最悪な夢はいつも唐突に終わる。

つらくて痛いその悪夢の環から俺を外へと連れ出してくれる、温かくてやさしい手によって。

その手に導かれて俺は終わらない悪夢とさよならする。

そうして深い闇の底から俺が目を覚ますと、そこにはいつもにっこり笑って俺の手をやさしく包むマリエルがいるんだ。

そして今回もまた――――。

「目を覚まされましたね、13歳おめでとうございます。若様」

そこには月の光を背にやさしく微笑む俺の女神様がいた。

◇◆◇◆◇◆◇◆

「……ル」

「はい、若様」

その呼びかけに応えたいのに、彼女の名前を呼ぼうとする声がかすれる。

声が出ないのだ。

何年も声を出したことがないかのように。のどに砂が詰まったかのように。

嫌だ、嫌だ、嫌だ。

搾り出すように、彼女の名前を叫ぶ。

じゃないと彼女が消えてしまう。

そう思いながら。

「……リエル」

「はい、若様」

「……マリエル。マリエル。マリエル。マリエル。マリエル」

何度も呼ぶ。求めるように、すがるように、なくさないように。

一度声が途切れたらもう帰ってこれなくなるんじゃないかという不安で。

呼び続けないと彼女が夢に変わってしまうのではないかという恐怖で。

だから何度も何度も。

「はい、若様。マリエルはここにおりますよ」

やさしく俺の手を包み込んだ彼女の手の温かさで、やっと俺は俺が

生きている事を、悪夢が終わった事を理解した。

息を吸い、吐く。

それができる自分に何故かびっくりしてしまう。

まるで奇跡のようだと。

うっすらと目に映る美しい人がまた俺に魔法をかけてくれたのだと、あやふやなままの俺の頭はそう理解した。

長い時間をかけて呼吸を整え、ようやく俺の唇は意味のある言葉を紡ぐ。

「……マリエル。怖い……怖い夢を見たよ」

俺のその言葉にマリエルは笑いながら包み込むようにしている手に少し力を込める。

今はその少しの強さが何よりもうれしかった。

「大丈夫です若様、もう怖い夢はおしまいです。ずっと私がお傍についております。

若様がもしまた怖い夢をご覧になりそうになったら、夢の中に入っていって私がお助けいたしますから」

安心してお眠りください、という言葉と彼女の手のぬくもりによっ

て俺はようやく安心して目を閉じた。

彼女が来てくれるなら、もう大丈夫だと。

それは確信。

そしてもう一度俺は眠りに落ちた。

悪夢はもう見なかった。

次に目覚めた時、俺の手を握ったままベッドの脇で跪くように眠るマリエルがそこにいた。

何度あの声に救われただろう。

何度この手に救われただろう。

何度あの笑顔に救われただろう。

そんな俺の眠れる女神様に言えるのは、いつもこの一言だけ。

「……ありがとう。マリエル」

◇◆◇◆◇◆◇◆

起こさないようにそっとマリエルを抱きかかえて自分のベッドに横たえてから、俺はこっそり自分の部屋を後にした。

廊下の窓から見える外の景色はまだまだ薄暗く、陽はまだ昇りきってはいないようだ。

「13歳か……」

新しい年。それは俺が13歳になったという事であり、前の世界（前世）を旅立ってから13年もの時が過ぎたということだ。

今回の事を冷静に振り返ってみる。

冒険者になるっていうことは、つまりあれを日常にするって事だ。

あの死んでいった彼らの運命はいつ自分にふりかかるやもしれない。

血まみれの富と栄光の世界だ。

正直、今のまま普通の貴族の子供として穏やかに過ごす人生もある

と思う。

今までの全てをドブに投げ捨てたとしても、誰に文句を言われる筋合いはない。

ないのだが。

そういう道も考えてみたが、やはりそれは無理のようだ。

我ながら呆れてしまう、自分の愚かさに。

俺は力が欲しい、誰にも何も傷つけられないくらいに。

俺には力が必要だ、諦めるつもりはないのだから。

俺は強欲だ、あらためて自覚する。

新しい年、生まれた日。決意を新たにするにはちょうどいい。

……ただあの子達を連れて行くのはやめにしないとな。

自分の我儘の極みに、我ながら苦笑する。

どこまで他人の運命を弄べば気が済むのかと。

いや、だがしかし。

俺はやはりそういう人間のようだ。
行く先は地獄しかないだろうな、しかたない。
俺は覚悟を決めたよ。
大きく息を吸い、そして吐く。
体は俺の意思のままに動く。
マリエルのおかげだ。
俺はもうどこにでも行ける。
――――ならば俺は前に進もう。心のままに。
そう決めたらアレが見たくなった俺は、石作りの廊下を走り階段を駆け下りてそのまま外へと飛び出す。
冬の身を切るような朝の空気が気持ちいい。
そのまま太陽の昇る方向を見据えた俺はその視線の先に、空に浮かぶ小さな黒い点のようなものを見つけた。
そのままはるか遠くにあるその黒いものを睨みつける。

アレだ。

とりあえずはアレが目標。

何故ならアレは俺がなくしたものの象徴だから。

だから、取り戻す。

そんなことを考えていると自然と言葉がこぼれ落ちた。

「待ってろよ、俺はもう一度お前の主になってみせる！」

「このような早朝に突然大きな声を出されてどうなさいました？
何の主になられるのですか？　ジオ様」

……唐突に背後からかかる聞き慣れた幼い声。

ゆっくりと振り向くと、そこにいたのはこざっぱりとした身なりの
黒い髪の少年だった。

「……テト、おはよう。いつからそこにいた？」

「おはようございます、ジオ様。新しい年を迎えることが出来た感謝を神々に。そしてお誕生日おめでとうございます！えと、いつからと申されましてもジオ様がこちらにいらした時からです」

しまった。興奮していたせいでまったく気配に気づかなかった……。

そうこの少年がテト。あの時買った俺の運命を決めた少年。

初めて会ったときから変わらない、キラキラ輝く綺麗な目で俺を見下ろしてくる。

……そう変わったのは互いの目の位置。

俺を見上げていたあの日の小さかった少年は、４年の歳月を経て今では俺が見上げるほどの長身へと成長していた。

おそらく既に１６０センチは楽に超えているだろう、まだ１２歳なのに。

ちなみに俺の身長は１４０センチ前半といったところ。

俺のほうが１歳年上なのに……。

言わずもがな、目下俺の最大のコンプレックスは身長である。

それをこいつは強烈に刺激する、無自覚に！

「……ありがとう、テト。そして俺が今叫んだことは忘れてくれ」

そしてあまり近寄るな。

新年早々イライラしたくないんだよ、自分の小ささで！身長と器の面、両方でな！

そう俺が言うとう～んと小首をかしげた後、いつもの大きな声で

「分かりました！忘れます！」

と叫んだので近くの木から小鳥達が驚いて飛び立ってしまった。

いっきに力が抜けた俺は、そのままよく刈り込まれた朝露付きの芝生に倒れこんだ。

まぁ、何にせよ……新年最初の日、１３歳になった最初の朝。

あらためて人生を決める重大な決意をしたすぐ後にも関わらず。

決まらねぇ……。

こんな恥ずかしい子ですいません……。

あとテト。お前は少し空気を読め！執事には必要なスキルだろ！

◇◆◇◆◇◆◇◆

3日ぶりの我が家を少しうろうろして時間をつぶし、日が昇り始めたところで父上たちの寝室へ向かう。

俺が生まれた部屋でもあるここは、まさに今の俺の原点と言っても過言ではない。

大きく息を吐いてからドアをノックする。

「誰だ？」

父上の声。もう起きていたのか。

「おはようございます、ジオです。入ってもよろしいですか？」

と言ってドアを開こうとした瞬間、突然内側からドアが開きそのまま母上に抱きしめられた。

「ジオちゃんもういいのよ、無理はしなくて。普通でいいの。私は貴方が幸せならなんでもいいの。つらいのなら冒険者になんてならなくていいの」

そう言いながらきゃしゃな母上が俺を力いっぱい抱きしめていた。

胸が熱くなる。

そうだ、何も俺の女神様はマリエル一人ではなかった。

隙間から母上の顔をうかがうと明らかに寝ていない憔悴しきった顔。

それを見た瞬間、自然と俺の目から涙がこぼれ落ちる。

愛されている。

なんて幸せな男なんだろうと。

母の抱擁に身を任せたまま、新しい年と二人に対する感謝の挨拶をする。

「父上、母上。昨日は申し訳ありませんでした。色々あって取り乱しておりましたもので。

新しい年を迎えることが出来た感謝を神々に。そして私を生んでくれたお二人に感謝を。

母上、ありがとうございます。このように心配してもらって私は幸せ者です」

父上は声を出さず何度も頷いていた。目を潤ませながら。

母上は体を震わせて泣いていた。その背中を優しくなでる。

「父上、母上。朝食に参りましょう！ジオはお腹が減りました！」

そう言って笑った俺は二人に両手を差し出す。

そして俺たち親子3人は、神々へと感謝を捧げる今年最初の朝食へ手をつないで歩いていったのだった。

## 第十四話　長期休暇は大変だった　？（後書き）

お読みいただきましてありがとうございます。

ご意見、ご感想、誤字脱字の指摘など幅広くお待ちしております。

## 第十五話　長期休暇は大変だった　？（前書き）

今回短いのは、ちょっと話を先に進めたかったからです。

閑話で書くかもしれませんが未定です。

## 第十五話　長期休暇は大変だった　？

新しい年の最初の日に家族３人で食べた朝食はとてもおいしかった。

新しい年を無事迎えられた事を神々に感謝する新年最初の食事は、この世界の慣習で質素な黒パンと具のないスープと決まっており、食事中最初の祈りの文言以外は話してはならないというものであり、いつもの食卓よりも数段質素かつ静かなものであったが今までに食べた事がないほどその朝食はおいしかった。

父上も笑顔だったし、母上も涙交じりの笑顔だった。俺も泣きながら笑っていたと思う。

３人とも慣習に従い無言で食べた。でもお互いの目と目とで話していたから言葉を使うよりも多くの話をしたかもしれないほどだ。

俺なんてほとんど何を食べていたか認識もせずに口に運んでいたが、それでもおいしかった。その場に言葉がなかろうがなんだろうが、ただおいしかった。

食後、あの様子では昨夜一晩中寝ていなかったに違いない両親に寝てくださいと頼んだら、逆に父上に母上と一緒に寝て上げなさいと言われ、幼い頃のように母上に手を引かれて両親の寝室へ向かった。もうこちらでの年齢だけでも１３歳、昔（前世）なら中学１年生だった歳ではあるのだが、恥ずかしさよりも満ち足りたものを感じながら、俺は母上に抱かれて再びの眠りについた。

父上はそんな俺たちを眺めながら寝室に俺が生まれたときからあ

る安楽椅子に腰掛けて、俺たちが眠りについたのを見届けてから自分も夢の世界へと旅立ったようだ。

そうして俺の新しい年の最初の日であり、１３歳の誕生日の午前の時間はこの上もなく幸せで穏やかに過ぎていったのであった。

◇◆◇◆◇◆◇◆

ワトリアの街の大鐘楼の鐘が鳴り響く頃、穏やかな眠りから目を覚ましていた俺は、じぃの「ご昼食のご用意が整いました」という声をきっかけに両親を起こして食堂へと向かった。

さてここからがラ・テオフラストゥス家の新年の祝いが普通ではないところである。

いつもは家族のみで食事をする為だけに使われるだだっ広い印象のある食事の間だが、長大なテーブルとその前に整然と並んで座る屋敷に仕える全てのものにあたる１５人の使用人たちの存在感で、その印象を一変させていたのである。

テーブルには当然マリエルもテトもアリアもエリアもリューネもシルウィもいた。イナ先生もアニーもいた。

俺の姿を見て小さく頭を下げたマリエルと少し話したいとも思ったが、今はそういう時ではないから後にする事に。

そのマリエルの左右に2人づつ並ぶ俺の幼い従者や、この場に始

めて参加するアニーなどは緊張した顔つきでカチコチになっている。

テーブルの上には、俺たちが朝食で食べたものと同じような質素な黒パンと具無しのスープとグラスが人数分並んでいた。

テーブルの一番上座に当たる入り口から最奥の席へと歩く俺と両親。扉を閉め後に続くじぃ。母上と俺、そしてじぃが席に座った事を確認してからおもむろに父上が自分のグラスを掲げる。

入っているのはただの水。

父上はそれを持ったままよく通る声で話し始める。

「今年も新しい年の訪れを神々に感謝し祝うこの席に、誰一人欠けることなく迎えられた事を、このフィリップ大変うれしく思う。神々のご加護と日頃の皆の献身的な働きに感謝を。皆グラスを持て」

父上の声で全員がグラスを手に持って自分の目線の位置へと運ぶ、そして。

「乾杯！」

父上のその声で俺を含めた全員が水を飲み干し、目の前のパンとスープに手を伸ばす。

さてこの光景のどこが普通ではないのだろうか？

１８人の人間がただひたすら静かに食事をしている所？

外から見れば大変シュールなものだったであろうが、新年の感謝と祝いの食事はひたすら神々への感謝を込めながら無言で食べると決まっているのだから仕方ないし、これはこの世界では常識。

まぁ俺がわざわざ言わなくても分かるとは思うが、使用人とこのように重大な宗教的儀式でもある新年の感謝と祝いの食事をする貴族は明らかに普通ではない。おそらくこの大陸のどこを探しても存在しないだろう。

これは俺が9歳のときに父上と相談して決めた。

家中のものに日頃の感謝を示す為に、使用人たちも家族の一員として新年の感謝と祝いの場を共有すれば屋敷の使用人全てに今まで以上の団結が生まれるはずで効果的ではないかと父上たちに話したところ、それから毎年こういう形で新年最初の昼食を皆で食べることになっているのだ。

……新年の祝いをマリエルたちと一緒にやりたいと思ったからというのは内緒。以前はマリエルと従者達5人でそれを行っていたので、俺が仲間はずれな気分だったからというのは誰にも知られていないはずだ。

俺の屋敷ではこれをまず朝に各自の家庭で。マリエルたちは独身の使用人たち全員と一緒に。その後昼食は屋敷のもの全員と。さらに俺はこの後泉のほとりで待ってくれている俺に仕えてくれている人たちと同じことをする事になっている。

これももう毎年の事だ。一回の量はそれほどでもないので全然苦にはならない。むしろ足りない。

そう思いながら本日2度目の食事を楽しむ俺であった。

これのどこが下手をすれば屋敷が危なくなるほどのイベント？と思うだろ。

やばいのはこの後なんだよ。

◇◆◇◆◇◆◇◆

新しい年最初の日の夕暮れ。ラ・テオフラストゥス家屋敷前の庭は戦場と化す。

丸一頭回転しながら焼かれている牛1頭に豚2頭。料理人たちが総出で汗を流している。

玄関近くの開けたところには、先ほど食事の間を占領していた机が3つ並ぶ。

その脇に並ぶ無数の酒ダル。

屋敷の中から運ばれる様々な食べ物がテーブルを埋め尽くすように並んでいく。

その場を取り囲むように組まれた無数の松明。

俺に従ってくれる人々も、汗を流しながら準備を手伝ってくれて

いる。しだいに集まる４０人ほどの人間たち。

その準備の様を見ながら、俺は４人の従者達やアニーと一緒に二人の赤ん坊の世話をしている。アニーもどうやら俺がいなかった間にアリアたちと仲良くなったようで全員の顔が笑顔だったのが俺にはうれしかった。

まぁ、アリアたちが俺にじゃれてくるのはいつもの事だからその辺はスルーだ。

そうこうしているうちに準備が整ったようで、テトが俺たちを呼びにきた。

さぁ今年もパーティの始まりだ。

「え～、今年もこの場で皆と顔を合わせることが出来た事を感謝する。

では楽しんで欲しい！乾杯！」

父上の音頭で始まるラ・テオフラストゥス家新年恒例大宴会。

皆で食べ、皆で飲み、皆で語る。これこそが人間のあるべき姿の一つだと俺は思うんだよな。

さぁ俺も楽しむか！

……ここでこの後何が起こったかは割愛させてくれ。とてもじゃないが説明したくない。

毎年の事とはいえ、何故こうも死屍累々たる状態になるんですかね？　皆さん……。

## 第十五話　長期休暇は大変だった　？（後書き）

お読みいただきましてありがとうございます。

ご意見、ご感想、誤字脱字の指摘など幅広くお待ちしております。

今回の話はまた前の話とそのうち圧縮しますのでご了承ください。

にしても出来が悪い・・・・要修正。

## 第十六話　長期休暇は大変だった　？（前書き）

大変長らくお待たせしました。

今後不定期投稿になりますがどうかご容赦くださいませ。

## 第十六話　長期休暇は大変だった　？

翌日。

俺が目を覚ましたのは、窓から差し込む光から考えるに既にお昼前という時間だった。

ベッドで上体を起こしたのだが、二日酔いのせいか頭がグラングランする。

まったく毎年毎年未成年に無理やりお酒を飲ますのはいけないと思います。

昨日はとにかく大変だった。

父上は酔っ払ってゲラゲラ笑いながら《爆発》（エクスプロージョン）を連続でぶっ放し、母上は二樽分（！）ものワインを空けてからようやく俺に抱きついて撃沈し、逃げ切れず母上のペースに付き合わされたイナ先生はいつものクールな姿がまるで嘘のように酒樽に頭からはまってそのまま動かなくなり、アニーは酔っ払った使用人のお姉さんたちにその歳と体に似合わぬ巨乳を弄られまくり、といった阿鼻叫喚の地獄絵図の中、俺は何とか使用人や俺の奴隷さんたちがよってたかって飲ませようとするのを飲まされながらも脱走し、半分以上つぶれながらも命からがら正気を保ったままその場を逃げ切った。

後に残ったのはアリアなど子供たちとじぃ、そしてマリエルと俺

だけという惨憺たる有様。

毎年の事とはいえ……これだから大人は！

とにかく俺は父上と母上を何とか寝室に運び込み、一息ついた時には時間は既に深夜。

そこで限界を迎えた俺は後をじぃとマリエルに託し、そのままグラグラする頭を抱えて部屋に向かった所までしか記憶がない。

あの後大丈夫だったんだろうか……。

ふ～とため息をつきながら、立ち上がるためにベッドに左手をつこうとしたら、

「……あん」

という声。

左手に何かあったかくて柔らかいものがと思い、なんだろう？とそれを軽くにぎにぎしているうちに急激に覚醒する意識。

青ざめながら左手の先を見てみれば――――――。

メイド服の胸元からこぼれ落ちた最近発育いちじるしいシルウィのおっぱいを俺の手がもろにつかんでいた。

「……ご主人様の、……エッチ」

急いで手を引っ込める俺。頬を赤くして俺を見つめるシルウィ。

やばい、ヤバイ、ＹＡＢＡＩ！

そうして冷や汗を垂れ流していると聞こえてきたあまりにも聞きなれた足音。

ノックと「若様失礼致します」の声とともに開かれるドア。

……沈黙。

「……失礼しました。ごゆっくりどうぞ」

速やかに閉まっていくドア。

待って！違うんだ！マリエル！俺は断じてロリじゃないんだ！

すぐさまベッドから飛び起きて必死の弁明に向かう俺！

……まさかどこより安全なはずの自分の部屋で、人生最大の危機が俺に訪れようとは思いも寄らなかったぜ。

◇◆◇◆◇◆◇◆

新年早々の大ピンチに二日酔い気味の頭で、持てる言語能力の限りを使ってどうにか対処した俺は、時間的にそう呼んでいいのか不明だが朝食を食べずに庭にある農園に向かった。

あの後で食い物食えるほど俺の胃袋頑丈じゃないもの。

空は快晴、雲ひとつなく澄み渡った空。だが今は雨季という事もあり油断は禁物。いつ雨が降り出すか分かったもんじゃないからな。

だから雨が降らないうちに何とか次の段取りを進めてしまいたいんだが、なかなかままならん。雨が降ってしまえば、乾燥のために最低2、3日必要になるし。

いくら予定通り転職クエストを終えたとはいえ、残り10日。正直時間に余裕はまったくない。

……父上は今日一日ぶっ壊れたままだろうから、転職もできんしな。

まったくまだまだ頭が痛いことだらけである。

実際今二日酔い的に俺の頭も痛いが。

そう思いながら右にふらふら、左にふらふらと2、3分歩いて行くと通いなれた俺の農園が見えてきた。

作った当時の小さな畑が少しあった頃とは違い、今ではまさに農園の名にふさわしい規模へと成長を遂げている。

東Oドーム2個分ほどの規模にまで大きくなっているからな。

ここで働いてくれている人は今では総勢15人。あと子供が2人。主に俺や父上が使う薬草類や秘薬などを扱ってくれている。

そしてこの1年で一番変わったのが牧場。最初は鶏や豚が数頭って感じだったのだが、食糧生産の実験と、とある理由から今ではまさに牧場。

自分の家の庭に農園と牧場があるシュールさ。うん、筆舌しがたいものがあるね。

まぁなんにせよ、これをやって一番良かったのが朝一番の手作りバターだ。あっさりとしているのにコクがあって前世(むかし)食べていた工場生産の小売のバターとはまさに比較にならない素晴らしい味で俺の朝食にいろどりを添えてくれている。

いや工場生産が悪いって事じゃなくて、手作り作り立てがすごいって意味だから勘違いしないように！

ちなみにこのバター、特に母上が大のお気に入りで自分でも作りたいのかたまに使用人さんやアリアたちを引き連れてバター作りをしたりしているらしい。

おっと……。またついつい本題とは無関係なところに思考が飛んでしまった。悪いくせだ。

というわけで父上がああゆう状況の為、今日出来そうなことをする為に俺はここに来ているのだ。

泉のほとりに立つ一番大きなレンガ造りの家のドアを叩く。

「は……い。誰で……すか？」

中から聞こえる半死半生の男の声。

「ジトー、ジオだ。入るぞ」

そういってドアを開けると中には幸せそうな顔で寝ている黒い髪の小さな赤ん坊と、それとは対照的に二日酔いで死にそうな顔をしているある夫婦の姿があった。

「こ、これはジオ様！も、申し訳ありません、お見苦しいところをお見せいたしまして……」

頭を抑えながら俺に真っ青な顔で話しかけてくるジトーの、そのあまりの姿にさすがに呆れてしまう俺。かろうじて起きだしてきて頭を俺に下げているセロン。こちらも顔は真っ青。

二人とも飲みすぎだ！

「ジトー、セロン。飲むなとは言わないが、毎年その体たらくはどうかと思うぞ？　シュバルツの教育にも悪い。もう少し考えるように。

まぁお小言はこのくらいにして……。『アレ』を持ち出す。今数はいくつある？」

「ア、『アレ』でございますか？　現在１５個あるかと。全て倉庫にございます」

そうか、思ったよりもいっぱい出来てた。これなら大判振る舞いもアリだな。さすが俺の従業員、いい仕事してるぜ。

「よし、５個持って行くよ」

俺のその言葉に違う意味で顔を真っ青にする二人。

「『アレ』を……、５個も……ですか？　失礼ですがジオ様、あまりに危険ではありませんか？　もし街中で……」

俺の言葉に泡を食って止めにかかるジトー。あぁ、そりゃ心配だよね。『アレ』がどういうものか全部知ってるもんな。

そう思い二人を安心させる為にニッコリ笑いながら、

「大丈夫。ポーチで運ぶから仮に外が火の海でも俺が中から出さない限りどうにかなったりしないよ」

と教えてやる。魔法のポーチに入っている限り俺が出さない限り外部からの干渉は不可能だからだ。

「というわけで5個持ち出すので、みんなにも後で言っておいて。あとコレ。」

そういってポーチから小さな濃緑色のポーションを取り出す。途端に俺の心遣いはうれしいのだが、その薬はちょっと……という感情が絶妙に入り混じった顔をする二人。

「飲んでさっさと二日酔いを治すこと！

……まずいのは自業自得だ」

そう、渡したのは俺特製の二日酔いに効くポーション。効果は絶大だが……とにかくまずい。わざとまずく作ってるからな。いい気味だ！悪い大人たちめ！

そう言い放ってジトーの家から立ち去る俺。今の俺は正義だと思う！

その後、倉庫にあった『アレ』を一度に４つポーチに入れて運ぼ

うとしたら、重量オーバーで一歩も動けんかった……。

その後何とか移動可能な数だった二つずつ、引きずるような足取りで屋敷の前まで持っていった後、そこでじぃに荷馬車を用意してもらってゲートキーパー前まで運び、変身マントで変装（？）して何度もエルトリンシティの俺の宿を往復してそのクソ重たい樽を5個預かってもらっておいた。

取り扱いを厳重に注意してからな。

さてと、農園を作り始めてからおよそ3年……。ついに実戦で使いますよ『アレ』。

## 第十六話　長期休暇は大変だった　？（後書き）

いかがだったでしょうか？

次回チート発動です。

ご意見、ご感想、誤字脱字の指摘など幅広くお待ちしております。

## 第十七話　長期休暇は大変だった　？（前書き）

もうあと少しで休暇も終了します。

この次の話がやりたくてこのストーリーは始まったりしています。

そしてチート当てクイズ正解者の景品様お一人目のご登場でございます！

# 第十七話　長期休暇は大変だった　？

開けて新年３日目。

俺は今、ようやく生き返った父上と一緒にワトリア魔法ギルドにいる。普段誰にでも開け放たれているギルドだが、今だけはその扉は完全に閉まっていた。

目の前にはギルドマスターとしての正装に身を包んだ父上が、真剣な表情で俺を見つめている。静まり返る室内。この場にいる全ての人の鼓動が聞こえそうなくらいの静寂がその場を包んでいる。

やがて父としてではなく、ワトリア魔法ギルドのギルドマスターとしてフィリップ・パラケルスス・ラ・テオフラストゥスが俺に語りかけてきた。

「ジオ・パラケルスス・ラ・テオフラストゥス。ウィザードの試練を乗り越えた証をここに」

そう促されて小さな金のブローチ、クエストアイテム『魔術師の証』を渡す俺。それを確認した父上が高らかに宣言する。

「これにより汝はウィザードとして認められた！おめでとう！」

その言葉とともにオレは黄金の光のヴェールに包まれる！

そして湧き上がる新しく、そして懐かしい感じがする力が俺の中を満たしていく。欠けていたものが少し埋まっていくような充実感に俺がしばし酔ってしまってぼうとしていると、いつの間にか周り

にはワトリア魔法ギルドのギルド員の皆さんの姿が。

「おめでとう！」

そう言って異口同音に皆が俺のウィザードへの転職を祝福してくれた。俺は少し泣いているのかもしれない。頬を何かが伝った感触があるから。そして泣いているのは俺だけではない。目の前で笑い泣きでいるのは、ギルドマスターではなく父親としての俺の父上だった。

「ジオ！おめでとう！早速家で祝杯を上げねば！」

……っておい。まだ飲む気なのかよ！

前世（むかし）のお笑い芸人のように膝からくずれそうになりながら、心の中でツッコミをいれる。そしてさすがにそれはダメだ。そんなことは俺が許さない。アレをもう一回とか絶対ヤダ！そして俺にはまだ重要な用が残ってるんだ！そんなことしてる時間はないんだよ！

ということで……制裁開始だ。

「父上！俺はこの後隣でレンジャーになってきますから、家には戻りませんよ？

……それに昨日おつらい思いをされたはずなのに、どうやらまだ『薬』が足りないようですね……」

そう言って俺が取り出した濃緑色のポーションを見て後ずさる父上。ギルド員の皆さんに目配せをすると、全員がその意味をすばやく汲み取ってくれ、父上の体の拘束にかかってくれた。

ジタバタともがくものの身動き一つ出来ない父上だったが、どうしても嫌なのか《爆発》の術式の演算と展開を始めやがった！そこまで嫌か！

さすがに危険な為、わずかに開いた口にすかさずポーションの中身を流し込む！

その後、つい先ほどまで厳粛な空気に包まれていたギルドは父上の絶叫と、みんなの笑い声に包まれたのだった。

あぁ、もちろんその後隣で同じようにレンジャーへと転職しました。こっちはまったく未知の感覚でまさに新しい力がみなぎってくるようだったぜ。

あとアスナイさんがすっごいご機嫌でしきりに俺の頭を撫でてくれていたのと、モルゲンデーレのおっさんが捨て犬みたいな目で俺を見ていたのが対照的だったことも付け加えておこうかな？

とにかくジオ・パラケルスス・ラ・テオフラストゥス、１３歳。

『ウィザード』と『レンジャー』への転職完了であります！

◇◆◇◆◇◆◇◆

転職終了後、家まで帰りついた俺は庭の一角で超久々にシステム

ウィンドゥを開いてスキルを覚える事にした。実際これを最後に開いたのは1年以上も前にコモンスキル《ファーストエイド》を覚えた時以来。

そうして今まで転職しないままレベルが２６まで上がっていた為に有り余っていたスキルポイントを使って新しい力を獲得して行く俺。

特に重要だったのが、レンジャースキルでは《スプリント》と《ミラージュステップ》。ウィザードスキルでは《サークルフレイム》と《スリープ》、そして《サモンウッドゴーレム》である。

レンジャースキル《スプリント》は、ごく短時間ではあるが移動速度が跳ね上がる補助スキルで、これがあると何かと便利である。

もう一つが《ミラージュステップ》。このスキルは《スプリント》と同じくごく短時間ではあるが、自分の回避率を跳ね上げる事ができる緊急避難スキルであり、種族によりそれぞれ名前は違うが軽戦士系職の切り札である。

ウィザードスキルについてだが、まず《サークルフレイム》から。これは火の玉が敵に向かって飛んでいくまでは《ファイヤーボール》と同じなのだが、着弾と同時に周囲に円状の炎が広がる火属性の範囲攻撃魔法である。この魔法の取得によって今まで出来なかった範囲攻撃ができるようになったのはかなり大きい。

次にスリープだが、その名の通り敵一体を寝かせる魔法スキルである。これと短剣職の組み合わせ、つまりスタブ系スキルとの相性は最悪に最高だ。寝ている奴に後ろからズドン！だからな。

そして最後に《サモンウッドゴーレム》。その名の通り木ででき

たゴーレムと呼ばれる人形を呼び出して操り戦わせる魔法である。欠点はコイツを出していると一定の魔力を奪われ続けるところと、取得経験値をもって行くところ。ちなみにウッドゴーレムの場合は２０％である、とここまでは普通の人の場合。

……そう既に魔改造済み。俺は以前からこの魔法というかスキルをどうやって取得するのか父上に詳しく聞いていた。そのやり方はまずウィザードに転職後、必要量のスキルポイントを貯めてから、小さな樹の人形を用意する。それに血を垂らして契約すると、以後その人形が大きくなったゴーレムが召喚される、ということであった。

ただ基本ゴーレムの姿は誰が使っても一緒、なぜならみんなスキル取得の時にギルドで媒体となる人形をもらってそれと契約するからであり、術者のレベルによってのみその強弱が決まるって事だったんだが……。俺はもちろんそんな慣習や常識に従う気などまったくなかった。

シランに頼んで手に入れてもらった、剪定のため切り落とされた世界樹の枝、大人が両腕で抱え込めないほど太いそれを、ワトリアの腕のいい木工職人の手のよって丁寧に俺のイメージどおりに作り上げてもらった一品に、俺の血を垂らして契約。

――――そして完成したのが、今俺の目の前にある荷車付きの二頭立ての大きな木馬のゴーレムである！依り代となった木彫りの人形の材質が世界樹の枝であった為か、まるで生きているかのように躍動する木馬のゴーレムは、明らかに普通じゃない強さを持っていることが一目で分かる。だってうっすらと光りすら放っているんだもん。

……ゲフンゲフン、自重なんてしませんよ？

「うわ～！何これすごいわ！ジオちゃ～ん！はやいはや～い！」

「ちょっ！ちょっと若様！い、いささか速すぎます！奥様もお立ちになろうとしないででください！こら、あなたたちおとなしくしなさい！」

「あはは～すごいです～ご主人様～♪」

「はやいです～楽しいです～ご主人様～♪」

「うにゃ～すごいにゃ～たのしいのにゃ～！」

「うん。決めた。この右の子は、私のもの」

といった具合にその後昼食までの時間、母上やマリエル、そしてアリアたち４人を荷台に乗せて試運転？　がてら庭を猛スピードで爆走していたのだが、そこで大変な事が判明した。

もっていかれるＭＰが半端じゃない。まさか普通の《サモンウッドゴーレム》の約３倍とは……。何かを変えるといいことばっかりじゃないって事ですね、反省。

まぁとにもかくにもこれで準備は全て終了した。あとは実行あるのみ。

◇◆◇◆◇◆◇◆

ということで俺は父上と同じく復活したイナ先生と、エルトリンシティのゲートキーパー前にいるわけなんだが。

「おい、シラン。お前何をやっている？」

そう、俺の前には例によって例のごとくあの腹黒がいる。しかし決定的に普段と違うところがあった。

「はて？　危険なところにジオ様たちのみを行かせるのは、と思いまして」

「で、その格好は何だ？」

「はぁ、鎧ですな」

「そうだな！　鎧だな！　俺が聞きたいのは、何でその鎧がＡグレード重装備であるブラッククリスタルメタルアーマーセットなんだってことなんだよ！」

ブラッククリスタルメタルアーマーセット、通称ＢＣＭアーマーセット。Ａグレード重装備のなかでも、攻撃力＋５％、攻撃速度＋７％などの追加効果を持つことから、攻撃特化型の戦士系職から絶大な支持を受けていた装備で、魔法系職だった俺もそのデザインと

かっこよさから大好きだった装備であるが、今この時そんな事はどうでもいい。

重要なのはそれをコイツが着ているということ。それはつまりシランがレベル６０以上の超一流の冒険者だということである。

ちなみに市場価格の相場は、前世（むかし）の最後の時期で７００万Ｇ。おそらく今のこの世界でも最低５００万Ｇを下回ることはないだろう。そしてよく見てみると奴がその手に持っていやがる武器は、Ａグレード最強の槍であるサイクロングレイヴときたもんだ！

さすがのイナ先生も口を大きく空けてポカンと見ている。

……あくまで概算かつ予想ではあるのだが、今名前を上げたものだけでも余裕で３０００万Ｇを超えるはずである。

つまり、こいつは俺の知ってる誰よりも強い。俺はもちろん、イナ先生よりも、そして父上よりも。おそらく装備している物から考えると、こいつの職業はヒューマンの戦士系の内の一つ、バーサーカー。

バーサーカーは、両手鈍器エキスパートと槍エキスパートを持つ攻撃特化職で、両手鈍器による単一の敵に対する単純攻撃力型と、槍による範囲攻撃特化型とその場その場でスタイルを変えることができる為に汎用性が高く、非常に人気のある職業であり、スキルにスタン、つまり一時的に行動不能にする状態異常効果を与える事が出来るものを豊富に備えていた為、対人戦にも強かった。そして最大の特徴は、しぶとい。盾職に比べると、防御力は差ほどでもないのだが、ピンチになると攻撃力や防御力を上げられるスキルや緊急避難でＨＰ回復できたりするスキルを持っていたことから、とにか

くしぶとかった。

ふ～～～～～～。四角く切り取られた青い空を見ながら、思わず口元に苦笑が浮かぶ。どうやら俺はコイツには一生勝てそうにない。だって俺は今の今までシランが冒険者だと考えた事もなかったんだから。それもまさか、よりにもよってＡグレード冒険者。父上に聞いた話だと現在大陸中を探しても２０人を超えることはないってきいてる実力者がレベル２０そこそこの俺の配下？　とかマジでありえない。

とりあえず心気を張って声を出す。

「シラン。まだ俺に隠している事はあるか？」

ニコニコしながら俺を見ているシラン。その態度はなんらいつもと変わらないものだった。

「さぁ？どうでしょうか？」

まったく食えないヤロウだよ、お前は。さぁ悩んでいても話は進まない。事実は事実、受け入れるか。

「シラン。手分けして『コレ』をゲートキーパーを使って『ジエンの古戦場』に運ぶ。手伝ってくれ。

……もちろん『飛べる』な？」

その言葉に小さく頷いたシランに見せたのは、俺の身長より少し

低いくらいの高さがある大きな樽１０個であった。

そうして『ジエンの古戦場』に飛ぼうとした俺をシランが呼び止めた。

「ジオ様、実は紹介など微塵もしたいとは思わないのですが、残念ながら紹介させていただきたい者がおります。お目通り願えますか？」

ん？　珍しく、非常に珍しくシランの眉間に縦じわが。一体どんな人間だろうと、興味を持ってその言葉に頷いてしまったのがいけなかった。

シランの、お会いくださるそうだ、という声とともに物陰から現れたのは、左右に壮年の男を一人ずつ従えた普通ではありえない桃色のボブカットの女、いや多分女。中性的な顔立ちに女性だとしたら高い、男性だとしたら華奢すぎる体を持った性別不詳、年齢不詳の人間だった。

その少年のような顔立ちに似合わない真っ赤な口紅を引いた唇からあざけるような声がこぼれる。

「昔なじみとはいえ、自分でわざわざエルトリンまで呼びつけておいて随分ひどい紹介もあったものだね、シラン。失礼、ジオ・パラケルスス・ラ・テオフラストゥス殿。はじめまして、僕の名前はミルアルド・ジョバンニ・フラミンゴ。

――――ミリーって呼んでくれるとうれしいな」

これが俺と天敵2号の出会いであった。

## 第十七話　長期休暇は大変だった　？（後書き）

お読みいただきましてありがとうございます。

ご意見、ご感想、誤字脱字の指摘など幅広くお待ちしております。

さてこの時を持ちましてチート当てクイズはおしまいです。

だって次で答えが分かっちゃうから、て思ったら違うチートだったけどちょうどいいからここで終了！

シランの職業を、マシナリーナイトからバーサーカーに変更しました。

## 第十八話　長期休暇は大変だった　？（前書き）

長いことお待たせいたしました。今回微妙に整合性に自信がありません。ごめんです。

## 第十八話　長期休暇は大変だった　？

「へぇ、面白い事を考えたものだね。
なるほど……、子供だろうがなんだろうが、祝福さえ受けてしまえば冒険者にはなれるのか……。これは完全に盲点だったよ。
それにしても先ほどの君の女装？　といっていいのかな？　あれにもビックリしたよ。いや、僕も商人の端くれとしてああいうものの存在は知ってはいたんだけど、まさか実際に有効利用している人間がいるとは思わなくてね。いや～、目から竜燐が落ちた思いだ。
ところで、ジオ殿と呼ぶのは堅苦しいから、ジオ少年と呼んでいいかな？　どうにも僕は堅苦しいのは嫌いでね。いや、君が貴族のご子息という点に敬意を払わなくはないのだが、君はまだまだ１３歳の少年で、僕は先輩の冒険者だし、あと何分僕は貴族のいないギーレン連合共和国の人間だからあまり貴族様というものに対していい印象がなくてね。大陸中の大きな町で商売をしているとどうしても避けるわけにはいかないんだけど、口では偉そうな事を言うくせにやっていることと来たら、僕たち商人よりもよっぽどあこぎな方々が多くて困ってしまうのさ。
あ、別に君のお父上やご家族を悪く言うつもりは、これっぽっちもないから誤解しないでね。ていうか君の父上はあの『爆炎』殿だろ？　昔何度かあったことがあるよ、懐かしいなぁ。あの人にこんなかわいくて大きな子供がいるなんて、僕も歳をとるわけだ……。
あ、ごめんごめん、ちゃんと説明していなかったね。僕は商人としてはギーレン市商業連合の十二人委員会の一員で大陸中で手広く商売をやっているし、冒険者としても、既に学院を卒業してかなりの年月が経ってる上に、ギルドマスターなんかもやってる関係で色々と方々に顔が広いんだよ。まぁ、ただフィリップさんにあったのは前のギルドに所属している時で、その時はまだ普通の冒険者だったけどね。

それにしてもわずか１３歳でレベル２６？　でたらめにほどがあるよね少年。僕もこうみえて商人としても、冒険者としても、かなり多くの人間を見てきたつもりだけど、この僕でさえ少年のような非常識を越えた非常識はほとんどお目にかかったことはないよ。ビックリもビックリ、大ビックリだよ。まったくこの腹黒が入れ込むわけだ。

あとさ少年、本当にすごい黄金の髪と、……瞳だね。

う～ん、見れば見るほど少年は本当にかわいいというか、美しい顔をしているね。本当に男の子？　女の子じゃないの？　まぁ僕はどっちでもおいしくいただける人間だからどっちでもいいんだけどね。というわけでどうだろう？　今夜お互いについての理解を深める為に、僕と仲良くしない？　もちろんベッドの上で。シラン、いいよね？」

そのあまりの長口上に眉間に深い縦皺を刻み込みながら、器用に片眉だけ上げ一瞬考えた後、小さく頷くシラン。頷くシラン？　頷くシラン！

いいわけあるかぁぁぁあああああああああああああああああああああ！！

というわけでってどういうわけだコラァァァァァアアアアア！！

あとあんたバイセクシャルかぁあああああああああああああ！！

そして、シラン！そこで頷くんじゃねぇぇぇぇぇぇ！！　お前さては微妙に俺の敵だろ！気づいてたはいたけどさぁぁぁぁぁぁあ！！

◇◆◇◆◇◆◇◆

俺の魂の絶叫の後も、まったく気にした素振りも無く、年齢、性別不肖でバイセクシャルなミリーさんはしゃべるしゃべる。その狩場としての特性上、やはり陰鬱な雰囲気のする『ジエンの古戦場』の重苦しい空気でさえ、彼女の軽すぎる口を止める事などでできはしなかった。それは俺に、日本式の葬式に紛れ込んだ陽気なジャマイカンの姿を幻視させる程であったのだから。

そしてマシンガントークの合間を縫って、ネズミを狙う蛇みたいな目で俺を見るのはお願いですからどうかやめてください！　怖いから！　危ないから！　主に貞操が！

まぁ気を取り直して、今俺と一緒に目的地であるあの場所に向かって歩いているのは、６人。俺、イナ先生とシラン、ミリーさんとその護衛らしき男二人である。

護衛の二人のうち一人は、いかにも戦士といった風貌だが、何ともいえない愛嬌のある顔つきをした屈強そうな大男。装備がＢグレードのフィールドアーマーとタワーシールドという超重装備な所から職業はほぼ間違いなくパラディン。ヒューマンの盾職の一角であり、その防御力はとにかく鉄壁の一言である。

もう一人は苦労性なのが一目で分かる細身の男の人。……こっちはちょっと分かりにくい。装備がルーンローブセットなので、大男と同じくBグレード以上の実力者なのは間違いないのだが魔法職の場合、装備だけではなかなか職業が確定するのが難しいのである。ちなみにルーンローブセットはBグレードの魔法職御用達で、最大MP＋10％、魔法詠唱速度＋10％、MP回復力＋5％、移動力＋5％という超優良装備であり、レベル60以上のプレイヤーでもそのまま使っていた人が多いBグレードで最高の人気を誇ったローブ装備である。攻撃、補助、回復そのどれにも適性を持つその性能故に魔法職のBグレード冒険者の場合、見た目での見分けはほぼつかないと言っていい。当然俺もBグレード当時は装備していたし、その後も手放したりはしなかった一品である。

そんな上級冒険者にも関わらず、しきりに目で俺に謝ってくる哀愁漂う彼らには思わず涙が出そうだ。

……ご苦労お察しします。

そしてミリーさん本人は、俺にとってすごく『懐かしい』格好をしていた。それは複雑な魔法紋様が刻まれた真紅のローブ、スカーレットジュエルローブセット。Aグレードの攻撃系魔法職の御用達品であるそのローブは、セットで装備すると魔法攻撃力＋10％、魔法詠唱速度＋7％、物理防御力＋5％、状態異常・沈黙・睡眠に対する抵抗力＋30％というそのグレードと名にふさわしい装備なのである。このことから必然的に彼女？　もレベル60以上の実力者であり、さらに攻撃型魔法職、つまりソーサラーかカースメーカー、もしくはアルケミストであることは間違いないということである。

それにしても懐かしい。《New World》時代、1年以上

もあれが俺のメイン装備だったのだから。……まぁ、俺のローブにはあんな太ももが全てあらわになるようなスリットなど入ってはいなかったのだが。

それにしても数日前にも通ったモンスターに遭遇しにくいルートを歩きながら俺は考える。何故シランはわざわざ自分が高位冒険者であることをこのタイミングで明かした？　何故この場に他の高位冒険者であるミリーさんをわざわざ呼んだ？　俺はシランにはっきりいって直接的な戦闘力など求めた事もなかったし、Aグレード冒険者だと分かった今後もそれを求める事はあまりないだろう。せいぜい対人戦の訓練相手になってもらうくらいだろうから。ということはシランがわざわざそのカードを切ったのはミリーさん達をこの場に同席させる為、と考えるのが妥当か。

となると問題は、ミリーさんをこの場に呼んだという事。それはつまり俺が3年がかりで用意した隠し玉を彼女に見せたいというシランの意志の現れである。しかも俺に事前に何の相談もなしに。事前相談が無いのは今に始まったことではないが、それにしてもこれまでの件とこの件では重要度がまるで違う。これはさすがに見過ごせない。

さて。

「シラン、ちょっと」

「はい」

いつものようなアルカイックスマイルではない真剣な顔つきのシラン。どうやら俺に呼ばれるのは予想の範囲内だったようである。そして俺が何を考えているのかも。

……場合によっては主従関係の解消も考えないといけないな、今回は。まったく密度の濃すぎる休暇ですこと。

◇◆◇◆◇◆◇◆

「ということで理由を聞こうか？」

今俺はシランと二人だけで他の４人からは離れた場所にいる。さすがにこの位置からでは彼らに声は聞こえないだろうから、まぁ二人きりだ。

「ここにわざわざ彼らをつれてきたからには、『アレ』を見せるということだ。俺は『アレ』を他の人間に教えるつもりはないんだが？　しかもあの人は自分のことを商人といった。お前は『アレ』を売る気なのか？」

俺のその言葉にシランは表情を変えずに答える。

「最初にこの度のこと、ご相談をせずに図りました事について心よりお詫び申し上げます。その上で失礼を承知で申し上げます。今回のこの事、ジオ様にしては大変珍しい完全な失着でございます。何故なら『アレ』を使う場所はどうしても衆人環視の狩場です。全ての人間の目をふさぐには私の手は足りませんし、さらに一度流れ出したうわさを止める事など誰にも出来はしません。もし今回の事ジオ様のみで行われても、いずれは周囲にばれることは避けられなかったでしょう。今でなくてもこの先、『アレ』を使う限りいずれそのことは広まります。

であれば、それを少しでも遅らせる為に、そしてジオ様から目をそらさせる為にも、信用できるものに一枚噛ませる、というのがまず最大の理由でございます」

……失着とは、いつもながらはっきりということだ。そして確かにその通りだろう。リスクが否定できない。『アレ』はどうやったとしても目立つ。だからその性質上秘密にするという事は不可能なのだから。

そしてシランが今回の事を強行した理由もおおよそ読めた。俺もシランの行動原理はこの数年の付き合いでほぼ完全に把握しているからだ。シランは基本俺の考えを受けて諸処の物事を進めていくのだが、その過程で問題にぶち当たった時に積極策をとるか消極策をとるかの判断基準は、どうやらシラン自身がその事態のコントロールができるか否か、らしい。つまり数年がかりで準備した成果を試せることで浮かれきっていた俺とは違い、その先を見通した上でこのままでは危険と判断し、俺の計画と考えに修正を加えるべく無理やり彼らをこの場に立ち合わせたということか。

「……目をそらさせるって言うのは、具体的にはどういうこと？」

「我々で製造したものではなく、買ったものとすればよろしいのです。伴うリスクは大幅に減少する事は間違いございません」

なるほど。故に商人でもあるあの人を呼んだと。

「じゃあ、彼女……でいいのかな？　は何者だ？」

「私の昔の知り合いで、本人が言った通り商人であり冒険者でございます。非常に忌まわしい事ですが、その双方において大陸有数と

言って過言ではなく、残念ではありますが今回の件において私の知る限り奴以上の適任者が存在しなかった為に、ジオ様には大変ご不快な生き物をお見せすることになってしまい誠に申し訳ありません。……あと一応女です。世の全ての女性に対する冒涜でしかございませんが」

なるほど。あの人はシランも認めるほどの大物ってことなのか。ならその『嘘』にも信憑性が出るだろうな。ただ仮にもそんな大物で、わざわざ来てもらった昔の知り合いにその言い草はさすがにひどくないか？　そしてようやく性別判明。女の人、と。一応、女の人、と。

「あちらのメリットは……、『アレ』の独占販売権か？」

重々しく頷くシラン。

「そればかりは仕方ないかと。但し、搾り取れるだけ搾り取りますが」

まぁ妥当な範囲だろう。商人が利益無しで動くはず無いからな。ただ『アレ』の性質上あまり広めるわけにもいかないのだが、その辺はうまくシランがやるだろうさ。あと怖いです、シランさん。

……そして最後に確認。まったくいつもながら俺はまだまだだと思うよ。

「シラン、本当にいいのか？　俺で」

俺がそう言うとシランはにっこり笑って言う。

「もちろんでございます」

なら、俺から言う事はもう何もないや。いや聞きたい事は山ほどあるが、それは俺とシランの関係においてそれほど重要じゃないから、な。

「じゃあこの話はここでおしまい。今回の件はお前のシナリオに任せるよ。あと以後こういう場合は一言相談してからにしてくれ。さすがにいつもいつも事後承諾では神経が持たないから」

心の中で、ありがとうと一言そういって歩き出した俺の後ろにこれまでと同じようにシランが続く。まったくいろんな意味で俺には過ぎた従者（参謀）殿だよ。

そう思いながらみんなのところへ向かって歩いていた俺たちにミリーさんの一言。

「お二人さ～ん。男同士の愛情は非生産的だよ？　僕が言うのもなんだけど」

……何というか色々と台無しだよ！あんた！

## 第十八話　長期休暇は大変だった　？（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

ご意見、ご感想、誤字脱字の指摘など幅広くお待ちしております。

まだしばらく引越しのごたごた含めて不定期となりますがご理解の程よろしくお願いいたします。

## 閑話　ある日の少女達（前書き）

ちょっと間が開くので閑話をどうぞです。

次からの展開、しばしお待ちください。

## 閑話　ある日の少女達

それはジオ１４歳の月が美しいある夜のこと。

「絶対に、絶対に！　私が２番目だわ！」

「アリアは３番目だもん！　２番目は私！」

「うにゃ～～～！　２番はリューネに決まってるのにゃ～！」

「五月蝿い、３人とも。２番目は私」

ラ・テオフラストゥス家のメイドの寝室にて、４人の少女たちが話し合いという名の言い争いを繰り広げておりました。

「だって、私が最初にご主人様に目を留めていただいてお買い上げいただいたのよ！　２番は私に決まってるじゃない！　それに私、屋敷の皆さんにかわいい、かわいいってすごく褒めてもらえるのよ！　ご主人様もそうおっしゃってくれるし間違いないわ！」

仲良く部屋に４つ並んだベッドのうち、自分のベッドの上で立ち上がり赤い髪の女の子、アリアはそのちいさな拳を握り締めながら宣言する。

そのアリアの言葉に反論するのは、彼女と瓜二つの少女であり、双子の妹でもあるエリアである。

「アリア！　私だって皆さんにかわいいって言ってもらってるし、そもそもアリアと私は同じ顔だよ？　だから私がアリアより下とは

ないはずだし、ご主人様に私もかわいいかわいいって言ってもらってるから私が2番だと思う！　だってアリアより多分3回は多くかわいいってもらってるはずだもの！」

「うにゃ～～～～！　アリアもエリアも間違ってるにゃ～～～～！　ぜったい2番はリューネだにゃ～～～～！　難しいことはよくわかんにゃいけど、一番おひざであたまナデナデしてもらってるのはリューネだにゃ！」

よく分からない理屈でお互いに自分が2番だと言い張るエリアと猫族の少女、リューネ。

そこに爆弾を投下する銀髪、黒い肌、そしてエルフの証明である長い耳を持つ少女。

「アリアも、エリアも、リューネも大間違い。2番目は絶対に私。だってもうこんなに私おっぱい大きいもの」

そう言って11歳とは思えないほどよく実ったバストを、両腕で寄せて上げながら他の三人に見せつけるダークエルフの少女シルウィ。

そのあまりの破壊力に3人は怯み、そしてその3人の様子にシルウィは普段表情の乏しい顔に優越感をにじませる。

「ご主人様は間違いなく大きなオッパイがお好き。だからこの中で一番大きなオッパイの私が2番目なのも間違いのないこと」

小さくクフフ、と笑うダークエルフの少女に我に返った3人が猛反撃を開始する。

「「な、何よ！　ちょっとオッパイが大きくなったからって最近調子に乗りすぎじゃないの、シルウィ」」

「そうだにゃ！　そ、それに、オッパイが大きければいいとはかぎらないにゃ～！」

必死の抵抗を繰り広げる3人であったが、クールなダークエルフの少女はさらに3人に決定的な一撃を繰り出す。

「――――だって、姉さまのオッパイも大きい」

絶対の勝利宣言とともに、わずかに、ほんのわずかに口元を上げているシルウィ。普段ほとんど表情を変えない彼女にとって、これでも見るものが見れば驚きを隠せないほどの変化なのであるが。

思わずベッドに突っ伏してしまう3人とそれを睥睨する勝利者シルウィ。

但し、彼女の勝利もそこまでであった。

不意に開くドア。

入ってきたのは彼女達の義姉であり、直接的な保護者でもあるマリエル・エトラント嬢17歳。いつもはやさしげな微笑を浮かべているその顔には隠しようも無い怒りの表情が浮かんでいた。

「4人とも、このような時間までいつまでも眠りもせずに何を大きな声で叫んでいるのですか！」

そういって始まった彼女のお説教はそれから1時間終わる事はなかったという。

そして、彼から思えばこの上なくくだらない内容で喧嘩して、自分の安眠を妨げた義妹たちに復讐を果たした密告者は自分のベッドの中でふと考えた。

（――――どうして1番じゃなく、2番争いだったんだろう？）

だが、その考えを熟考する前にテトは深い眠りに誘われて全てを忘れてしまったのだった。

ちなみにその答えを彼女達4人にもし聞いたなら、彼女たちは異口同音にこういったに違いない。

「だって1番はマリエル姉さまだもの！」

## 閑話　ある日の少女達（後書き）

お読みいただきましてありがとうございます。

ご意見、ご感想、誤字脱字の指摘など幅広くお待ちしております。

## 第十九話　長期休暇は大変だった　？（前書き）

長々と引っ張りましたが、チートご開帳でございます。

分かっていた方もそうでなかった方も楽しんでいただけたら幸いです。

なお、ミリーのキャラ及び設定の元は、チート当てクイズの景品として　モチゴメ　さんからのご提供でございます。ここに謹んで御礼申し上げます。

## 第十九話　長期休暇は大変だった　？

一応性別が女だと判明したミリーさんの色々と台無しな一言から１０数分、俺たちはなおも陰鬱な古戦場の風景を歩き続けた。もちろんここは狩場なので、前回と来た時と同じようにモンスターと遭遇しにくいルートで目的地を目指していたのだが、どうやらこのあたりが懐かしいらしいミリーさんが、あっちにふらふら、こっちにふらふらするせいでモンスターの索敵範囲に引っかかってしまったらしく、結構な量のモンスターたちが襲いかかってきたのだが、その全てが哀れシランが何気なく槍を一振りするだけで一掃されてしまっていた。

骨も死体（スケルトンゾンビ）もその他（犬とか大型の毒蜘蛛とか）も全部一撃。そのあまりのレベル差にアイテムも金もほとんど落ちやしねぇ。

ちなみにこのあたり、つまり『ジエンの古戦場』最奥のモンスターの平均レベルは３５。今の俺なら一匹相手にするだけでも大変で、２匹以上だと真剣に命の危機である。

さすがＡグレ冒険者。そしてやばいよ、サイクロングレイヴ。さすが武器攻撃力２４８は伊達じゃない。さらに最低でも槍エキスパートＬｖ１７と他の補正もろもろ合わせて、おそらくシランの攻撃力は軽く２０００を超えてるだろうし……。今の俺なら一発かすっただけで確実にお陀仏だな。

分かりやすいように比較対象として、現在の俺の物理攻撃力の場合、ミスリルダガーの攻撃力が８３、それに短剣エキスパートＬｖ５でプラス他もろもろ補正を入れても、５６５。いかにレベルが重要かよく分かるって話だぜ。

……考えれば考えるほどアイツが俺の下に付いてる理由が分からなくなるな。

そしてミリーさん、あんたが上級冒険者なのはよく分かったから懐かしいからといってうろうろふらふらすんな！　俺が精神的にダメージ受けるわ！　今のあんたには遊び場でも、今の俺には命の危険のある狩場（デンジャラスゾーン）なんだよ！

何はともあれ彼女の仲間だろう二人――ごついパラディンのほうがアルドレさん、苦労人確定の人のほうがオラクルのワトキンスさんというらしい、がひたすら俺に向けてくる謝罪の視線を感じながら、ようやく到着しました目的地。

そこにいたのは切り立った崖の下に鎮座し、そびえ立つようにその威容を見せ付ける巨大な骸骨、討伐モンスター『ヒュージスケルトン』

さてと、いろいろあったがこれからが本番だ。

ここで状況を整理するついでに、いくつか追加で説明しておかないといけない事がある。討伐モンスターと戦う場合、いくつかの制約というかペナルティが存在する。

まず普通のモンスターとも共通して言える事だが、《Ｎｅｗ　Ｗｏｒｌｄ》ではプレイヤーのアバターのレベルが高くなりすぎ、モンスターのレベルと１０以上離れると経験値やアイテムがほとんどもらえなくなる。厳密には６以上の差がある場合は経験値もドロップも約半分に、８以上で約１０分の１、１０以上離れるとほぼ０に

限りなく近い状態になってしまうのだ。

つまりさっきシランが骨やら死体やらを一掃していたが、あれをいくら続けてもレベルは上がらないし、金が儲かるわけじゃないということ。まぁこれも抜け道が無いではないが、普通のザコモンスターや討伐モンスターを倒すのにやるにはメリットよりデメリットが勝る代物なので、まったくもって非現実的である。そんなことをしている暇があったら適正レベルの狩場で暴れたほうがよほど実入りがいいのだから。

次にこれが問題なのだが、仮にレベルが１０以上離れた討伐モンスターにプレイヤーが攻撃を仕掛けたり、適正レベルのパーティの中に一人そういうプレイヤーが混じっていた場合どうなるか？

その場合、そのプレイヤーのアバターは強制的に最寄の町に帰還させられ、さらに現実時間（《Ｎｅｗ　Ｗｏｒｌｄ》ゲームプレイ中に現実の時間でという意味）で２０分間の強制麻痺のペナルティを負う事になるのである。今この世界だと何分動けなくなるのかは正直分からん。

つまり長々と何が言いたかったかというと、今回俺はこの目の前のでかぶつを一人で始末する為にここに来たってことだ。

さて鬼が出るか、蛇が出るか。うまくいったらご喝采。

ちなみに俺の今のレベルは２６。『ヒュージスケルトン』は３５。プレイヤーのレベルが下である分には何の問題も無いぜ？

さてここで問題。適正レベルの冒険者１４人がかりで倒せなかった化け物をどうやって俺はたった一人で倒すつもりでしょうか？

◇◆◇◆◇◆◇◆

じゃあ、解答だ。

「シラン、それからアルドレさん。町で渡した『アレ』を出してください」

危ない、シランだけなら普通だが、アルドレさんは初対面の年上の人だった。そう軽い反省をしながら彼らに預けた『アレ』が姿を現すのを待つ。そうしているとまったく表情を変えないシランと対照的に緊張した面持ちのアンドレさんが、それぞれの魔法のポーチから一抱え以上もある大きな樽を合わせて５つ取り出した。俺はレベルなどの都合で一個がまともに動ける限界なのだが、さすが全員Ｂグレード以上の冒険者でさらに戦士系職、アルドレさんは２つ、シランに至っては３つ楽々とポーチに収めて平気な顔をしていたのだから、つくづくレベルの差というのは埋めがたいと思う。

レベルの関係というのは基本ポーチでの重量制限の一つの基準がＨＰだからである。まぁ他にもポーチ自体の性能が違う事もある。ポーチのランクアップクエストはレベル５０以降にしか受けられないし、父上のものを借りて試してみたけどグレード制限食らったから無理だったしな。

そうやって今俺の目の前にあるのが、例の『アレ』。見た目にはどこの酒場でも置いてあるような何の変哲もない大きな酒樽である。

それを俺は慎重に一個ずつ『ヒュージスケルトン』を中心に正確に五芒星になるように配置していく。

念のため全ての樽の蓋を開け、中身の状態を確認する。俺の手からさらさらと零れ落ちるのは、独特のにおいがする真っ黒な粉。

そうしている間にも自分の周りをうろちょろする俺の動きを、奴はゆっくりと見てくるが、見てくるだけで特に何もしてこない。

そう、以前にも少し話したとおりモンスターには、普通のモンスターのような近寄るだけで攻撃を仕掛けてくるアクティヴ型と、大多数の討伐モンスターのように、こちらが攻撃するまで一切何のアクションも起こさない非アクティヴ型が存在する。この前こいつを討伐にきたパーティが、こいつの目の前で強化魔法などの準備をしていても襲ってきたりしなかった事がその証拠である。

……但し見てくるだけで正直ションベンちびりそうに怖いが。

そして俺はおもむろに奴から５０歩ほどの距離を取ってから愛用のミスリルダガーではなく、もうひとつの俺の装備であるエルダーウッドワンドを取り出して装備する。さらにポーチから各種能力強化ポーションを取り出そうとしたところで、不意に先ほどのまでの多弁が嘘のように静かだったミリーさんから声がかかった。

「少年、せっかくオラクルがいるんだ。それはさすがにもったいないと思うよ。デュー、彼に《エンチャント》してあげて」

その言葉を聞いたワトキンスさんが一歩前に進み出て、俺に対して様々な魔法を唱え始める。

物理攻撃力を上げる《ブレスオブパワー》。

物理防御力を上げる《ブレスオブシールド》。

魔法攻撃力を高める《ブレスオブマナ》と魔法詠唱速度を高める《クイックスペル》。

さらに現在彼が唱えられるであろう全ての強化魔法が次々に《エンチャント》されていき、俺は今までに感じたことの無いほどの体から湧き上がってくる力に思わず拳を握り締める。

オラクルはヒューマンの2次魔法職であり、1次魔法職であるクレリックから派生する強化魔法に特化した補助魔法のスペシャリストである。その真価は特定の誰か、多くの場合には自分や自分のパーティメンバーに対する一定時間の魔法による強化、つまり《エンチャント》にある。《エンチャント》にどれほどの力があるかは、《Ｎｅｗ　Ｗｏｒｌｄ》に限らずＭＭＯＲＰＧを実際にプレイしたことのある人間にとってはいわずもがなの事であるが、具体的に分かりやすくいうなら、おそらく今のこの状態の俺なら、レベル２６でしかない今の俺が、レベル４６のレンジャーであるイナ先生とほぼ互角に戦えるはず、というほど。

それほど《エンチャント》というのは重要な要素であり、《Ｎｅｗ　Ｗｏｒｌｄ》、ひいてはこの世界がいかに一人では何も出来な

いかという事を教える好例といえるだろう。

俺は深々とミリーさんとワトキンスさんにお礼のお辞儀をする。

さてと、ようやくここまで来たか。思えばこの3年、長かったような短かったような……。じっとりとワンドを持つ手が汗でにじむ。口の中もカラカラに乾いて、魔法の詠唱ができないと感じてしまうほど。どうやらガラにもなく緊張していたらしい。ポーチから水の入ったガラス製の水筒を取り出し一息にあおる。渇いたのどに冷えた水の冷たさが心地よい。そのまま残った水を頭からぶっかける。

おし、準備は万端。後は結果をご覧じろ！

俺は覚えたばかりの魔法スキル《サークルフレイム》を発動。エルダーウッドワンドの先端に《ファイヤーボール》とは違う渦巻くような炎の玉が生まれる。

それを万感の思いを込めて『ヒュージスケルトン』に向けて解き放つ！

澱んだ空気と、周りで見つめるみんなの視線を切り裂いて飛び炸裂する炎の一撃。着弾と同時にその炎を物ともせず、俺を敵とみなして攻撃を開始しようとする『ヒュージスケルトン』。

――だが甘い！　食らうがいい！　1．5t分の黒色火薬で作り出した擬似《爆発》（エクスプロージョン）の威力を！

奴を中心に展開した炎のサークルによって着火した5個の樽の中に満載された黒色火薬が一斉に火を噴き、視界全てをふさぐ黒煙とともに凄まじい爆音が『ジエンの古戦場』全体に響き渡ったのであった。

## 第十九話　長期休暇は大変だった　？（後書き）

お読みいただきましてありがとうございます。

ご意見、ご感想、誤字脱字の指摘など幅広くお待ちしております。

いえっふ～！　やりたかったこと１個おわったぜぇ！

## 第二十話　長期休暇は大変だった　？（前書き）

出来立てです。

少し実験を行っております。

## 第二十話　長期休暇は大変だった　？

濛々と立ち込める黒煙を前に、俺はすばやく《ヒール》を使って轟音で破けた鼓膜を癒す。さらにポーチから《スケルトン》族にほとんど効果のないミスリルダガーの代わりに、念のために用意してきておいたＤグレード最強両手鈍器ウォーハンマーを取り出す。その無骨な姿は見た目に違わずずっしりと重く、その秘めた攻撃力を確信させてくれる。さらにレンジャースキル《ミラージュステップ》を発動し回避率を極限まで高めたその瞬間、黒煙を切り裂くように振り下ろされる巨大な象牙色の鉄槌ならぬ骨槌！

いまだ上がり続ける黒煙を割って現れたのは、アンデッドモンスターが蔓延る『ジエンの古戦場』の王と呼ぶにふさわしいその威容。討伐モンスター『ヒュージスケルトン』。

さすがだわ。アレを喰らってさえ一撃で死なないか。『初心者殺し』（ルーキーキラー）の名は伊達じゃないか。

――前世（むかし）、《Ｎｅｗ　Ｗｏｒｌｄ》初心者時代の俺が３回連続で討伐失敗したのは俺の黒歴史の一つだし。

遥か頭上からの死神の一撃をスキルによって跳ね上がった回避率を持ってかわしたのだが、その一撃によってくぼんだ地面を見て、俺は呆れるのを通り越して感心してしまう。

今回用意した『アレ』、つまり黒色火薬入りの樽は一樽あたり３００ｋｇ。つまり５樽合わせて１．５ｔ用意したにも関わらず、一撃死しないでやんの。

――まぁ、それはともかくとしてあの幼女な女神様は俺の願いを誠実に叶えてくれた。

俺が彼女？　に頼んだチート能力の一つは、ゲームには本来存在しない新しいアイテムや概念を俺が考え出して作ることができる能力。

それを使い本来《Ｎｅｗ　Ｗｏｒｌｄ》に存在しないこのメイドイン俺なチートアイテム『黒色火薬樽』を作るとき、俺は父上の全面的な協力の下行われた数え切れない実験の末に、およそ１５０ｋｇで父上の、つまり《爆発》（エクスプロージョン）Ｌｖ７に相当する威力だと割り出した。

つまり目の前のこのどでかい骨は、《爆発》（エクスプロージョン）Ｌｖ７、１０発分の威力をまともに喰らって生き延びやがったという事だ。

ちなみに実験の生け贄になってくれたのは、父上の召喚した各種ゴーレムたち。君たちの尊い犠牲は忘れない！　……いや、何回でも召喚できるけど。

まぁ、あと願いが叶っていたのは７歳で初めてレベルアップできたときから分かってたけどね。

それにしてもおっかしいな～、前世（むかし）、ギルドの仲間と何発当てたら強制転移＋麻痺する前に一撃死させられるかっていうネタイベン

トをやって1万ダメージで即死だったはずだから、計算上は一撃死だったはずなのに……。

だが間違いなく瀕死。ただし、計算をどこかで間違えたせいでタイマンガチバトルをやる破目になったというわけだ。

まぁ、現実（リアル）は厳しい！　チート（ズル）ばっかじゃダメでたまには体を張りなさいってことかね！

勝負は、《ミラージュステップ》の効果が切れるまでわずかな時間。たかだかレベル２６の軽装備職じゃもってせいぜい２発。３発喰らえば確実にアウトだろう。

つまり俺の卑怯技（チート）で瀕死の『ヒュージスケルトン』がぶっ倒れるのが先か、《ミラージュステップ》切れで俺がいいのもらって神殿に行くのが先か。

さぁ、はじめようか！

――奴の追撃と、俺が振り下ろすハンマーの一撃が交差し、ここにまさに命がけのチキンレースの幕が開けた。

え？　何で奴が死んでないと確信してたのかって？　爆破してすぐレベルが上がらなかったからに決まってるじゃん。

◇◆◇◆◇◆◇◆

一方その黄金の髪を持つ少年が、巨大というしかない骸骨との戦闘を開始しようとしていたその時。

それを見守る5人の大人たちの表情は、見事に3つに分かれていた。

呆然とその光景を見ているものと。

何か耐えるような真剣な表情でそれを見つめているものと。

――これ以上無く面白いものを見ている顔とである。

ミリーの護衛たるアルドレとワトキンスはただただあごが外れそうなほど口を大きくかけてめまぐるしく変わりいく状況を見つめているのみであった。

一方、ジオの戦士としての師であるイナからも普段のような余裕のある雰囲気はどこかに消えてしまっている。焦燥感漂う表情で綱渡りを続ける愛弟子の奮戦を見ているのみであった。

そしてうっすらと笑みを浮かべて目の前の光景を見ていたシランとミリーだが、この二人の『人でなし』の表情にはわずかではあるが差があった。シランのそれは驚きと再確認の満足の笑みであったが、ミリーのそれは怜悧な観察者としての目を備えつつ、どこか観劇に静かに熱狂するオーディエンスのような顔つきだったのだ。

やがて弧を描くような笑みを浮かべていたミリーが口を開く。

「……ひどいじゃないか、シラン。これほど面白い見世物だとあらかじめ教えてくれていたら極上の葡萄酒を用意してきたのに」

「笑えん。相変わらず本気か冗談か分からんな、お前の言うことは」

「本気も本気に決まってるじゃないか。

……そう、血のように赤い葡萄酒ならさぞや最高だっただろうね。ところでやっと思い出したよ。あなたはイナ・サラシスだね。どこかで昔見た顔だと思っていたんだ。ということは『戦終える鐘』繋がりであの子のお守りを、『爆炎』殿に頼まれたわけか」

横目で自分を見つめるミリーの視線を感じながらも、死闘を繰り広げる愛弟子からいささかも目をそらさず自分への呼びかけに応えるイナ。

「……そのあたりの話は後でゆっくりうかがうことにさせてくれ、『ギーレンの魔女』殿。今貴方と話している余裕はない」

「あら……素敵な殿方に振られてしまった。

まぁくだらないおしゃべりはやめて、今はこの最高のショーを見ていることにしようかな」

そういって意識の全てを再び前方で繰り広げられる戦闘劇に向けるミリー。

終幕が近づいていた。

◇◆◇◆◇◆◇◆

《ミラージュステップ》の効果時間はわずか1分ほど。しかし俺にはその1分がまるで1時間にも一日にも思えていた。そんな無限とも思えるような時間の中でかすっただけでも致命傷は避け得ない攻撃をかわし続けながら、何度も何度もウォーハンマーを叩きつける。

……まだか、まだか。俺の中のレンジャーとしての感覚が砂時計の砂が落ちるかのようにタイムリミットが近づいているのを告げてくる。

あと10秒。さらにもう一発ハンマーで奴の巨体をぶっ叩く。手に返ってくる慣れない鈍い痺れと残り7秒という感覚の声を無視しながらさらにハンマーを振りかぶったところに不意の横殴りの一撃！

わずかにかすっただけのその一撃によって俺のHPの約半分を持っていきやがった！　この野郎。あまりのその一撃の痛みに膝からくずれそうになるが、歯を食いしばって耐える。
ポーションを飲むその刹那の瞬間がもったいない。

残り2秒、最後の賭けに出る俺。鈍器系攻撃スキル《ハンマーアタック》Lv3を発動！

――こいつで倒せたら俺の勝ち！　ダメならてめぇの勝ちだ！
この野郎！

残り一秒！　巨骸の繰り出す振り下ろしの一撃を滑り込むように

もぐりこんでかわした俺は、渾身の力を振り絞り地を砕く勢いで全体重ごとハンマーを叩きつけた！

再び手に返ってくる鈍い痺れ。どうなった？　ダメか？

そして砂時計の砂が無くなった感覚とともに《ミラージュステップ》の効果時間が終わり、急激に自らの足捌きが緩慢なものに変わる。そのスキルの恩恵の終わりをも無視して悪あがきともいえる次なる攻撃のためにハンマーを振りかぶろうとした俺の体を神々しい光りが包み込む！

そのレベルアップの祝福の光りと自分の体に満ちる新しい大きな力に自分があの巨骸との戦いを制した事を文字通り体で感じながら、思わず地面にへたり込んでしまう俺。

大きく息を吸い、そして吐く。そしてもう一度吸って、その吸い込んだ空気を俺は勝利の雄叫びへと変えた。

「勝ったぁあああああああああああああああああ！！」

例えようもない充実感が俺の心身を埋め尽くす！　これがあるから冒険者はやめられない！

……こんなギリギリの勝負、二度とゴメンだけどな！

## 第二十話　長期休暇は大変だった　？（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

ご意見、ご感想、誤字脱字の指摘など幅広くお待ちしております。

## 第二十一話　長期休暇は大変だった？（前書き）

正直短いです。

本来は前の話の最後につくべき部分になるかと思いますが、なにとぞご勘弁を。

１０月１７日多少加筆しました。

## 第二十一話　長期休暇は大変だった？

未だ濛々（もうもう）と黒い煙をあげる戦場で、黄金の髪を持つ少年が地面にへたり込みながら勝利の凱歌をあげていたその後方。

そこには呆れ顔でその姿を見つめる並んで立つある男女の姿があった。

漆黒のブラッククリスタルメタルアーマーに身を包んだ男の名は、シラン・モーフィング。かつて『黒く荒れ狂う嵐』、もしくは『黒鎧（こくがい）の軍師』と呼ばれた凄腕のバーサーカー。

もう一方の真紅のスカーレットジュエルローブを纏った特徴的な桃色の髪の女が、ミリアルド・ジョバンニ・フラミンゴ。

ギーレン連合共和国内だけでなく、大陸全土に強い影響力を有するギーレン市商業連合の最高意思決定機関『十二人委員会』の一員でありながら、大陸有数の規模と力を持つ冒険者ギルド『ゴータニア商会』ギルドマスターをも兼ねる才媛。そして自身の冒険者としての実力も大陸屈指のアルケミストという規格外の怪物であり、人は彼女のことを『ギーレンの魔女』と呼ぶ。

その二人をして今自分達の目の前で起こった奇跡には、ただただ驚きの声しかなかった。

◇◆◇◆◇◆◇◆

「……勝っちゃったねぇ」

「そうだな」

「シラン。もしものときに介入する為だったんでしょ？　《ハウリング》あたりで動きを止める気だったのかな？」

「そちらこそいつでも介入できるように、小声で術式を展開していただろう」

「……ばれてたのか」

「当然だ。誰だと思っている？」

しばし二人の間に沈黙が落ちる。

そしてまたミリーがおもむろに口を開いた。

「……でも無駄だったねぇ」

「無駄だったな」

「さすがの僕もホントに一人で勝つとは思わなかったよ」

「……まぁ、それが普通だな。ただお前の口からそういうまともな言葉を聞くと、なぜだか逆に落ち着かない気持ちになるのだが」

「……相変わらず減らず口が減らないみたいだね、まったく。まぁ、おかげでその懐かしい君の姿も無駄になっちゃったわけだ。

僕はうれしかったけどね。なんだか昔に戻ったみたいで」

「……ふん、お前を喜ばせても1Gの利益にもならん。

それはともかくとしてこちらは手札（カード）の切り損だ。この姿を見せる事でジオ様を驚かせるのには、もっと相応しい場面は他にもあったはずなのに……。我ながらまったく……」

情けないとばかりに額に手をやって小さく頭を振るシラン。

そんなシランを見て、大げさな仕草でおどけるように両手を広げながら話を続けるミリー。

「あらら、その一言であの子が苦労してるのが手に取るように想像できるよ。

……ご愁傷様という他ないね。

それにしてもあの少年、君に読み違いをさせるほどなのか……。

ねぇ、シラン。真面目な話、あの子を僕に譲ってくれない？」

その言葉を聞いたシランは、おもむろにミリーに向けて右手の人差し指を1本立てた。

「ん？　１本？　ってことは１００万（Ｇ）かな？」
「馬鹿なことを言うな。もし本気なら最低でも１００億（Ｇ）持って来い」
「……さすがにぼったくりすぎでしょ、それ。ちぇ、ケチンボ」
「それにしても……」
「うん、そうだね……」
そう言ってから大陸中探しても現在２０人ほどしかいないといわれるＡグレード冒険者二人は、揃って口元に凄絶と形容するしかない笑みを浮かべながら異口同音に同じ言葉をつぶやいた。

「おもしろい」

その場に居合わせた熟練（ベテラン）ではあるが、至極普通の常識と感性を持った冒険者であるミリアルドの護衛二人は、ある酒の席で自分達の上位者のその態度を評してこういったらしい。

「あの場に居合わせ、あの奇跡を目の当たりにして、そのあげくあんなことが言えるあの人たちこそ、あの場で奇跡を起こしたジオ少年をも遥かに上回る真の異常者だ。
――そしてあの二人に目をつけられてしまったあの黄金の髪の少年

に心の底から同情する」と。

ちなみに後にその物語を仲間達に語る二人。終始自分の見ている光景が信じられずその後もかなりの長い間生きた石像と化していたままだった。

一方、そんなやり取りになど目もくれず彼の師であるイナ・サラシスは、普段の彼からは考えられない事だが、自分の愛弟子が成し遂げた快挙に思わず歓声をあげて彼の元へ走り寄っていった。

◇◆◇◆◇◆◇◆

「痛い、痛いです！　先生！　大丈夫ですから！　もうポーション飲みましたから！」

聞いたこともない大声をあげて近づいてきたイナ先生に、猛烈な勢いで頭をなでまわされながら、ひとしきり達成感を満喫した俺は自分の現状の確認に入る。

さてとまずレベルは……３０だと？　どういうことだ？　最低でも３２までは上がらないとおかしいんだけど……。レベル２６でレベル３５の討伐モンスターを一人で討伐となると、最低６や７のレベルアップは普通である。前世（むかし）散々似たことをやったから間違いない。じゃあ何故俺のレベルは４しか上がっていないのか……。そこであることに気づいてしまった。

今のこの現象。凄まじく懐かしく、そして馴染みがあり過ぎ、かつ嫌過ぎるほどに覚えがある。

背中を流れ落ちる冷や汗。ようやく落ち着いたばかりだった心臓の鼓動がやけにうるさい。

だが何度考えても出る答えは一つ。

――アルケミストをはじめとする特殊職の経験値倍化ペナルティ。

つまり俺は《ダブルジョブ》というチートと引き換えに、懐かしの経験値倍化ペナルティをいただいたわけか！　１＋１は２ですね！　小学生でも分かるわ！　道理でレベルが上がるのがやたら遅いわけだ！　むしろ今の今まで気づかなかった自分のアホさ加減に我ながら呆れるわ！

そこまで考えた俺はまたその先にある真実に気づいた。

気づいてしまった。

絶望的なそれに。

そのあまりの救いの無さに、冷水をぶっ掛けられたような感覚と、

先ほどまで以上に荒々しくランダムな心臓の鼓動。

だが、行き着いてしまった答えからは逃げられない。

――じゃあ、片方が特殊職たるアルケミストになったらどうなるの？

つまり、

――さぁ算数の時間だ。１＋１は２．じゃあ１＋２は３。どう考えてもアルケミスト転職後は、レベルを上げるためには最低でも普通の冒険者の３倍必要。

問題は『最低』でも『３倍』だということ。

前代未聞のダブルスキル故に、その必要経験値の計算がどうなるかなど、『《Ｎｅｗ　Ｗｏｒｌｄ》の歩くうぃ〇様』とまで呼ばれたさすがの俺にもわからない。

要するに。

最低でもアレよりさらにマゾいの？　それどんな無理ゲー？　え？　現実ですか、そうですか。……って！

「そう簡単に納得できるかぁぁぁ！」

結果からいうと何とか3倍で済みました。あと耳元で急に大声で叫んだからイナ先生に怒られちゃいました。

まぁなにはともあれ、ということで実験&討伐成功！　そして仇はとったぜ？　あの時見ていることしかできなかった俺！

## 第二十一話　長期休暇は大変だった？（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

ご意見、ご感想、誤字脱字の指摘など幅広くお待ちしております。

一応次かその次で休暇終了です。

## 第二十二話　長期休暇は大変だった？（前書き）

諸事情により今迄で最短ですが投下いたします。

明日の昼に日曜の深夜までまた実家かえるからなんですけどね。

まぁ次の話がどうしてもかなり長くなりそうなので。

## 第二十二話　長期休暇は大変だった？

闘争と勝利とに彩られ、そして最後のオチに遅すぎた理解という名の絶望に叩き落されたあの日から一夜。

ベッドに上半身だけ起こした俺に、うっすらと窓を覆うカーテンの隙間から入る朝の陽の光と、あまりにものん気な小鳥達のさえずりが朝であることを教えてくれているのだが、うすぼんやりとして依然活動する気配を見せない俺の脳みそは、実際にはそれほど長い時間ではなかったようだが、自分の体感時間的にはかなりの長時間、一切の物事の理解をボイコットしていた。

ちなみにボイコット中の俺の脳内会議の模様はこう。

俺　「正直、しんどいよな」

俺　「うん、しんどい」

俺　「マリエルに会いたいな」

俺　「うん、会いたい」

以上がエンドレスで繰り返された。会議は踊る、されど進まないどころかその場でループ！　その様はまさに無限円舞（エンドレスワルツ）。

そう今俺がいるのは俺の女神様がいるワトリアの自宅ではなく、

オープンが数日後に迫ったエルトリンシティの俺の宿『冒険者の止まり木亭』でここ数日は俺専用と化しているＶＩＰ専用特別室。

さすがにあの後極度の緊張から開放された直後に極度の精神的負荷が精神にかかったためか、絶叫の後ぶっ倒れた俺は、かろうじて発動させた帰還スクロールで帰還後イナ先生におんぶされてそのままこのベッドに。

しかし夢の中でも襲い掛かってくる経験値三倍ペナルティという近い将来の現実というのは、さすがにいささかヘビー過ぎると思う。

話についていけないといけないので説明すると、一般的にＭＭＯＲＰＧ《Ｎｅｗ　Ｗｏｒｌｄ》で初心者プレイヤーがかなり頑張って、一般職の場合Ｓグレードに、つまりレベル７０以上にするまでにかかる時間はおよそ２年だといわれていた。

まぁもちろんそのプレイヤーが選択した種族と職業にもよるが。

但しそれはあくまでも一般職の話。公式マゾチートである特殊職はそうはいかない。

全特殊職の中でソロでの狩りも範囲パーティも討伐モンスター狩りも何でもこなせたために、最もレベル上げがしやすいといわれていたダークエルフの万能魔法火力職『メイガス』ですら、普通にやって２年半。

……全特殊職最悪といわれたアルケミストに至っては、環境の整っていたほうであろう俺のギルド『十七人の賢者』の猛者たちです

ら、平均すると3年半かかっていたのだから。

さてここで再び算数のお時間である。

当時の俺たちの一日平均狩り時間４時間×３６５日×３、５年＝およそ５１１０時間。

つまりアルケミストを一人、三次職である『ヘルメス・トリスメギストス』にするには時間にして５１１０時間必要だという計算になる。

これは日数になおすとさらに分かりやすくなるので、５１１０時間を２４時間で割ると、

５１１０時間÷２４時間＝約２１２日という答えが出る。

つまり２４時間耐久レースでうちのギルドのメンバークラスの一流プレイヤーが高効率で狩りをやったとしても、約２１２日かかる計算になるほどアルケミストからヘルメス・トギスメギストスへの転職には膨大な時間と血の滲むような労力が必要であったのだということが分かる。

……オンラインゲームに価値を見出さない一般の方からすればアホ過ぎるとしか思えないだろう。こうして数字にして振り返った今なら俺もそう思うよ、本当に。

もっと言うなら仮にこの時間を使って時給８００円のアルバイトをやっていたとしたら、

時給８００円×５１１０時間＝４，０８８，０００円。

……４００万円以上ですね、ハイ。親父、お袋、マジでゴメン。ネトゲしてなきゃ学費半分出せたわ、俺。

おっと脱線してしまった。話を元に戻そう。

さてと、では次にこの絶望的な時間をさらに１．５倍にしてみよう。だってこれからの俺に必要になる数字は２ではなく３倍だから。

５１１０時間×１．５時間＝７６６５時間。

さらにさらに、それをあちら（前世）もこちら（今世）も変わる事のない一日の時間である２４時間で割ると？

７６６５時間÷２４時間＝約３１９日。

ついでに前世（むかし）の平均プレイ時間である４時間で計算すると、

７６６５時間÷４時間÷３６５日＝５．２５年

となり、一日４時間ペースで頑張っても５年と３ヶ月かかる。

つまり俺が『ヘルメス・トリスメギストス』の座に『返り咲く』には、一日２４時間一時も休まずにレベル上げにいそしんだとしても、約１年まるまるかかるほどの時間が必要になるということだ。

いつ飯食えっちゅうねん……。

もしくは、毎日４時間モンスターどもに追われつづける生活を５

年ちょっと……。

今この時ほど、自分が理系でしかも子供の頃そろばん習っていたせいか、暗算が得意なことを恨んだ事はなかったよ、ママン……。

さらに今列挙した全ての数字は、『命の危険』や『迫り来る死の恐怖』といったリスクがまったく存在しなかった『前世(むかし)の世界のディスプレイ越し』だから出来た事であって、実際に今世(いま)やるとなるとレベルが上がりきる前に、俺の精神(こころ)が死ぬ。間違いなく逝く。

だってさ、あいつらマジで殺しに来るんだよ？　俺のこと。殺気とかマジで半端ないんだよ？　大丈夫とかいうそこの誰か！　一回でいいから包丁とか目じゃないでっかいナイフ持った緑の顔の気持ち悪い小人さんの集団に追い回されてごらんよ！　俺の言ってることの意味が分かるから！

そんなの無理……、超無理ゲー。ていうか転生するとき（最初に）気づけよ俺……。

そこまで脳みそが動き出した途端に猛烈に嫌な回転をして俺の人生お先真っ黒です、どうもありがとうございました、と結論を出しやがったところで、ふと寝台脇にあった鏡を見ると、今までででも最高クラスのひどい寝癖と目の下のふっといくま。

そりゃそうだよな！　こんな超弩級の心労(ストレス)喰らったらな！

正直まったく寝た気がしません！

……その上、今日はあの『怪物』どもとＯ☆ＨＡ★ＮＡ☆ＳＩしないといけないんだとよ……。

万全の状態でも謹んでお断りしたいんですけど！？

あぁ早くマリエルに会いたい……。じゃないと胃に穴が開いちゃう……。

◇◆◇◆◇◆◇◆

美味い……、何これ美味すぎる……。

疲れきったこの体に染み渡るこのポトフのおいしいこと……。

人参、小さなカブらしき野菜、それにジャガイモと厚切りベーコンがよく煮込まれてて、マジですごいおいしい。さらにこの荒挽きの小麦を使って焼かれたパンとの相性も最高……。

こうやってポトフのスープにパンをつけて……、うん間違いないね。

「ジオ様」

「しょうね～ん」

ん？　誰かが俺を呼んでるなんてことはないよ？　そんなの聞こえない。今の俺は目の前の飯を食う為だけに生きてるのだから！

「ジオ様」

「しょうね〜〜〜ん」

聞こえない。俺には何も聞こえない。聞こえないったら聞こえない。おっ、ソーセージまで入ってる！　うむ、美味い！　コックを呼べ！

「……ジオ様」

「し・ょ・う・ね・ん♪」

……聞こえない振りをしていればいつか嵐は通り過ぎる、そう思っていた愚かな時期が俺にもありました。

分かったからシラン！　頼むから槍持ち出すな！　穂先を微妙にこっちに向けないで！　あとミリーさんは室内で《ファイヤーボール》詠唱しないで！　オープン直前に燃えちゃうから！

というわけで食後の休みももらえずにシランとミリーさんに引きずられて宿の応接室へ連れて行かれる俺。

……あ、ドナドナが聞こえる。

## 第二十二話　長期休暇は大変だった？（後書き）

いかがだったでしょうか？

ご意見、ご感想、誤字脱字の指摘など幅広くお待ちしております。

今回はネットゲームというのがいかに時間を大量に食いつぶすものかという説明的な話になりました。

いつか入れないと思っていたのでよかったと思います。

次回予告は、バイセクシャルなド変態大商人との商談という名のバトルを予定しております。

## 第二十三話　長期休暇は大変だった　？（前書き）

なかなか進まない筆（？）

終わらない休暇ですが、あともう少しだと思いますのでもう少しだけお付き合いください。

## 第二十三話　長期休暇は大変だった　？

――それはジオが目覚める数時間前。まだ薄暗い早朝のこと。

早朝の宿というのは忙しい。掃除、洗濯、早起きの客のために食事の支度など息をつく暇もないほどである。未だオープン前の『冒険者の止まり木亭』であるが、この数日は自分たちの主人というべき少年とその関係者がオープン前のチェックを兼ねて滞在している為に従業員一同、朝から懸命に働いていた。

そんなあわただしいながらも静かな朝の宿の一室に大声が響く。

「ミリー様！　シラン様！　ご説明願います！　一体、何なのですか彼は！？　あの爆発する樽！　レンジャーとウィザードのスキルを一人で発動できること！　自分のこの目で見たことなのにまだ信じられない気持ちなんです！　何か分かってらっしゃるならどうか説明してください！」

昨日一日の非常識の連続で幾分やつれた顔をしたデュー・ワトキンスが目の下に大きなくまを作り、彼にしては珍しく、そう職業的に聖職者の一種たる『オラクル』でありいつも穏やかで口元から笑みを絶やさない彼としては非常に珍しい事に、声を荒げ目の前で食後のお茶を楽しんでいる主人とその盟友、二人の怪物を問い詰めていた。

「デュー、朝からどうしたの？　眠れなかった？　布団が合わなかったのかな？」

「小僧、朝から五月蝿い。せっかくのお茶が不味くなる」

「馬鹿なことを言ってはぐらかさないでください！　『アレ』を見てそのように平気な顔をしていられるのはお二人だけです！」

小さく肩をすくめる茶色の髪の男と桃色の髪の女。

ミリーは思う。声を上げているデュー・ワトキンスは自分の股肱であり、戦闘、ギルドの運営、商会での活動、さらにプライベートな面でも自分の秘書の役割を務めてくれている有能な男であるのだが、いかんせん聖職者の端くれであるからなのかもともとの性格なのか、常識にとらわれがちで理解と認識の間が短すぎて真実や事実に対し追究する力が弱い。

分かりやすく言えば「頭が固くて察しが悪い」のである。

昨日のまるでバーゲンセールのように惜しげもなく曝された異常事態の中で一番異常だったのは、見たこともない爆発を起こす樽ではなく、年端もいかない少年がたった一人であの強大な『討伐モンスター』を倒したことでもなく、ましてやその少年が見せた戦士職と魔法職の両立といった奇跡でさえなく、あの場にいたものにさえ『目で見ることが決して適わないところ』であったのだが、おそらくそのことに気づいているのは自分ともう一人だけ。目の前で大声で騒いでいるデューはもちろん、もう一人の連れもそう。さらには少年を鍛え上げた軽戦士も、そして少年本人ですら気づいていないかもしれないと彼女は考えていた。

その『見えない事実』に比べれば他のものなど正直何ほどのものでもないと、彼女は自分が茶葉を持ち込んで入れさせた香り高い南

方産のお茶を飲みながら思う。

まったく面白いものを見せてくれたものだ。その点だけはこの男に感謝しないといけないなと思いながらもう一口お茶を口に含む。

――但しお代は非常に高くつきそうであるが。

そうした中で彼女がふと目をやるともう一人の部下であるガデス・アルドレも、ワトキンスに任せて口こそ出してこないがその表情が雄弁に昨日の異常事態の説明を求めていた。幼少の頃より自分に仕えてくれている二人の、そのあまりの常識人さにミリーは内心やれやれと思いながら隣で平然とお茶を飲んでいる男の爪の垢でも飲まそうかと思ったが、即座にその考えを否定した。

（とてもじゃないけどこいつみたいな部下、僕は要らない。そういえばもう一つあったな、ありえないこと。

……ほんと、あの子はよくやってるよ）

ミリーからすれば自分たち二人だけが気づいているであろう事実以外では、昨日の数々の出来事より、『あの人』以外に今自分の隣に座るこの男を未だ１５歳にもならない少年が曲がりなりにも御す事が出来ていることが何よりの異常事態であり、正直にいうとデューもガデスも何故その点について何も言わないのだろうか？　と不思議でさえあった。

（まぁ……、久々に大きな商談だね。さてどうなることやら……）

ちらりと様子がまったく変わらない隣に座る商談（てき）相手を見てから、迫り来る武器を交えぬ戦いへの期待と興奮をいささかもその表情に

表すことなく、『ギーレンの魔女』とその古馴染みの男は静かに時を過ごす。

大陸西方の大国、エルトリン王国の首都の片隅にある小さなオープン前の宿屋から嵐が巻き起こった日の朝は、こうして慌てふためく常識人2人を除き比較的穏やかに過ぎていったのであった。

## 第二十三話　長期休暇は大変だった　？（後書き）

いかがだったでしょうか？

ご意見、ご感想、誤字脱字の指摘など幅広くお待ちしております。

## 第二十四話　長期休暇は大変だった　？（前書き）

長い長いとご指摘の長期休暇ですが、ホントなんでこんなに長くなったんだろうと私が一番むかむかしてるのは間違いないのでどうにかこうにか許してください。

というわけでようやくここからが本番です。

## 第二十四話　長期休暇は大変だった　？

というわけで先ほどドナドナされた俺は今、宿の一階にある応接室にいる。

白を基調としたシンプルな作りに、目立たないが凝った作りの樫のテーブルや椅子がセンス良く置かれていて落ち着く大変よいお部屋である。

あの後であるが、一応朝食は全部食べさせてもらえた。どうも無視されたのが気に食わなかったようで、「分かったから！　ちゃんとするから！」と俺が叫ぶとようやくドナドナ状態から開放されゆっくりと朝ごはんを食べる事ができたのだった。

その開放される直前の二人の目がやべぇことやべぇこと……。８９３さんも裸足で逃げ出すよ、アレじゃ。その時シランに、私たちはもう随分前に食事を済ませて長い時間ジオ様をお待ちしていたのですから、とか言われたがそんなの俺は悪くないと思う。

絶対悪くないと思う！　もっと俺はワガママいっていいと思うんだ！　だって１３歳だし！

うん、そんな言い訳があの化け物どもに通じるわけがないね。諦めよう。一人でも十二分に手に負えないのにそんな奴が二人とか……。

ちなみに今の部屋の中がどうなっているかというと、まず２人がけのソファーに座る俺の隣にイナ先生。対面に腹黒とバイセクシャル。その後ろに苦労人なお二人が凄まじく何かを言いたそうな顔で

立っている。

何が言いたいんだろ？　職場に関することなら愚痴ぐらいなら今度聞いてあげるのにと、いまいち動いていない頭で考えながらぼ～と話が始まるのを待っている俺。

そうしていると、「正直やる気がない」「早く家に帰って寝たい」、そんな俺が発するオーラを２００％理解しているはずなのに平然と無視する腹黒男が、後々まで俺が忘れる事ができない大商いの口火を切った。

「ジオ様、まずは昨日はお疲れ様でございました。こちらがジオ様がお勝ち取りになられた戦利品でございます」

そういってシランが並べたものは、鉄製の大剣一振りと鉄製の鎧を含めた防具が７点。

あぁ、衝撃の事実のせいですっかり忘れていた。討伐モンスターは普通のモンスターとは違い、武器や防具、もっとレベルが上がればアクセサリーなどのアイテム、いわゆる『現物』を高確率でドロップする。

経験値だけならば普通に狩りをしていたほうが効率がいいにも関わらず、多くのプレイヤーが討伐モンスターを倒すのはこれが大きな理由である。

一言で言うと、討伐モンスターは金になる。

但しＭＭＯＲＰＧをやったことのある人なら分かると思うけど、昨日の俺のアレは例外中の例外。実際《Ｎｅｗ　Ｗｏｒｌｄ》内で

も破格の条件が整ってなきゃ出来なかったし、仮に条件が整ったとしても他の討伐モンスターならともかくあの骨相手には絶対無理だったしな。

あの骨はマジで強いんだわ、ホント。実際ギルドメンバー総出で適正レベルのアバター作って、強化限界装備持ち寄って、最強バフかけて、ソロ討伐試してみたこともあったけど失敗したしな～。

そんな懐かしいことを考えながら机の上の武器防具に目をやると、剣は人狼族の戦士職が好んで使う両手剣である『アイアンツーハンデッド』、防具はあのリーダーらしき人がつけていた『アイアンアーマー』の他、同等クラスの腕防具や頭防具などが6点といった具合である。

本来なら参加者全員でこれらの品々をその場でオークション形式で売買しGに換金した後、合計金額を人数分で割って解散というのが普通の討伐モンスター後の流れなのだが、昨日奴を倒したのは当然俺一人。つまりこれらの品々は俺の総取りである。

武器1点、防具7点合計での購入代金が、ＮＰＣの店売りで１４，３２０Ｇ。

まぁ何とか半分は回収できたといったところだろうか。ちなみにあの『黒色火薬樽』、現状では一個４０００Ｇは下らない代物だったりする。つまり昨日俺は2万Ｇ以上を派手にぶっ飛ばしたわけだ。

まぁ今回の散財は俺にとっても決して軽くはないが、今回は今までの実験の総決算という意味合いもあるし、レベルを4あげることと引き換えなら悪い話ではない。それにあの使い方は本来の『黒色火薬樽』の使い方ではないのだから。だから今回の手に入れた現物

ははっきり言っておまけ。グレード最強装備もないしな。というわけでこれらの代物はとりあえず……、さっさと金に換えよう。

「ミリーさん」

「はいはい♪　何かな？　少年」

「これ全部、いくらで引き取ってくれます？」

「ん～、ざっと１万でどうかな？」

「……随分高い値を付けてくれますね」

「うちの商会で定価で売れば、こっちに損はないからね。昨日はいいもの見せてもらったしこれくらいはサービスだよ♪」

うん、まったく問題ないどころか完璧に俺の予想上限価格ぴったりだわ。さすがギーレンの商人というべきか。

ギーレンというのは大陸の中ほどに位置する共和制を敷く国家で、その中心であるギーレンの街はエルミオン海に開けた海港都市にして大陸最大の商業都市である。というのがいわゆる《Ｎｅｗ　Ｗｏｒｌｄ》の公式説明。そしてその実に違わず実際のゲーム内でもプレイヤー達の最大拠点となっていた街である。

何故ならとにかく広場が広い！　だから露店がし易い！　そしてＣグレード中位までの装備品が売っている唯一の街（他はＤグレード最強まで）であり、各種コモンアイテムの作成に必要な店売りアイテムが全て揃っている点や、大陸西部と東部の各都市や４０～６０台までの有望狩場に直接ゲートキーパーから飛べる有用さなどな

どから、一度は誰もが根城にしていたゲーム内最大の街であった。

懐かしいな～、第二次ポーション封鎖とか……。色々やったなぁ……我ながら。

「お～い少年、どこにいっちゃってたのかな？　僕を前にして余裕だね～」

ニコリと笑ったミリーさんの声で我に返った俺は、思わず大量の冷や汗をかくこととなる。

全然目が笑ってない。完全に物に値段つける商人の目してるんだもの……。付け加えるならシランもたまに同じ目をする。こっちの何かを探るような、なんていうかガラス玉みたいに無機質な目。マジでこいつら同類か。

やっべぇ、頭切り替えないと……喰われるな。

そこでいつものようにカチンと音が聞こえた気がして俺は自然と集中状態へと移行する。正直時間をかければもう少し高い値で売れなくもないのだろうが、ここは素直に現金に換えておいたほうがいい。本気で自分で売る手間を考えれば1万Gという値付けはかなり良心的な額といえるから。

「すみませんでした。ではそのお値段で引き取りお願いします」

「……へぇ、いいんだ。その歳で物の相場が分かってるのか、たいしたもんだ」

感心したよう言い、小さく笑う目の前の桃色の髪をした女。昨日は唐突な登場と討伐前の緊張感で余裕がなくてまるで把握できなかったのだが、落ち着いてじっくりと相対した今なら分かる。

――この人も間違いなくシラン級、もしくはそれ以上の難物だと。

昨日確か彼女はこう言った。『僕は商人としてはギーレン市商業連合の十二人委員会の一員』だと。

ギーレン共和国連合は、《Ｎｅｗ　Ｗｏｒｌｄ》の製作スタッフが間違いなく歴史上『千年共和国』、『最も高貴な国』、『アドリア海の女王』と呼ばれたヴェネチア共和国を意識して創った街である。町並みは明らかに現在も中世当時の面影を色濃く残すヴェネチアの街の面影を色濃く写し取ったもので、美しい白大理石の街は多くの運河と橋でブロックごとに分けられていたし、ゴンドラ観光なんてプチイベントまで存在していた。さらに彼女の言った『十二人委員会』というのも実際歴史上に存在したヴェネチア共和国の『十人委員会』を基にしたものだろう。

ついでに言えば多くのプレイヤーが文字通り隙間なく通行の邪魔になるほど露店を広げていた広場の名前は『サン・マルティクス広場』。『マルティクス』とはイタリア人に多い名前であるマルコの語源である。

その昔、水浸しにならないよな？　とギルドメンバーとチャット

で笑いあったのはいい思い出だ。

つまりこの目の前の女性は、中世ヨーロッパ世界の中で最も長く繁栄を誇ったヴェネチア共和国の最高統治機関に類するものの一員ということであり、その経済的、社会的影響力はシランはおろかエルトリン王国の貴族である父上ですらその足元に及ばない事は容易に察する事ができる。

つまり言動がどうであろうが、性癖がどうであろうが、現在大陸でも有数のＶＩＰでありながら、大陸でも数少ないＡグレード冒険者、そして”あの”シランがその双方において『大陸有数』としぶしぶながらも認める怪物であるということ、その事実をしっかりと頭に叩き込んだ上で俺は俺の目の前でいつもの笑みを浮かべるシランに聞くことにした。

「さて、シラン。俺はミリーさんとこの後何を楽しくおしゃべりすればいいのかな？」

◇◆◇◆◇◆◇◆

その俺の言葉に反応したのは、意外にもミリーさんの後ろに立っていた苦労性なオラクルのワトキンスさんだった。

「少年、いやジオ・パラケルスス！　あれは一体どういうことだ！　なぜ君はレンジャーのスキルとウィザードのスキルを両方使うことが出来る！？　それにあの『爆発する樽』は一体なんだ！　私たちに……」

そこまで話したところでワトキンスさんの声が止まる。俺の前に座る女性からあり得ないほどのプレッシャーが噴き出していたからだ。

一気に凍りついた室内の空気。唾を飲み込むのもつらく感じるほどの圧力。

やがてわずかに顔を斜め後ろに捻っておもむろに口を開く桃色の悪魔。

「……デュー、お前は僕に恥をかかせたいのか？

……すまなかったね、少年。部下が無粋なことを言って」

そこで一度言葉を切った彼女が小さく息を吐くと同時に、部屋を占領していたプレッシャーが雲散霧消した。

やばいこの女、俺の想像以上だ。さすがのイナ先生も俺の隣で顔を真っ青にしている。正直俺が耐えられているのは非常に腹立たしい事だが、目の前に座ったもう一人の人間、シランのおかげだろう。

――野郎、あのプレッシャーの中でもまったく変わらずお茶まで飲んでやがるんだぜ？

そんなもの目の前で見せられたら逆に肚が座っちまった。なんたって俺はこいつの主らしいからかっこ悪いところは『あんまり』見せられないのだ。あの日約束しちまったからなぁ……。退屈させないって。

それにしたってまったくお前みたいな化け物は一人で十分だっつうの。

そんな目でシランを見ると小さく頭を下げてきやがった。おいおい俺の頭の中読んでるだろ、お前。

そんなやり取りをしてから何とか自分を立て直した俺はあらためて言葉を続ける事にする。

「え～、あ～、そうですね、昨日見てもらったあの爆発する樽の製造法を買ってくれるとシランからは聞いているのですが？」

そこですかさずシランが俺の言葉を引き取る。ナイスフォローだ、腹黒！

「とジオ様がおっしゃっているが、さて『アレ』の製造法にいくら出す？」

ん～と腕を組んだまま首をかしげ、やがて右手の人差し指を一本立てるミリーさん。

一本ってことは……？

「１００万ってことですか？」

１００万Ｇ、確かに大金である。前世換算で約１億円。今までの俺の支出を補って余りある額だが、はっきり言って安すぎる。俺が作り出したチートアイテムとその製造法にまつわる様々な新しい考え方の価値はそんなものではないはずだからだ。

そう思って断ろうと動かしかけた唇にいつのまにかミリーさんの先ほど立てた人差し指が当てられていた。

「早漏は嫌われるよ？　少年。というわけでここからは大人の話をしようか。……イナ・サラシス、しばらく少年とシラン、そして僕の三人だけで話をさせてもらえないだろうか？」

そういってまずは自分の背後を振り返り、護衛でもあるのであろう二人に退出を促すミリーさん。同時に俺にではなくシランとアイコンタクトを交わし、頷いたシランを見て立ち上がり俺に、しっかりな、とだけ言って席を立つイナ先生。

その後にワトキンスさん、アルドレさんも続きドアが閉まった音の後、部屋に残ったのは俺と2人の人の皮をかぶった『何か』だけになった。

シランがおもむろに席を立ち部屋の片隅にあった籐製の丸椅子を持ってきてちょうど俺とミリーさんと三角形になる形で座る。

どうやら傍観するつもりらしい……。ここ数年の付き合いのせいか、面倒な事にこいつの考えは分かりたくないところだけは良く分かるのだ。

シランが再び腰を下ろしたことを確認してもう一度その女性らしい細い指先を立てて俺に尋ねるミリーさん。

「さて……少年。『1億』だ。『条件付きで1億』。さて君はどうする？　乗るか？　反るか？」

そう、ここまでの全てはただの前座。ここからがこの長期休暇の本番であったことを俺はこの後知る事となる。

## 第二十四話　長期休暇は大変だった　？（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

ご意見、ご感想、誤字脱字の指摘など幅広くお待ちしております。

我ながら引っ張りすぎですね。

## 閑話？　昔話　パート1（前書き）

このお話を読む方は

決して作者に石を投げないことを誓った上でお読みください。

そして読まないほうがいいと思ったりしてます、ハイ。

一言で言うと……ネタです。

# 閑話？　昔話　パート1

ぬ～わーるど　むかしばなし

ジもたろう

むかしむかし　あるところに　おとうさんとおかあさんがいました。

ある日　おとうさんは山に芝かりにいったら　なぜかハッスルしすぎて高笑いしながら《爆発》（エクスプロージョン）を連発して山は丸焼け。

おかあさんは川にせんたくにいったのですが、生粋の貴族のおじょうさま育ちであるおかあさんはせんたくができるわけもなく足を川につけてジャバジャバ遊んでおりました。

そうしておかあさんがあそんでいると　川上から　ドンブラコ～　ドンブラコ～　と金色の桃がながれてくるではありませんか！

おかあさんはビックリしながら　その桃を岸にあげようとしましたが　おかあさんは生粋の貴族のおじょうさま育ちでしたので　腕力がなくてもちあげられません！

ですが　たまたまそこへとおりがかった　親切な旅の執事さんが桃をひきあげてくれて　おまけにおとうさんとおかあさんの家まではこんでくれました。

芝かりにいったはずなのに　山を丸焼けにしたおとうさんが家に帰ってみると　びっくりぎょうてん　そこにはおおきなおおきな金色の桃があったのです！

おとうさんとおかあさんが　台所からＢグレード片手剣ダマスカスブレードをとりだして　桃をわってみると　そこには！

かがやくような黄金色の髪と不思議な紫色の瞳のあかちゃんがいました！

こどもがいなかった二人は　その不思議な子に　ジもたろう　と名づけて　ようじょな神さまにかんしゃしながらたいせつにたいせつに育てました。

何年かたったある日のこと　おおきくそだったけれどあまり身長だけはのびきらなかった　ジもたろう　は都のひとびとが　鬼が島の鬼にこまっていることを聞いて　じゃあ俺がたおしにいこうと　鬼が島へむかって　たびたつことにしました。

もちろん　おかあさんは　猛反対。

じぶんのおへやにお隠れになってなかなかでてきてくれません。

おかあさんが　きびだんごをつくってくれないので　ジもたろうは　しかたなく魔法のポーションを　たくさんつくってでかけることにしました。

たびにでた　ジもたろうがあるいていると　目の前のみちに　かわいいあかいかみをした　ふたごのいぬがいました。

ふたごのいぬがいいます。

「「ジもたろうさん！　ていうかご主人様！　きびだんごとかどうでもいいですから　わたしたちをたびのおともにくわえてくださいワン！」」

ジもたろうは　まとわりついてくるふたりのいぬを　どうにかあやしながらつれていくことにしました。

しばらく　たびをしていると　こんどは　はだがくろくて　みみがながい　どうみても飛んでいない　きじが腕をバタバタさせながらあらわれました。

きじがいいます。

「……ばっさばっさ。ご主人様、シルウィついていっていい？　ばっさばっさ」

地面にしこたま足がついているのに　きじだと言い張る　こまったきじをおともにして　ジもたろうは　たびをつづけました。

そうしてまた鬼が島への　たびをつづけていると　こんどは　さるにみせかける気すらもうないネコがおりました。

とりあえず　ジもたろうにとびついて　ひとしきり顔をなめまくったあと　さる？それともネコ？　はこういいました。

「リューネ、長い時間待ってさびしくて泣いちゃいそうだったにゃ〜。リューネもご主人様と一緒にいるにゃ〜！」

どうやらネコのようです。さるではありません。

ネコをおともにくわえ　ついにジもたろうは　鬼が島にたどりつきました。

鬼が島に　のりこんだ　ジもたろうをまっていたのは！

「あぁ、ようやくお越しになりましたか、ジもたろう様。さぁどうか私の期待に応えて下さいませ」

「やぁジもたろう、待ちくたびれてしまったよ。どうだい？　今日こそ僕と寝床で仲良くしないかい？　もちろん性的な意味で」

そこにはなんと！　どうしようもなくドＳな鬼と性的に両方ＯＫなド変態な鬼がまちうけていました！

ジもたろう　の　こうどう　！

たたかう

まほう

わざ

あいてむ

ちーと

＞　にげる

ジもたろう　はちからのかぎりにげました！

胃と貞操の危機です！　おともだけをつれて　いちもくさんに　にげました！

その後　ジもたろうは　おとうさんとおかあさんのところにかえって　まりえるという　かわいいおよめさんを　もらってしあわせにくらしましたとさ

めでたしめでたし

## 閑話？　昔話　パート1（後書き）

あ～あ、読んじゃった（笑）

お読みいただきましてありがとうございます。

ご意見、ご感想、誤字脱字の指摘など幅広くお待ちしております。

## 第二十五話　長期休暇は大変だった　？　（前書き）

精神的に落ち着くまでしばらく休止いたします。

個人的なことでご迷惑をかけますがなにとぞよろしくお願いします。

## 第二十五話　長期休暇は大変だった　？

（――１億、だと？）

予想を遥かに超えるその金額に、俺の警戒感が一気にＭＡＸまで跳ね上がる。

１億Ｇ。その金額は《Ｎｅｗ　Ｗｏｒｌｄ》プレイヤーにとって特別な数字である。何故なら上級プレイヤーの仲間入りの最初の一歩であるＳグレード武器の平均的な相場が１億Ｇだからだ。さらに普通の《Ｎｅｗ　Ｗｏｒｌｄ》プレイヤーが最初これを手にする為におよそ現実時間で半年以上の時間が必要になることもいっておかなければ片手落ちになるだろう。

そして今の俺からすれば、文字通り目のくらむような大金。俺がこそこそ動き始めて早５年、その間に稼いだ額がおよそ５０万Ｇだといえば、この１億Ｇのインパクトの凄まじさが分かってもらえると思う。普段の俺なら盛大に大声をあげてるのは間違いない。「い～～～ち～～～～お～～～～～～く～～～～～～～！！！」とかな。それ程の大金。

そしてそのことが返って、これは罠だと全脳細胞がけたたましい音を立てて警告を発する理由となった。

小さくそれでいて深く深呼吸を３回繰り返す。落ち着け、そして考えろ。まず目の前のこの女に『黒色火薬樽』の製法にに１億の大金を出す価値があるのか否か。俺が逆の立場であれば、それは『ある』だ。むしろ安いと判断するかもしれない。つまり俺の考えている本来の使用法に気づいている可能性が高いという事。正しく使い

さえすればレベル７０への道が見えるのだから、もし彼女がアルケミストならこれ以上のチートアイテムは存在しないといっても過言ではない。

次に問題なのは『条件つき』の一言だ。何が条件なのかさっぱり分からない。売買契約に対する独占権か？　それとも昨日見せた俺の《ダブルジョブ》に対する説明？　それとも誰かと戦って昨日のあれがまぐれでない事を見せろ？　ダメだ、思い当たる節がありすぎてまったく分からない。

俺がこちらの世界で学んだ大事な事の一つに、『交渉事をする場合、常にその場での主導権を握り続けること』というのがある。

……まるっきりそっくりそのまま完璧に相手にやられてるな。

さて、聞かなきゃ話が進まないか。ではでは罠にはまりに行くとしますかね。

「ミリーさん、その『条件』の内容を教えてもらえますか？」

桃色の悪魔は紅色の半月を弧にして哂う。まさかこんな宿屋の一室でボス戦をやる破目になるとは。まったく俺は何の因果でこんなハードな２度目の人生送ってるんだろうか。

まぁなんだかんだ言ってるけどこう見えて、結構楽しんでるんだけどな。

さぁ、鬼が出るか蛇がでるか……それ以上の何かが出るか。

俺の言葉に唇の両端を上げたままのミリーさんは先ほどと同じように右手の人差し指をピンと立てて言った。

「条件といっても何もそんなに大層なことじゃない。一つ、僕の質問に正直に答えてくれたらいいだけさ。簡単だろ？

あぁ、基本の部分を先に詰めておこうか。

1つ、僕が今回買うあの『黒色火薬樽』だけど、僕が僕の身内に使わせる以外には独断での販売しないことを誓約しよう。つまり君以外への販売は許可制というわけだ。

2つ、今後は僕が代表を務めるド・フラミンゴ商会が君の活動のバックアップをする事を約束しよう。まぁもちろん商売としてだがね。

……安くしておくよ？　例えば硫黄とか。

3つ、ここで見聞きした事は誰にも話さない。もちろん先ほどまでいたデューやガデスにも僕は何も言わない。

まぁこんなところかな？」

その言葉を最後に再び静かになった部屋の中で俺が思った事は一つ。

（……何だ、この好条件過ぎる待遇は？）

そのことに返って俺の危機感が轟音となり嵐のようなビートを刻んで吹き荒れる。

一連の内容からミリーさんが『黒色火薬樽』を自分、ひいては自分の身内の為だけに使うのは確定だと考えていいだろう。懸念していた流出も無し。その上大陸でも有数であろう大商会のバックアップの約束。さらにその『聞きたいこと』とやらの内容は誰にも漏らさないときたもんだ。

ニコニコと笑みを浮かべるその顔からはその答えの欠片も窺うことは出来ない。

考えろ。思い出せ。昨日彼女と出会ってから俺は何をやった？俺の直感が確実にこの『聞きたいこと』というのが俺の急所を突いて来る物だと告げている。ここでその『聞きたいこと』の中身が分からないと拙いのは間違いないだろう。同時にこのことが俺にとって致命傷になるようなことでないこともうっすらと感じ取れる。

つまり『聞きたいこと』とやらは俺にとって限りなくありえないことがばれるという事か。

そこで俺は背中に氷柱を貼り付けられたような戦慄を味わった。

ま、まさか転生者であることがばれてるのか？　いや、さすがにそれはない。そんなことが分かるところなど見せてないはずだ。現に今まで誰にもそんな事疑われた事すらない。そしてもしそうなら

それは俺にとって致命傷と言っていいだろうから直感に従えばそれはない。ないのだが。

この場にいる二人にはその『ない』と言い切れないことが恐ろしい。

昨日の戦い以上の綱渡り感が俺を掴んで離さない。

握り締めた両手がじっとりとした汗でぬめる。アナコンダに睨まれた子ネズミってこんな気持ちなのかなと感じてさえしまう。

「……そちらの条件は必ず遵守してもらえるんですね？」

故にこんな聞かなくてもいいようなことが思わず口をついてでた。

余裕を笑顔を持って俺の言葉に答えるミリーさん。

「もちろん。契約と誓約の神、ミウラに誓って、ね」

そう言うと懐から一枚の羊皮紙を取り出す。それは久々に見る『ミウラの契約書』。ミリーさんは慣れた手つきで備え付けの羽根ペンを操り、さらさらと誓約内容を書き記していく。

それが俺には俺の死刑執行書にサインしているところに見えたから不思議だ。

そしてそれを書き上げた彼女がゆっくりと顔をあげて俺に決断を迫る。

「さぁどうする？　ジオ・パラケルスス。乗るか、反るか」

……進めば地獄と大金。引けば失望と安全といったところか。

いいだろう、死ぬわけじゃあるまいし！　そしてこの俺にこの手の交渉を持ちかけたことを後悔しやがれ！

俺も彼女のように右手を前に差し伸べて指を立てる。違うのはその数。１本ではなく――

「３億。３億ならその条件を飲みましょう」

３本。それで取引自体をやめるというなら俺の勝ち。そしてさすがに３億は出せないは……

「いいよ、３億だね。分かった」

今なんていった？　この女？

『３億Ｇ』あっさり受けやがった……。

## 第二十五話　長期休暇は大変だった　？　（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

ご意見、ご感想、誤字脱字の指摘など幅広くお待ちしております。

## 第二十六話　長期休暇は大変だった　？（前書き）

最初にご注意を。

基本決まっていた伏線は全て回収しましたが、結構強引にもっていったのでかなりぐだぐだです。

ということで色々と荒い部分はございますが約2週間ぶりの再開にして、長すぎた長期休暇のラストでございます。

## 第二十六話　長期休暇は大変だった　？

「さてと、商談成立と。さすがシランのお気に入り、なかなか持っていかれたねぇ。ヤレヤレだよ♪」

あのあっさりとした衝撃の一言の後、呆然とした俺は促されるまま死刑執行書にサインをした。これで3億Gの大金と引き換えに俺は何か大切なものを持っていかれるのは確実だ。それが何かは分からないが、そんな事よりも俺の全身をただただ一つの『負けた』という感覚が支配していた。

ひたすら上を見上げてボーとする俺。天井から吊るされたシャンデリアは素晴らしく細かな細工の一品でこんなときでなければそれに目を奪われてしばらく過ごしていられるほどだったのだが、今の俺には目に映っているだけ。

逆に聞きたい。俺に3億も払って聞きたいことって何だよ……。

緊張感が消えた室内にミリーさんの先ほどまでの切りつけるような声ではなく。明るい軽口が響き渡る中、今までずっと無言で交渉の推移をただ見ているだけだったシランがミリーさんに声をかけた。

「……で何点かな？」

「まったく……。僕はこの子に心から同情するよ。君のような人間が部下じゃ気が休まるときなんてありはしないね

……70点ってところだろうね。対したものだよ、ホントに」

おいおい。本人目の前にして平然と点数つけてんじゃねぇよ、この超絶ドＳコンビが！

そして何軽く満足そうに唇ゆがめてるのかな？　シラン！

そう口に出して抗議したいのはやまやまだったんだが、あの昨日の今日でしかも先ほどの３億Ｇショックによる精神的ダメージはでかくまだ全然立ち直っていない為、スルーするしかなかった。

……仮に万全の状態でもつっこんだとしても間違いなくＫＯされただろうけどな。

そう思いながらあれこれ好き勝手話している二人を眺めていたんだが、やがてミリーさんがソファにしっかりと座りなおしてから、軽く身を乗り出すような格好で俺の目を見据えてこういった。

そしてこの長期休暇最大の爆弾は投下された。

「さて、では聞かせてもらおうか？　君の知っている大変革――僕の読みどおりなら『大侵攻』ははたしていつ頃起こるのかな？」

◇◆◇◆◇◆◇◆

空気が凍った。

そうとしかいいようがない。

絶対にばれるはずのない「俺が『前世知識』（チート）を持っていること」が何故ばれている？　３億もの大金を惜しげもなくつっこんできたことから何かつかまれているかもとは思っていたが、さすがにコレはありえない。

現に今まで最も身近にいた父上や母上、戦士職としての師匠であるイナ先生にだってそういう風な事をわずかでも感じさせる言葉さえ言われたことなどなかったのだから。

しかし、今確かにミリーさんは「俺が知っている『大侵攻』の時期を教えろ」と言われた。

おかしい、もう一度考えろ。何かきっかけがあるはずだ。火薬樽、ソロでの討伐モンスター狩り、ダブルスキル……、いや、おかしい。それらの要素からでは予測すら出来ないはずなのに。

分からない、分からない……。

呆然となすすべなく奈落に叩き込まれた俺にミリーさんは丁寧に種明かしをしてくれた。

「随分ビックリしているようだね。何故僕がそんな事を聞いたのか分からないんだね？　……まぁ無理もないね。あの場にいた人間でその可能性に気づいていたのは、僕とシラン以外はいなかったからね。君自身も含めて、ね。

じゃあまずひとつづついこうか。

まず1つ。君のような『複数の職業の特性を持つ人間』、つまり『英雄』（レジェンド）の資質を持つ人間というのは例外なくモンスターの『大侵攻』の前に世界に登場するのは、まぁ御伽噺を真面目に読み解いていけば誰にでも分かること。まず君が『複数職業持ち』という時点でそれが近いということは分かった。

2つ。君は僕たちに手の内を見せすぎたね。あの『黒色火薬樽』、何故5個用意したんだい？」

『黒色火薬樽』の数？　そんなことに何の関係がある？

「あの『黒色火薬樽』の威力は素晴らしいものだった。一個あたりがおおよそ僕の《爆発》（エクスプロージョン）の1．5倍の威力くらいか。おそらく『爆炎』殿の《爆発》（エクスプロージョン）を基準に火薬の量を決めたんだろう？　まったくたいした代物だよ、アレは。誰でも簡単に上級（アルケミスト）の破壊力を再現できるなんてまったく嫌になってしまうね」

……たった一回見ただけでそこまで分かるのかよ。しかもこの女Aグレードの《アルケミスト》か！

「……まだ分からないようだね。混乱してるのかな？　うん、かわいげがあってよろしい。

問題は『何故君が『黒色火薬樽』5個で『ヒュージスケルトン』を倒せる、もしくは瀕死に追い込める事を知っていたのか』だよ。

当然それを割り出すためには、一発あたりの威力と……おおよそでも奴の生命力が《爆発》（エクスプロージョン）換算で何発分か知らないと出来ない。

……そんなことは誰も知らない。現在大陸で活動する現役の《アルケミスト》最高位である僕ですら知らない。君は何故誰も知っているはずのないことを知っているのかな？」

あ……なるほど。合点がいったよ。彼女のそのあまりに明快な説明に逆に心が落ち着いてしまった。我ながらとんだ大ポカをやらかしたもんだ。簡単な数学の問題だ。

（A×B＝X）という計算式があるとする。この解を求めるにはAかBかX、そのうち2つに入る数字が分からなければこの計算式の答えは分からない。

今回の件の場合、Aは1個あたりの黒色火薬樽の与えるダメージ。Bは必要な個数、そしてXは『ヒュージスケルトン』のHPだ。

Aはいい。実験データを元に割り出した数値があるから。

では、『ヒュージスケルトン』のHPは？　――少なくても俺がそれを知ったのはこの世界でない。

しかしこの女、正気か？　そんなあやふやな理由を根拠に俺が『大侵攻』の時期を知っていると判断して3億もの大金を賭けやがったのか？

俺の表情の変化に気づいたのだろう、唇をゆがめて哂う魔女。

「僕はね、自分の読みと勘は何があっても信じることにしているん

だ。それが信じられなくなったときに商人としての僕は死んでしまうからね。さて、やさしいお姉さんの謎解きの時間はここまで。

さぁ、教えてくれるかな？」

まったく恐ろしい女だよ。まさに『魔女』の名にふさわしい。

……但し今回に限ってはあんたの読みは『厳密には』ハズレ。

だから。

――俺の逃げ切り勝ちだ。

「知りません」

◇◆◇◆◇◆◇◆

「…知らないだって？」

「ええ、知りません」

そう、俺は『大侵攻』がいつ始まるかなど知らない。俺が知っているのはおよそ2年後、アサイオンの大神官マルフィアの神託によって『もうすぐ大侵攻が始まる』ということであって、俺がプレイしていた間に行われた《Ｎｅｗ　Ｗｏｒｌｄ》の5回のアップデー

トでも『大侵攻』の予兆が次々と世界に暗い影を投げかけていくだけで『大侵攻』そのものは始まってなどいなかったからだ。

言葉遊びのようだが嘘は言っていない、否、嘘はつけない。何故なら彼女の質問に一度だけ正直に答えると『ミウラの契約書』にサインをしているから。

それはあちらも分かっているはずだ。

氷のような目で俺を見るミリーさん。俺も最後の力を振り絞って彼女の視線を真正面から受け止める。

そう長くはなかったとは思うが、俺にとってはとんでもなく長く感じたにらめっこのあと、大声とともにミリーさんは椅子にもたれかかると同時に天井を仰いだ。

「あ〜〜〜

昨日初めて会った人間に、しかもたかだかあれだけの情報量で俺の一番の急所にまでたどり着かれるとは思ってもみなかった。

さらに自分の予想が外れているなどとは微塵も思っていない、恐るべき自信。マジで半端じゃねぇ。……実際目の付け所自体はは大当たりだったしな。

まったく世界は広い、世の中に出ていくのが嫌になる。こんな化け物ばっかりじゃ俺の胃が休まる暇もないじゃないか。

そう思いながらもミリーさんの質問に苦笑しながら答える。

「教えませんよ、それこそ１００億Ｇもってきてください」

キ～～～～という叫び声とともに悔しがる。

「あ～～～腹が立つ！　ホント似たもの主従だね！　同じこというんだもの！」

その言葉に冗談じゃないと思いながら、シランを見ると多分俺はその時浮かべていたと思う困ったような顔をしてやがった。

シラン！　お前にそんな顔をする権利はねぇ！　１人だけ高みの見物決め込みやがって！　しばらく口きいてやんないからな！

◇◆◇◆◇◆◇◆

「さてと、じゃあこれが約束の３億Ｇ」

そういってテーブルの上に置かれていったのは1本１００万Gを示す黄金のインゴットが出るわ出るわ３００個。

ゲームでは腐るほど見てきた代物だけどさすがに現物で見たのははじめてだった。

《Ｎｅｗ　Ｗｏｒｌｄ》では１００万G以上のGはコインではなくインゴットに変わるのだ。

ちなみにGに仕様上重さはない。たぶん魔法がかかっているんだと思うだけど、そこはゲームだから仕方ないとしか言いようがない。じゃないと重すぎて運べない。ご都合主義万歳。

「……壮観ですね」

その文字通り目もくらむような光景に思ったことを口から出てしまった。

そんな俺の声も目の前であ～くやしい、またシランにしてやられた、あ～くやしいといい続ける桃色の髪の女性には聞こえていなかったようだった。

金の事はどうでもいいのかよ。

一応前世換算で３００億円なんですけどねぇ……。Ｓグレード一式揃えてもまだお釣りがくるわ。

シランも当たり前みたいな顔をしてミリーさんの腰のポーチから次々出てくるインゴットを眺めてやがる。

くそ、こいつらマジで普通じゃねぇ。

やがて、３００個のインゴットが俺の前に壁となって積み上がりましたよ。

「どうぞお納めください♪」

ヤケクソ気味にそういうミリーさんだが、そう機嫌が悪くないように見えるのは何故なのか……。俺なら3億G持っていかれたら腸煮えくり返って何するか分からんのだが。

とりあえず目の前を埋め尽くすインゴットを自分のポーチにしまうことにする。

次々消えていく金の延べ棒の群れ。

それがなくなってようやく落ち着くことができた。

テンションのアップダウンが激しすぎてもう限界です。ということで話を切り上げる方向に持っていくことにした。

「ミリーさん、『黒色火薬樽』の作り方の件なんですがどうします？」

「ん？　あぁ硝石の安定確保の方法と君のところで取ったであろう実験結果、そしてうちの人間を何人か送り込むから実際にそれを作ってるところでしばらく研修させてくれたらそれでいいよ。その辺の実務レベルの詳しい話はまた後日でこちらから使いを出すからそっちもシランに任せればいいさ。さすがに君も疲れただろう？」

はい、おっしゃるとおり疲れ果てました。限界なんてとっくに超えてますから。

俺の表情で察したのだろう、ミリーさんは軽やかに立ち上がりながらこう言った。

「じゃあね、少年。ギーレンに来たらいつでも遊びにおいで。いつでも大歓迎だよ。

……筆おろしは僕に任せておきたまえ」

「お断りします」

「つれないなぁ……。まぁいいや。少年またね」

そういって颯爽と部屋から去っていこうとするミリーさんにどうしても聞きたいことがあって俺は彼女を呼び止めてしまった。

「あの！　ミリーさん！」

「ん？　なんだい少年？」

「何故『大侵攻』の時期だったんですか？」

そう、あそこまで至っていたのなら俺の息の根を止めるような質問の仕方を考え付く事など目の前の彼女のにとっては朝飯前以下の簡単なことだっただろうに何故？

その質問に彼女はこう答えた。

「簡単な事さ。『大侵攻』の時期が分かれば、市場をうまく操作して一儲けできるから、だね。それに僕はいい商人だから末永くお付き合いしたい良いお客様にはちゃんと遠慮もするんだよ？　ただそれだけのことさ」

そう言ったミリーさんは素晴らしい笑顔だった。俺とは違う自分の力だけで生きる本物の商人で冒険者の気高い顔に、思わず見とれてしまった。

今のままじゃどうにも気持ちが悪い、負けるのは嫌いだが反則勝ちみたいなのも好きじゃないんだよな。これがその時の俺の正直な気持ち。

――だから。

「およそ2年後です。2年後には大陸中大騒ぎになりますよ」

そう言ってしまっていた。現実的に考えれば悪手も悪手。だが俺は上っ面の勝利より、深い部分での引き分けのほうを選んだだけ。商売人には向かない考え方だな。

そう俺が告げると、ミリーさんは一瞬驚いた顔をしてから出会ってから初めて見せる顔でこう言った。

「……そうか。シラン、君は本当にいい主を見つけたな。少年、いやジオ・パラケルスス殿。何かあったらこれで僕に連絡しなさい。僕にできる範囲でなら力になろう」

その言葉とともに渡されたのは俺も良く知る小さな石、『念話石』だった。

それを受け取った瞬間、俺はこの規格外の魔女に認められたんだと分かった。多分それはこの人との騙しあいに勝つことよりも、戦って勝つことよりも難しいことなのかもしれない。

「じゃあ今度こそ。またね二人とも」

彼女はそういってドアを開ける。

そこで今まで忘れていたことを急に思い出した。この長期休暇でやらないといけない最後の1つを。

「ミリーさん、早速で申し訳ないんですが、眼鏡を探していただけませんか？」

彼女はその俺の声を背中に受けてながら後ろ手に右手を振って了解の意を示しながら去っていった。

1人分も広くなった部屋で大きく息を吐く。

ふ～まるで台風のような人だったぜ。

さて、じゃあ総評を聞かないとな。

「で、シラン。あれでよかったのか？」

そして今回の事を企画してくれやがった腹黒の顔を見ると、俺も見たこともないくらいの満面の笑みでこう言いきりやがった。

「はい、大変満足でございます。ただ欲を言えばあと2億は引き出せたかと。その辺りはまだまだこれからでございますね、ジオ様」

俺はまだまだ甘い、世の中には上には上がいる。それが今回学んだこと。

そしてもう一つ学んだ事。

自分の腹心の部下が世界で1番の腹黒野郎だということ。

誰か何とかして……。

## 第二十六話　長期休暇は大変だった　？（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

ご意見、ご感想、誤字脱字の指摘など幅広くお待ちしております。

終わったあああああああ

## 第二十七話　長期休暇もようやくおしまい（前書き）

ということでこんどこそおしまいです。

注意点が多数あります。

現在改稿中のスタイルに文章が微妙に変わってきています。

その影響で時制のかみ合わないところがあるかと思いますが、完全なものは改稿をお待ちください。

## 第二十七話　長期休暇もようやくおしまい

「ん～」

カーテンの隙間を潜り抜けた冬のするどい朝の光りに目が覚める。

自慢でもなんでもないが俺は朝が弱い。これだけは前世(むかし)からまったく変わらない。

逆に徹夜は得意中の得意なんだがなぁ。５徹、６徹当たり前だったし。ＭＭＯのレベリング（レベル上げ）は場所取りがすごく大事なのです。

そんな寝起きでうすぼんやりした頭のまま体を起こしたのだが、そこで何か違うような、いや逆に何か正しいような感じがして戸惑う俺。

違和感の正体を確かめるべく部屋の中を見渡すと、そこには見慣れた机や家具一式。

徐々に覚醒する意識とともにようやく違和感の理由が分かった。

俺が寝ていたのは一週間滞在しつづけたエルトリンシティの宿の部屋のベッドではなく、長らく留守にした久々の我が家の我が寝床。目に映るのは寝台脇の鏡に映る黄金の髪をした寝ぼけ眼の自分の姿。

すぐに分からなかったのは、ようやくゆっくりと自分の部屋で寝れたことで気が抜けすぎたのかねぇ？

……それにしても濃い一週間だったこと。レンジャーとウィザードの2職同時転職に始まって、実家での一休みを挟んで、新年早々自作のチートアイテム『黒色火薬樽』を用いての『ヒュージスケルトン』のソロ討伐、そして『魔女』ミルアルド・ジョバンニ・フラミンゴとの出会いと最後に待っていた思い出すだけで寒気のする商談という名の戦場。

とてもじゃないけど1週間とは思えない。まるで“4ヶ月”ほどかかった気分だ。

……何かすごくメタなことを考えてしまった気がするのは気のせいだろうか？

そんな考えを振り払いながら、ベッドから立ち上がろうと体に掛かっていた布団を捲り上げると――そこには、俺の左右にきれいに2人ずつ当年9歳になる少女が4人仲良く眠っていた。

おいおい、いつの間に……。

俺の小さな小さな従者たち。彼女達を『買った』時から3年、随分大きくなったと思う。このところまったく構ってやれていないからさぞかし拗ねている事だろう。俺は彼女達への責任を果たせているだろうか？　その答えはどこまでいってもでないのだが、少なくても4人のこの幸せそうな寝顔を見ていると最低限のそれは果たせているようだと思える。

そんな事を考えながら見ているとアリアがううん、とちいさく身じろぎをする。額に掛かった赤い髪を後ろに流してやってから寒くないように4人に布団をかける。

その光景に怒ろうとする気持ちよりも呆れると同時に何とも言葉では表現できない気持ちに、これがお兄ちゃんになるってことなのかね……と小さく独り言をつぶやいてからかわいい眠れるお姫様たちを起こさないように、まるでコソ泥のような足取りで部屋を出て行くことにした。

ベッドに勝手に忍び込んでたことを怒るのはマリエルに任せよう。お兄ちゃんとお姉ちゃん、仕事はちゃんと分担しなきゃな。

◇◆◇◆◇◆◇◆

冬の肌寒い石畳の廊下を1人考え事をしながら歩く。とりあえず昨日一日かけて問題点の整理はできたので、それの裏づけを父上かイナ先生に聞かなきゃならないからな。後は金の使い道だな～などと考えながら、すれ違う使用人たちと挨拶を交わし、朝食を食べる為に食堂へと向かっていたら「若様！」と突然後ろから声をかけられた。

誰かと思えば休暇に家に誘ったのはいいが、完全にほったらかしにしていた同級生であるアニー・ロビルス・メアンが何故だか分からないがテオフラトゥス家のメイド服を着て立っていた。

それにしてもまぁなんていったらいいのか……この破壊力は。この世界の13、4歳の平均から考えてもかなり小柄なその体と規格外のお宝をメイド服で隠しているのだが、当然胸元はぱっつんぱっつん、胸元のリボンが浮き上がっちゃってあなたホントに俺と同い年ですかって感じだよ！　おまけに三つ編みで垂れ目……すげぇよ

まじで。

いや～朝からいいもの拝ませていただきました。ありがたや、ありがたや。

「あの～若様？　どうかなさいました？」

おぉう……危ない。変態一歩手前じゃねえか。乳神様のあまりの神々しさに思わず一瞬我を忘れてしまったぜ。

「いやなんでもないよ。悪かったね、一週間も放っておいて。どうだった？　うちの者と仲良くやれていたかな？」

「はい！　皆様大変良くしてくださって！　私感激いたしました！」

内心の焦りを隠しながら話をふると、とびきりの笑顔で答えてくる。そこであることを思い出す。

「アニー、あと何日かしたらみんなで王都に行くんだけど、君もおいでよ。人数は多いほうが楽しいだろうしね」

そういってアニーを誘う。

「そんな……、よろしいのですか？」

誘われたことには喜びを見せつつも領民の子という自分の立場から遠慮しているのだろう、子犬のような目で俺を見てくるアニー。色々と反則だ、君。

「いまさらだからね。と言うことで決定、異論は認めない」

「は…はい！　ありがとうございます」

「じゃあまた後でね。ゆっくりその時には話を聞かせて」

そういって彼女に背を向けて歩き出す。今日は今日とて忙しいのですよ。

３億手に入れて貧乏じゃないのに暇じゃないとはこれ如何に。あればあったで大変だという事か。

そう思いながら俺はぐぅとなる腹をおさえて食堂へ。今日の朝食がスープだといいな。まだ胃に昨日までの後遺症ががっちり残ってるから。

◇◆◇◆◇◆◇◆

――その夜。

俺は再びエルトリンシティにいた。昨日までと違うのはその場所。今俺がいるのはシランたちと初めて出会った奴隷の館のあの一室である。

金属がこすれる音と木と木がこすれあう音。そしてかすかな足音とともに奴が現れた。

シラン・モーフィング。

大嘘つきの腹黒大王様である。

「わざわざのお越し、いかがなさいましたか？　ジオ様」

「いいからとっとと座れ。１５日以降は母上とこちらに来る約束をしているからな、面倒な事は全て今日で終わらせて、せめて２、３日は実家でゆっくりぐうたらしたいんだよ」

そうやって顔にいつもの笑みを浮かべながら目の前に座るシラン。おそらく今日俺がここに来るのも計算済み。直前にそっちに行くっていってもまるで驚いてもいなかったし。そして数年来の隠し事が俺にばれるのも、いやこいつが自分からばらしたようなものか。俺はただ出された問題に答えただけであって、自慢にもなんにもなりはしない。

腹の探りあいはもう飽き飽きだ。特に昨日げっぷが出るまでやった後だ。さっさと終わらせるか。

腰のポーチから一億Ｇ分のインゴットを取り出す。

「シラン、余計な会話はもう昨日まででお腹一杯だから回りくどいのはやめてくれ。で？　１億でここは買えるのか？　オーナーさん。いや、元冒険者ギルド『三叉の矛≪トライデント≫』副ギルドマスターにして現『影に潜む刃≪ヒドゥンエッジ≫』ギルドマスター、シラン・モーフィング！」

そう眼前の男こそが父たちの現役時代大陸最強の一角と呼ばれた冒険者ギルド『三叉の矛≪トライデント≫』の一員にして、この奴

隷の館の真の主。エルトリンシティの闇の帝王って訳だ。

シランの笑みがいつもにもまして深くなる。にゃろう……、目で言ってやがる「大変よくできました」と。

それからおもむろに立ち上がり深々と頭を下げる。

「……申し訳ございませんでした」

「何がだ？」

「お怒りではないので？」

「何に怒ればいい？」

そこまで俺が言うとシランの顔には昨日見せたそれと同じ、いやそれ以上の――満足した笑みを浮かべていた。

そう、今の俺には分かっている。俺はこの3年間こいつの試験を受けていたのだ。まったく3年も気づかなかったとは、我ながら間抜け。こいつは3年間、俺のかなり無茶な指示を完璧にこなしてみせた。そんなことが一介の下働きにできるわけがないのに。にも関わらず気づかない俺が馬鹿だったのだ。

「……ちなみにどこでお気づきになりました？」

「昨日家に帰ってから今回のことを整理しなおした。一番引っかかったのはミリーさんの『昔なじみ』の一言だな。商売人にしても冒

険者にしても超一流の彼女と一介の奴隷屋の人間、不釣合いにも程がある。あとホントに隠したいのならあんな装備見せびらかすもんじゃない。ばらしたかったんだろ？　そろそろ」

「……さすがですな」

「『人を見ているときは自分もまた見られてる』ってな。さてと、そんな話はどうでもいいんだ。俺はお前がどこの誰だろうが今後も俺の期待にさえ応えてくれればそれでいい。

――お前もそうだろ？」

言外に必要以上に俺について気づいたことに触れるなと警告する。その声が聞き取れないほどこいつの耳は悪くはない。

「で、合格か」

「はい、合格も合格。大合格でございます」

「そりゃあよかった」

顔を見合わせたままそこまで言い切ったら無性におかしくなってきた。腹の底から登ってくる笑いが止まらない。

見るとシランもそうらしい。初めて見たかも、こいつが声を出して笑っているのを。

ひとしきり互いに大笑いした後、この時の俺はもう一度『アレ』をやり直すことにした。

……かなり変なテンションになっていたことを認める。思い出すのも恥ずかしい。

「んじゃまぁ、『あなたの人生と引き換えに、俺はあなたにあなたが退屈しない人生を差し上げる努力をしますよ』」

そう俺が芝居がかった声で言うと、顔にいつもの笑みを浮かべたシランが俺の足元に跪き

――

「『契約成立です。私の全てはジオ様の望みとともに――』」

そんな恥ずかしい会話と金の使い道を話し合ってから、俺はワトリアの実家にこっそり戻った。レンジャーっていいよな。

こっそり動くのが簡単になったし。

まぁとにもかくにもこれにて長期休暇の冒険はおしまい。あとの母上たちとのエルトリンシティへのたびの話はまた今度ということで。

## 第二十七話　長期休暇もようやくおしまい（後書き）

ご意見、ご感想、誤字脱字の指摘など幅広くお待ちしております。

正直今が一番きつい時期かなと本人的には思っています。

作品続行中にスタイルがかなり変わってきたので、かなり文章的に破綻してますので、改稿をいそがんとなぁという感じです。

スタイルの確立もですが。完成形はある程度見えてはいるのですが遠い……。

## 第二十八話　久しぶり！　でも大変だった　（前書き）

無双です、多分。

このお話を読む前に８話と９話を読み返しておくと幸せになれるかもしれません。

## 第二十八話　久しぶり！　でも大変だった

いや～、久しぶり。ホントに久しぶり、ジオ・パラケルススです。いや～、あの胃の痛すぎる前期長期休暇から約８ヶ月、とうの昔に２年生になりました。ていうかもうすぐ１４歳です。光陰矢の如し、時間が経つのは早いなぁ。

「いけないなぁ、貴族の坊主！　こんな真夜中に１人でお外をうろうろしてちゃあ！？」

さておき、この約８ヶ月の間にも色々ありましたよ。正直転生してから俺の人生イベント多すぎだと思う。まずはテトが正式に『じぃ』ことサバン・トランドの養子になり、テト・トランドになって今年から『戦神の鍛錬場』に入学（？）したこと。養子縁組の話を伝えた時テトの奴、男の癖にびーびー泣いてそれはもう大変だった。あとそれから少ししてから、アイツがじぃに「……お父様」とか恥ずかしげに言ってるとこを偶然目撃して日には、思わず萌えちゃいましたよ！　野郎なのに！　無駄にでかいのに！　……ちなみに依然身長に関しては奴に離される一方であります！　主人として年上として非常に遺憾であります！

「まぁ１人じゃないのかな？　なぁ、『灰風』イナ・サラシス！　出てこいよ！　お前がこいつの護衛をしている事はとうの昔にばれてるんだよ！」

「どこにいるのかな～？　『灰風』ともあろうものが怖気ついて出てこれねぇのかな？」

ん～あとはそうだな……学院関係だと、あの休暇の最後の日にミ

リーさんから送られてきたメガネは今アニーが使ってる。物に当たる事がなくなったって本当に喜んでくれましたよ。まぁあれで休暇の半分ほったらかしにしていた穴埋めはできただろうと思うし。あと新学期に入ってから有望そうな同級生を数人捕まえてポーションの作成とかの勉強会（＋将来を見据えての洗脳ともいう）をしていたら、何故だかクリス嬢が乱入してきてなし崩し的に教える事になったり。そのうちにいつの間にかヘルガー・ブライトス・ラ・エンデルフォンまで混ざってやがったんだが、俺があいつに教えなくちゃいけない理由が分からん。……イケメンは基本敵だ。もしアニーの至宝が目当てなら俺が相手になってやる。

「さぁて、俺たちもガキをいじめる趣味はないんだが、これも仕事なんでなぁ。悪く思うなよ、『爆炎』の息子よぉ！」

「ギャハハハ！　ボクチャン「父上～、母上～」って泣かなくていいのかい？」

「おいおい、貴族のご子息がそんなかっこ悪い真似するわけがねぇだろうがよ！　まぁもしそれをやるなら少しはやさしくしてやるけどどうするよ！　お貴族様よぉ！」

あぁ、そうそう。無事に『黒色火薬樽』の作り方もミリーさんに伝える事ができた。さすがに硝石の作り方、つまり灰と糞尿を地中で混ぜるという事を教えた時にはかなり面白い顔をした後見たこともない大爆笑をしていた、というのは実際にギーレンに技術指導にしに行ったジトーの弁。……まぁあれは初めて聞いたら誰でも唖然とすると思う。なんたって『う〇こ爆弾』だもんな。

「ん？　びびっちまって何にもいえねぇのか？　だがダメだ、お前さんはここでお仕舞いなんだよぉ！　恨むなら悪目立ちしちまった

過去の自分を恨みなぁ！」

あ～、そうだな。他に言っておかなきゃいけない事は……。あぁ、金の使い道かな。まず1億はシランに預けて財テク中。2年後には5倍に増やしてお返しいたしますってにっこり笑って言われた。個人的には5倍じゃ済まないと思う。だってシランだし。あと1億は青カビ育てるのに使いました。結果が出るにはまだまだ時間がかかるみたいだけど、先行投資って大事だよな。火薬作りも一段落したから他の仕事も必要だったし。残りの一億？　２０００万ほど装備とかに使ってあとはお小遣いだな。多すぎるけど。

「……おい、糞ガキ。てめぇ立場分かってんのか？　何とか言ってみろやぁ！」

ん？　……あぁ、ああゆう輩って何でどいつもこいつも判を押した様に似たような台詞を吐くんだろう？　あまりにテンプレかつ小物臭いんでたまに決まりでもあるのかと思うよな。

あ、耐え切れなくなった連中の一人がちょうどいい具合に矢を放ってくれた。もちろんわざと当たりにいく。ちょっと痛かったけど――これでフラグ成立。

思わずにやけてしまう俺。でも仕方ないよな、こういう時に笑わずにいつ哂う！

というわけで色々言いたい事はあるけど、とりあえず。

――俺の目の前に展開する青白い光りを放つ化学式に酷似した魔ルーン

術文字。

「まとめてぶっ飛べ」

次の瞬間、静寂を打ち破る爆音とともに赤い炎が闇夜を染め上げた。

放たれた紅蓮の狩人が狩るべき獲物は世界で一番腹の黒い脚本家の仕掛けた罠に見事に嵌った札付きの冒険者（アホ）３５人。突然の異常事態に驚きが隠せないようだ、無理もない。

『絶対にありえない』だからな。

さてと、ようやく一年がかりの舞台の幕は上がった。後はせいぜい脚本通り、しっかり『主役』を務めるといたしましょうかね。

◇◆◇◆◇◆◇◆

突然立った賞金首フラグと俺の放った『ありえない魔法』に大慌てのお客様ご一行。そらそうだよな。邪魔な護衛はいるが、たかだか１３歳のガキをボコボコにした後攫うっていうだけのお手軽かつ大金が手に入る割のいい仕事だったはずが、いきなりの父上の厨二な二つ名を思わせる爆炎のお出迎え。そしてターゲットのガキは騒ぎに乗じて逃げるどころか短剣片手に凄まじいスピードで襲いかか

ってきてるんだから。

ん？　話が見えないって？　あぁ、じゃあ少し昔話をしようか。それはそれは昔々、俺があの豚野郎の話を聞いた後、アイツの始末をどうしようかシランに相談した時の話だ。

一つだけ注意しておく。黒すぎるから気の弱い人はやめておいたほうがいいと思うよ？

まぁつまりはあの時こんなやり取りがあったわけですよ、はい。

――――――もったいないだと？

誰もいない空き教室で拳を握り締めながら俺は怒りの成分が混じった思念をシランに叩きつけた。

今回送られてきたのがあのレベル１４程度のおっさん達格下３人だけ、しかも油断をしていたからこそ何とかなっただけで、人数がもっと多かったり、単独でもレベル５０を超えるような相手だったなら、俺は今頃やられていた確率が高い。

確かに俺はこの年齢、この段階において規格外に強いが、それでもいい所中堅どころくらいの強さしかない。
おれ自身がそれを一番分かっているのだから。

そして黒幕は、あの豚野郎。

一応貴族のガキだから、殺すのはまずいだろうが、即効対処しないと、いつか暴走してこちらが危なくなる可能性が高い。

そして狙われるのは俺とは限らない、もし狙いが俺の関係者に代わったら――

にも関わらず、シランは何を考えている？

その程度の事が分からない男じゃないはずだが。

――――どういう意味だ？　俺にやられろと？

――――これは、ジオ様にしては随分頭に血がのぼってらっしゃいますな。まずは少し落ち着かれませ。

くそ、思念での会話だからこそダイレクトに分かるシランの楽しそうな感情。

楽しんでやがる！　あのドＳ野郎！

――――後顧の憂いを絶つ為に、排除するのがいけないことか？

――――いえいえ、ですがこの場合それはいかにももったいないかと。

もったいない？　あの豚の何が？　ダメだ、まったくシランの考えが読めん。ギブアップ。

――――……俺にも分かるように説明してくれ。

――――では、失礼して。今回の黒幕は、ジオ様がお聞きになったとおり、そちらにおられる貴族の坊ちゃまである事はほぼ間違いないかと思います。私は直にその方にお目にかかった事はありませんが、お話をお聞きするに、私の経験上そういう方は非常に執念深い方が多うございます。おそらく2度3度と襲撃は繰り返されるでしょう。

だったらなおの事、処置は早いほうがいいだろ。マジで何考えてやがる。

――――ですが、その反面自分で考える、ということが出来ぬ方が非常に多いのでございますよ。……自分の頭で考えたとおりに、物事が進むと考えるのが彼らに共通する癖ですね。我儘を言う子供と変わらぬ頭しかないのですよ、どこまで行っても、ね？

その思念が届いた次の瞬間、どす黒い哄笑とでもいえばいいのだろうか、非常に悪辣な思念が俺に向けて飛び込んできた。

やべぇ……、黒すぎる……。

その後の提案を聞くまでもなく、その思念のあまりのどす黒さに俺は思わず震え上がった。

並みの人間ならちびってるな、絶対。実際凡人の俺は既にちびりそう。

――――そういう方々というのは実に見事に私の用意した舞台で『踊って』くださるのですよ？　ジオ様。ですからこちらからその方の代理人に接触しまして、私が彼らに知恵を付けましょう。そうしましてから、わざとジオ様を襲撃させるというのはいかがです

か？

怖え、いったい何考えてんだこいつ。

◇◆◇◆◇◆◇◆

――――つまり、ですね。彼らには綿密な計画を立てる頭脳はありません。お馬鹿さんですから。それは今回のお粗末な襲撃でも明らかです。そこで、そんな彼らの代わりに私が作戦を考え、時期を探り、ジオ様襲撃の段取りを整える……。いかがですか？

――――すまん、シラン。お前は俺を殺したいのか？

――――いえいえ、滅相もありません。もしそうならとっくにやっていますとも。……申し訳ありません、さすがに失言でございました。それにしてもこれはこれは本当に珍しいこともあるものですな。失礼ながら今回の一件、ジオ様に私の見えているものがお見えになっていないようで。

おいおい、慇懃無礼って言葉知ってるか？　そして今の失言完全にわざとだろ。あと俺をお前みたいな腹黒大王と一緒にしないでくれ。俺はお前と違って清廉潔白の看板背負って生きてるんだからな！

ただ悔しい。本当に頭が回っていないのか、シランの考えがまったく読めない。

どういうことだ？　シランが奴に接触して知恵をつけて俺を襲わ

せる？　そんなことに俺に何のメリットがある？

――――――では有体に申し上げますと、私のコントロール下で彼らにあくまで”自発的”に動いていただき、ジオ様の襲撃を計画していただきます。私は、そうですね、誰か私の知り合いあたりを代理に仕立てまして、彼らに接触、彼らの空っぽな頭では考えられない具体的な襲撃計画を立案し提案、そしてそれを彼らに実行していただこうかと。

なるほど、そうなると襲撃時の情報はこちらに筒抜け。完全に迎撃体制を整えた上で、襲撃を待つ事ができる。あとは煮るなり焼くなり思いのままってわけか。だがそれだけではメリットとは言いがたい。襲撃を待つより、襲撃がない方がいいはずだからだ。

じゃあ、この場合のメリットとは何だ？　ええい、埒が明かん！　自分が急に馬鹿になった気がする……。

――――――シラン、もう一度言う。俺にも分かるように説明してくれ。

そう俺が思念を飛ばすと、シランの笑いがこらえきれないような思いを乗せた思念が俺に飛んでくる。マジでうざい……。

――――――では、端的に。

まず一つ、下手に暴走されるより、襲撃の戦力、タイミング等をこちらでコントロールできる上、情報も筒抜けの為、迎撃が容易いところ。

二つ、その過程で相手方の不都合な情報を集める事によって、本当

に対処なさる時に、完膚なきまでに叩き潰す準備が可能な事。

三つ、これが最も重要なのですが、ジオ様の対人戦闘経験の為。冒険者は、『アスリオン』神の加護を受けている為に、冒険者同士の戦いなどそうそう経験できるものではありませんから。こういう機会は貴重です、逃す手はございません。

四つ、冒険者も玉石混交の世界でございます。こそこそと白いふりをしている子悪党どもをジオ様の対人練習相手としてご提供いたしますので、ご使用後に賞金首にして金に換えてしまいましょう。

少しこの世界も住み易くなり、ジオ様のふところも潤います。

金はいくらあっても困るものではありませんでしょう？

まさにいい事ずくめではございませんか。

まぁ、一石二鳥ならぬ一石四鳥といったところでしょうか。

シランのその思念を受け取って奴の提案を理解した次の瞬間、俺は思わず忍び込んでいた空き教室の机に突っ伏していた。

シラン……。腹黒にも程があるだろ……。お前の頭の中はどうなってる……、絶対に覗きたくねぇ……。後、そんなモン誰

が分かるか！　どんなに頭回ってても分からんわ！

――――――シラン、つまりこういう事か？　俺に馬鹿どもを釣り上げる為の生餌になれと？　年齢的に、とても冒険者登録済みだと思われることのない俺を使って？

そう俺が問いかけると、ようやく満足したかの様な感情とともに思念が飛んできた。

そうですか、ようやく合格ですか。

――――――はい。さすがはジオ様。そのとおりでございます。

その一言でやっとこいつの意図が読めた。こいつの本当の狙いは４番目。一般人に迷惑をかけるような冒険者たちの排除と、それがもたらす多大な金銭的利益だ。

冒険者のＰＫ行為による賞金首化には実は穴がある。『冒険者Ａが冒険者Ｂに対して、故意に攻撃した場合、Ａは即座に賞金首になる。』これが基本だ。

しかし、『冒険者Ａが一般人Ｂに対して、故意に攻撃した場合、Ａは”即座には”賞金首にならない。』のだ。この違いが何故生まれるかというと、それが勇気の神『アスリオン』からの加護の有無なのである。そもそもこの賞金首化システムは、ＭＭＯＲＰＧ《Ｎｅｗ　Ｗｏｒｌｄ》で冒険者であるプレイヤーのアバター同士に、不要なＰＫ行為をさせない為の抑止力的システムであった。

まぁ一言に言えば、『重すぎる罰(ペナルティー)が怖いなら、プレイヤー同士喧嘩するな』である。

だが今俺が生きている世界は、《Ｎｅｗ　Ｗｏｒｌｄ》をベースにした現実世界であり、もちろんそのシステム自体は存在している。しかしここで一つ問題が。

ではそのシステムで元々想定されていなかった人間への冒険者による暴力行為はいったいどうなるのか？　である。

普通の子供ならそんな事は尋ねることもなかっただろうが、それはそれ。蛇の道は蛇、蛙の子は蛙。

幸か不幸か、俺は普通ではなかったから、あの前回の３人の襲撃の後じぃに尋ねると答えはこうだった。

「冒険者ギルドにその者たちがやったと報告すれば、調査が行われ、事実と判明すれば賞金首とされるそうですが、残念な事に必ずしも彼らが断罪されるわけではないそうです」

つまり一般人が冒険者に攻撃されても、冒険者ギルドに報告さえされなければ、賞金首になる事はないのである。その前に捕まえるか……殺すかすれば誰にも分からない。

つまり何気ない顔でそこらを歩いている冒険者の中には、裏で一般人に非道な真似をしている下種どもがいるっていうことだ。

そうして自分の身内を振り返ると、シルウィがその犠牲者だった。

冒険者くずれの屑どもが、彼女の村を襲撃し彼女は囚われて奴隷にされたらしい。

もちろん直接シルウィ本人に聞いたわけではない。うちに来た当初なかなか心を開いてくれなかった彼女の事情が知りたくてシランに念話で尋ねたところ聞かされた話であり、シルウィはそれゆえ心を閉ざしていた。

シルウィの両親は彼女を守って亡くなったそうだ。これはマリエルから聞いた。

その話を聞いた後、思わず俺は自室の石壁を力いっぱいぶん殴ってしまった。

さらにアリアやエリア、リューネも事情は似たようなもの。アリアたちの両親は名の知れた聖職者だったそうだが、同僚に陥れられ名誉も地位も失って失意の中で世を去ってしまい残された2人は当てもなくいつの間にか奴隷として売られていたらしい。

リューネは細かなことは分からなかったが、おそらくシルウィと変わらない事情だろうとシランは言っていた。

まったく反吐が出る最低な話だ。どこを取っても向こうの世界でありふれていた夢も希望もない話。俺が生まれかわったこの世界はやっぱりどこまでいっても現実(リアル)だった。

俺は聖人君子を気取るつもりもないし、自分がやってる事が人から見れば偽善であり、そしてそれがどこまでいっても自己満足だと分かっている。

ただ全部、自分が気分良く生きていく為にやっているに過ぎない。だが異常に腹が立ったのだ。

だから自分の為にそいつらは見つけ次第、絶対に始末する。そう決めた。理由は『俺がそうしたいから』である。

話がそれたな。つまりシランはそういう馬鹿どもを俺の戦闘練習の相手にした挙句、捕らえて金に換えてしまおうという考えなのだ。

そして『冒険者は１５歳以上の人間がなるもの』という固定概念の為に、そいつらが１２、３歳の俺が冒険者だと考えるはずもない。

そして勇気の神『アスリオン』の加護を受けている人間を攻撃すれば、間違いなく冒険者くずれの子悪党どもは、即賞金首になるのだ。１人が攻撃すればそれはパーティ内全体に伝染する。パーティの集合体であるレギオンの場合、当然一人の行動がレギオン全体に波及するのだ。

つまり俺が囮になれば、そういう馬鹿が攻撃した瞬間全員賞金首になる。

ワトリア内での情報は、父上が完全に封鎖しているし、冒険者ギルドの人間には守秘義務があるので軽々しく話す事はない。

ここまでくると笑えてくるから困る。実にシランらしい悪辣という言葉をいくつ重ねても足りない悪辣さ。最悪だよなアイツ。いろんな意味で。

でも納得しちゃったんだよな俺も。だから仕方ない。こんな主人を危険にさらす方法でも有効なら躊躇なく提案するあいつには心底寒気がするけどな。

――――――分かった。手配等は全て任せる。但しあの豚に引導を渡すのは俺が直接やるから、お前は手を出すなよ？

アイツをやるのは俺のお楽しみだと、そう釘を刺しておかないとどこでやっちまうか分かったもんじゃねぇ。出来過ぎる部下って怖い。マジ怖い。

――――――かしこまりました。そちらはジオ様にお任せいたします。では早速。

とまぁこれがその時の顛末で、その結果が今俺の目の前に広がってるってわけ。いや～釣れた釣れた、釣れたくま～ってこういうことを言うんだと思うよ俺は。

思い出すだけで吐きそうになるあの1週間の苦労もこの時のため。俺という餌に食いついた馬鹿な魚を逆に食い殺す為。うん、我ながら猛毒付きの餌だこと。超素敵。

新しい俺の相棒である『アサシンダガー』の暗紅色の刃を振るい、次々とお客様を神殿送りにしながら考える事じゃないんだけどさ。

まぁあと一時目に見えて脅えていた豚が、この計画が進むにつれ以前のような尊大な態度で学院内をうろつくようになったのを見ていて笑いをこらえるのに必死だったのはここだけの話。

え？　そんなことはどうでもいい？　あの魔法は何だ？　って。あぁええと、《爆発》（エクスプロージョン）だよ、《爆発》。

何でそんなものを使えるのかって？　そんなのもちろん　――決まってるじゃん。それは俺がもうとっくに《アルケミスト》になっちゃってるからだよ。

ジオ・パラケルスス１３歳！　只今のレベルは４２！　職業は《ローグ》及び《アルケミスト》であります！

## 第二十八話　久しぶり！　でも大変だった　（後書き）

ご意見、ご感想、誤字脱字の指摘など幅広くお待ちしております。

無双は無双でも腹黒さんの陰謀無双でした。テヘペロ。

それにしても我ながら戦闘シーンがダメダメだ！　精進します。

## 第二十九話　大漁すぎて大変だった（前書き）

寒い中皆さんいかがお過ごしでしょうか？

引き続き無双です。そしてこれが本年中最後の更新になるかもしれません。

## 第二十九話　大漁すぎて大変だった

只今絶賛戦闘中、現場のジオ・パラケルススです。今も放っておくと厄介な回復役である『クレリック』に愛のこもった《バックスタッブ》でお1人様神殿に送って文字通り『刺しあげた』ところだ。うん、仮にもお前聖職者だろ。何でこんなところで子供襲うのに参加してんだよ、神様に叱られてこいって感じで送り返してあげました。

うん、いいことしたなぁ俺！

間髪いれず次の獲物へ。狙いはCグレード防具エンシャントローブセットに身を包んだ《ソーサラー》。高速で接近する俺に慌てふためきながらも《ソーサラー》が得意とする炎系攻撃魔法《火葬》（イニシレイト）を詠唱し始める。すかさず《ミラージュステップ》を発動。本来なら各種攻撃スキルは回避できないのだが、短剣職が緊急回避スキルを発動している時は別。通常攻撃と同じように回避の対象へと変わる。刹那迫り来る骨をも焼き尽くすような炎の塊を何とか寸前でかわし、奴の懐に。絶望を顔に浮かべた目の前の男の頚動脈、腋下動脈、大腿動脈を狙って暗紅色の刃を走らせる。

狙ったとおりに連続でクリティカル判定が出たらしい。そのダメージに魔法職である《ソーサラー》が耐えられるはずもなくゆっくりと地面に倒れふし、そして消えていった。

まったくこれが自分の先輩かと思うと腹が立って仕方がない。後輩をいじめるのはかっこ悪いですよ？　先輩。

な～～～んてそんな余裕ぶっこいた様に見せかけてはいるけど、

今の俺には残念ながらまったく余裕なんてものはない。こうしている間にも散発的ではあるがかわしきれない攻撃により結構洒落にならないダメージをもらっているし、虎の子の《ミラージュステップ》も使っちまったから。さらに《高級回復ポーション》、通称オレンジジュースをがぶ飲みしている始末。ちなみに自家製。市販価格は一本５００Ｇだから案外懐的に笑えない。

まぁそれくらいは仕方ない事だろう。だって俺が１人に対して、相手は３５人。５ＰＴもの大群なのだから。まったく討伐モンスターでも狩りに行くのかっていう大戦力だぜ。

とまぁ普通に考えたらどう考えてもただの自殺行為。相手がＥグレードとかならともかく、ぱっと見た感じ奴等の平均レベルは３０台中盤くらい。Ｃグレードの奴も決して少なくない。普通なら多勢に無勢、勝ち目はない。

そんな絶対的不利な状況の中、今曲がりなりにも有利に戦えている理由は３つ。

まずは相手が完全にパニックになっている。『冒険者見習いのガキとその護衛１人』を相手にするつもりで徒党を組んで余裕綽々で俺を狩りに来たつもりの連中に、いきなり《爆発》（エクスプロージョン）なんてものぶつけられて動揺しない奴はいない。その隙を突いているだけ。できるなら固まったところにもう一発《爆発》をかましてやりたいんだけど、本質的に《爆発》は詠唱時間が長く乱戦には向かないんだよ。あと下手すると自分も巻き込むし。

２つ目は俺には今各種（バフ）（強化魔法）がこれでもかっていうほどかかっていること。これで今俺は実質レベル５０の冒険者に限りなく近い状態になっている。一方奴らはたった２人、まして一人は学院

卒業前の半人前を相手にする予定だった事で油断しきっていた。だから《バフ》の恩恵をまったく受けていないはずだ。

最後に俺の武器はＣグレード最強の短剣である『アサシンダガー』。防具もＣグレード軽装備の中でも防御と回避率にプラス補正がある『ブルーワイバーンスケイルレザーメイルセット』で、さながらサファイアのような光沢を持つ俺の自慢の一品だ。さらにＣグレードから解禁になった各種アクセサリーももちろん完備。今は『回避率上昇』のネックレスと『弓耐性上昇』のイヤリング２個、『詠唱速度上昇』のリングだ。

おまけに……全部『普通』の『アサシンダガー』や『ブルーワイバーンスケイルレザーメイルセット』じゃないんだな、これが。《Ｎｅｗ　Ｗｏｒｌｄ》ではＣグレードから各種装備を強化する事ができるようになるのだ。これを《エンチャント》という。まぁ細かい説明をし始めるときりがないので結論からいうと今の俺の装備はこのようになるわけだ。

『アサシンダガー』＋５　攻撃力１３６　＞　１５５

『ブルーワイバーンスケイルレザーメイルセット』＋４　防御力２２０　＞　２５５

とまぁ軽くＢグレード下位装備に匹敵する性能なわけで。

高い買い物だったが、値段に見合う、いやそれ以上の性能を発揮してくれている。探してくれたミリーさんには感謝だね。

というように１対１なら今の俺はこいつらの誰にも負ける事はないだろう。しかしそんな俺でさえ５ＰＴ、３５人はきつすぎる。数

が多いっていうのはそれだけで絶対的なアドバンテージだし、思っていたよりも2次職のやつらが多い。まったく転職前なら間違いなくとっくに今頃俺が地面にキスした後神殿行きだったな。……死にそうな思いして《アルケミスト》の転職クエスト終わらせておいてよかった。まぁ思い出したくもないが。

とりあえず一番厄介な《ヒーラー》3人は既に倒したが、奴らが立ち直るまでに何とか……。

「おいっ！　お前ら落ち着け！　いくらこのガキが異常だろうとどうやら1人のようだ！　俺たちはまだ30人いるんだ！　落ち着けばなんてことはない！」

……あ～ら。どうやらずっと俺のターンは終了の模様。ここからがホントの勝負ってことだな。まったく世の中厳しい事。都合よくいく事は少ないねぇ。

◇◆◇◆◇◆◇◆

短剣職の特殊スキル《ステルス》。これはMPを持続的に消費してこちらがアイテム使用以外の行動を完了するまで透明になって隠れる事ができるスキルである。この状態であれば敵は俺の事を視認できずターゲットに指定する事はできない。

例外は2つ。範囲攻撃魔法に巻き込まれるか、《ステルス》と同じく短剣職のパッシブスキルである《サーチステルス》で解除されるか。

幸いな事に今回の敵には短剣職はいない。いやおそらくシランの奴が意図的に外させたんだろう。おかげで俺にも勝機があるだけど。まぁそこに気を使うならもう少し人数減らして欲しかったと思う俺は我儘なんだろうか？　どうせニヤリと笑われてそこで終わりだろうから何も言う気はないけど……いつもながらあいつの信頼はヘビー級だわ。

そんなわけで俺は今かくれんぼ中。何となく前世（むかし）で近所の友達と遊んだときのことを思い出してしまうシチュエーションだ。何故かというと俺は木の上に隠れることが多かったんだ。見つからなくて泣きそうになってる友達を見下ろすのが好きでさ。

ちょうど今みたいにね。

「ちぃ、野郎どこに行きやがった！　そもそもアイツは何だ！　あれは《アルケミスト》の《爆発》（エクスプロージョン）じゃねぇのか？　なんで《アルケミスト》にあんな動きができる？　あれは完全に短剣職の動きだったぞ？　意味が分かんねぇ！」

あなたの真上ですよ、おマヌケさん。そしてその疑問に関してはその通り、とはいっても成り立てだけど。

今俺の真下にはさっき落ち着けっていう余計な事を言ってくれたヒューマンのおっさんがいる。がたいのいい髭面の男。身にまとった武器防具から判断しておそらく《マシナリーナイト》だろう。ヒューマンの盾職の一翼であり、様々な武器に適正を示す傭兵騎士。厄介極まりない相手だが、さっきも言ったとおりCグレード冒険者はこいつ1人じゃない。見たところでおそらく6人といったところだろうか？　ヒューマンの戦士職（バーサーカー）1人と弓職の《スナイパー》2人、

先ほど倒した奴とは別の《ソーサラー》、そしてダークエルフの弓職である《ブラッディセンチネル》。

２次の弓職が合わせて３人もいるのかよ。道理でさっき喰らった矢のダメージが半端じゃなかったわけだ。痛いのなんの、もう２，３発まともに喰らっていたらこっちがやられてたな。

他にも《レンジャー》や《ウォーリア》、《ナイト》に《ウィザード》……。どいつもこいつも何の為に冒険者になったのかと思う。《Ｎｅｗ　Ｗｏｒｌｄ》がゲームの時は良かった。ＰＫプレイヤーのような奴らも確かにうっとおしくはあったが、それもゲーム、仮想現実内でのロールプレイだから許せた。

しかし今の俺にとって目の前のこいつらはまがう事なき現実であり……敵だ。

金に誘われ、欲にかられて他人を不幸にする人間の皮をかぶった獣どもめ。こんな奴らのせいでシルウィは両親を殺された。アリアとエリア、リューネも似たようなもんだ。もちろんこいつらが彼女達の不幸の原因になった連中ではないと思う。しかし、こいつらを野放しにする事は俺のかわいい『義妹』（いもうと）たちのような人間を増やす事に他ならない。

だから殺す。そこにもう躊躇いなんてものはない。

こいつらに比べれば本能のままに人間族を襲う『モンスター』たちのほうがまだましだ。

シルウィはうちに来てから笑うようになるまで１年かかった。リューネの体からアザが完全に消えるまでにもだ。それに４人とも今

でも時々寝ているときに泣くんだ。脅えながら、震えながら。俺はその時何にもできやしない。神様からもらった能力があろうが、冒険者としていくら強くなろうがまったく無力だ。

……その彼女達を自分の手駒にする為に『買った』俺も同じ穴の狢だ。お前達だけを責めるつもりはない。

だから獣は獣同士、しっかり最後までやりあおうぜ？

誰にも聞こえないほど小声で、《爆発》と双璧をなす《アルケミスト》のもう一つの手札を切る。

それは仮初の命を吹き込まれた人形。

それはその体に『真理』の文字を刻んだもの。

それは本来あるべき形ではなく、俺の思いによって生み出された新しい可能性。

――来い、《アイアンゴーレム・ナイト》！

そして青い光りとともにそれは奴らの背後に現れる。

鉄の体を持つ半人半馬。甲冑に身を包み右手に槍を左手に盾を持つ『騎士』の名を冠したゴーレム。

さぁ第2幕の始まりだ。

――1人も逃さない。お前達の冒険はここで幕引きだよ。

## 第二十九話　大漁すぎて大変だった（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

ご意見、ご感想、誤字脱字の指摘など幅広くお待ちしております。

ではメリークリスマス、良いお年を、来年もよろしくお願いします。

来年の目標は？

仕事を頑張る、ニューワールドをちゃんと完結までもって行く、かなぁ。

## 第三十話　大変なのは俺以外だった（前書き）

新年一発目ですが過去最短かもです。

前回の切りが悪かった！

## 第三十話　大変なのは俺以外だった

それにしても『見えない』ということと『知らない』ということは本当に恐ろしいものだと、俺を襲撃してきた奴らを逆に《アイアンゴーレム・ナイト》が襲撃、否、蹂躙した結果を見ながらふと思った。

『見えない』から奴らは後方から無防備な状態で俺の奇襲を食らったわけだし、『知らない』から奴らは《アイアンゴーレム・ナイト》に対処できない。

《アイアンゴーレム・ナイト》は本来という《アルケミスト》の術式で召喚されるゴーレム（サモン・アイアンゴーレム）を例によって俺が魔改造したものだ。

普通の《サモン・アイアンゴーレム》で呼び出されるのは鉄の鎧人形なのだが、俺の《サモン・アイアンゴーレム》はさっきもいった通りまったく違うものと成り果てている。

半人半馬の鉄の鎧武者が右手に馬上槍（ランス）、左手に方形盾（ヒーターシールド）をもっているのだ。もちろん性能も多大なＭＰの消費と引き換えではあるのだが、贔屓目無しで段違いである。なにしろ俺の《アイアンゴーレム・ナイト》の本来存在しない攻撃スキルである《チャージ》（突撃）は文字通り攻撃範囲上にいる全ての敵を「はね飛ばす」のだから。

とここで簡単な物理の話なのだが、破壊力とは物体の硬さと重さ、そして速度によっておよそ算出する事ができるのは誰でも分かってもらえると思う。

スピードが出ている車のほうが出ていないそれよりも危ないし、

車よりもダンプカーのほうがより危険だといえばさらに分かりやすいだろうか。

まぁ何はともあれ結果は俺の目の前に広がる光景が全て――俺の《アイアンゴーレム・ナイト》はその姿を消すまでに格上であろうCグレード冒険者４人を道連れにしてくれたのだ。

後に残った奴らも既に満身創痍。リーダーらしき《マシナリーナイト》ですら肩で息をしているのが見える。既に虎の子の盾職で最も厄介なスキルである緊急避難用防御力超増大スキル『ウォールスタンス』も使わせたしな。

そこに襲い掛かる紅蓮の炎。《爆発》（エクスプロージョン）がもたらす破壊の赤が再び夜の闇を真っ赤に染め上げる。甘いんだよ、お前ら俺がいること忘れてただろ？

崩れ落ちるろくでなしども。リーダーのおっさんが俺に恨みがましい眼を最後向けて地面に倒れ伏し、やがて消えていった。それはCグレードまで至ったにも関わらずその『力』を弱いものに振るった阿呆どもに似合いの末路、この後奴らは冒険者を襲った冒険者としてではなく貴族の子弟を襲撃した事による罪で裁かれることが決まっており、３回の猶予などなく死か奴隷落ちが決まっている。事の前にシランがニッコリ笑いながら言っていた。「死んだほうが増しだった。そう思うような残りの人生をプレゼントします」と。奴等の今後に関しては同情すらできない。悲惨すぎる人生しか思いつかないなぁと遠い目になるのは仕方ないと思う。

「に、逃げろ！　あのガキは人間じゃねぇ！」

失礼な、地味に傷つくなそれ。ともあれリーダー格とCグレードクラスの実力者がほぼ全滅したことで格下の連中が泡を食って逃げ始めたらしい。つまり局面はその様相を変え掃討戦に切り替わるということ。

というわけで残り17人、一人も逃がしはしない。いや、逃げられない。だって――

「ぎゃあ！」

「何でこんな奴らがここに！」

「死にたくねぇ！」

この場を手配したのはあの腹黒だぜ？　逃げられるわけないじゃん、大魔王が裸足で逃げる相手だぞアレは。ていうかもう動き出したのかよ。気配からすると7人かな？　それまで隠れてことの成り行きを見守っていたのだろうシランの部下たちが動き出したのだろう、次々と残った連中の気配が消えていく。

……一応ローグになってステルス破りのスキルである『サーチエネミー』を取得済みの俺からほぼ完全に隠れおおせるとか確実に全員Bグレードの短剣職じゃねぇかよ。あいつ手下に暗殺者集団抱えてやがったのか……。マジ怖いです、シランさん。

そのあまりの手際の良さに出番はどうやら終わりみたいだなと俺が思った瞬間背後に気配を感じ振り返ると、案の定というべきか漆黒の鎧に身を包んだこの舞台の演出家がそこにいた。

……演出家の前に『地獄の』がつくと思うが。

「ジオ様、何をお考えですか？」

「……明日の天気」

にっこりと微笑むシラン。怖いんだよ、お前。目が笑ってないから。いつも言ってるだろ？　俺の考えを読むんじゃないって。あと背後から出てくるなよ、怖いだろと言いたい。

「……俺の出番は終わりでいいのかな？」

「はい、お疲れ様でございました。これで少しは世の中暮らしやすくなる事でしょう」

「じゃああと俺はしばらく家で引きこもってればいいんだな？」

「はい、ごゆっくりお休みくださいませ」

そのシランの言葉を背に受けながら『帰還のスクロール』を発動させる。

明日の朝はみんなで朝食を食べよう。そんなことを思いながら俺の姿はその場から掻き消えたのであった。

## 第三十話　大変なのは俺以外だった（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

ご意見、ご感想、誤字脱字の指摘など幅広くお待ちしております。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3995u/

New　World

2012年1月10日02時28分発行